

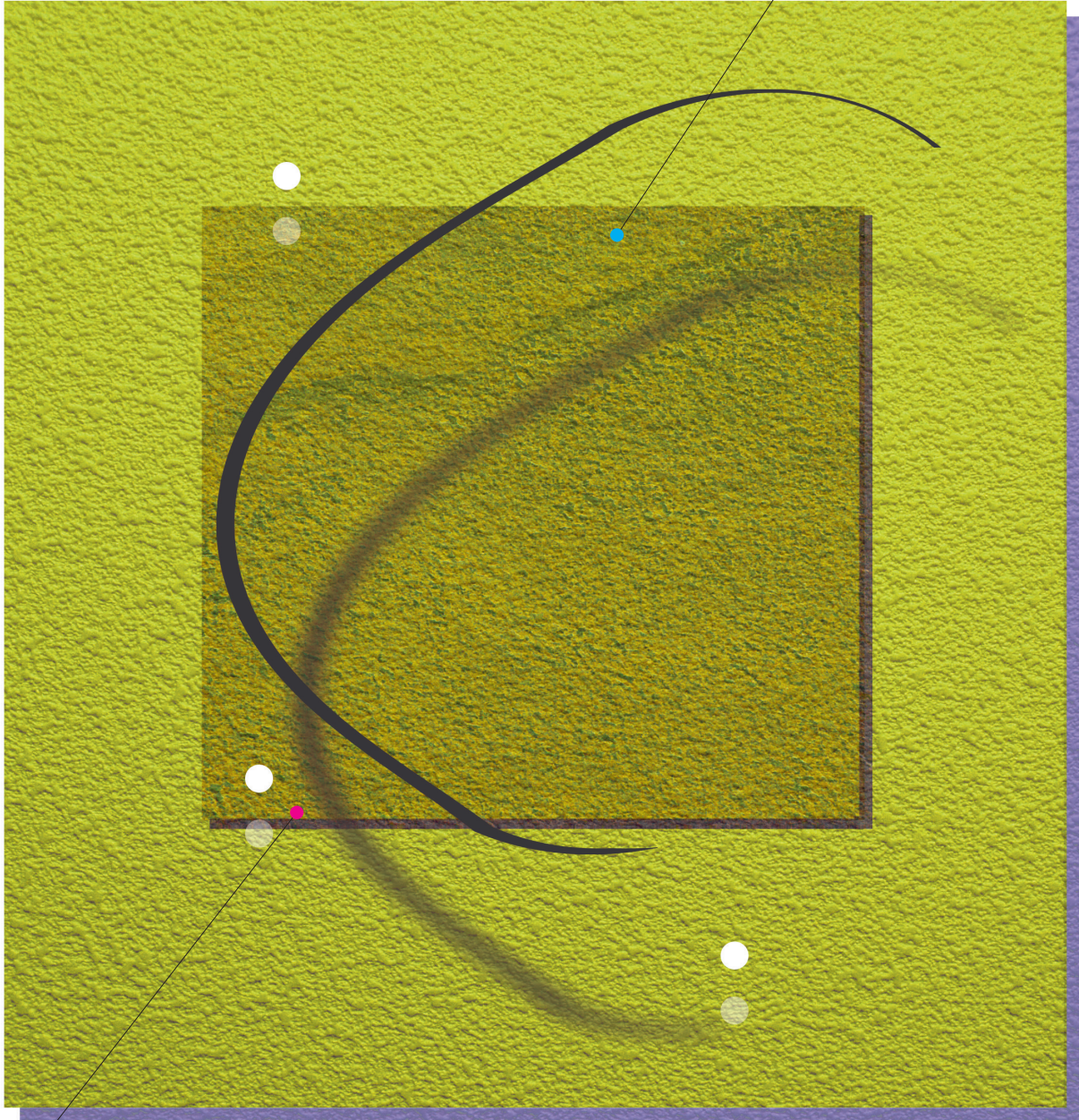
総人・人環フォーラム

HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM

特集 美とはなにか

武田宙也 「美学にとって美とはなにか」

田部勢津久 「材料化学はこんなに面白い～光り物に魅せられて～」



特別公開講座 藤原辰史

「学問で平和はつくれるか？—私が総合人間学部と人間・環境学研究科で学んだこと」

巻頭言

「教養」の未来へ	吉田 純	1
----------	------	---

公開講座「美とはなにか」

セッション1「美学にとって美とはなにか」	武田 宙也	2
セッション2「材料化学はこんなに面白い～光りモノに魅せられて～」	田部勢津久	9

特別公開講座

「学問で平和はつくれるか？」 ——私が総合人間学部と人間・環境学研究科で学んだこと——	藤原 辰史	17
--	-------	----

2024年度 人間・環境学研究科報告

2024年度 人間・環境学研究科 現役生・修了生の受賞者一覧	29
2024年度 人間・環境学研究科 教員の活躍一覧	30
現役生・修了生 2024年度受賞研究から	31
藤本 修嗣 本間 桃里 渡邊 寧 奥内 蒼馬 宇田あかね	
季原 一樹 王 海濤 白石 暖哉 開 信介 楊 峻懿	
安藤加菜子 岩木 雅宏 迎田 暁 佐野 文哉 高橋 そよ	
中村 徳仁 傅 馨怡 Chanachai Pattanathummasid 堤 直也	
張 瀚 寺門 寛 増田 和俊	

教員の活躍

田部勢津久先生オットー・ショット研究賞受賞に寄せて	林 英明	53
日本建築学会 Japan Architectural Review Best Paper Award 2023 および一般財団法人住総研 研究・実践選奨 受賞 住まいの過剰と過小： 「スラム化する世界」の先を見据えて	前田 昌弘	55
日本セラミックス協会進歩賞 真空単位基準束縛エネルギー図に基づいた新規長残光蛍光体の開発	許 健	56
クリタ水・環境科学振興財団 2024年度クリタ水・環境科学研究優秀賞顕彰 生物源炭酸塩の超高感度安定同位体分析による 新たな水域生態環境指標の開拓	石村 豊穂	57
日本生態学会宮地賞 『植物の種形成における地理・生態・時間的隔離の役割』	阪口 翔太	58
現代韓国朝鮮学会賞、比較文明学会研究奨励賞、田辺元賞 テーマ：思想は「自己否定」する	郭 旻錫	59

私の研究の原点と現在

超越整関数の複素力学系－有限性の無い世界での数学	木坂 正史	60
筑波の道と古典文学と	長谷川千尋	64
文書館を「逆なでに」する研究	福元 健之	66

京都大学 人と社会の未来研究院若手出版助成の成果

中村徳仁『シェリング政治哲学研究序説—反政治の黙示録を書く者』：吉村雄太	
永盛明美『眼差しの詩学——トマス・ハーディに見るジェンダー表彰の側面』：玉井史絵	
藤原征生『芥川也寸志とその時代』：長門洋平	
高城建人『韓国黎明期の民主政治への試み—大統領制と議院内閣制の攻防』：小針進	
澤西祐典『芥川龍之介における海外文学受容 旧蔵書越しに見える風景』：庄司達也	
佐々木幸喜『安部公房×科学』：鳥羽耕史	

人環図書 一教員自らが語る新著

感銘を受けた3点

「フレイト上のC型描線」
それは浮いている、視線はそう捉えるがそれは錯覚である。平面を這うC型の影によって人間の脳はあらゆる不都合を補う。ところが次元論によると白マルの存在はどのフレイトにも属さない垂直空間上に在る。これは脳における必然的躊躇の情景である。

表紙のことは

プロフィール
くらもと 倉本 修

東京生まれ、75年以降6千余冊の単行本を装幀。88年、装幀事務所を設立。造本装幀コンクール文芸部門などで多数受賞。独ライプツヒ「世界で最も美しい本展」などに出品。作品集「ミシヨ魔法の国にて」「一本の指もまた立っている」「美しい動物園」「芸術のルール」ほか。



「教養」の未来へ

吉田 純 | Jun YOSHIDA (京都大学名誉教授)

ミュージシャン・米津玄師が「べらぼうに面白かった」と紹介したことなどがきっかけで、竹内洋『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』（中公新書、2003年）が最近、多くの新たな読者に読まれているという。旧制高校文化を源流とする、かつてのエリート学生文化としての教養主義——人文的教養の獲得による人格形成という理念——が「没落」して久しい現代に、この本が改めて注目を浴びている理由についてはいくつかの議論がなされているようだが、そうした時代だからこそ「新しい教養」が求められているのではないか——という見方で、衆目はおおむね一致しているようだ。ヴォーカロイド音楽という、最新のテクノロジーを駆使したサブカルチャーを出自とする米津がこの本を評価したことも、そうした印象を強めているのだろう。

だが、「新しい教養」とはそもそも何を意味するのだろうか。

『教養主義の没落』の末尾で、実はすでにその基本的な方向性は示されている。竹内は、社会学者・井上俊による文化の3つの作用、「適応」「超越」「自省」という図式を借りながら、次のように論じる。

教養主義の没落後の学生文化においては、「適応」つまり実用性や効率性のみが肥大化し、「超越」つまり現実を批判する理想主義、および「自省」つまり実用性や理想主義に対して向けられる自己反省という2つの作用が衰退してしまった。しかし文化は、これら3つの作用の拮抗とダイナミズムによって成立するのであり、「適応」への一元化は、文化における活力や創造性の喪失につながる。だとすれば、「教養教育を含めて新しい時代の教養を考えることは……文化における自省と超越機能の回復の途の探索である」（同書、246頁）。

この本が刊行された2003年は、私が助教授として総合人間学部に着任して3年目にあたる。その頃の私は、教養教育を重要なミッションとするこの部局の構成員としてのアイデンティティを、まだ十分には構築しきれていなかったように思う。が、「適応」「超越」「自省」をめぐるこの議論は、それ以降の研究や教育への重要な示唆を与えてくれたように記憶している。

さらにその方向づけを明確にしたのは、翌2004年、人間・環境学研究科の「文系群会」（教養教育担当者としての人文・社会系教員のグループ）が発行した『教養教育に関する人間・環境学研究科・文系群会の考え』という冊子（起草者は高橋由典先

生）である。そこでは、教養教育の理念が次のように提示されていた。

教養教育の焦点となるのは、研究者次元での「小さな差異」ではなく、研究者と「世の常識」との「大きな差異」である。学生たちは、いわば「世の常識」を代表する人物として席についている。教員個々人の学問的営為をその基底において支えているのは、実はこの「大きな差異」の方である。したがって、それを語ることは、教員の研究の根本動機を語ることにほかならない。

その意味で、教養教育は研究者である教員にとっての自己反省やアイデンティティの再構築の場となる。また学生にとっては、教養教育は専門教育にともすれば付随するさまざまな現実的・外在的要因（将来のキャリアとの関係とか教員との人間関係とか）から自由になれる場であり、だからこそ、純粹な知的関心に基づくコミュニティの構築の土台ともなりうる。もちろんそれは一種の理想形ではあるが、教養教育は構造的にこのような教員と学生との理想的関係を構築しうる可能性を秘めている。

——以上のように教養教育を意義づけ、実践することは、「自省と超越機能の回復の途」を切り開くことでもあるだろう。それ以降ずっと私は、その可能性をいかにして現実化していくかということ——その成否は別として——総人・人環での自らの課題としてきたように思う。そして、総人・人環は、幸いにも、この課題を追求していくうえで最適の環境であった。「新しい時代の教養」がかつてのエリートの教養主義と大きく異なるのは、（この点も竹内が『教養主義の没落』の末尾近くで強調しているのだが）それが教師や友人との「対面的人格関係」によって培われるという点である。文理を越境した多様な専門分野の個性に満ちた先生方、そして——一応は教員の専門分野（私の場合は社会学）というゆるやかなくくりはあるにせよ——やはりきわめて多様で旺盛な研究関心をもつ学生・院生諸君とのあいだでの活発なコミュニケーションは、私にとって、まさに「新しい時代の教養」を求める実践であったと言える。もちろんそれは、狭義の教養教育（全学共通教育）においてだけではなく、学部・大学院の専門教育、そして研究においても同様に当てはまることである。

もはや直接にその実践の現場にいられなくなったのは少し寂しくはあるが、知的関心を共有する人びととのコミュニケーションは持続可能である（たとえば現在、元院生たちの希望でオンラインの自主ゼミを週1回開講している）。今後もそのようにして、新しい「教養」の未来へと歩んでゆきたい。

セッション1

「美学にとって美とはなにか」

武田 宙也 | Hironari TAKEDA

武田 宙也（たけだ ひろなり）
人間・環境学研究科教授。1980年生まれ。専門は
美学・芸術学。人間・環境学研究科准教授を経て、
2025年より現職。

美学とは

武田と申します。本日はよろしくお願いいたします。私は美学を専門としております。美学とは、英語で「エステティクス [Aesthetics]」、フランス語で「エステティック [Esthétique]」、ドイツ語で「エステティック [Ästhetik]」とそれぞれ呼ばれる学問分野です。このエステティクスが明治期に日本に紹介されるようになった際「美学」という訳語を与えられることになったのですが、じつは欧米語のエステティクスにはそもそも「美」という含意はありません。というのも、この語は「感覚」や「感性」という意味を持つギリシア語の「アイステーシス [αἰσθησις]」に由来し、本来「感性論」とでも訳するのが適当なものだからです。つまり、エステティクスとは文字通りには、人間のさまざまな感性的反応について考察する学問ということになります。

とはいえもちろん、美という主題が美学において重要でないというわけではありません。むしろ美は、古代ギリシア以来、美学の主要な考察対象であり続けてきました。人間は古来から、美とはなにかと問い、その本質規定を行おうと試みてきたわけです。たとえばこれを適切な比例関係（黄金比のような）から説明する議論は長い歴史を持ちますし、プラトンのように、現世的なものを超えたアイデアの世界に究極の美を見出す立場も有名です。また、キリスト教神学の伝統においては、万物の創造主たる神に美の源泉も求められてきました。これらはおおよそ、美の由来（＝あるものが美という性質を帯びようになる理由）を何らかの客観的な要因に求める説明と言えますが、近代になり人間の感性の偏差が意識されるようになると、美の要因として、それを認識する人間の主観を重視する立場が現れるようになります。たとえばイマヌエル・カントは次のように述べています。

あるものが美しいか否かを判別するために、われわれは「対象によって与えられる」表象を「……」主観に、かつ主観の快ないし不快の感情に関係づける。したがって、趣味判断は「……」美的〔感性的・直感的〕（ästhetisch）である。この語「すなわち美的判断という語」のもとにわれわれは、その規定根拠が主観的で

しかありえない判断を理解する¹。

「表象」というのは対象の知覚から思い浮かべられるイメージのことであり、もっと平たく言えば対象の見た目から受ける印象のようなものと考えてください。ここでカントは、あるものが美しいか否かを判断することというのは、対象の見た目の印象に対して、主観的な快不快に基づいて判断することである、と述べているわけです。趣味判断（＝美の判断）が「直感的（ästhetisch）」であると言われるのは、こうした意味においてです。このようにカントは、美の判断というのが、まずもって主観的なものであることを強調しています。また、同時代の哲学者デイヴィッド・ヒュームも、美はそれを認識する者の主観、すなわち「趣味」に依存するとしします。ただしヒュームは、趣味が基本的には人それぞれであることを認めつつも、他方でそこには基準となるものも存在すると述べます。すなわち、元来多様な趣味が、経験を積み重ねることによって次第にそこへと収斂していくような、なにか基準的な趣味が存在する、というわけです。言い換えればヒュームは、なにを美しいと考えるかは完全に人それぞれというわけではなく、そこにはある種の統一的な見解があるはずだと考えるのです。これはカントも同じで、上で見た引用では、美の判断はまずもって主観的なものである、と述べられていましたが、その後彼の議論は、なにが美しいかという判断は、完全に主観的なものでも完全に客観的なものでもない、その中間に位置するものである、という形で展開するようになります。彼は、対象の形式的側面にのみ注目してなされた美の判断（カントの言葉では「無関心的な趣味判断」）は、判断する人の文化的背景を問わず——つまり、その人が生まれ育った時代や地域、社会階層にかかわらず——、普遍的に妥当すると考えるのです。

趣味の多様性

現代は、趣味の多様性や、趣味の形成に文化的背景が及ぼす影響といったものが、ヒュームやカントが生きた18世紀に比べてますます意識されるようになった時代です。こうした時代にあって、上記のような彼らの考え方は維持するのが難しくなっています。たとえば彼らと同時代

1 イマヌエル・カント『判断力批判 第一部——訳と詳解』小田部胤久訳、東京大学出版会、2024年、3～4頁。



の哲学者であるエドモンド・バークは、美を対象の小ささや形の滑らかさ（ぎざぎざや凹凸がないこと）、繊細さ、色彩の多彩さといった特徴から定義しました²。人は対象のこうした特徴に美しさを感じる、というわけです。なるほどこれらの特徴を有した対象は、18世紀の西洋に生き、一定の教養を身に着けた社会階層の人々にとっては、共通して「美しい」と感じられるものだったのかもしれませんが。しかしながら、21世紀の日本において、バークのこの定義を授業で紹介すると、学生たちから「私はまったくピンとこない」という意見が必ずといっていいほど出ることもまた事実なのです。これは、上で述べたような文化的背景が趣味に与える影響を示すものでしょう。

あるいは、美的感覚の普遍性は、ダーウィンの「性淘汰」理論の観点から説明されることもあります。すなわち、たとえばクジャクの雄が美しい羽を進化させてきたのは、歴史的により「美しい」雄が雌から選ばれ、したがって子孫を残してきた（＝性的に淘汰されてきた）結果であって、人間もこれと同様に、美的嗜好（選ばれる美しさ）にはある種の傾向性があり、またそれは進化の過程で一定の方向に収斂してきた、というような説明です。しかしながら、現代ドイツの美学者ヴィンフリート・メニングハウスによれば、ダーウィン自身はこのように考えることはなく、むしろ美的嗜好の偶発的な変化や、多様な分岐の可能性を強調しているようです（図1）。実際彼は、同じ分類群に属し、生活の習性もほとんど同じ鳥類の間に多様な色の種類が存在することなどをその証拠として挙げています³。ダーウィンによれば、雌鳥の嗜好は、人間のファッションの流行と同じくらい気まぐれの変化を見せるものであるといいます。これは人間においても同様で、そうでなければ、世界中のさまざまな部族で受け継がれてきた身体装飾にこれほどのヴァリエーションがある理由を説明できません。たとえば、アフリカでは身体中に刺青を入れる部族もあれば、身体 of さまざまな場所に傷をつけ、そこに塩を塗り込んで肉瘤を作る部族もいますし、少なからぬ数の前歯を叩き折る部族

もいます。また、頬やこめかみに傷をつけてはじめて美しさが完成されると考えるアラブの部族もあります。南米では、平たく変形させられた頭部が「美の本質」とであるとする部族や、耳や唇に大きな穴を開け、そこに装飾具をはめ込む部族もいます⁴。こうした装飾の発展はいずれも美の追求を原理としており、したがってダーウィンの「性淘汰」の帰結ということになりますが、その表出の仕方はじつに千差万別です。すなわち、いずれの装飾の発展も、「（おもに異性から）美しいと思われたい」という動機は同じであっても、それが具体的にいかなる形で表出するか、またいかなる形式が一般性を得て受け継がれるようになるかに一定の法則は見いだせず、偶発的な要因によっていかようにも変わりうる（＝「気まぐれ」である）ということです。

美的カテゴリー

ところで、先ほど紹介したように美を定義したバークは、美と対比される崇高という概念を論じたことでも有名です。対象の小ささ、繊細さ、多彩さによって特徴づけられる美に対して、崇高は対象の大きさ、力強さ、恐ろしさといった特徴によって説明されます。具体的には壮大な自然現象（どこまでも広がる海、山、空といった無限性を感じさせる光景や、雷や嵐といった自然の猛威を体現した光景など）が例として挙げられますが、こうした自然現象は、その只中にいたら——たとえば、広大な大海原や激しい嵐の只中に放り出されたら——生命の危険を感じ、心は恐怖の感情によってすっかり占拠されてしまいます。一方で、こうした現象を、離れたところから、つまり生命の安全が保証された状態で眺めるとき、心には余裕が生まれ、人はたんなる恐怖だけでない、ある種の「喜悦 [delight]」を味わうだろう、とバークは述べます。これは、美のもたらすたんなる「快 [pleasure]」とは異なる、恐怖と入り混じった快（あるいは恐怖がベースにある快）とでも言うべき独特の感覚であり、さらに、恐怖という形で人間の生存本能に訴えかけるという点において、美よりも強い印象を与えるものです。

ここでバークは、狭義の美と区別される、しかしある種の感性的な興味深さを示す感覚として崇高を定義しているわけですが、このように、人間の美的経験の対象は美に限られるわけではありません。実際、いま紹介した崇高のほかにも、たとえば優美、悲壮、滑稽など、独自の輪郭を与えられている美的経験の対象はさまざまあります。これら美と並ぶ美的経験の対象をまとめて美的カテゴリーといい、19世紀以降そのラインナップが豊かになっていきます。また日本でも、20世紀になると大西克禮のような美学者が、日本独自の美的カテゴリーとして幽玄、あはれ、さびなどを提唱しました。比較文学者の四方田犬彦が主張する

² エドモンド・バーク『崇高と美の觀念の起原』中野好之訳、みすず書房、1999年、122～129頁。

³ ヴィンフリート・メニングハウス『美の約束』伊藤秀一訳、現代思潮新社、2013年、96頁。

⁴ ヴィンフリート・メニングハウス『ダーウィン以後の美学——芸術の起原と機能の複合性』伊藤秀一訳、法政大学出版局、2020年、59～60頁。

ように、現代ではここに、「かわいい」なども加わってくるでしょう⁵。このように美的カテゴリーとは、原理的には人間の経験するあらゆる感性的な質を、すなわち狭義の美から醜までを含むものです。

さまざまな「美」説

さて、ここまでの話を、「美学にとって美とはなにか」という講演タイトルに即していったんまとめ直してみましょう。美学にとって美は歴史的に重要な主題であり続けましたが、一方で、とりわけ20世紀後半以降になると「美とはなにか」という本質主義的な議論は成り立ちにくくなってきました。その背景としては、趣味の多様性や、趣味の形成に文化的背景が及ぼす影響といったものが広く認識されるようになってきた、という事情があります。すなわち、たとえば美を対象の小ささ、繊細さ、多彩さという特徴から定義づけるパークの議論は、18世紀イギリスの教養ある階層であればおおむね同意を得られるかもしれませんが、現代の日本では必ずしもそうではない、といったようなことです。

西洋流の美学は明治になると日本にも導入され、これ以降多くの知識人が——大西のように——、伝統的な日本の美意識を西洋の概念を用いて抽象化しようと試みるようになります。たとえば、戦前の京都帝国大学でも教鞭をとった美学者の中井正一は、日本の美の本質に「きれいで、さっぱりとし、軽く、柔らかく、流れ動き、清く新しく、常に濁りと汚れと、重さから脱出せんとするところの、脱出の精神と行動」⁶を見えています。要するに中井は、ある種の「清らかさ」を目指す新陳代謝的な運動性に日本美の本質を見て取っているわけですね。これはすでにしてパーク流の美の定義と少なからぬ隔たりを見せていますが、ここには18世紀半ばのイギリスと20世紀半ばの日本という時代的・地理的な間隔が反映しているでしょう。ただしやっかいなのは、同じ文化圏に生きている同時代人同士であっても必ずしも意見の一致を見るわけではないという（当たり前といえど）問題です。というのも、たとえば20世紀の日本に限ってみても、谷崎潤一郎やドナルド・キーンのように東山文化的な枯淡の境地に日本美の真髄を見る人もいれば、他方には桃山文化的な豪華さを強調する三島由紀夫や、縄文的な破格の美を重視する岡本太郎のような人もいるからです⁷。要するに、少なからず日本の美に精通していると思われる識者の間でも、これほどの意見の相違が見られるわけです。

こうした事情もあり、近年、美学の分野では（狭義の）

美を本質主義的に扱うような研究は少なくなってきました。また、美学にせよ芸術学にせよ、美という言葉自体、かつてほど頻繁に使われなくなってもきました。これはおそらくいま述べたような美の定義しがたさが意識されるようになってきた結果ではないかと思います。むしろ近年の美学では、人間が何らかの対象に向き合った際の、広い意味での感性的反応が問題とされることが多くなってきています。すなわち、先ほど美的カテゴリーについて説明した際にさまざまな感性的質をご紹介しましたが、それら全体を包含するものとしての感性的反応のようなものです。人間は、何らかの現象に直面した際に、対象に感性的に反応し、（ポジティブであれネガティブであれ）なにがしか心を動かされることがあるわけですが、この心の動き自体に注目するような立場です。もしこうした感慨の総体を（広義の）美とあらためて名付けるとすれば、美学は依然として美を対象とする学問であると言うことはできます。ただし、この感慨にはポジティブなものだけでなく、（醜のような）ネガティブなものも含まれますので、果たして「美」という呼称が適切かという問題は残ります。いずれにせよ、そこで問題となるのは、伝統的に論じられてきた美と異なるものであることは確かでしょう。

芸術は「美しい」のか？

もちろん、現代においても（狭義の）美を対象とする美学は存在します。たとえば、美の感覚を神経生理学的なアプローチによって明らかにする神経美学という分野があります。これは、人間が美を感じるときに脳のどの領域が反応しているかを突き止めることによって美の秘密に迫ろうとするものです⁸。ただし、このアプローチは、先ほど説明した美の多義性や相対性を解決するものではありません。というのも、神経美学が採用する美の定義というのは、あくまで（当該の研究が行われている時代や地域において）一般的・常識的なものに限られ、それ以外の美の可能性が考慮されることはないからです。たとえば神経美学の実験においては、人間が美を感じている状態を再現するために西洋名画の画像を見せたりしますが、これによって明らかになるのは、あくまで時代、地域、社会階層といった点において限定的な美のメカニズムにすぎません。言い換えればそれは、あらかじめ限定された範囲の美がいかなるメカニズムで働いているのかを明らかにするのには役立たずかもしれませんが、必ずしも人類全体に共通する普遍的な美の構造を明らかにするものではないのです。なお神経美学においては、いま紹介した実験のように、美の感覚を再現するために芸術作品が用いられることがよくあります。すなわちそこでは、「芸術＝美しいもの」という前提が共有されているわけです。ただしこの前提もまた、芸術学の観点

5 四方田犬彦『「かわいい」論』筑摩書房、2006年

6 中井正一『日本の美』中央公論新社、2019年、29頁。

7 谷崎潤一郎『陰翳礼讃』中央公論新社、1995年；ドナルド・キーン『日本人の美意識』中央公論新社、1999年；三島由紀夫『三島由紀夫の美学講座』筑摩書房、2000年；岡本太郎『日本の伝統』光文社、2005年。

8 例えば以下を参照。川畑秀明『脳は美をどう感じるか——アートの脳科学』筑摩書房、2012年；石津智大『神経美学——美と芸術の脳科学』共立出版、2019年。

からすると確実なものとは言い難いところがあります。というのも、現代アートの世界をざっと見渡してみるだけでも、いかなる意味でも美しくない作品というのはいくらでも目につくからです。

たとえば、イギリスの現代アーティスト、ダミアン・ハーストの《一千年》(1990年)という作品は、ガラスとスチールからなるケース内に牛の頭部が置かれた作品です。切断された牛の頭部は時間の経過とともに腐敗し、蛆虫を発生させ、やがてそれはハエに成長します。成虫になったハエはケース内を飛び回りますが、ケースの上部には害虫駆除用のライトが吊り下げられており、それに触れたハエは感電死して落下します。本作は、ハーストが一貫してテーマとしている生と死のサイクルを表現するものとして構想されましたが、その見た目は美しさからはほど遠いものです。ケースの内部には腐敗した牛の頭部と多数のハエの死骸が散乱し、ケースの外にまで強烈な臭いを放ってきます。ハーストは、存命中の作家の中では作品が最も高額で取引されるアーティストの一人ですが、この現代のトップアーティストの代表作は、感性的なレベルでは不快感しかもたらさないもののなのです。

もちろん、たんに美しくないだけでなく不快感まで引き起こすハーストの例はかなり極端なものですが、現代アートの世界では、素朴な意味で「美しくない」作品、すなわち目の快楽に資するところがほとんどない見た目の作品というのは珍しくありません。そもそも現代アートの始祖と言われるマルセル・デュシャンの代表作《泉》(1917年)からしてそのようなタイプの作品ですし、1960年代から70年代にかけて隆盛を極めたミニマル・アートやコンセプチュアル・アートと呼ばれる動向の作品群には、こうした傾向がとりわけ顕著です。たとえば、鉄板を並べただけの「彫刻」を制作したカール・アンドレ、蛍光灯を組み合わせたダン・フレイヴィンの作品、ソル・ルウィットの幾何学的な構造物、正方形のキャンバスに白一色で描くロバート・ライマン、ハンネ・ダルボーフェンが紙に手書きする数字、制作日の日付のみを描く河原温の「Today」シリーズなどが挙げられます。

かつて岡本太郎は、「今日の芸術は、うまくあってはいけな。きれいであってはならない。こちよくあってはならない」⁹と述べましたが、いま見てきた20世紀の作品は、まさに岡本が述べるような意味での「今日の芸術」で



岡本太郎の芸術観と美学・芸術学の分離

- ・「今日の芸術は、うまくあってはいけな。きれいであってはならない。こちよくあってはならない」(岡本太郎『今日の芸術』)。
- ・現代では「芸術=美しいもの」とばかりも言えなくなり、芸術と美は別個の問題として考えられるように。
- ・美学：人間の美的経験を扱うもの／芸術学：芸術という存在物を扱うもの。

ある、と言うことができるでしょう(図2)¹⁰。さて先ほど、今日では芸術について記述する言葉として美があまり使われなくなってきた、ということを書きましたが、これは上記のような事情とも無関係ではないと思われます。すなわち、「芸術=美しいもの」という前提が疑いえないものであった時代であれば、芸術とはなにかという問いは、美とはなにかという問いと直結したわけですが、現代のように「芸術=美しいもの」とばかりも言えなくなってきた時代においては、芸術と美は別個の問題として、いわば切り離して考えられるようになってきたのです。それは美学と芸術学という学問分野の区別にも見られます。われわれの業界では、美学と芸術学というのはおおそ同じ分野を指すものとして使われることもあります。ときに厳密に区別されることもあります。その場合、美学が扱うのが人間の美的経験である一方で、芸術学が扱うのはあくまで芸術という存在物のほうである、というニュアンスがあります。

美的経験と注意

さて、先ほど美学とは狭義の美から醜までを含む、広範な感性的質を扱うものであると述べました。美学においては、芸術にせよ自然にせよ何らかの対象を感性的に「味わう」経験のことを「美的経験[aesthetic experience]」と言いますが、これは、先に述べたような感性的質に注意を向けるようになる経験である、と定義することができます。たとえば、ハーストの《一千年》を見た人は、(狭義の美ではないかもしれませんが)何らかの強い感性的質を喚起されることがあり、その意味で《一千年》の経験もまた美的経験になりえます。また、まったく同じ絵画を見る経験や同じ小説を読む経験であっても、あるときには美的経験になり、あるときにはならないことがあります(すごく心にしみて感動するときと、全然没入できずなんの感慨もわ

9 岡本太郎『今日の芸術——時代を創造するものは誰か』光文社、1999年、98頁。

10 ただし、厳密に言えば「美しくない」芸術というのは現代に特有のものではなく、歴史上つねに存在してきた。実際、イタリアの哲学者ウンベルト・エーコは、西洋美術の歴史を美の観点からたどった『美の歴史』の編纂に携わった後、今度はそれを醜の観点からたどった『醜の歴史』を編纂している(Cf. ウンベルト・エーコ編著『美の歴史』植松靖夫監訳、川野美也子訳、東洋書林、2005年；『醜の歴史』川野美也子訳、東洋書林、2009年)。

かないとき、というように)。この場合、対象は同一のものであるので、違いが生じる原因は受け手の側にあると考えられます。

最近私は、ベンス・ナナイという現代の美学者が書いた『美学入門』という本を翻訳したのですが、本書においてナナイは、ある経験が美的経験になるか否かには、注意の向け方が大きくかわると述べています。では、どのような注意の向け方をすれば美的経験オープン・エンディッドになりやすいのでしょうか。彼がとりわけ重視するのは「しぼりのない注意」と呼ばれるもので、これは本書では「一つの対象の多くの特徴に注意を分散させ、しかも特定の目的や目標を念頭に置いていないときの注意の払い方」¹¹と定義されています。要するに、時間に余裕があり、特に目的もなく、リラックスして対象に向き合っている際の注意の向け方がこれに当たります。ナナイによれば、美的経験はこうした状態で対象に向き合う際に起こりやすい傾向があるといえます。本書で挙げられている例ですが、たとえば、友人のアパートにいたときに火事が起こり、それを消し止めなければならなくなった場合、そこで目にするもの——たとえそれが芸術作品であったとしても——に「しぼりのない注意」を向けることはまずないでしょう。その場合、それがいかに消火に役立ちうるか、という観点からしか注意を向けないからです。すなわち、特定の目的（＝消火）を念頭に置いて、一つの特徴（＝消火に役立つか否か）にのみ注意が向けられるわけです。これは「しぼりのない注意」とは真逆のもの（ナナイが「固定された注意」と呼ぶもの）であり、したがって美的経験につながる可能性は低いです。ただ、火事の例は極端ですが、人が日常生活において身の回りのものに向ける注意というのは、多かれ少なかれ実用的な観点から「固定された注意」であることが多い、というのは確かではないでしょうか。

美学者の佐々木健一によれば、美学の問題とは実用の別を超えた微細な差異を味わうことにあります¹²。たとえば、果物屋の店先で赤りんごではなく青りんごがほしいときには「青りんごをください」とだけ言えばよく、その青がマスカットの青とどのように違うのか、というような微細な区別は口にする必要も意識する必要もありません。むしろ、そのような微細な差異にいちいち気を取られていたら、私たちの日常生活は立ち行かなくなってしまうでしょう。私たちは普段、身の回りのものをいちいちしげしげと観察したりはせず、とくに仕事や家事といったルーティンワークで接する事物に関しては、それを「習慣」や「カテゴリー化」によってほとんど無意識的に処理しています。通勤時に青信号を目にしても、その青色と、朝食に食べた青りんごの青色の違いに思いを馳せたりはしません。それらはい

ずれも「青」という言葉によって「おおよそ同じ色」としてカテゴリー化されます。また、そもそも通勤時に目にする青信号の青は、色という感性的なレベルよりも、「You can go」を意味する記号としてしか認識されていない可能性もあります。「習慣」によって、青という色が「You can go」を表す記号としてのみ処理されているわけですね。ここから逆に、この「習慣」や「カテゴリー化」を意識的に停止して対象に向き合う際に、「しぼりのない注意」は発動しやすく、したがって美的経験も立ち現れてきやすい、と考えることができるのではないのでしょうか（青りんごの青と青信号の青の違いに、あえて注意を払ってみる、というように）。

これと似たような文脈で、哲学者のアンリ・ベルクソンは、「わたしたちは事物そのものを見ていない。ほとんどの場合、事物の上に貼り付けられたラベルを見ているだけである」とか、「事物と存在の個性は、その認知が物質的に有用でないかぎり、わたしたちの目を逃れてゆく」¹³というようなこと述べています。この「事物と存在の個性」のことをベルクソンは「実在」（＝この世界の実相のようなもの）とも呼びますが、彼によれば、実在とは本来無限の差異——上記の青の違いのように——に満ちているものなのですが、こうした無限の差異にいちいち気を取られていては日常生活に支障がでるため、通常は大半の差異が捨象され、実用の観点から必要な範囲においてのみ認識されている、というのです。一方でベルクソンによれば、世の中にはこうした（普通の人が従っている）功利主義的な行動原理と無縁の人が稀におり、その人は無限の差異をそのままに知覚できるといいます。それが芸術家です。芸術家は、自らが知覚した実在を作品として表現します。そして、表現された作品を通じて、芸術家ならざるわたしたちもまた、彼が見ている実在（＝無限の差異）の一端に触れることができるというわけです。

さて、先ほど紹介したナナイはまた、美的経験において人は、たんに対象に注意を向けるだけでなく、その対象を経験している際の自己の内面にも注意を向けるようになる、と述べています。どういうことでしょうか。ある対象を経験する際、人は自分がいまどのように感じているか、その感性的な質に目を向けるとともに、対象のいかなる特徴がそうした感性的な質を生み出しているかにも思いを馳せるようになるというのです。ナナイによれば、このように、対象だけでなく自己の内面（＝自分がいまどのように感じているか）に目を向け、さらにはこの両者の関係（＝対象のいかなる特徴がそうした感性的な質を生み出しているか）に注意を払うことで、ある経験は美的経験となります。たとえば、通勤中に青信号を目にするとき、青信号の記号的側面（それが「You can go」を意味すること）には注

11 ベンス・ナナイ『美学入門』武田宙也訳、人文書院、2025年、65頁。

12 佐々木健一『美学への招待』中央公論新社、2004年、27頁。

13 アンリ・ベルクソン『笑』林達夫訳、岩波書店、1976年、127頁。

意を向けても、その信号が自分にどのような印象を与えるかまで顧みることはないでしょう。反対に、休日に美術館を訪れ、たまたま目にとまった絵画に時間をかけて向き合うとき、当該の絵画のさまざまな特徴に「しぼりのない注意」を向けると同時に、そこから自分がいかなる感慨（美醜や快不快など）を抱くようになるのかにも注意を払います。また、両者の関係、すなわち絵画のいかなる特徴が私に特定の感慨を引き起こしたのかにも思いをめぐらせます。これは芸術作品の経験に限られるわけではありません。より日常的な経験、たとえば食事という経験を取り上げれば、急いでいて10分で料理をかき込まなければならないときや、上司とのランチミーティングで粗相がないように気を使わなければならないときなどには、その食事は美的経験になりにくいでしょう。一方で、料理を味わう経験は、味覚はもちろんのこと、視覚、嗅覚、触覚、聴覚という五感すべてにかかわるもので、この五感に与えられるさまざまな刺激に注目し、その一つひとつが自分にいかなる感慨を引き起こすか、またそうした質同士の調和やコントラストといった事柄に注意を向けることによって、食事の経験は美的経験になりえます。このように、対象だけでなく対象と経験の関係にも「しぼりのない注意」を向けることこそが、ある対象を感性的に味わうこと（すなわち美的経験）の重要な特徴であると言えます。

おわりに

そろそろまとめに入りたいと思います。美学は「美とはなにか」という問いを古代から問い続けてきました。ただし、近年の美学は（狭義の）美を本質主義的に定義することからは距離を置き、人間が何らかの対象に向き合う際の「心の動き」に焦点を当てるようになってきています。その際の「心の動き」には非常に多様な美的カテゴリーが含まれることはすでに見た通りです。冒頭に、英語のエステティクスは語源的には「感性論」とでも訳するのが適当な語であると述べましたが、近年の美学はまさにこの感性論として、人間のさまざまな感性的反応を考察対象とするようになってきています。そうした考察のフレームワークの一つとして、本日は最後に「美的経験」を取り上げました。美的経験というトピックが興味深いのは、その成否（つまり、ある経験が美的経験になるか否か）が、対象のみに依存するわけではない、という点にあります。つまりそこには、主体の側の状況が大きくかわってくるのです。一般に「美しい」とされるもの（たとえばダ・ヴィンチの《モナ・リザ》）を前にすれば、いつでも誰でも美的経験をするわけではありません。逆に、一般には「美しい」とみなされないもの（たとえば近所のコインパーキングの風景）であっても、ときと場合によっては美的経験になりえるのです。そして、本日最後に紹介した論者たちが強調していたのは、そこで「注意」という要素が果たす役割の大きさでした。ある経験が美的経験となるか否かには、なにに、いかなる注意を向けるかが大きくかわってくるのです。

まとめ：美学の変遷と新たな問い

- 美学は「美とはなにか」を問い続けてきたが、近年は人が対象に向き合う際の「心の動き」（感性的反応全般）に焦点を当てている。
- 美的経験の成否は、対象だけでなく主体の側の状況、特に「注意」に大きく依存する。
- ネルソン・グッドマン（1906～98）の言葉になぞらえれば、今日の美学は「美とはなにか」よりも「いつ美か」を問うようになったと言えるかもしれない。

言い換えれば、この注意の仕方如何によっては、まったく同一の事物であっても美しいと感じられるときと感じられないときがある、ということです。これは、先ほど触れた神経美学の実験（いわゆる名画を被験者に見せることによって美的経験を再現しようとする実験）が疑わしく思われるもう一つの理由にもなるでしょう。アメリカの哲学者ネルソン・グッドマンは、一見して日用品と区別ができないような芸術——デュシャンの《泉》やアンディ・ウォーホルの《ブリロ・ボックス》のような——が登場するようになった20世紀以降の現代アートの状況を踏まえうえで、今日の芸術の問題とは「芸術とはなにか」を問うことではなく、むしろ「いつ芸術か」を問うことにあると述べました（図3）¹⁴。このグッドマンの言葉をもじるならば、今日の美学は、ある意味で「美とはなにか」というよりも「いつ美か」を問うようになった、ということもできるかもしれません。

討論

武田宙也教授の講演を受けて、討論者、司会を含めて会場で活発な討論がなされた。以下は編集部によるその要約である。

まず、ドイツ現代哲学を専門とする安部浩教授は、ギリシャ語で芸術の語源である「テクネー」が技術（わざ）全般を指す言葉であったことに言及し、近代に工芸や工業生産といった技術と区別するため「ファインアート（芸術）」として限定された芸術の概念が、次第にふたたび広義に定義しなおされてきていると指摘した。その上で、美を再考する二つの切り口として、①カントやアリストテレスに遡り、「自然」との関係性から美を捉え直すこと、②「美しい」という言葉の文化的背景（中国、韓国との比較や、枕草子における「うつくし＝可憐で小さなもの」の用法）から考えることが提案された。これに対して講演者は、芸術が自然を模倣するという考え方は近代に揺らいだこと、また「うつくし」が日本の「かわいい」文化の源流にある点の重要性を補足した。

次に、数学を専門とする木坂正史教授は、数学の分野で

14 ネルソン・グッドマン『世界制作の方法』菅野盾樹訳、筑摩書房、2008年、129頁。

は定理や結果を「美しい」という言葉で評価することはほとんどなく、美学や芸術とは異なる価値基準で動いている点を指摘しつつも、「オイラーの等式」($e^{i\pi} + 1 = 0$)のように全く異なる文脈で定義される数学の基本的な定数がシンプルな形で結びついている点には美しさが見出されると指摘した。さらに、数学の美を理解するには、その背景知識を理解する時間が必要である点、個人の体調や文化によって左右されにくい普遍性を持つのではないかとの見解を示した。対して講演者は、数学の美も美学の対象となり得るとしつつ、その美を味わうためには専門的な知識や経験(教養)が必要であり、その点では水墨画の美しさを理解することと同じで、他の芸術とは異ならないと述べた。

会場の参加者からは、様々な質問があげられた。建築に

は時代や文化を超えた普遍的な美の存在があるのではという質問に対して、講演者は美学全体としては絶対的な美の探求は後退しているが、建築のような特定のジャンル内では歴史的に蓄積された知見に基づく「ジャンル内の普遍性」は存在し得るとした。また、現代アートは何を追求しているのかという質問に対しては、それまで誰もやってこなかったものを生み出すことに価値を見出すため、「新しさ」を追求していると応答した。さらに、バンクシーの活動の意味づけについての質問に対しては、彼自身が美の追求とは少し違うタイプのアーティストであり、パレスチナの分離壁に描くなど、その作品は政治的なメッセージを伝えるための手段としての側面が強いと分析した。



セッション2「材料化学はこんなに面白い～光りモノに魅せられて～」

田部 勢津久 | Setsuhisa TANABE

田部 勢津久 (たなべ せつひさ)
京都大学 大学院 地球環境学堂
フォトセラミック材料化学論分野
(兼) 人間・環境学研究科 物質科学講座

皆さん、こんにちは。田部勢津久と申します。材料化学・無機化学が専門で、ガラスとかセラミックスを自分で作って自分で光らせて、という研究をしています。わたしの研究室でいろんなガラスを作っていて、いまここに持ってきたものも全部ホームメイドのガラスたちです。もちろん色があるガラスも作りますが、僕たちが作るのは、レーザーだったり蛍光を発したり波長を変換したり、自ら光るガラスを作っています。例えば、ここに4つ、ガラスがありますね。これは、紫外線を照射すると、そのエネルギーを蓄えて、励起光を遮断しても光り続ける不思議なガラスです。こういうものも開発しています。

ガラスとは何か

そういうことで、自ら光らせる材料ということで、いろんな波長、いろんな色、紫、青、緑、黄色、オレンジ、赤、虹色——七色という言い方をするのもかもしれないんですけども——それだけではなくて、赤外波長領域、人間の目には見えないんですけども、非常に大事な役割をしている波長域で光るものなんかも扱っています。

ここに用意した4つのガラスは、すべて同じ組成なんです。でも、熱処理温度をちょっとだけ変えて、析出結晶の粒子を変えてやると、こんなに色が変わります。 Mn^{2+} (マンガン2プラス)。鉄は皆さんご存じですよ。周期表でマンガンという鉄のひとつ手前です。鉄は26番で25番がマンガンなんですけど、こんな色で光る、ということです。

さて、それではまず、ガラスとは何か、お話ししますね。溶かして、流し出して、固めると、過冷却状態の液体を経てガラス転移したものを「ガラス」という固体として捉えます。昔、ガラスというのは液体の一種なんだという言い方をしているときもあったのですが、正確には、液体の構造を保ったまま固体になった、固体です。液体ではないということです。気体から液体を経て、普通の物質は融点に到達すると、そこで固体に変化するというので、普通の、ガラスになるようなものであったとしても、冷却温度が下がってきたときに融点で不連続に体積が小さくなる。これは普通の物質が結晶になったときです。そうではなくて、過冷却の状態でも冷却速度が十分速いときには、液体の構造を保ったまま過冷却になる。けども、ある程度以上温度が低くなると固体にならざるを得ないということで、固体になって、液体の構造を保ったまま固体化したのがガラス、ということになります。

熱力学の研究者から言えば、ガラスというのは原子の構

造がランダムになっているので、残留エントロピーが0ケルビンになっても有限のエントロピーを持つ、ということになります。結晶物質だと0ケルビンではエントロピー0になるんですが、そういうことがない不思議な物質である、といえます。例えば、石英は、化学組成 SiO_2 です。でも、石英を溶かして、いったん液体にして、そのあと冷やしてやると元の石英にはなりません。その代わり、ランダムな構造をしたシリカガラスになります。石英 SiO_2 という化学組成がランダムな構造を保ったまま固体になったのが、あの「ガラス」ということです。

僕たちは、いろんなところでガラス材料を使っているんですが、地殻中の元素の存在度、すなわちクラーク数でいうと、酸素、シリコン、アルミ、鉄、カルシウム、ナトリウムが一番豊富にある元素であるというのは、よく知られているとおりです。これに対して、たとえば銅。電気エネルギーを伝送している銅線として使われたりしますが、非常に少ないんですね、クラーク数でいうと。でも、ガラスの主成分はどれも、たとえばカルシウムもナトリウムもソーダ、石灰として非常に豊富に存在する、ということがお分かりいただけると思います。

ガラスの用途

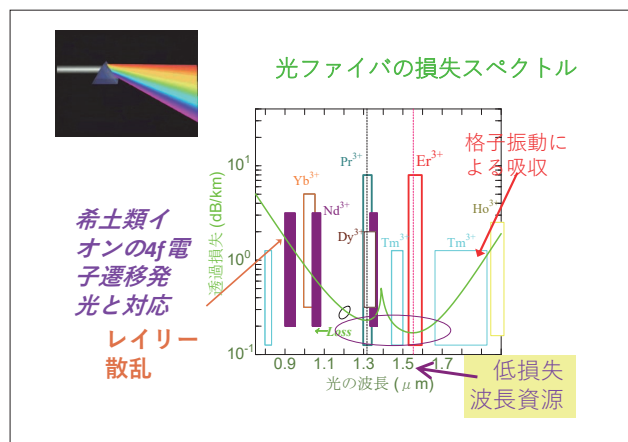
ガラスは、いろんなところで使われています。たとえば、エレクトロニクス、フォトンクス、オプトエレクトロニクス、ディスプレイ、液晶テレビ、いろんなところでガラスが使われています。たとえば光ファイバ通信。皆さんも毎日スマートフォンでインターネットサイトにアクセスして、大容量のYouTubeの動画を楽しむことができるのも、30年前であれば無理だったことがいま簡単にできるようになっている。ということで、チャールズ・カオさんがノーベル賞を受賞したのが2009年のことでした。

光通信では、いろんな種類のガラスが使われています。スライドの、この緑色に光っている光ファイバですが、実はこの緑よりも1000倍強く、1.5ミクロンという近赤外の波長領域で光っています。では、どうして光ファイバは遠くまで光を届けることができるのでしょうか。この中心部、コアの部分に、スライドではわざと大きく書いているんですが、本当は10ミクロンの直径しかないんですけども、ゲルマニウム(ゲルマニウムというのは、シリコン、ケイ素の真下にある元素で、あとでちょっと紹介しますメンデレーエフが存在を予言した元素です)を少し加えてやると、シリカガラスの屈折率が高くなり、全反射して、ある一定

の角度以上に入射した光は絶対に全反射するという性質をうまく使っているのが、この光ファイバというデバイスです。なおかつ、純度を99.9999%、6N（ナイン）とか9Nとか高純度に（つまり完全に不純物を取り除いて）やると、ガラスというのはいくらでも透明になるということが知られています。

なぜ光を見ることができるのか

例えばプリズムに、太陽光のような白色光を照射すると虹ができます。空に浮かぶ虹は、ガラスじゃなくて水蒸気の水玉が虹を作っているんですが、光を照射するとスライドでお見せしているように分光することができるというのはご存じだと思います。赤、オレンジ、黄色、緑、シアン、青、紫かな。だいたい波長、波の性質で波長という物理量があるんですが、0.4ミクロンから0.7ミクロンのあいだが可視光で、人間の目で見ることができる波長であるということが分かっています（スライド1参照）。



スライド1

なぜ人間はものを見ることができて色を感じるのかという話をすると、たぶん1時間では終わらないのですが、簡単に言いますと、人間の目には3種類の光センサーがあって、その3種類の光センサーの感度が波長によって違う。だから、青、緑、赤の三原色があるとカラーテレビを作ることができる。人間の目は、だから、RGB3色あればフルカラーを再現できるということです。この網膜の、水晶体があって、この黄斑の部分に3種類のセンサーがあって、このセンサーに入ってきたフォトン数を電気信号にして脳へ送ると、それを脳の中で処理をして色を感じるということになります。よって、3種類しかセンサーがないために、二次元でこの色を表現することができるわけでありまして、これを色度座標といいます。

ガラスの材料とフォトニクス

それで、僕たちが扱っている元素ですが、全ての元素を扱っています。先ほどメンデレーエフのお話をしました。「水兵リーベ僕の船」って、中学校のときに習ったと思いますが、だいたい「クラークカ」、カリウム、カルシウム

まではたぶん覚えていらっしゃると思います。1、2、第4周期です。それから、そのあと、遷移金属が10列あって、ガリウム、ゲルマニウム、シリコン、ゲルマニウムですね。国際周期表年が、もう6年前かな、に行われたんですが、メンデレーエフがこの周期表の概念を提唱したのが1869年で、その150周年になるので、IUPACが提唱したことによって、国連で国際周期表年が定められたという経緯があります。ニホニウムの発見はビッグニュースになりました。いまから9年前、2016年のことですね。日本で、アジアで初めて発見された、というか作られた元素がニホニウムということでありまして。日本以外のアジアの国はまだ、名前がここにはないということでありまして。

それから、光ファイバ通信、固体照明、LED、太陽光発電の効率を高くするために、紫外線や紫、青の光を分割してフォトンをついに分割する、量子切断という波長変換によって太陽光の効率を高くしよう、なんていう研究もやっています。

20世紀はエレクトロニクスの時代でした。トランジスタ、ICという電気を増幅する増幅器が発明されたことによって、エレクトロニクスが飛躍的に発展を遂げたということがあります。1970年に、アメリカのベル研究所で初めてレーザーダイオードが室温で発振しました。レーザーダイオードが発振したということは、電気の信号を光信号に変換することができる。つまり、レーザーっていろんな応用はあるんですが、情報を光で遠くまで届けることができる。で、オプトエレクトロニクスと呼ばれる時代が、20世紀の後半に起こってきたということです。と同時に、光ファイバが、先ほど言いました、高純度化が進んだおかげで、100キロ行っても、100分の1にしか光が弱くならない。0.2デシベル／キロメートルという低損失の光ファイバができたことによって、光通信が始まったということになります。ここでも日本の技術が、大変大きい貢献をしています。NTT武蔵野通研、のちに光エレクトロニクス研究所が発明したVapor Axial Depositionという方法で、るつぽを使わずに高純度のシリカガラスを作るという技術が大きな貢献をしているということも、ちょっと知っておいてください。

次に大事なことは、電気じゃなくて光を直接光で増幅するものができること、まさにこれはもうフォトニクスである、ということです。その中心になっているのが、エルビウム添加ガラスと呼ばれるガラスです。いまここに持っているんですが、ピンク色をしているガラスです。見えるかな、ピンク色。それで、元素なんです、炎色反応、「リアカー無きK村、どうせ、かると、するとくれない馬力」、というのを中学校か高校時代に暗記させられた人もいるかもしれません。それは何かというと、元素が決まると、電子の数が決まって、軌道が、エネルギー準位をとることができて、要は、基底状態、一番低い状態から高い励起状態になって、その高い状態から下へ落ちこちてくるときに、そのエネルギー差に相当するフォトン放出する。フォトン、光

子。みつこさんと書いて——「光子の裁判」という朝永振一郎さんの本もあるんですけども——、光子。それで、元素によって波長(光っている色)が違うということになっていて、フォトンエネルギーが違うということで、 h がプランク定数、 c が光速、 λ が波長、波長の逆数で、エネルギーが決まっている。このスライドのアニメーションがちょっと面白いんですけど、赤がフォトンです。それで、吸収すると基底状態から上の状態になって、落っこちてくるときにフォトンを出したところ——というアニメーションです。

ガラスが光る仕組み

元素の周期律なんですけど、なんでこんなふうになっているんだ、ということですね。主量子数という、シュレーディンガー方程式を解いたときに一番大事になってくる量子数があります。2番目に出てくるのが方位量子数と呼ばれるもので、こいつは0から $n-1$ (n 、主量子数)までの n 種類の整数しかとることができないものであります。そいつが0、1、2、3に対応して、s、p、d、fオービタルといわれて、s軌道が最外殻になっている元素はというと、1族、2族のアルカリ金属、アルカリ土類金属ということになります。それから、「僕の船BCNOFNe」は、2p軌道に電子が1、2、3、4、5、6個まで収容されているということで、p軌道が3つしかないために6個までしか電子を収容することができない。だから、ナトリウムは当然3s軌道に1個だけ電子を収容する…、というような次第であります。それで、s、p、d、fとあるわけですが、この第6周期になると、セシウム、バリウムの次にランタンという元素があります。ランタンは57番だけれども、その右隣にあるハフニウムは72番です。これ、変ですね。周期表というのは必ず原子番号が1つずつ隣りにないといけないんだけど、だから、3d軌道、4d軌道、そして5d軌道の前に、4f軌道に電子が充填されることによって、14個まで電子を収容する57番から71番までの元素群がここに存在しているということです。

これらの軌道に電子を安定なほうから供給していく、ということで、元素の周期律がなんでこんなきれいに成り立っているんだろうか、ということを理解することができます、ということです。それで、さっきの七つのこれ、回転しているんですけど、この立方体のちょうど中心が原子核だと思ってください。その原子核を原点として反転操作をしたときに、符号が変わるものを奇対称、ウンゲラード(Ungerade)といいます。f軌道というのは方位量子数が3なので、p軌道、f軌道は必ずUngerade、奇対称という性質を持っています。3d軌道は皆さん知っていると思いますが、ルビーレーザーが、初めて人類が手に入れたレーザーですけども、赤いきれいな宝石です。天然のルビーはとても不純物が多くて、レーザー発振にあまり適していませんけども、ちゃんと人工的に、純粋なアルミナに0.1～0.2%程度の Cr^{3+} (クロム3プラス)を添加してやると、ちゃんとレーザー発振するルビー結晶を得ることがで

きる。それで、3d軌道ですが——このスライドは学部生向けに作っているんですけども——偶対称になっているというのは見ていただくことができると思います。

もう1回ランタノイド、希土類のお話に戻りますと、57番のランタンから71番のルテチウムまで、こんな電子配置をしています。54番、第5周期の最後の元素、キセノンで内殻電子54個を省略してやると、こんなふうに電子配置を書いてやることができます。何が言いたいかというと、たとえば、58番のセリウムはf電子を1個だけ持っている。71番のルテチウムは14個の電子が入って、もうこれ以上電子を収容することができないので、中性原子は5d軌道に1個だけ電子を収容する、というふうな理屈で電子配置が成り立っているということです。0個のランタンと14個入っているルテチウムはまったくエネルギー準位をとることができないんですけど、1個から13個という中途半端に電子が充填している、この13種類のセリウム、プラセオジウム、ネオジウム…からイッテルビウム=13個入っている元素はこんなエネルギー準位をとることができます。このスライドは、エネルギーを波数、波長の逆数の単位で書いたもので、上へ行けば行くほどエネルギーが高いわけですが、例えば2万カイザーというと、波長がちょうど500ナノメートルの緑色の光に相当します。下向き矢印で書いているのは、どの元素がどんな色で光るかということと、対応しているわけです。そうですね、せっかく持ってきたので、これ、ちゃんと見てもらったほうがいいかな。短いほうの矢印、赤で書いているんですけど、実は赤くは見えません。目に見えない近赤外の光です。でも、すごく大事な波長で、この近赤外の光を使って、長距離で光ファイバ通信が行われているということに対応しています。この横軸ですが、可視光、さっき0.4ミクロンから0.7ミクロンと言いましたが、このへんです。それで、0.9から1.7ミクロンぐらいまでの波長のところで、いろんな波長資源があって、遠くまで光を届けてやるができるということがわかります。さっき言いました、このエルビウム、ピンク色をしているガラスですが——ごめんなさい、これはユーロピウムだった。赤く光ってます。こいつも違うな。これはサマリウムですね。こんなふうに光る。ごめんなさい、エルビウム、持ってくるの忘れました。

これは、ヤグセリウム(YAG:Ce)という結晶です。これは透明でガラスに見えるかもしれませんが、セラミックスです。多結晶。いま、セラミックスも透明にすることができますということです。これも僕たちの研究室で開発された、世界で初めて光り続ける蛍光体です。こいつもセラミックスでガラスじゃないけれども、こいつがすごいのは、光り続けるんですね。光エネルギーを蓄える、なんていうものもあります。それから、これは僕が開発したんじゃないで、根本特殊化学の人が開発したものをちょっとガラスで作ってみたものですが、こいつも光り続けている。

というようなことで、いろんな光るものを作れるので、毎日楽しんで、楽しく実験をしているというのが僕たちの

研究室であります。

光ファイバ通信とは何か

それで、次は光ファイバ通信の波長です。スライドにあるとおり、矢印が短く書かれていて、目には見えません。近赤外の波長に対応しているということでもあります。こういう単位を利用してやると光増幅ができます。この緑が電子で、上向きにエネルギーの準位がとびとびに青い線で書かれているんですけども、下から2番目の励起状態に、ちょっと波長の短い光で励起してやると、1.5 ミクロンという光ファイバが一番透明になる波長で光を増幅するというのが、このエルビウムというすぐれものです。基本的に赤が原子核で、この円の周りを回っているのが、ボーアのモデルによる原子モデルだと思ってください。本当はこれ、インチキなんですけれども、そういうことになります。

これを100 キロ、200 キロと延長していくと、どうしてもレイリー散乱による光損失のせいで、信号光が弱くなってしまうんですが、それを簡単に1万倍に増幅することができるのが、このエルビウムの単位を利用した光ファイバ増幅器と呼ばれるもので、見た目は緑に光っているんですけども、これよりもはるかに強く1.5 ミクロンという近赤外で、光っているということです。Light Amplification by Stimulated Emission of Radiation の頭文字をとったのがレーザーであるということは、もし知らなかったら覚えて帰ってください。

光通信が電気通信よりすぐれているのは何かというと、光はパラレルに違う波長を同時に伝送できます。なので、波長を細かく区切ってやると、例えば1550 ナノメートル、1.55 ミクロンという波長でいちばん光ファイバが透明になるんですけども、例えば、それよりプラスマイナス20 ナノメートルで1 ナノメートル刻みでやってやると、40 ナノメートル、40 チャンネルが同時に伝送できるわけです。今日行われているのは、Dense WDM、波長分割多重通信、Wavelength Division Multiplexing という方法で、太平洋、大西洋、海底ケーブル、それからメトロポリタンネットワークでFiber to the Home (FTTH) も可能になっている。これはエルビウムが持っている、このエネルギー準位があるが故に、われわれはその恩恵を被っているということでもあります。エルビウムだけではなくて、トリウム、プラセオジウムという元素も、光通信で大事な役割を果たしています。昔であったら、増幅率が小さかったの、例えば100 キロのあいだに、8 チャンネルで通信したかったら、40 の中継器が必要だったんですが、エルビウムドープファイバアンプが発明されたおかげで、今日では1本の光ファイバで同時に8 チャンネル、合波器と分波器さえ使えば、1本の光ファイバで、昔だったら40個の中継基地が必要だったような、複雑なシステムでしかできなかった通信が、今日は非常に簡単に行われるようになったということです。

国際ガラス年

ところで、2022 年、いまからもう3年前になってしまったんですが、国連が、国際ガラス年ということにしました。2019 年、周期表年だったわけですがけれども、国連に認めさせるために、いろんな努力をしてきました。それで、国際年、知ってる人、覚えてる人、いるかな。例えば1979 年、ゴダイゴの「Every child has a beautiful name, a beautiful name, a beautiful name」っていう歌がはまりました。あれは国際児童年です。さいわい今日はお年を召した方がたくさんいらっしゃるんですが、僕が学生相手に「知ってるか」と言うと、絶対知らないんですね。当たり前ですけど本当にショックを受けます（スライド2 参照）。

国連の定める「国際年」とは

1959 年～、国連は特定分野の活動について、その国際社会への貢献を周知、促進するため「国際年」を宣言

1975 年	国際婦人年		マイルストーンが...
1979 年	国際児童年		
2005 年	国際物理年		
2011 年	世界化学年		
2015 年	光および光技術の国際年		
2019 年	元素周期表の国際年		
2022 年	国際ガラス年		

スライド2

それで、国際児童年、国際物理年、国際化学年、などあるのですが、光および光技術の国際年というのが、いまからちょうど10年前にありました。いろいろマイルストーンがあって、物理年も、例えばアインシュタインが奇跡のミラクルイヤーで3つの論文、「特殊相対論」と「ブラウン運動」と「光電効果」に関する論文を書いた年からちょうど100年ということで、2005 年が国際物理年になりました。2019 年はさっき言いました周期表の国際年ですね。その後、国際ガラス年がやっと2022年に決まりました。なぜか。ちょっと苦しいんですけども、マイルストーンをいくつかリストアップしました。直接的な理由は、ベルリンでドイツガラス学会100周年をやるということで、このことはこの5年ぐらい前に決まっていたので、この年にみんなで世界中でガラスをたたえて祝福しようということがありました。そのうえで2022年の理由付けをするため、いくつか理由を考えました。たとえば、エジプトで、ツタンカーメン王のためにエジプトガラスが使われているのが発見されて100周年。これはびっくりなんです。またフレネルレンズ、灯台で使われているレンズの発明から200年。それから、フロート法といって、いま、巨大なビルディングの建築のために、巨大なフラットなガラスが作られるようになっていますが、これが可能になったのは、スズ金属の上にガラス融液を流し込んでやると、まったく

研磨せずにフラットできれいな表面のガラスを作ることができる、こういう偉大な技術の発明から70周年。さらに、スタジオのガラス、工芸作家たちの運動から60周年とか、50周年とか、いろんなマイルストーンがありました。それで2014年にですね、コーニング社——エジソンの電球を作ったのもコーニング社なんです——という世界最大のガラス会社が、「Arrival of The Glass Age」というYouTubeビデオを流しました。それから、ちょうどその翌年が国際光（ひかり）年で、その時に「Glass and Light」＝「ガラスと光」という特集号が、アメリカのセラミックス・ソサエティによって新しくできたジャーナルで出版されることになりました。これに僕も1本、単独著者で寄稿しています。このスライドにうつっているパイ先生というのはすごくパワフルな、エネルギーがすごい先生で、この先生がいろいろ活躍して、光だけでなくガラスも国連国際年にしようじゃないかということで、運動が始まったということです。

次にお見せするのは、コーニング社の、さっき言ったYouTube動画です。

（動画再生 [Welcome to the Glass Age]）

（動画を見ながら）いまスマホは割れませんか。あんな薄くて強いガラスができるようになったのは、つい最近、20年ほど前からです。

国際ガラス年と日本

次にいきます。日本でも国際ガラス学会をパシフィック横浜で主催しまして、その時にICG会長がアメリカのチャウダリーさんからスペインのアリシア・デュランさんに代わるということがありました。このアリシア・デュラン会長が非常に精力的に動いたおかげで、国連での採択に至ったという経緯があります。もちろん、それにあたっては、2030年の国連の目標であるSDGsに対してガラスが非常に貢献をしているということがあります。このスライドは、AGC、旭硝子の島村会長の基調講演の写真ですが、非常に素晴らしい講演でありました。日本でも国際ガラス年の実行委員会が設立されて、私がその委員長を仰せつかりました。翌年、21年に最終議案を合議して、共同提案国として日本も参加しました。そのときに、アリシア・デュラン会長から「セツ、お前、日本の国連大使を知らないか？」と聞かれました。「いや、僕知らないんだけどな」と思ったのですが、その後、東大の先生に聞いたら、たまたま大隅国連大使を知っていて、コンタクトをとることができました。彼も日本代表として、この国連国際ガラス年の議決に協力をしてくれました。それで、2021年5月18日——僕、ふだんは夜10時過ぎたらもう眠くて寝ちゃうんですけども——この日は夜、午前1時まで起きて、この総会決議案が可決される瞬間を聞いていました。

それで、いよいよ2022年が始まって、2月にジュネー

ブの欧州国連本部、UNOGというんですが、その「人権と文明の同盟の間」という部屋で国際開会式を開きました。この時も日本から3人の人が招待講演をしています。1人は住友電工の大西光ファイバ事業部長、それから2人目が旭硝子の杉本研究所長、それからもう1人は工芸作家の樋口主明さん、です。樋口さんは女性で、素晴らしい作品をたくさんたくさん作ってらっしゃるんですが、その方が工芸ガラス協会、世界の工芸協会が樋口さんにぜひお願いしたい、ということで、唯一工芸作家で選ばれたのが日本人の樋口さんであったということです。それで、ベルリンで国際ガラス会議が予定通りに開かれました。僕、ベルリンフィルが大好きで、カラヤン、アバド、それからサイモン・ラトルが大好きで聞きにいきたくったんですが、7月はずっと夏休みでベルリンフィルはどこかに行っちゃって、全然聞けなかったのが残念でした。このスライドはブランデンブルク門ですね。ちょうどこの時期はコロナの終盤で、その頃は空港でPCR検査を義務付けられていましたし、みんなマスクしているのがアジアでは当たり前だったんですが、ヨーロッパの人は全然気にせず、マスクもせずに、ランチもピュッフェ形式で、過ごしていました。おかげで、30人ぐらい日本人が参加していたんですけども、そのうち10人ぐらいがPCR検査で陽性になって帰れなくなって、1週間ベルリンで過ごさざるを得なかったというラッキーな（？）人もいらっしゃいました。閉会式は東京でやりました。日本もちゃんと貢献しているということです。

それで、ぜひ、皆さん、これ、メモをとってください。iyog2022.jp、これ見たらめちゃくちゃ面白いです（スライド3参照）。いろんな勉強ができます。何がすごいかって言うと、アーティスト170人分のリンクがあって、この中で、これ面白そうだなというものをクリックすると、その工芸作家のウェブサイトに行きます。ぜひともこのページを見てください。力作です。実行委員会が苦労して一生懸命コンテンツを集めて作ったという経緯があります。



スライド3

ガラス、人類と歩んできた万能材料

それからもうひとつ、文科省科学技術週間「学習資料：一家に1枚」のテーマに採択されました。前年の8月にオンラインで面接をやって、競争率20倍だったんですけれども、さいわい5月にちょうど国連総会で可決されて、「2022年は世界中で国際ガラス年を祝うんだ」と言ったことがアピールポイントになったんだと思います。それで、スライドにありますとおり、「ガラス、人類と歩んできた万能材料」ということで、このポスターができました（スライド4参照）。



スライド4

12人の若手チームによって作られて、いろいろな種類のガラスを紹介しています。それから、ここにQRコードがあって、ここからウェブリンクにつながるという工夫もなされています。いろいろなことを勉強できるんですが、例えばこの部分に注目すると、地球のマントルの化学組成とガラスの組成はほとんど一緒だな、とか、こんなものもガラスでできているんだな、とか、わかるようになっていきます。文化・芸術・生活・医療・科学・技術を支えるいろいろなガラスがあるということが、ここからも分かるわけです。ということで、ガラスは万能材料だということも覚えて帰ってください。そして、SDGsに対応しているところ——17種類のサステナブル・デベロップメント・ゴールズに対応しているところ——に、ちゃんとマークを入れています。それから、科学の発展、情報通信技術を支えるガラス。スライドはちょっと模式図というか、漫画のようなものですが、光ファイバがあってこそ、いろんな生活が成り立っているというのは、もう疑いのないところだと思います。

それからメダルが描いてあるのは、ノーベル賞です。ノーベル賞に貢献しているガラスがたくさんたくさんあるということです。例えば、カミオカンデでチェレンコフ光を、宇宙から飛んできたニュートリノを追跡するため、浜松ホトニクスの光電子増倍管が使われている。おぼけみたいな巨大なガラスの真空管の中にアルカリ金属を入れてやると、非常に高感度に光を検出することができます。日本の浜松ホ

トニクスの光電子増倍管があったから、ニュートリノの発見が可能になったといっても過言ではないわけです。

それで、次の見どころとして、光を曲げ、集めるもの。みなさん、よく知っていますね。レンズがそうです。望遠鏡があったからプトレマイオス、コペルニクス、ガリレオ、ニュートンによって、古典力学、物理学が可能になりましたし、顕微鏡があったからこそ、生物学が発展したということがあります。それから、ブラックホールの観測も、非常にフラットな熱膨張率が0のガラスが開発されたことによって、初めて可能になりました。反射型望遠鏡も、熱膨張率が0のガラス（オハラ社：日本製）があって初めて可能になったということがあります。

このようにガラスは、いろんなところでいろんな活躍をしています。次のスライドも本当は見たいんですけど、もう時間がないから次に行きますね。次のスライドは、情報化社会を支えるガラス、です。この緑で光っているのが、さきほどお話ししたエルビウム添加ガラスです。

このポスターは英語版も作ったので、全世界に配りました。700枚持って行って、100枚ぐらいいは余って、それを持って帰ってきて、僕の部屋に100枚ほど残っています。よろしかったらもらってください。

ガラス動画コンテスト

それから動画コンテストもやりました。たくさんの、240件の静止画、30件の動画があって、僕たちが審査したんですけど、面白かったです。これはね、素晴らしいんですよ。たとえば、この動画。僕の話よりこっちのほうが面白いんじゃないかな、絶対。「涼のある世界」。夏の小樽です。小樽ガラスのガラス工芸ですね。金属よりもガラスのほうがいいでしょう。これは北一硝子、ご存じでしょうか。こういうもの。

（動画再生 [ガラスの無い世界ある世界コンテスト「涼のある世界」]）

（動画を見ながら）この写真の建物はルーブル美術館とちょっと似てますね。ガラスのピラミッドと。

はい、ここで動画のほうはちょっと飛ばしますね。動画は以上です。動画にもあったように夏は暑いですね。赤外線遮蔽ガラスというものあって、部屋が暑くなるのを防いでくれるですけども、やっぱり夏はですね、冷酒をこのガラスの器で楽しむというのも大事なことでないかなと僕は思うわけです。

ガラスの美しさ、ガラスの今後

それで、ガラスはなぜ美しいか。透明だから。光を反射してキラキラ光るから。あるいは着色しているから。特定の波長の光を吸収して反射すると色がつくから、ということになります。でも何より僕がガラスを美しいと思うのは、光を操ることができるからです（スライド5参照）。それが、

ガラスはなぜ美しい？



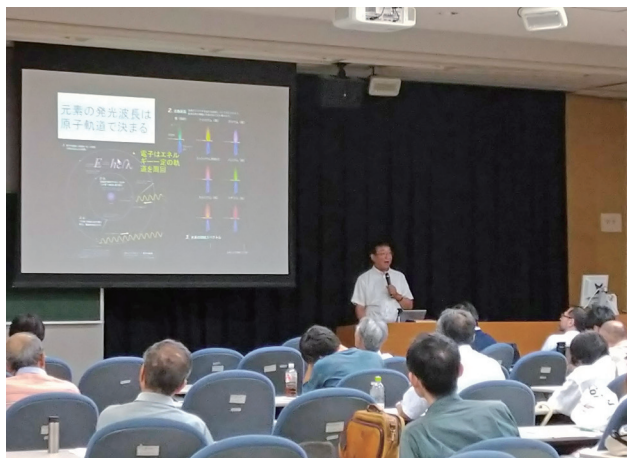
スライド5

やっぱり……。

それからガラスは実は地球と環境にもやさしい。リサイクルが一番進んでいるのはガラス材料ではないでしょうか。

石器時代の黒曜石、実はあれガラスです。あれがあったおかげで、人間は包丁で動物の皮を剥いで肉を食べることができるようになりました。それから青銅器、鉄器等々、ありますが、新しい材料を開発した民族が歴史的にみて有利になるわけです。青銅器よりも鉄のほうが戦争やっても強いわけですね。

20世紀、シリコンの時代という言い方ができるかもしれませんが。21世紀は、僕はガラス時代がやってきたと思っています。材料は技術を制する。新しい科学の発展を促すことは確かです。量子力学が誕生したのも、溶鉱炉で鉄を大量生産して、その温度をいかに正確に測るかというモチベーションがあったが故に、量子力学が誕生したということが言えます。新しい材料を開発するためには、領域を超えた学問分野の融合的アプローチが有効なので、若い研究者が活躍できる。今日はあんまり高校生の方がいらっしゃらないのでちょっと残念ですが、持続的繁栄を維持する、SDGsを含めて知恵を絞りなさいと。総合人間学部ではそういう勉強ができますよ、ということです。無機化学は僕です。量子力学は藤原先生、光物性物理学は木下先生、数学は木坂先生、立木先生、それから視覚心理学・認知科学



に関しては、以前、江島先生という先生がいらっしゃいましたが、現在は月浦先生という、かっこいい先生がいらっしゃいます。それから環境経済学は浅野先生がおられます。専門領域にとらわれない広い発想と美しいものに魅せられる柔軟な心が大事なんだろうと思います。ということで、今日の講演は以上です。

討論

田部勢津久教授の講演を受けて、討論者・司会者を含めて、会場では活発な議論が交わされた。以下は、編集部によるその要約である。

岩石学・地球科学を専門としている討論者の小木曾哲教授から、天然に存在するガラスはじつは黒曜石くらいしかなく、じつは稀な存在であるのに対して、ガラスと同様に透明で美しいものとして「宝石」があるが、その違いはなにか、質問がなされた。田部教授からは、宝石は長い時間をかけてゆっくり冷却して固体化してできあがるものであり、人工的に巨大な宝石を作るのは非常に難しい。それに対してガラスは容易に巨大なものをつくることができ、そこが非常に異なっている、という回答がなされた。岩石という自然物を扱う研究者と、ガラスという人工物を扱う研究者のあいだで、同様に自然界の物質を扱っているにもかかわらず「見方」が大きく異なることが示され、非常に興味深いやり取りであった。

続いて、建築学・都市計画学を専門とする中嶋節子教授から質問がなされた。中嶋教授からは、まずガラスが建築で使用されてきた歴史について説明がなされ、そのうえで、ガラスと光がひとを魅了する理由として、ガラスが「物質性／非物質性」や「透明／不透明」という二面性をもった存在だからではないかというコメントがなされた。そして田部教授に対して、なぜガラスに魅せられたのか、また、将来のガラスの可能性についてどのように考えているか、さらに今後どのようなガラスを作りたいか、質問がなされた。これに対して田部教授からは、次のような回答がなされた。ひとつめの質問については、根本にはやはり「光るから好き」という気持ちがあり、そのうえで毎日自分で実験をして、ガラスを作って、そして自分が作ったガラスが光って、というプロセスがとても楽しいし、さらにそれがLEDになったり、光通信の光を増幅したり、というかたちで社会の役に立つことがうれしい、ということであった。ふたつ目の質問については、光り続けるガラスが、いまはせいぜい10時間ぐらいしかもたないが、将来は40時間ぐらい光り続ける材料を作りたいという回答がなされた。もしこのような材料ができたら、たとえば、昼間だけでなく夜も太陽光発電ができるようになり、人類のエネルギー問題を解決するのに非常に役立つと思っている、ということであった。

続いて会場のフロアからもいくつかの質問がなされた。

まず、化学組成の観点から、ガラス工芸の地域性のようなものがあるかという質問がなされた。田部教授からは、

ガラスの化学組成は99%同じで、その点でほとんど地域差はないが、技術的に、特別な手法を用いて美しい色を出す、といったことは地域ごとに成されてきた、という回答がなされた。たとえばベネチアでは、ゴールドルビーガラスというものがあり、その作り方はベネチアの工芸作家の秘伝で、その秘伝をバラしたら、その工芸作家は死刑になるというくらいベネチア独自の大切な技法だった、という例が紹介された。

フロアからは続いて、「軽いガラス」や「変形できるガラス」、あるいは「プラスチック質のガラス」といったものはないのか、という質問がなされ、田部教授からは、すでにそういうガラスは開発され実用化されている旨、回答があった。田部教授によると、サランラップみたいに簡単に変形できるガラスがあること、厚さがだいたい100ミクロン以下だといくらでも曲がるようになること、それによってガラスでできている光ファイバが折れないことが説明された。またスマートフォンに使われているガラスのように、厚さ0.2ミリしかないにもかかわらず、非常に丈夫で簡単に割れないガラスがある、という紹介がなされた。さらに、プラスチックは石油から作られているため炭化水素が主成分であり、それがガラス状になったものはたくさんある、ということであった。

続いてフロアからは、討論者の中嶋教授に対して建築設備の機能美について質問がなされたり、田部教授にカメラのように紫外線が見えるようになりたいか、といった質問がなされたり、さまざまなやり取りがおこなわれ、興味深い議論が活発になされた。

最後にフロアから、田部教授にとって美とはなにか、ま



た実験結果が美しいとか美しくないとかいったことがあるか、質問がなされた。田部教授からはまず、オイラーの公式や波動関数といったものをみると非常に美しいと感じる、という回答がなされ、そのうえで、実験結果について美しい／美しくないという判断はしないが、どんな結果であれきちんと保存しておくことが大事だ、という説明がなされた。フロアからは重ねて「田部教授にとって美とはなにか」という質問がなされたが、「それはわかりません」という答えがあった。この質疑応答に関して、司会の岩谷彩子教授からは、田部教授には、実際に光らなくても光る可能性、潜在的な可能性があるものに対する欲望があるのかもしれない、というコメントがなされた。最後に、岩谷教授から、ひとと環境と美という3つの要素が具体的に関わりあいをもつ素材としてのガラスのおもしろさについてあらためて指摘がなされたうえで、セッションが終了となった。

学問で平和はつくれるか？——私が総合人間学部と人間・環境学研究科で学んだこと

藤原 辰史 | Tatsushi FUJIHARA

藤原 辰史（ふじはら たつし）

1976年生まれ、2002年、京都大学人間・環境学研究科中退、同年、京都大学人文科学研究所助手、東京大学農学生命科学研究科講師、京都大学人文科学研究所准教授を経て、現在、同教授。主な著作に『ナチスのキッチン』（共和国、河合雄雄学芸賞）、『給食の歴史』（岩波新書、辻静雄食文化賞）、『分解の哲学』（青土社、サントリー学芸賞）、『縁食論』（ミシマ社）など。



みなさんこんにちは。京都大学人文科学研究所の藤原辰史といます。私が大学生のときに学んだ先生もおられたりして、ちょっと緊張しています。実はこの教室も私の修士論文の発表の場所、先生たちに集中砲火を浴びた場所ですので、あんまりよい思い出のないところで、こ

こにいろとなんとなく力が入っちゃうわけです。この場所は私を育ててくれた本当に大切な故郷、ふるさどですから、この場所について何か話してくれと言われたら断るわけにはいかない。実はまだ6週間ほどボーフム大学というところで教えたり発表したりして、さらにヨーロッパ各地を回って帰ってきたばかりで、ちょっとジェットラグの時間帯なんですけど、全力で今日は発表したいと思います。どうぞよろしくお願いします。

「学問で平和はつくれるか?」、この問いをぶつけてくるのはさすが細見さんらしく、直球で来たわけですね。こんなボールが飛んできたら私もフルスイングで答えるしかないです。今まで47年生きてきて、研究人生は25歳から始まっていますから22年間やってきた、そのほんのわずかな期間でこの問いを振られて、まず先に思った言葉は「作れるに決まってるだろう、何躊躇してんだよ」でした。でも、やっぱりその後、研究者というのはいつもフニャフニャフニャってなってくる。いや、でもこの条件、あの条件、こんな条件があるから、そう簡単にうまくいかないですよ、ね、といった付帯条項がものすごくたくさんついてくる。でも、私は基本的には前向きにこの問いに対して答えていきたいと思っています。その理由についていろいろこれからお話ししたいと思いますが、その前に、「私が学んだこと」という副題がついているので、総人時代に学んだ思い出をお話したいと思っています。

私が総人で学んだこと

私が総合人間学部に入ったのは1995年で第3期生です。そのとききょうも来てくださっているカール・ベッカー先生の授業で京大カードの作り方を学びました。多彩な講義が全学共通科目でありました。それとともに、ユニークな友だちやコイツは一生かなわないなという友だちと出会えたのが私の大切な財産です。総人が始まって3期生で、まだ総人という場所がよくわかってないときの、私の先輩た

ちのイメージはとにかく行方不明者が出てくる、ということでした。この本『学問で平和はつくれるか?』でも「逃げる」ということがキーワードの一つなんですけど、逃げるということがいい意味でもあった。まさしく死屍累々で、4年で卒業しない人がものすごく多い。私のときでも3分の1は留年すると囁かれていて、そんなに緩いんだと驚いたことを今でも覚えています。

ちなみに私が総合人間学部を目指したのは、とても簡単な理由からです。高校の2年生で文系か理系か行くのを決めろと言われた。ところが私は国語がものすごく点数が悪くてセンター試験で一番足を引っ張っていた。世界史と数学は得意なんですけど、物理、化学は全くダメだった。一体どっちを選べばいいのかが全く分からないときに、先生がチラッと教えてくれた。出身が島根県の田舎で藤原だらけなんで下の名前で呼ばれてたんですが、「辰史お前、この感じだと、総合とか発達とか、そういうのがいいんじゃないか」と。それで、神戸大学の発達科学とか、広島大学の総合科学部とかを教えてくれたんですが、そういう意味不明学部の一つが京大の総合人間学部でした。正直名前がおかしいなと思いました。総合人間って、どんな人間を作るとこなんだって、本当に最初分からなかった。

入ってみて気づいたのは、理系の先生も文系の先生もおられて、例えばキノコの菌類の自然史というのもあったり、いろいろなジャンルの先生が集まっておられた。ただその割に、高校のモラトリアムというか、そのままいろいろな学問を勉強し続けられるという意味で、私にはすごく心地のいい学部でした。私が卒業したとき、ちょうど法学部の平野啓一郎さんも同期で、平野さんが『日蝕』で芥川賞を受賞されたあとすぐだったんです。ですから、ものすごい数の新聞社がカメラを構えていて平野さんの周りにいました。僕はその隣の隣ぐらいにいたんです。それで、こんなスターがいるのは京大らしいなと思いつつ、総合人間学部の総代が卒業証書をもらう様子を眺めておりました。顔を全部銀色に塗って宇宙人になって卒業証書をもらっていた。そのときのフレーズが「私たちはようやく猿から立派な総合人間になりました」だったと記憶しています。いまでも名言だと思います。当時金融業者のCMで宇宙人を登場させる「ラララむじんくん」というのが流行っていたんですね。それで「猿からやっとな人間になれた」という言葉に「ああ、そうだよな」と私も思いました。

「何してるの?」ってよく文学部とか理学部の友だちから聞かれて、「こういうことあいうことに関心があるん

だ」と言う、「結局、遊んどるんとちゃうか」と言われた。それで「ああ、そうか、遊びと学びを一緒にする場所が総合人間学なんだ」とかなり納得してしまったこともあります。現に学ぶ中で、先生も多彩だし、学んでる人たちも多彩だし、とにかく自由で、いろいろなことを挑戦できました。今でも自分の心の中にあるし、人環の先生を見ていてそうだなと思うのは、やっぱり他流試合を恐れないことです。どういうことかと言うと、全然違う分野の人に自分の分野の「こういうところが面白いんだ」と伝える言葉を持たなければ、それは自分が分かっていないことと同じであるということ、そのことをここで学びました。

たとえば、私はドイツのナチズムの歴史の研究をしていますが、ナチズムは「国民社会主義」と訳されるんですけど、国民社会主義ってどういう意味かを、例えば生物学で菌類の研究をされている先生とか、宇宙物理学を研究されている先生にも、少なくとも誠実に伝えようとしなければならぬ。その時に初めて学問のブレイクスルーが起こる。学問的に上昇してゆくんじゃなくてむしろ下がっていった、この言語のもとはどういう意味かを深く、そして広く探っていくことが重要で、そのために他流試合をして、一体自分がどういうふうに見られているか、どういう文脈の中にあるかをちゃんと理解しなければならない。そういうことを学んだ気がします。

ただ、私はドイツ系にいたので感じましたが、ドイツ語の先生たちはむちゃくちゃ言葉に厳しかった。ドイツ語系の人たちはお酒が好きで飲みながら説教されることも多かったですが、本当に言語に対する執着は半端でなかった。たんにドイツ語だけではなくて日本語にも厳しかったですね。この前亡くなりましたけど、たとえば小岸昭さんというユダヤ研究者がおられました。彼にもすごくお世話になりましたが、一語一語を丁寧に学んでいくことの重要さは彼から学びました。小岸さんは空で覚えているドイツ語のフレーズがものすごく多かった。黒板に書きながら、ゲテは……、とか、ヘルダーリンは……とか言って、ドイツ語でスラスラ書いてくれる。今もたぶん先生方もやってらっしゃるような、ああいうのに憧れました。私の先生の池田浩士さんは、ドイツ語の先生なのにドイツに一度もいったことがない。どうして外国語をやるのか、その理由

のひとつは日本語を鍛えるためだ、徹底的に外国の言語を体の中に通した上で、もう一度日本語を鍛え直すチャンスを得るためだというようなことを言われたと記憶しています。それから、君は辞書をどうやって引いてるんだと聞かれたとき「いや、主な訳語をみています」と答えると「とにかく辞書は、最初から最後まで、発音記号から最後の語源のところまで全部読んで、概念を把握してから、その上で訳語を自分で考える。辞書にある言葉が必ずしも適切な訳語ではない」ということを教えられました。先生たちのテーマはバラバラで言語が要なので、そういう言葉に対する緊張感も実はここで学んだと思います。

あと、テーマに対して自分でワクワクしていないとやっちゃいけないということも、思い知らされました。つまり、モチベーションがない状態で研究するのはだめだということです。私は研究者の職業についてものすごく驚いたのは、モチベーションが弱いのに研究している人がいる、ということでした。そうじゃなくて、純粹にこれが楽しいんだ、めっちゃ興奮すんねん、ということ、を、恥ずかしげもなく言える場所がここだったなと思っています。

私の研究テーマ

私が研究してきたことは基本的には「食」です。食べるとはどういうことか、食べることをめぐる歴史はどうだったのか。それから、とくに「農」ですね、耕すとはどういうことなのか、農業とは一体どういうことなのか、どうやって人々は食べてきたのか、どういう技術を使ってきたのか。そういうことが、私の研究のテーマですが、それはこの人環だからこそ許してくれたテーマでした。

総人ではもともと国際法とか国際関係論を勉強していました。国際法の授業で米の自由化の問題を扱ったときに大学院生の人から「米の話とかもう古いんじゃないの？」って言われて、すごくショックを受けて、「農業の話って学問の中で古いて思われてるんだ」と少し悩みました。そういうのは農学部でやればいいじゃない、と言われたこともあったんですけど、なんかうろろうしてるうちに、人環や総人では、農業について哲学もできるし、文学もできるということで、行方不明になりそうな私を受け入れてくださった。人環のおおらかさがなければ、私は、間違いなく研究者の道を諦めていたと思います。

ただ、困難も多かった。農業の半分以上は理系なんですね。土壌学とか、植物栄養学とか、機械学とか。『トラクターの世界史』という本も書きましたが、そのときは農業機械学に関わる本をたくさん読みました。『植物考』という本も出していますが、植物学の本を素人ながら文系の観点から読んで、文系の立場から植物とは何かを考えた本です。あこがれの東大の生物学・植物学の先生に新聞で書評していただきましたが、よく勉強してるけど一点だけ気になるところがあるという、それ以外はよく考えられている、という書評で、うれしかった。文系と理系を融合したいという高校時代に考えていたことを実現したいという思いが



あって、今でも理系の先生と文系の先生、両方とお話させていただくことも多いです。農業やってる方々とか、給食の仕事をしている方々とか、それから、建築関係の方が多いですね。人環にも建築学の中嶋節子先生がいらっしゃいますね。最近は建築関係の友だちとか、建築を実際設計していらっしゃる方とかと一緒することもあります。

それから、トラクターについて書いたときは、北海道に「十勝オールドトラクターの会」というトラクターが大好きなおじさんたちの集まりがあって、この本が出版されてすぐにそこに呼ばれました。「よく出してくれた。俺たちがようやく認められる日が来た。ぜひ私たちのツアーに付き合ってもらいたい」ということで、富良野からさらに札幌を吹雪の中めぐるという行程で車で一日かけて、北海道にあるトラクターファンの小さな施設、ミュージアムをめぐるという、貴重な経験をさせていただきました。それはもう理系の世界、純理系の世界です。いかにこの機械がすごいのかという思いがあって、1920年代からのヴィンテージものに彼らは全部油をさして、いつでも動かせるように常に保存していて、私のような者が来たときにそれを動かしてみせる。そのためだけに、素晴らしいトラクターのコレクションを持っていらっしゃる。トラクターは1890年代の半ばにアメリカで発明された内燃機関の機械なんですけど、農業機械もしくは機械の知識を人環で学んでも誰も文句を言いませんでした。

それから、芸術の研究者がこの人環には多くて、私は文学の先生に歴史を教えてもらおうという、ちょっと不思議な状況でした。それから、映画の先生たち、岡田温司先生の研究室の飲み会にも参加させてもらったこともあります。とにかく、あんなに芸術に触れ合う機会はおそらく農学部にはなかったと思います。そのことも私にはとても大きかった。たとえば、『分解の哲学』という本をつぎに紹介しますけど、これも芸術家の人たちとたくさん交流するなかで書いた本です。

『分解の哲学』をめぐる

じつは同じテーマなのに、自然科学と人文科学という二つの分野に分かれているように普段は見えているものがある。本当は同じテーマをめぐる学問なのにバラバラにされているように見えるわけです。『分解の哲学』は、近代の制度でバラバラにさせられたものを、分解というキーワードでもう一度、分けられてしまった知の体系をつなぎなおす試みであると言えます。とくに、食ですね、食べもの。食べものの話をすれば、大抵、おしゃべりの場が持ちますよね。違うジャンルの人でも、国際学会でも、どこの食べもののおいしいだの、まずいだのと言っていれば、だいたい話が盛り上がる。

『分解の哲学』はすぐ韓国でも翻訳が出て各新聞で書評されました。韓国の芸術家はものすごく敏感で、世界中のいろんな人文書を読み漁っていらっしゃいます。韓国に行って驚いたのは、芸術家たちの前で発表したんですけど、

来る質問、来る質問が、人文書、哲学書を読んでいるだけじゃなくて、環境問題についての深い知識に裏付けされたものでした。そういうことに興味がなくて、芸術家はありえないぐらいの勢いでした。実際に、たとえば芸術作品を土の中で腐らせていくような実験的な芸術もあったりして、そういう方々に読んでいただいたわけです。

生態学の先生がおられるので本当に恥ずかしいのですが、私が中学校の時に習った、生産者、消費者、分解者という3つの分け方があります。これがどのように働いているのか、その生産・消費・分解という言葉をもっと社会科学や人文科学に広げていくとどういう風になるのか。物質は循環して、地球の中でリサイクルしているのですが、熱だけはずっと太陽光からもらってきている。この循環の中で、私たちがいつも見失いがちなのは、生産者あるいは消費者ではなくて、死骸や髪の毛とか皮膚とかから落ちたものを、もう一度食べて分解して、無機栄養塩と水とに変えて、最後また植物に返していくような、分解者の生物・動物たちのことです。それがどうも注目されていない、少なくとも文系の人は、経済学では消費と生産ばかり見ていて、あまり分解者を見てこなかったもので、こういうふうに分解者というものを勝手に借りてきて、うまく適合させたいな、と思っていました。

そうすると、分解あるいは食を考えると、人間もミミズと大した変わらない存在として分解の役割も担っているのではないかと考え始めて、人間の再定義ということを考えました。多田富雄さんという有名な免疫学者がおっしゃっているように、人間は一本のチューブである。内臓と言われているものは外に接していて、空気や食べものが通っていったり出ていく。私たちはその通り道に過ぎない。しかしその通り道には、膨大な数の微生物が住みついていて、それが多くのものを分解したり、免疫作用に関わったりしている、そのことは、今の腸内細菌ブームで、ご存知の通りだと思います。それ以上に、私たち自身も食べものであって、私たちの髪や皮膚から剥がれ落ちたものに付着している微生物がそれを食べたりしている。そう考えると、私たちにおいて食べることで排泄はしょくたになんていって、私たちはこの循環の中の一つの通路に過ぎない。生態学の中の、さまざまな物質の循環の中の通路の一部として私たちは存在していて、その窓口として、料理とか食とか、台所とか農業とか、そういうものが存在している。この自然に貫かれている人間として私たち自身を見ていくのはどうだろうか。そういう視点で人間の定義をしています。

それとともに、生態学だけではなくて、人間社会に限ってみても、壊れたものを分解してまた再利用していく行為はいろいろなところで見られるんじゃないかと思って、この『分解の哲学』では、いろいろ壊れたものを元の世界に戻していくことを論じています。たとえば、あまり有名ではないドイツの哲学者、アルフレート・ゾーン＝レーテルのある新聞記事の文章があります。「壊れたものの理念」というタイトルで、ナポリ人の技術について書いてい

ます。

ナポリ人は、卓越した名人芸で、自分の所有する壊れた自動車を、街頭で見つけたような小さな木の棒という、予想外のものを取り付けて、ふたたび走らせることができる。だがもちろん、当然のことながら、それはまもなくふたたび壊れるだけだ。というのも、完全に修理してしまうことは、ナポリ人に嫌悪感をもたらすから。ナポリ人はむしろ完璧な自動車など、ハナから諦めているのである。

これは私が大好きな文章です。いろいろな人文学の担い手、ジョルジュ・アガンベンも引用していましたが、私はドイツ語にもどって訳しなおしました。人間自体、何か完璧なもの、ツルツルに完成されたものではないのに、人間にとってあらゆるものが壊れつつある。人間自体ひびも入っているし、割れてもいる、そういう存在であって、そういう存在だからこそ、私たちは他者に依存しながらしか生きていけない。このナポリ人にとっての自動車もそうで、完璧なものをナポリ人は恐れる。トヨタみたいにならなくても壊れないのは何かあるに違いない。そうじゃなくて、壊れるからよしよしとなる。壊れることへの美意識みたいなものがここにあります。

あと僕がこの『分解の哲学』で論じていて思い出したのは、日本における金継ぎの技術です。日本は中国大陸や朝鮮半島から、たくさんの器を輸入してきた。船で運ぶのでガタガタ揺れちゃって、バリバリ割れる。もったいないってことで、これ何かで繋げようとして考えたのが漆でした。漆で繋げて、繋げたところにちょっと金塗ってみようかって塗ってみる。すると、繋げたひびのところがむしろ金の模様に見えてくる。そういう技術のことを、金継ぎまたは金継ぎと呼んでいるそうです。

これが、東日本大震災の後に大ブームになったのをご存知でしょうか。ものすごい数の人がそれを始めた。私の知り合いで、『食べるとはどういうことか』という私の本の表紙も書いてくれた漫画家の堀道広さんという方がいます。この人は、漫画家でありながら、奥能登の輪島で修行された漆職人でもある。ずっと鳴かず飛ばずだったけれど、漆職人の漫画を描いたら売れたそうです。彼が震災後に金継ぎのワークショップを東京で開いたら、人が殺到した。彼に聞いたら、単純に震災で大切にしていたものが割れたからというのが、一つ目の理由だそうです。彼が言う二つ目の理由には驚きました。多くの人々があの震災で大切な人を失った、その大切な人を失った人が、金継ぎをすると少し心が軽くなる。金継ぎという行為と、心の臨床行為が繋がってるんじゃないか。私は妙に説得されました。このエッセイは筑摩書房の文学国語の教科書にも載っていますが、高校の先生からも反響があります。

こういうクズの話、ボロやクズという言葉が、日本には、ゴミという言葉の前に、もう一回再利用することを前提に

したものとしてあった。そういう言葉がたくさんこの世界には存在していて、たとえば、鉄クズという言葉があって、鉄クズを集めて売ったりする有名なアパッチ族の話があります。大阪の空襲の後に、東洋一の陸軍の砲兵工廠の跡地で鉄クズを集める、とくに在日コリアンの人々のことです。彼らの生き様を描いた小説『日本三文オペラ』と『日本アパッチ族』、『夜を賭けて』はどれも面白いです。こういうことについて最近英語で論文を書きました。

私が今注目しているのは、クズとかボロとか、そういうものからどんなものが出てくるのか、あるいは生態学のジャンルでは、基本的には崩れたり壊れたりしたのですが、それを私たちは食べものとしている。食べものというのは、生物の死骸でしかないのに、死骸を食べながら、循環の一員となっていく、その人間のありようを考えていきたいなと思って、いろいろなことを論じています。こここで、自己紹介というか、総合人間学に憧れて、また人間・環境学研究科に入って学んだ私の宿題の提出ということで、お許しいただければと思います。

『学問で平和はつくれるか?』について

さて、この本『学問で平和は作れるのか』ですが、この本をいただくまで、私は総合人間学や人間・環境学が平和学だという発想が全くなかった。こういう手があったのかと、正直、驚きました。私は戦争にも平和にも関心があって、ガルトウングのことも当然知っているし、ものすごく引用もしている。戦争の問題は本当に重要だと思っていたのですが、そうか、平和という言葉で、もしかしたら、いろいろな学問の構想がどこかでつながる可能性があるのか、と思いました。

とくに、細見さんが「わけ知り顔のリアリズム」に対抗するのが目的だと書いておられますが、これはとってもいいですね。わけ知り顔のリアリストたちこそが、私への主要な批判者で、「なんでロマンばかり見ているんだ」というのがいつも私に対する主要な批判のコメントです。これは大変すっきり、「ああ、そうだ、これと対抗しなきゃ」というふうに思いました。

今日は多分若い方もおられて、これから学問をやりたいという方もおられるので、ちょっとその方々に向けて語りたいと思いますけど、学問に魅せられた人、勉強に魅せられた人って、目がキラキラしている。驚く達人たちが、ここに執筆者として書いている印象を得ました。40歳になっても50歳になっても驚き続けているのは、体力と気力があると思うのですが、その驚く持続力はとりわけ自然科学の先生方の文章にたくさん見られて、私は改めて学問って驚嘆する行為なんだなと思いました。それから、これも若い人に向けて言いますが、驚けるから問いが出てくる。一体なぜこれがこうなのかという驚き。後で、この本から引用した私の問いのコレクションをお見せします。

それから、本の作り方が特徴的だったように思いました。少なくとも細見さんの序章をみなさん読んだ上で書いてい

るパターンが多かったと思いますし、他の文章を参照しながら、書いていらっしゃる。私はこういうのが大好きなんです。お互いに耳を傾け合って、「この人はこういうことを論じているけど、それを我田引水するならこうだな」と相互行為をどんどんやっていくのがこの本の魅力です。当然、人文系の先生が生態学の先生の文書を引用するパターンもありますし、その逆もあります。あと、細見さんの発言を批判する方もおられます。そういうふうにお互いにいろいろ聞き合う。それは一方で、この本のキーワードを3つ挙げろと言われたらその1つに当たるであろう「謙虚」という言葉とつながると思います。「リスペクト」と言ってもいいかもしれませんが。要するに、自然に対しても人間に対しても当てはまるんですけど、驚嘆の達人であるとともに謙虚になる達人たちがこの本には集まっていると思います。

話は飛びますが、ついこの前までボーフムというところで研究や教育をしていたのですが、ボーフムというのは皆さんがご存知の通り、ルール工業地帯と中学校のときに地理で習った、そこの都市の1つです。ルール工業地帯にはたくさんのポーランド人が移民しているので、カトリックが結構強い。しかし、それ以上に面白かったのは、戦後に日本人の炭鉱労働者が結構ルール工業地帯にやってきて、そこで働かされていたという展示をケルンで見ることができたことです。ハンブルクにお住まいの川辺ナホさんの作品です。日本人が炭鉱労働者として働いていたのはどういうことかと言うと、とくに九州地方ですけど、そこで働いている労働者たちの中でも比較的にしっかりした、企業にとっても結構優秀な労働者を集めて、ドイツからの要請でガストアルバイター（外国人労働者）として来てくれと言われて、日本政府との取り決めで結構な量の人たちをドイツの技術を学ぶという名目で送り届けた。それでルール工業地帯の炭鉱で日本人が働くんですけど、思惑が外れてしまった。日本側としては最高の技術を学ぼうと思ったけれど、ドイツの炭鉱と日本の炭鉱はかなり違っていて、道具もドイツの方が圧倒的に重い。使い方を学ぼうにもそもそも使えない。日本の方が労働運動が激しくて、ドイツの方ではそんなに激しくないの、いきなりジグザグデモを日本人が始めたりした。それで労働運動カルチャーの相互作用みたいなのがあったりとか、そういう話を聞くことができたりして、とても面白かったです。

そのルール工業地帯の都市にデュースブルクという都市もあります。ライン川に接していて、ヨーロッパ最大の内陸港をもつ街ですけど、今は移民の街になっています。鉄道で駅に降りた瞬間に分かるんですけど、止まっている車はほとんどブルガリア、ルーマニア、トルコのものが圧倒的に多くて、そこで私、調査をさせていただきました。びっくりしたのは、そこのグルントシューレという小学校に行ったんですね。するといわゆる「白人」でドイツ語をしゃべる「障害」を持たない子どもが4%しかいない。残り96%はさっき言いましたような移民の子どもたちで、な

おかつその半分以上がいわゆる日本で言うなら障害者に当てはまる子どもたち、両親もほとんどドイツ語がしゃべれない、そういう小学校です。そこの校長がポッシェン先生という方でした。ポッシェン先生はものすごくパワフルで、「ここは勉強なんて学ぶところじゃない。とにかく3つを学べばいい」と言っていた。一つは謝ること。もう一つポッシェン先生が、あらゆる国から来た人たちに絶対これだけは教えているという言葉が「リスペクト」でした。とにかくどんな人に対しても、その人は生きてきたんだから、まずリスペクトの心を持ちなさい。これだけはもう叩き込みますと言われていた。あと3つ目は廊下を走らない。非常に大事だそうです。廊下を走らないというルールは大事なものとおっしゃってました。

ところで『学問で平和はつくれるか?』でよく出ているように、たとえば菌類の数というのはなかなか分らない。そういうふうに分らないことを分らないと言える人こそ、研究者の鏡だなと思います。分らないことを分かった振りをするのがこの「わけ知り顔のリアリズム」だと思います。そういうふうに問いを開いてあげると、学生にかぎらず若い人たちはすごく元気が湧く。ぼくはこれだけ頑張ったけど分らなかったと、私もそういうふうになれるようになりたい。

あと、この本の本文の最初はスケールから始まるんですけど、一円玉の話が出てくる。太陽系と銀河系の距離感が私は全然つかめてなかったんですが、センチメートルに変えると距離感がつかめてくる。ナノテクノロジーの話も出てきますが、人文系って本当に距離とか面積に弱い。私が一番困るのは、農学ではヘクタールとアールが命なんです。ヘクタールが分からないと農業経済についていくら説明しても分からない。例えば日本の農業労働者は1930年代1ヘクタール以下が60%です、と言っても全然通じない。人文科学研究所に行って、啓蒙研究の先端を牽引する研究者たちの前で私が発表したときに、最初の質問が「藤原くん、ヘクタールってどれくらいの広さなの?」でした。100m×100mですよと言うんですけど、そういう私も含めて、スケール感というのはすごく文系の先生は弱いと思うので、これは大変勉強になりました。そういう達人たちの本ですから、ぜひ若い人に勧めたいと思います。

それからさっきも言いましたように、分らないことを分らないと言うことですね。たとえば、『学問で平和はつくれるか?』の第2章に書かれている以下の問いは、僕は全く今まで浮かんだことさえなかったものです。

地球が形成された頃、氷微惑星が彗星のように地球軌道付近までやってきて地球に大量に衝突していたとしたら、現在よりもはるかに多くの海水が存在したはずである。現在の海水量は、質量にして地球全体のわずか0.023%。10倍しても、たったの0.2%である。もし、地球を形成した微惑星の中に氷主体の微惑星が0.2%含まれていたなら、海水の量は今の10倍となり、表

面がすべて海水で覆われた陸地の全くない惑星ができていただろう。なぜ、地球の海水量が質量にせずか0.023%にとどまったのか、その理由は全くわかっていない。(同書、39頁)

これは私にとってものすごく感動的な問いでした。そんなことを考えたことなかった。海は大体これぐらいだろうなと思ってたんですけど、地球の陸地はわずか質量0.02%の海水に浮かんでいるようにみえる。なにか水溜りに浮かんでいるようなこのスケール感ですね。こういう問いをめぐる思考を私はもっともっと知りたいし、これは哲学に直接つながってゆく問いじゃないかと思います。南極の奥地はどうしてこんなに寒いのかを3つの概念を使って説明してください(41頁)、第6章では、DNAの塩基配列について、どうしてこういう無駄な配列があるのかは解明されていない、と書かれています。執筆されている先生の語り方が面白かったこともあるのですが、こういう分かっていないことは、勇気が湧いてくる問いだなと思います。

本当に釈迦に説法で恐縮ですけど、問いがたぶん学問の7割か8割ぐらいで、これがうまく立てられるかどうか大きい。総合人間学、人間・環境学というジャンルは問いが命であると感じます。やっぱり外にさらされているということが大きい。隣の部屋に別のジャンルの先生がいて、そこにもちゃんと分かる問い、心に響く問いを模索する。鶏が先か卵が先かとか、カエルが先かおたまじゃくし先かといった問いが昔からありますが、いつまで考えてもワクワクしてられる問いと出会える。そこがこの本の面白いところだと思いました。

あと一つだけここで話しておきたいことがあります。第10章で木下先生が胎児について書かれています。私も歴史学的に胎児にこだわっています。食べものを考えるときに必ず学ばないといけないことに公害があります。日本は公害がものすごく激しかったわけですが、その激しい中で、食べものがどういう循環の中で生まれているのかを見直そうという動きが出てきます。水俣病の場合、有機水銀が知らない間に流れていく過程で、魚を食べた猫や犬が最初に踊り死にするとところから始まりました。そのときに、胎児性水俣病患者が大きなテーマとして出てくる。ウイルスとの共同作業で生まれた胎盤は普通は毒を通さないために存在しているのに、なぜそれが有機水銀を通してしまうのか。胎盤は有機水銀を勘違いして取り入れてしまうんですね。それで胎児性水俣病が発生した。

ベトナム戦争も食の研究において重要なんです。いわゆる枯葉剤といわれる農薬を撒いたとき、たくさん撒かれた場所は森ですけど、森に撒いたのはゲリラの人たちを追いつつためと教科書で教えられます。実はあれは畑を攻撃していたんです。食べものを食べさせないように畑を攻撃して、人々を飢えさせていくという戦略でもありました。そのときに火炎放射器も使うと、ダイオキシンが発生します。このダイオキシンも胎盤を通して。胎盤を通るもの

と通らないものの関係がどうなっているかが、この20世紀にすごく明らかになったのが1950年代、そして60年代で、そこで『2001年宇宙の旅』の最後の場面へ。木下先生のあのエッセイを読んで初めて、あの場面は私にとっても、文系理系という言葉が本当に情けないくらい小さく見えるような、大きな問いのあらわれだと思ったりしました。

ここからは、私が学んだ2人の総合人間学的な学者、自然科学と人文科学を統一しようと試みた2人の学者を紹介します。そして最後に「学問で平和をつくれるか？」という難しい問いに戻って終わりたいと思います。

一人は吉岡金市で、1902年に生まれて1986年に亡くなった、京都大学農学部出身の、何学者と言っているかわからない人です。ここが面白いところです。彼は博士号を3つも持っています。農学、経済学、そして医学です。それがどうしてなのかを後で申し上げます。彼は公害という問題に出会います。二人目はジョズエ・ジ・カストロというブラジル人です。ブラジルの東北部出身の、これも何学者と言っているかわからないのですが、栄養地理学者、栄養学と地理学を合体した人です。これは戦争の問題と深くかわる飢餓という問題に通じています。平和という言葉、あるいは戦争という概念をもう一度考え直さなければならぬという問いが『学問で平和はつくれるか?』にはたくさん含まれていました。第15章の小倉さんの文章に「バイオフリーダム(生自由)」という言葉がありました。自由に活動できていないこと自体を平和と言えるのかという問いを小倉さんはそこで出されています。戦争と平和という概念をもう一度考え直したとき、食の研究者からすると、食べものが食べられて栄養が供給されているだけではなく、食べものを通じてちゃんと何らかの関係性や喜びを感じられているかどうか、平和の一つの定義になってくる。そういうテーマにぶつかったのが吉岡金市^{きんいち}でありカストロでした。

吉岡金市の総合人間学



- ・1950年に農学、1955年に経済学、1972年に医学の博士号取得
 - ・ルイセンコのみチューリン農法の信奉者。偏屈、自己礼賛、アカデミズム不信。
 - ・直播農法+農業機械普及の専門家
 - ・イタイイタイ病の原因を突き止めた学者
 - ・農学の父、横井時敬と似ている。
- 吉岡金市

15

まず、吉岡金市という人の話をしたいと思います。拙著『農の原理の史的探究』(創元社)でもっとも力を入れて論じた人物です。彼についてはこんな証言があります。

背が高く、からだつきがごついのに、声は非常に軟らかく抑揚があって西なまり（岡山県西部）のあるものの言い方をされるので、何となく遠慮がなくて、私どもはなんでもお尋ねしました。先生は明快に答えてくださいました。

この佐藤初江という人は岡山に住んでいる農民です。農民が彼の本の月報に彼のことを書いているんですけど、どうということかという、吉岡金市という人は、学問を修めるだけで満足する人たちを痛烈に批判して、どうして実践しないのか、これだけ学んだのに自分の知識をどうして村の人たちに向けて伝えようとししないんだ、と言っていた。そこで彼は、村に保育所や共同炊事の場所を作りながら、女性たちや男性たちと一緒に生活改善を行いながら農業を進めていった。1950年に農学、1955年に経済学、1972年に医学の博士号を取得しています。実はこの人、筋金入りのマルクス主義者。もっと言うとスターリニストです。ルイセンコというスターリン時代に評価された生物学者が編み出したミチューリン農法の信奉者でした。高密度の密植など西洋近代科学ではとても説明がつかないような農法です。1950年代、東京大学農学部にはミチューリン農法を信奉する人たちがたくさんいました。今でも農学部の地下に潜ると資料がいっぱい眠っています。

さて、吉岡の本を読んでいると、ひかえめにいっても偏屈な人物で、私はこの人についての論文をすごく頑張って書いたんですけど、結論は絶対に友達にはなりたくない人物だと思いました。なぜかという、とにかく自分好きなんです。自分が大好きで、自分を褒めてくれる人がとにかく好きで、自分を批判する人は全員敵とみなす人です。しかも一旦敵と見定めたら、徹底的にこき下ろし続ける。学者の風上にも風下にも置けない。本当に目も当てられない。こういう人物について書くと歴史学者は怖いんです。こういう論文を書いたら、ご家族からお手紙が来る。吉岡の場合、吉岡についての私の論文をわざわざ読まれたご遺族からお手紙が来た。結構あけすけに書いていたので、その手紙を開けるのが怖くて、開くまでに本当に一日かかりました。するとそこには「父のことを書いていただいてありがとうございます」と褒め言葉が書かれていて、あと5%とは何だったのかなと思いつつも、正直ほっとしました。

彼は直播農法と農業機械の普及の専門家です。直播農法とはなにか。日本の田植えというのはあらかじめ苗代で種をまいて稲を育てて、苗になったのをもう一度持って行って早乙女さんたちが植えていた。今は田植え機がものすごく立派になっていて、自動で肥料も落としてくれたり、軍事衛星の平和利用のナビゲーションシステムともつながっていて、きれいに田んぼの平らさ加減を自動でチェックできたりする。それくらいレベルが高くなっていますが、田植え機がなかった時代には人間が田植えをしていた。その

時には田植え歌があって、近世ではだいたい男性のリーダーが太鼓ボンって鳴らし、歌いながら田植えをしていた。だいたい卑猥な歌です。早乙女さんが下着も履かないで田植えをしているのを神さまが見て喜んでいるみたいな卑猥な歌です。しかし、妊娠している女性が田植えをすると結構流産が多い。そもそも田植えは女性にとってかなりの負担なので、田植えをなくせば女性が解放されると吉岡は考えた。どうして女性にこだわるか。彼は岡山の農家出身で、お母さん大好きだった。彼のお母さんもものすごく厳しく働いていた。子供の目から見ても、農業はどうして女性にこれだけ負担をかけるのだろうか、と疑問だった。これが農業経済学に彼の目を開かせた問いだった。お母さんのことが大好きで、そういう女性が解放されるために田植えから女性を解放しようというので、もうばら蒔いてそのまま、という直播農法を普及させることを真剣に彼は考えた。そうすれば、機械化が大変難しい田植えの部分をスキップできる。

1945年の戦争が終わった段階では田植え機はなかった。1960年代にようやく田植え機ができて、それで全部機械化が整いました。それまで田植えだけが難しくてできなかった。日本の高知県の農機具会社だったと思いますが、やっと田植え機を作った。それまでの間、吉岡は田植えをやらず直播農法をやろうとしていた。とにかく機械を入れちゃえばかなり労力削減になるだろうということを言った人です。だから家族経営ではなくて、日本でも集団農場でやるべきだということも言っていた。

それとともに、これが一番感動的なんですけど、吉岡は、富山県で起こったイタイタイ病の原因を突き止めた学者として今、公害史では名を轟かせている人なのです。農学の父と呼ばれる、東京農業大学を創設した横井時敬という人がいますが、この人も足尾銅山事件のときに、農学者としてコメントを出しているので、ちょっと似ています（彼も『農の原理の史的研究』で論じました）。いずれにしても、吉岡は田植えの廃止とイタイタイ病で有名です。彼は岡山出身でした。日本の農業機械化の中心は北海道ではありません。岡山です。岡山には児島湾干拓があります。大原孫三郎とかがお金を出して作った場所で、彼はそこにいた。児島湾というのは低地なので、ポンプを使わないと排水ができない。そこでポンプを作る鍛冶屋さんがたくさんいました。それとともに、岡山は、あるいは中国山地は、基本的にたたら製鉄で有名で、昔から和鉄を作る技術もあった。トラクターの耕す部分、その先端は刃物ですから、包丁と同じ技術で、鋼鉄が必要になる。その技術があったので、実は岡山がトラクターの聖地です。今でもヤンマー農機の本社は岡山の児島湾にあります。『トラクターの世界史』の調査のとき、お土産にトラクターのミニカーをもらいました。

彼の経歴のなかには、彼の思想形成に影響を与えた森近運平という、大逆事件で亡くなった農学者も登場します。母校の先輩だったということもあって、吉岡は彼をすごく

愛していて、反骨精神もこの岡山で育まれた。その後京都大学農学部に入って、大原農業研究所へと移動した。彼の自意識からすれば、京都大学に残って当然と思っていたようです。だけど、京大の人たちは何も現場を知らないということに気づいた。なのに農学とか言っている。どういうことだ。俺は昔から児島湾で母を手伝ってきたんだと彼は思った。彼はむしろ現場へ行くアカデミシャンであることを誇りに思っている。

田植えを廃止する理由として、たとえばこういうふうに書いています。

日本の農業労働力の中で、最も過労してゐるものは主婦であり、婦人であつて、さうしてそれは戦争の進展と共に益々婦人の労働負担は重くなつてきて、時間においても人数においても、だんゝ婦人に多くの労働力がかかつております。

その後、彼は満洲に調査に行き、広大な土地があるとされた満洲こそが、直播の、そして機械化農業がリアルにしやすい場所ではないかと見ていきます。彼はずっと農業機械化を大事だと言ってきたことがあって、左翼知識人だったけれど、国家に重宝されていた面があります。ほとんど多くのマルクス主義者は1930年代に転向して、マルクス主義を捨てて、国家に忠誠を誓っていくんですけど、彼は非常に特殊で、農学者で実利家なので、思想をほとんど曲げないまま戦争へ突っ込んでいけた。なおかつ、当時の農業思想の中心は小農主義で、小さい規模の家族経営の農業こそが社会を支えるという考えが主流で、北海道だけは別でしたが、京都大学農学部も東京大学農学部もそういう考えに完全に染まっていた。その中で吉岡はほぼ唯一、京都大学の小農学派に反発して、集団化を支持した人です。ですから、戦後、彼はすぐにGHQとも繋がって、小型の手押し型トラクターの開発へと向かいます。ここがユニークなんですけど、ソ連みたいな大きなトラクターは導入できない。そこで、皆さんも使ったことのある人がおられると思いますが、手押しのトラクターを発明するのを手伝っていきます。

彼自身はスターリン批判が始まるまでスターリンを信奉していて、ミチューリン農法も実践して、日本の農本主義を批判していました。こんな農業のロマン主義は良くない、実践だ、と言っていた。ちなみに私はどちらかというと小農主義派なので、ここでも吉岡と考えが違う。小さい規模の農業のほうが大きい規模の農業よりも自然に対してケアができると思っているので、私の立場は違いますが、彼自身は小農主義の人たちが家族の大事さを捉え、それが天皇制と繋がり、軍国主義と繋がったのだから、自分はそういう満洲移民に繋がっていく京都や東京の農本主義者たちとは違うんだとずっと言い続けていた。私が一番疑問なのは、彼のスターリン批判があります。フルシチョフによるスターリン批判があった後、すぐに彼はスターニズムを捨

てます。どうして？ というくらい簡単に、すぐに岩波の『思想』に論文を書いて、スターリンは肥料のことを何も分かっていない、と論文に書いている。その変わり目の速さはおよそ学者に必要な誠実さからかけ離れている。

転向した後に、彼はイタイタイ病と出会います。ここまでの段階で、経済学と農学の博士号は取っています。実践で頑張っている吉岡先生という人がいるということが運動家の界隈で知られていたもので、神通川の流域に住んでいた農民たちが、吉岡先生に手紙を書いた。10万円しか用意できないけど、これで原因を突き止めてくれないか。東大の先生とか来るけど全く埒が明かない、ということで彼に頼んだわけです。吉岡は、10万円は大したお金ではないけれどと書いているように、原因を突き止めるにはごくわずかなお金です。けれども、この金を元手に彼は原因究明に着手します。

彼とは友だちになりたくないけど、とても吉岡を尊敬する理由の一つが、この問題と出会って医学を一から学び直したことです。問題が先にあって学びがあとに来る。自分の元来のテーマではなくて、解きたい新たな問題があるから、その後に博士号がついてくる。彼は最終的にイタイタイ病と膀胱炎との関連性についての疫学的観察を発表して、イタイタイ病の原因は、東京の先生が言う井戸水の汚染ではなくカドミウムで、それが食物の連鎖を通じて人々の口に入ったということを明らかにした。

彼自身は元来文系だったので、民俗学の本を読んで、その知識をたくさん持っていた。日本農業経済学会は1924年11月19日に設立されますが、その発起人の一人に柳田國男が名を連ねていたように、農業を学ぶには民俗学が必要だった。吉岡自身も民俗学の本を調べて、イタイタイ病の原因は食べものではないかと考えて、民族学の資料館に行き、そこの農民たちが今まで一体何を食べてきたのか、どういう食生活だったのかをインタビューと文献でまづ明らかにします。それで発見したのが、この人たちは貝や魚を食べているということでした。それらをすり潰して、一体どういう物質が入っているかを確認するとともに、イタイタイ病で亡くなった方の体の一部をもう一度調査して、そこにどういう物質が共通のものとしてあるかを調べていって、原因を突き止めていった。もともと神通川は鮎の名産地と知られていて、その他にもたくさん魚類が生息していて、人々はそれを食べていた。遺体から重金属が検出されれば、当然その魚類からも検出されるはずだというきわめてエコロジカルな発想から、川魚の分析へと向かっていった。そういうことが彼の論文には書かれています。

1950年代、60年代に日本で体験された公害はすべて食と関わっています。新潟水俣病では阿賀野川が有名ですが、佐藤真監督の映画『阿賀に生きる』（一九九二年）に見事に描かれているように、カギをサケにヒューと投げて引張るカギ漁が盛んで、川魚をよく食べていた。そこに有機水銀が含まれていた。たんに川に有機水銀が流されただけ

では人間は傷つかない。食べものを食べるからなんですね。四日市公害もそうです。四日市公害は大気汚染による喘息だと言われているけど、最初は海洋汚染です。三菱モンスターとか、中部電力とかたくさんの化学産業、それに石原産業という農業産業も入ってきた。石油産業なのでタンカーが来る。すると石油が漏れる。漏れた油で魚が油臭くなって売れなくなって、漁民たちが氾濫を起こしたのが始まりです。名古屋の人たちは、この漁民たちを助けるために、漁民の魚を買い支える運動を始めます。それが、世界で極めて早い段階で消費者と生産者を直接つなぐ食の運動の提携、いわゆる地産地消の運動の先駆けの一つだったと言われています。地産地消って、いまでもローマ字で書かれたりするものもそのためです。

吉岡に戻ると、彼は『公害の研究』でこんなふうに書いています。

神通川水系の農業公害は人間公害に転嫁するのであって、この経路を証明することが、イタイタイ病の原因を解明するカギである。従来のイタイタイ病に関する研究が、飲料水中の重鉛（Zn）の検出のみに集中していたことは、医学の限界を最も具体的に露呈していたといわねばならない。（『公害の研究』53頁）

さらに彼はこんなカッコいい文章も記しています。

イタイタイ病の解明は、先ず医学と農学の障壁をうちやぶることによって、なしとげられるものである。しかしながらそのためには、自然科学と社会科学の総合統一した哲学的な方法論を前提とした、より高い見地からする問題究明の科学方法論の確立が必要なのである。我々のこの研究はそれを実験したものである。（同上、90-91頁）

彼自身はマルクス主義者としてある程度知られていたもので、田舎に行くと「赤が来た」と騒がれていた。吉岡が報告書を出したときには、当然地方の政治家たちから絶対公開するとプレッシャーがかかる。しかし彼は動じない。とにかくこの報告書を突き付ける。そういう意味で、とても立派な話です。ただこの論文を書いた後に、彼によると、発見の名誉を地元の医者にとってゆかれてしまう。イタイタイ病の原因を見つけるうでは地元のお医者さんも協力していたんですね。有名になったのが地元のお医者さんで、自分はせっかく見つけたのにスターの座に立てなかったという思いが吉岡にはあって、これ以外の文章はだいたいその医者への批判です。パチンコ狂いだとか、学者が絶対やってはいけない人格攻撃をしています。それでも私は吉岡の虜になりました。

ジョズエ・ジ・カストロについて



ジョズエ・ジ・カストロ
1880-1971

「飢餓計画」という言葉の命名者。ブラジルの地理学者。国連FAOの議長『飢餓の地理学』（1952）で、シュープの書籍を引用しつつ、ナチスの飢餓計画を非難。そのうえで、その意図的な飢餓がヨーロッパの植民地主義（プランテーションによる食糧自給圏の破壊）、さらには戦後の地球上の3分の2の飢餓とつながっていることを指摘。

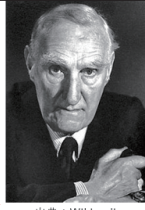
もう一人がジョズエ・ジ・カストロという人です。この人はナチスがやっていた罪の一つに「飢餓計画」という名前を与えた人です。飢餓計画というのは、どうしても私たちはアウシュヴィッツにナチスの罪を向けがちであると岡真理さんが『学問で平和はつくれるか？』の座談で語っていらっしゃいますが、ナチスにはロシア人捕虜を300万人餓死させたという罪があります。これはほとんど論じられてこなかった。ポーランドを植民地化して、そこに在外ドイツ人たちを集めて村を作っていくということもナチスはやっています。これはヨーロッパ植民地主義の延長で、人を飢えさせ、土地を疲弊させ、余ったものをドイツ人に回すというとても悪いことをやっていました。これを批判したのがジョズエ・ジ・カストロです。しかも、このナチスの犯罪は戦後の食料システム、フードシステムと直結していると言ったのもこのジョズエ・ジ・カストロでした。

先の吉岡ととてもよく似ているんですが、栄養学、地理学、社会学、政治学の統合を目指した人です。地理学が専門ですけど、戦闘的地理学者と呼ばれていて、徹底して西洋植民地主義を批判する人でした。ご存知の通り、ブラジルはポルトガルの植民地だったときに砂糖の基地、あるいはカカオの基地にされていました。ですからモノカルチャーが増えていき、土地が荒れ、そうすると当然飢えやすくなります。その飢えの中で彼は育っていったので、西洋植民地主義が一体何をするのかよく分かっていた。その中で彼はまさに栄養学と地理学を結びつけた。その一つが土を食べることを巡る考察です。

ブラジルでは多くの飢えた人たちが、普通に店先に売っている石けんみたいな土を買って、それを食べる風習があるんですけど、これはミネラルが足りていないので、土を直接食べる。これは飢餓の状況の中でよく見られる現象です。1950年代にあった中国の大躍進政策で、だいたい4500万人から6000万人が餓死したと言われています。毛沢東時代の中国の問題ですが、そのときにも観音土と言われる粘土のような土がものすごく食べられた。要するに私たちは植物や動物を通じて大地にある栄養、地球にある栄養を食べているだけなので、土を直接食べるのは分からないでもない。物質循環としてはそういうことなんです。こ

「世界食料委員会」の挫折

1943年5月～6月、アメリカのバージニア州ホット・スプリングズに、アメリカ大統領ルーズベルトの招請により食糧農業会議が開催。44の連合国政府が参加。ソ連も参加。ナチスの食料政策によって飢餓が始まっており、ユダヤ人が飢えている情報を共有。大戦後に、すべての人々を食糧の欠乏から解放しようという宣言。1946年に初代FAO事務局長のジョン・ボイド・オアJohn Boyd Orrの「世界食料委員会 World Food Board」の提言。



出典：Wikipedia.com

→しかし、食糧にかかわる国際機関が世界的な食糧商社などのコントロールができる権限をもつことは、イギリスやアメリカの強い反対があって失敗。FAO（国連食糧農業機関）は単なる調査と啓蒙の機関でしかなくなる。

原部正治『イギリス食料政策論—FAO初代事務局長J. B. オール』日本経済評論社、2014年。

の土を食べるという悲惨な現象から、栄養学、社会学、地理学をつなぎ合わせていく。

どうなってくるかという、飢餓を救うには、食べものだけを与えるのではだめだ。大地全体、土地全体が、栄養豊富にならない限り、人間は飢餓から救われたとは言ってはならない。つまりエコロジカルに飢餓から救わなければならないということはずっと言っていたのがジョゼフ・ジ・カストロです。さらにその文脈で、ナチズムのように人を飢えさせて食を奪うということは西洋植民地主義と変わらないと言っているわけです。

食と植民主義というのは古くてすごく伝統あるテーマで、砂糖と茶をめぐる問題は何度も読まれているだろうし、最近では『トマト缶の黒い真実』とか、『チョコレートの真実』という本が出されています。私は、なんとかの真実と書いている本は読まないようにしているんですが、この2つは本当に素晴らしいルポルタージュで、『トマト缶の真実』はイタリア産のトマトと書いてあるものの非常に多くが中国のウイグル地区で作られていることを明らかにしたものです。トマトのペーストが古くなって黒ずんだ状態になったとき、その黒ずんだトマトに赤い色素を入れる技術を開発していったグローバル企業の話が淡々と書いてある。当然イタリアでは出版停止になりました。『チョコレートの真実』では、カカオの産地コートジボワールで働いている子供たちは、マリ共和国から来ている。その子供たちはお金持ちになりたいと言って国境を越えてくるんだけど、当然そこには男たちが控えていて、無理やり農場に連れて行かれるという話がここに書いてある。それを明らかにしよ

うとしたジャーナリストが政府に近い人間に殺されていく、その殺害の話も描いている。

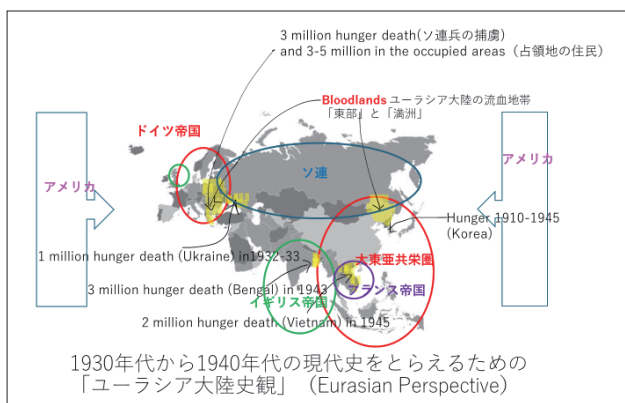
こういうふうに西洋植民地主義 500 年というのが食の問題と深く関わっていたということは高校までに習ってきたことです。この問題のために、カストロともう一人、イギリスの栄養学者ジョン・ボイド・オアが、第二次世界大戦の末期にアメリカで、世界食糧委員会を作ろうと唱えました。これは世界の食糧を一旦国際機関の倉庫に集めて、飢えている地域にちゃんと重点的に配分しながら、企業の関与をそこに入れない、企業を監視しながら食糧を保持する、非常に強い権限を持った委員会を作ろうという構想でした。しかし、イギリスやアメリカの強い反対があって、結局失敗して、本来は世界食糧委員会が国連食糧農業機関（FAO）の代わりになる予定だったんですけど、FAO は今は単なる調査啓蒙の機関となっているわけです。

歴史を捉えていくと、飢餓は現代史の中心にあった。これは私の作った地図ですけど、1930 年代、40 年代も、ドイツがひどかった、日本がひどかったというよりは、ユーラシア大陸のパースペクティブからすると、どこで飢餓が非常に盛んに起こったのか。ソ連とドイツ帝国の間、大東亜共栄圏とイギリス帝国、フランス帝国の間、それからソ連と大東亜共栄圏の間にある満洲国、そして何と言っても朝鮮半島の春窮と言われる飢餓が生じています。さまざまな飢餓がいまだにこういう地域で同時に起こっていることをやっぱり考えなければならぬと思います。

あらためて「学問で平和はつくれるか？」

大体以上が私の本日の発表内容なんですけど、じゃあ「学問で平和は作れるのか」というテーマに戻っていきたくと思います。今の吉岡も、そしてジ・カストロも、両者ともにいろいろな学問を組み合わせました。それ自体がとても素晴らしいことだし、私自身もやりたいと思っているんですけど、ただし私がこの二人から学んだことは、問題が先にあるという切迫感です。現場が、フィールドが先にあって、そこからしか統合は生まれないということを二人は体現している。つまり、学問で平和を作れるかというときに、平和という問題、あるいは戦争という問題、それがどういう問題なのかということが切実なこととして頭と体に入っていない限り、およそあらゆる学問を統合することには意味がないということが、おそらくこの二人から出てくるんじゃないか。何かに駆られるようにしてしか統合というのは生まれないんじゃないかと私は感じてきました。

『学問で平和をつくれるか？』第 13 章の藤田耕司さんの言語学の視点から考えると、組み合わせる知性という議論があります。人間というのは言語を階層的に組み合わせながら概念をどんどん膨らませることができる、そういう知性を持っている。そしてその知性はおそらく、人間が人間になっていく、その必然の中で組み合わせられた知性であって、何らかの学問を作るために組み合わせられたわけではないというのは当然のことだと思います。しかもそれ



はやはり日常生活から発信されているものと言えます。吉岡金市にとっては食べものという日常生活。ジョズエ・ジ・カストロにとっては、自分の故郷の飢えた人々が土を食べているという現実。そういうふうな日常生活をつぶさに見つめ直すことで、ようやくこの戦争と平和の問題がいかに深く結びついているということ、決して分かれているものではなくて簡単に切り離せないものだということが分かるのではないかと。

それから最後に『学問で平和をつくれるか?』第12章の林達也さんの論考に登場するネズミですね。あれはすごい面白い話で、実験室で飼っているネズミ。農学部では、ある研究室の院生さんたちの日常の仕事はいかにネズミを早く殺すかだということを私はソフトテニス部の後輩から聞いたことがありましたけれど、実験動物であるネズミは実験室の環境にいと食べ過ぎるんだ、ということが書いてある。林さんが書かれていたのは、学問というのはいつまで経っても深い山で、分け入っても分け入ってもいつまで経っても分からないことが続いていく。林さんは植木等が好きなんですね。植木等の「ホンダラダホイホイホイ」という歌を引用されている。135頁ですね。人間なんて所詮そういうもんだよってことで、お話が終わってるんですけど、これとても面白いなと思いました。

「どうせこの世は ホンダラダホイホイ／だからみんなで ホンダラダホイホイ」と書いてあって、要するに、いつまで経っても結局この世界は何も変わらないよとも読めるんだけど、しかしこの本を読んでいる読者の一人としては、これは学問へのラブコールだと思わざるをえません。どれだけ山を越えたと思っても、また新しい知見が増えていく。問いが増えていく。問いがどんどんどんどん増殖していく。いつまで経っても終わらないオープンエンドな社会をどう耐えていくのか。その問いへの耐え方をやっぱりこの本から学びたいわけで、それがおそらく平和を作る一つのスタート地点になるんじゃないかな、というふうに考えました。

すごく時間をオーバーして恐縮ですけど、これでお話を終わります。どうもご清聴ありがとうございました。

*本講演記録は、2024年10月31日に、人間・環境学研究科で開催された特別公開講座における藤原辰史先生の講演をテープ起こしして、藤原先生にご確認いただいたものです。なお、特別公開講座は、人間・環境学研究科編『学問で平和はつくれるか?』（京都大学学術出版会）の出版記念として行われました（編集部）。



2024年度 人間・環境学研究科受賞者一覧

*学年等は受賞時のものです。

現役生・修了生の活躍

■ 数理・情報科学講座

- ・藤本 修嗣(修士1年)「強化学習を用いた弾幕シューティングゲームを攻略するエージェントの作成」情報処理学会ゲーム情報学研究会 2024 年ゲームプログラミングワークショップベストポスター賞

■ 人間・社会・思想講座

- ・本間 桃里(博士3年)「非正規滞在の子どもの公教育からの排除のメカニズム—ノンフォーマル教育の場における教職員への聞き取りから—」(学会誌『異文化間教育』59号掲載研究論文) 異文化間教育学会論文賞 2022-2023年度(56号~59号)
- ・中村 徳仁(博士課程修了。現在、三重大学助教)“Das Unbehagen im Naturrecht: Was bedeutet die Neue Deduction des Naturrechtshinsichtlich der Entwicklung von Schellings politischer Philosophie?” (Schelling-Studien 10) 第64回ドイツ語学文学振興会奨励賞

■ 認知・行動・健康科学講座

- ・渡邊 寧(博士3年)「生成 AI からの業務フィードバックはワーク・エンゲイジメントを高めるか?—強み伸張/弱み改善フィードバックに関する RCT—」共同発表者 中山 真孝(人と社会の未来研究院 特定講師) 竹村 幸祐(滋賀大学 教授) 内田 由紀子教授 Japanese Association of Industrial/Organizational Psychology 産業・組織心理学会 2024 年優秀学会発表賞
- ・奥内 蒼馬(博士1年)「重力がフィッツの法則成立性に及ぼす影響の運動学的評価」日本スポーツ心理学会 第51回大会最優秀発表賞
- ・宇田 あかね(博士2年)「幼児期の巧緻性—ひも通しの操作性と運動能力検査の関係—」日本発達神経科学会 第13回学術集会ポスター賞
- ・季原 一樹(修士2年)「音の周波数が視覚標的の軌道予測に与える影響」日本バイオメカニクス学会 第30回大会奨励賞
- ・冠 儒(博士2年)「人は自分が思っているほど他人に迷惑をかけているのか?—援助要請行動における関係性への影響の過大視の文化差—」日本心理学会日本心理学会 第88回学術大会 優秀発表賞

■ 言語科学講座

- ・王 海涛(令和6年3月博士学位取得。現在、神戸大学 大学 グローバル教育センター 日本語等教育ユニット 助教) “An experimental study of the polysemy of the Mandarin Chinese temperature adjective *leng*” 2024 年度日本認知言語学会第25回全国大会学会日本認知言語学会奨励賞
- ・白石 暖哉(修士2年)「現代日本語における文末表現「V ヨウニ」が表す「命令」と「祈願」」日本語用論学会第27回大会大会発表賞

■ 東アジア文明講座

- ・開 信介(平成30年3月博士学位取得、現在、三重大学人文学部 リサーチアソシエイト 客員准教授)『久生十蘭作品研究—〈霧〉と〈二重性〉』(和泉書院 2023年3月) 第十九回全国大学国語国文学会賞
- ・楊 峻懿(令和4年9月博士学位取得 現在、蘇州大学 講師)『海を越える「水産知」——近代中国における水産人材の育成とその活動』日本国際政治学会第23回アジア太平洋研究賞・佳作

■ 共生世界講座

- ・安藤 加菜子(令和3年5月博士学位取得、現在、人文学連携研究者)シリーズ・現代の福祉国家17『在宅育児手当の意義とあり方—自治体による新たな現金給付とその可能性』(ミネルヴァ書房 2024年3月) 自治体学会 2024 年度研究論文賞
- ・岩木 雅宏(博士3年)「ネオリベリズムの戦間期日本における一起源—自由通商協会の思想史—」経済学史学会発行『経済学史研究』より 第17回 石橋湛山新人賞【本賞】

■ 文化・地域環境講座

- ・迎田 暁(修士1年)「天智天皇奉祀神社創建運動の主体と経緯—近江神宮の創建に関する研究—」日本建築学会 2024 年度(第16回) 近畿支部研究発表会優秀発表賞
- ・佐野 文哉(令和3年9月博士後期課程修了、人間文化研究機構拠点研究者 京都大学海域アジア・オセアニア研究(客員研究員)「言語変化における統治性と権力: 「フィジー手話」の構築をめぐる事例から」『社会言語科学』第26巻1号, pp.94-109. 社会言語科学会 第49回研究大会 第24回 徳川宗賢賞(優秀賞)
- ・高橋 そよ(博士課程修了。現在、琉球大学准教授)「沖

縄のサンゴ礁資源利用に関する生態人類学的研究」第46回沖縄文化協会賞（金城朝永賞）

■ 物質科学講座

- ・ 傅 馨怡（博士1年）"Size-Tunable Diameter Separation of SWNTs by Changing the Metals Coordinating with Phenanthroline-Based Nanocalipers" ChemOnTubes 2024 Oral Award
- ・ Chanachai Pattanathummasid（博士3年）"Synthesis and F-Ion Conduction of Ba_{0.57}Mn_{0.43}F_{2.43} (M = Y, La, Nd, Sm, Bi) As Solid Electrolytes for All-Solid-State F-Ion Batteries" The Electrochemical Society PRiME 2024 電気化学会 秋季大会一般学生ポスターセッション最優秀賞 The Electrochemical Society PRiME 2024 電気化学会 秋季大会一般学生ポスターセッション最優秀賞
- ・ 堤 直也（修士2年）「共鳴光電子分光とX線磁気円二色性による希薄磁性半導体 In_{1.75}Mn_{0.05}Sn_{0.20}O₃ の電子状態研究」日本物理学会 2024 年秋季大会（領域5）学生優秀発表賞
- ・ 張 瀚（修士1年）"Effect on defect and surface species of ZnO photocatalyst on activity in photocatalytic methane oxidation elucidated by SiO₂ coating strategy" OKCAT2024 Outstanding Research Award
- ・ CHANACHAI PATTANATHUMMASID（博士3年）"La_{0.9}Ba_{0.1}F_{2.9} (LBF) as a high-energy negative electrode for all-solid-state fluoride-ion batteries" 2024 年度第3回関西電気化学研究会電気化学会関西支部 2024 年度関西電気化学奨励賞（ポスター奨励賞）
- ・ LIAO KUOWEI（博士2年）"High-Performance and Stable Ru_{0.875}Ir_{0.125}O₂ Catalyst for Oxygen Evolution Reaction in Water Electrolysis" 2024 年度第3回関西電気化学研究会電気化学会関西支部 2024 年度関西電気化学奨励賞（ポスター奨励賞）

■ 地球・生命環境講座

- ・ 寺門 寛（修士2年）「スルメイカ平衡石の酸素安定同位体比および微量元素の複合分析による回遊海域識別指標の開発」（口頭発表）2024 年度 日本地球化学会第71回年会 学生奨励賞
- ・ 増田 和俊（博士3年）「小笠原諸島に固有なムラサキシキブ属3種の起源と過去の集団動態」日本植物分類学会第24回大会 口頭発表賞
- ・ 大波 千恵子（博士1年）"Novel far-red light-harvesting antenna complexes of *Phaeophila dendroides* (Ulvales, Ulvophyceae) for acclimation to severe light conditions within coral skeletons." 「サンゴ骨格内の特殊な光条件に順化するための *Phaeophila dendroides* (アオサ目、アオサ藻綱) の新規遠赤色光捕集アンテナタン

パク質複合体」2nd Asia-Oceania International Congress on Photosynthesis（第2回アジア・オセアニア国際光合成会議）Best Poster Presentation Award（最優秀ポスター発表賞）

教員の活躍

■ 東アジア文明講座

- ・ 郭 旻錫（講師）プリミエ・コレクション132『自己否定する主体一九三〇年代「日本」と「朝鮮」の思想的媒介』（京都大学学術出版会 2024 年3月）現代韓国朝鮮学会 2024 年度現代韓国朝鮮学会賞（小此木賞）2024 年度比較文明学会研究奨励賞（伊東俊太郎賞）田辺元記念哲学会 求真会 2024 年度 田辺元賞

■ 文化・地域環境講座

- ・ 前田 昌弘（准教授）"Acceptance and transformation of the housing "ladder" in slum resettlement projects in Colombo, Sri Lanka" 日本建築学会 Japan Architectural Review Best Paper Award 2023
- ・ 前田 昌弘（准教授）『歴史的街並みが残る過疎地域の「住み継ぎ」に向けた環境像の共有：岡山県瀬戸内市牛窓地区における実践を通じて』「住総研 研究論文集・実践研究報告集」NO.51（2024 年版）に掲載一般財団法人住総研第23回研究・実践選奨

■ 物質科学講座

- ・ 山本 旭（助教）「光を利用したメタン転換触媒系の開発」化学情報協会 JAICI（ジャイシ）賞
- ・ 田部 勢津久（教授）「レーザガラス光学材料研究と教育への貢献」エルンスト アッペ&カール ツァイス 財団オットー・ショット研究賞 E.Abbe & C.Zeiss 財団

■ Otto Schott Research Award

- ・ 許 健（特定助教）「真空準位基準束縛エネルギー図に基づいた新規長残光蛍光体の開発」第79回第79回（2024 年度）日本セラミックス協会進歩賞
- ・ 吉田 寿雄（教授）「光触媒を用いた物質変換反応の開拓」2024 年度触媒学会学会賞（学術部門）

■ 地球・生命環境講座

- ・ 石村 豊穂（教授）「生物源炭酸塩の超高感度安定同位体分析による新たな水域生態環境指標の開拓」リタ水・環境科学振興財団 2024 年度クリタ水・環境科学研究優秀賞
- ・ 阪口 翔太（助教）「植物の種形成における地理・生態・時間的隔離の役割」日本生態学会第29回日本生態学会宮地賞

情報処理学会ゲーム情報学研究会2024年ゲームプログラミングワークショップ ベストポスター賞

強化学習を用いた弹幕シューティングゲームを攻略するエージェントの作成

藤本 修嗣

Shuji FUJIMOTO

人間・環境学専攻 数理・情報科学講座 立木秀樹研究室 修士課程2回生

このたびは総人・人環フォーラムへ寄稿の機会をいただき、心より感謝申し上げます。本研究は「弹幕シューティングゲームを攻略する AI を作ってみたい」という素朴な動機から始まりました。立木ゼミの皆様をはじめ、たくさんの方々のご助力をいただいて論文投稿に至ることができました。ここでは、AI の一分野である強化学習を中心に、簡単に私の研究をご紹介しますと思います。

強化学習は心理学と関係が深く、動物の運動学習を解析することに端を発しています。例えば「パブロフの犬」は有名ですが、ほかにも「レバーを押すとエサが出る箱に入れられたネズミは、自ずとレバーを押すようになる」という実験があります。これは報酬によりレバーを押す行動が強化される現象で、オペランド条件付けと呼ばれます。AI の強化学習ではこの考え方を発展させ、コンピュータが自律的に試行錯誤を繰り返し、最も多くの報酬をもらえるよう行動を学習します。実際に、強化学習は囲碁や将棋だけでなくビデオゲームでも人間を上回る性能を達成し、ChatGPT などの生成 AI や自動運転にも用いられています。

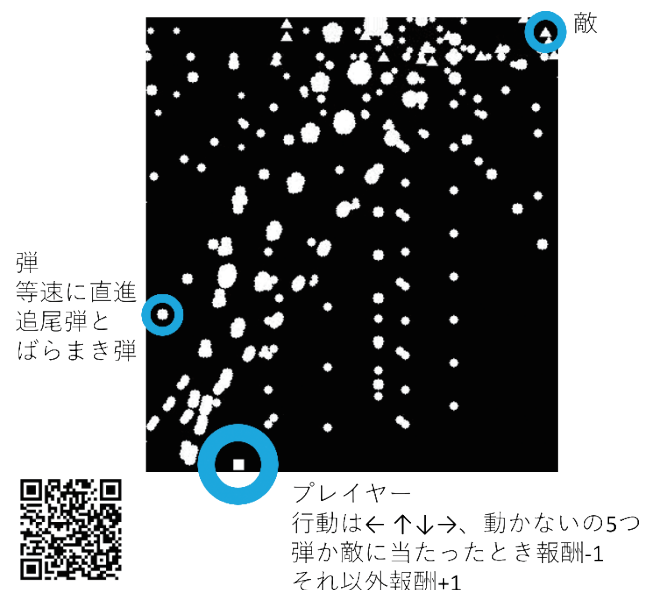
私の研究は強化学習を用いて弹幕シューティングゲームを攻略する AI を作ることです。このテーマを選んだのは、もともと弹幕シューティングゲームを楽しんでいたことと、このジャンルのゲームを扱った論文が少なかったことがきっかけでした。弹幕シューティングゲームの特徴は、画面を埋め尽くすほどの敵弾を避けながら戦う点にあります。単に安全を優先すると画面端に追い詰められ逃げ場がなくなってしまうので、時にはあえて危険な方向に進む必要があります。これが弹幕シューティングゲームの難しいところです。短期的な精密回避と長期的に行き詰まらない戦略を両立しなければなりません。この「長期的な計画」は強化学習が得意でない点と考え、実験する面白さを感じました。

実験では高速で動くゲーム環境を自作し、広く用いられている DQN とその発展である Rainbow を比較しました。1 回の学習につき約一週間を要しましたが、学習した AI は人間には想像もつかない避け方をしていたり、ゲームの

バグを利用したりと、とても興味深い行動を見せました。強化学習では人間の枠にとらわれず AI が自由に試行錯誤するからこそ、時に人を超える性能を達成するのだなあとしみじみ感じました。実際の性能としても、私程度では太刀打ちできないほどのスコアを残していました。

さらに分析すると、学習能力が劣る DQN は短期的な回避しか学習できず、一方 Rainbow では「弾の多い場所を避けながらも目の前の弾を正確に回避する」リスク回避的な戦略を学んでいました。この点が個人的に最も面白く、追加で実験を行ったところ、これは Rainbow の一要素である分布強化学習が要因であると考えられました。分布強化学習は比較的最近に考案された分野であり、未解明な部分も多く残されています。

本研究では、弹幕シューティングゲームを攻略する AI を作成し、分布強化学習に関する面白い特性を確認することができました。今後は分布強化学習を中心に、アルゴリズムの解析やその応用を探っていきたいと考えています。もし興味を持たれた方がいらっしゃれば、ぜひ一度弹幕シューティングゲームを遊んでみてください。



異文化間教育学会論文賞2022-2023年度（56号～ 59号）

非正規滞在の子どもの公教育からの排除のメカニズム—ノンフォーマル教育の場における教職員への聞き取りから—（学会誌『異文化間教育』59号掲載研究論文）

本間 桃里

Tori HOMMA

同志社大学社会学部 助教（京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程 2025 年 3 月修了）

私が研究をする原動力には、社会の不条理に対する強い疑問と怒りがあります。特に、日本に滞在するための在留資格がないことを理由に、さまざまな権利を奪われてしまう人々がいることに問題意識を抱いてきました。在留資格がない人々、つまり非正規滞在の状態にある人々について深く知るきっかけは、2020 年の出来事でした。知人から、「人身売買の被害に遭い、在留資格がないまま過酷な労働を強いられていたフィリピン出身の方々が関西に逃げてきた。助けてほしい」という SOS が届いたのです。逃げてきた方々の話を伺うなかで、非正規滞在に陥るのは自己責任ではなく、国際移動のプロセスや日本での受け入れ制度の不備と深く結びついていること、そうした状況を利用して利益を得るブローカーがいることがみえてきました。さらに、非正規滞在者を厳しく罰する法制度や社会のまなざしが、人身売買の被害者でさえも表に出て助けを求めにくくすることもわかりました。非正規滞在の状態では、生活するための就労さえ「不法」とみなされます。生きていくのに必死人々の弱みにつけこむ反社会的勢力もいます。つまり、法制度が非正規滞在者をつくりだし、かつ非正規滞在者を追いつめ、より「不法」な道へと導いているといえます。

すべての人々に人間らしく生きる権利があるはずなのに、なぜ国籍、在留資格の種類や有無などによってその権利が制約されているのか、疑問を持ちました。立場が異なると見えている社会が全く異なるという現実に気づき、誰もが不条理な扱いを受けずに暮らせるための仕組みを探究したいと思うようになりました。

今回の論文は、公教育にアクセスできない非正規滞在の子どもたちの教育保障の場として 1990 年代後半に始まったノンフォーマル教育の場でのフィールド調査と教職員へのインタビューがもとになっています。私は 2022 年からボランティア教師として関わり、それぞれの子どもの状況に応じた関わり方を模索してきました。たとえば長らく不就学状態にあった子どもは、ほとんど言葉を発しませんでした。学びをどこからどのように始めればよいのか悩みつ

つ、たくさん話しかけて言葉を増やしていきました。教職員みんなで協力しながら、文字の読み書きやお金の数え方、時計の読み方といった生活に不可欠な学びを積み重ねていった結果、今ではおしゃべりで、難しい漢字も書けるようになりました。日本は「子どもの権利条約」や「教育機会確保法」を掲げ、すべての子どもに教育を受ける権利があることを明記しています。しかし、法制度の理念と運用には大きな隔たりがあり、実際には非正規滞在であるがゆえに公教育にアクセスできない子どもたちがいることを論文で訴えました。

研究を進める過程では、多くの葛藤もありました。私は日本国籍をもち、大学院の博士後期課程まで進学できました。既存の法制度の恩恵を存分に受け、論文を書くことができる立場にあります。そんな私が既存の法制度を批判的に書くことができるのかという疑問です。また、初等教育を受ける機会さえなかった子どもたちのことを描くことで、私自身は博士号を取得するということにも、なんともいえない苦しさを感じました。私こそが非正規滞在の人々や目の前の子どもたちを研究に利用しているのではないかと感じ、フィールドノートがとれなくなることもありました。この悩みは解決したわけではありません。それでも、知ってしまったからには、特権性を活かして伝える責任があるとも感じています。社会のなかで不可視化されている不条理を多くの人に知ってもらいたい気持ちもあります。複雑な現実を表現するのに、論文という形式では限界があることも感じつつ、ひとまずは研究が私にとっての表現の主な手段だと思うようになりました。社会に対する怒りがあるからこそ、そして怒りを共有する人々がいるからこそ、研究を続けたいと思います。得られた知見は、政策提言や社会運動にも活かしていきます。

今回の賞は、私個人に対するものではなく、フィールドの子どもたちや保護者のみなさま、教職員のみなさまに対するものとして、受け取りたいと思います。そして、このように寄稿の機会をいただけたことにも感謝申し上げます。ありがとうございました。

産業・組織心理学会第39回大会優秀学会発表賞

AI と人間が協働する職場について —生成 AI による業務フィードバックの可能性を探る—

渡邊 寧

Yasushi WATANABE

人と社会の未来研究院 非常勤研究員／ホフステード・インサイツ・ジャパン株式会社代表取締役

AI と人間の協働を研究する

生成 AI の活用が広まり、私たちの職場は大きな変化を経験している。ChatGPT をはじめとする生成 AI が急速に普及し、メールの作成から企画書の下書き、データ分析まで、AI が日常業務の一部となりつつある。しかし、ここで重要な問いが生まれる。AI は単なる「便利なツール」なのか、それとも「AI 上司」として人間の上司を代替するような存在になる可能性があるのか。

特に注目すべきは、人材育成の課題だ。管理職の負担増加やリモートワークの普及といった職場の環境変化がある中で、従業員一人ひとりに適切なフィードバックを提供することは、ますます困難になっている。もし AI がこの役割の一部を担えとしたり、それは組織と個人の両方にとって大きな価値となる可能性がある。

しかし、AI によるフィードバックが本当に人間のモチベーションを高められるのか。文化の違いはどう影響するのか。こうした根本的な問いに答えるため、私たちは心理学の視点から AI と人間の新しい関係性を探る研究を行っている。

文化心理学× AI：新しい研究アプローチ

私たちが着目したのは、「関係流動性」という文化心理学の概念だ。これは、人々が新しい人間関係をどれだけ自由に選べるかを表す指標である。

例えば、関係流動性が高い文化では転職を行うことは比較的一般である。そこでは、人々は自分の強みについてのフィードバックを好み、そうした自分の強みを元にキャリアを構築していく傾向になる。一方、日本のような関係流動性が低い文化では、長期雇用が根強い傾向となる。そこでは、人々は既存の集団での役割を果たすことを大切に、そのため自分の課題についてのフィードバックを求める。

つまり、どんなフィードバックが効果的かは文化によって変わる。欧米では「君の創造性は素晴らしい」というポジティブ・フィードバックが、日本では「ここを改善すればもっと良くなる」というネガティブ・フィードバックが、それぞれ効果的という研究が文化心理学においてなされてきた。

では、フィードバックの送り手が AI になったらどうなるのか。AI がフィードバックする際にも、欧米ではポジ

ティブな、日本ではネガティブなフィードバックがモチベーションを高めるのか。この問いに答えることは、グローバルに展開する企業が AI を導入する際の重要な指針となる。

実験で見えた「予想外」の結果

私たちは 102 名の働く人々に協力してもらい、実際に AI チャットボットとの業務の振り返りの対話実験を行った。参加者は「あなたの強みを伸ばそう」と励ます AI、または「改善点を解決しよう」と指摘する AI と、15～30 分間対話した。そして、仕事への活力や熱意（ワーク・エンゲイジメント）がどう変化するかを測定した。

結果は予想外だった。日本的な環境（関係流動性が低い）では、改善点の指摘ではなく、強みを褒める AI の方が効果が見られた。なぜか。おそらく、今回の AI は職場の上司や同僚のような位置づけではないことが影響したと考えられる。実際の職場の上司や同僚ではない存在（AI）の課題指摘は、仮にその内容が妥当だったとしても、その課題を解決することは実際の集団内の評価に直結するとは限らない。今回の AI は所属する集団のメンバーではないからである。一方、日本の職場に典型的に見られるような関係流動性が低い状況においては、普段褒められることが少なく、AI からの褒め言葉でも新鮮に感じられ、モチベーション向上につながったと考えられる。

この発見は、AI を職場に導入する際に、その社会の文化や、AI と人間の関係性を考慮した設計が必要であることを示している。

社会実装への第一歩として

この研究は、第 39 回産業・組織心理学会大会で優秀学会発表賞を受賞した。評価されたのは、単に新しい技術を検証したことではなく、人間の心理と文化を踏まえた上で、AI の可能性と限界を科学的に示した点だと考えている。

今後、AI はますます職場に浸透していく。その時、AI を「人間の成長を支援するパートナー」として活用するには、こうした基礎研究の積み重ねが欠かせない。私たちの研究は、その長い道のりの第一歩に過ぎないが、人と AI が真に協働できる未来の職場づくりに貢献できることを願っている。

日本スポーツ心理学会 第51回大会最優秀発表賞

重力が上肢運動の speed-accuracy trade-off に及ぼす影響の評価

奥内 蒼馬

Soma OKUUCHI

人間・環境学研究科博士後期課程 2 年

本研究では重力がヒトの上肢運動に及ぼす影響を評価し、ヒトが無意識下で重力の影響を巧みに制御しながら運動する現象の可視化を試みました。

我々はゆっくりとならば身体を正確に動かすことができますが、速くなれば不正確になります。このような二律背反をなす身体運動の性質に着目した Fitts は、今から約 70 年前、運動に要する時間が距離と標的サイズを用いた簡単な対数式 ($MT = a + b \times \log_2(2A/W)$)、MT 運動時間、A 距離、W 標的サイズ、a と b は定数) で示せることを見出しました (Fitts 1954)。この発見は「Fitts の法則」と呼ばれ、身体運動の時空間的な性質を説明するモデルとして広く知られています。

通常、上肢到達運動は運動開始後に加速してピーク速度を迎え、その後徐々に減速しながら標的に近づく釣鐘状の速度曲線を描きます (図 1A)。鉛直上下方向の到達運動では、運動方向と加速／減速の局面に依存して、重力が異なる影響を及ぼします。上方向への運動では、重力は運動前半の上肢の加速に干渉しますが、後半の減速を促進すると考えられます (図 1B)。一方、下方向への運動では、重力は運動前半の上肢の加速を促進しますが、後半の減速に干渉すると考えられます (図 1B)。本研究では、鉛直上下方向への上肢到達運動に対して、重力が運動方向と運動局面に依存して異なる影響を及ぼす様子を運動学的観点より評価・検討しました。

実験参加者は鉛直面上のスクリーンに投影される標的に対し、できるだけ早くかつ正確に右手人差し指を到達させる課題を行いました。標的は、2 方向 (上、下)、3 距離 (16、32、64cm)、3 サイズ (直径 1、2、4cm) の計 18 条件としました。右手の人差し指先端に貼付された反射マーカの 3 次元座標値をモーションキャプチャーシステムと呼ば

れる装置で計測し、上肢の運動学的性質を解析しました。

解析の結果、下方向の運動に要する時間は上方向よりも長いことがわかりました (図 2A、B)。このことは、重力方向に沿う運動は抗う運動よりも長い時間を要することを意味し、我々の直観に反します。また、このような運動時間の上下差は、運動が難しい (距離が長い、標的が小さい) ときに顕著にみられました (図 2A、B)。この要因として、下方向の運動後半の減速局面において、重力が上肢運動に強く干渉するため、標的に正確に指を到達させるためには時間をかけてゆっくりと制御する必要があると考えられます。さらに、到達運動中の右手の指先の速度変化から、下方向の運動では上方向よりも最大速度が小さいことがわかりました (図 2C)。このことは、下方向の運動では運動後半に生じる重力の干渉を予め考慮して運動前半にゆっくりと加速し、上肢の制御を行いやすくする無意識的な戦略をとっていることを示唆します。

これらの結果は、重力が我々の身体運動に影響を及ぼす様子を可視化するとともに、それを無意識的に考慮しながら効率的な運動をつくり出す、ヒトのもつ洗練された運動生成システムの性質を表していると考えられます。

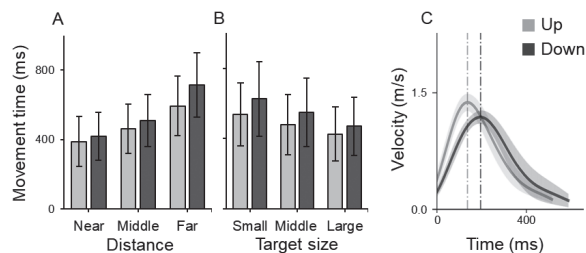


図2 各方向・距離・サイズの標的に対する運動時間および速度変化 (A) 各距離 (B) 各サイズにおける上 (淡い灰色) / 下 (濃い灰色) 方向の運動時間。エラーバーは標準偏差を示す。(C) 上／下方向の上肢運動における指先の速度変化。破線はピーク速度の出現時間を、帯域は 95% 信頼区間を示す。

(引用文献)

- Fitts PM (1954) The information capacity of the human motor system in controlling the amplitude of movement. *J Exp Psychol.* 47: 381–391.
- Gordon J, Ghilardi MF, Cooper SE, Ghez C. (1994) Accuracy of planar reaching movements. II. Systematic extent errors resulting from inertial anisotropy. *Exp Brain Res.* 1994; 99(1): 112–30.

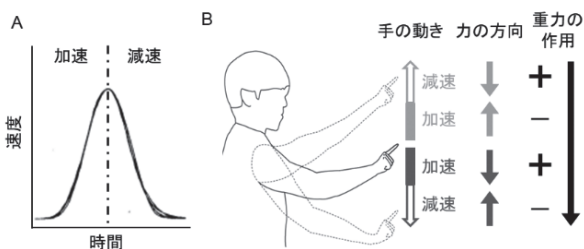


図1 上肢到達運動の速度変化および運動方向に依存した重力の作用の概念図 (A) 上肢到達運動における指先の速度変化。Gordon et al., 1994 を改変。(B) 鉛直上下運動の加速／減速局面における運動と重力の作用との関係性。

日本発達神経科学会第13回学術集会ポスター賞

動作の“質”から幼児の協調性を捉える ——生涯を通して変わる“手の動き”を見つめて

宇田 あかね

Akane UDA

京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程（作業療法士）

「ひも通し」は、ビーズにひもを通すだけの簡単な遊びに見えますが、実はこの動作には、幼児の手指や身体の協調的な運動が高度に関わっています。私はこれまで、ひも通しという一見単純な課題を手がかりに、幼児の微細運動と粗大運動の関連性、そしてその発達の軌跡を明らかにする研究を行ってきました。

今回、ポスター賞をいただいた研究では、3歳児と6歳児がひも通し課題に取り組む際の手の使い方に着目しました。特に注目したのは、ひもを通す手と、ビーズを持つ手それぞれの「手のひらの向き」です。解析の結果、3歳児では手のひらが上や下を向くなど、安定した保持が難しい様子が見られたのに対し、6歳児では手のひらを中間位に安定して保ちながら操作を行えるようになっていました。さらに、このひも通し操作時の“手の使い方の違い”は、ひも通しに限らず、運筆、ボールキャッチ、ボール投げといった、両手の協調が必要とされる他の課題の遂行にも影響している可能性が示唆されました。つまり、ひも通し操作は単なるスピード計測ではなく、動作の質をみることで両手の役割分担や身体の使い方そのものを評価できる重要な糸口だと考えるようになったのです。

現在私は、こうした「操作性」をより精密に捉えるために、深層学習を活用したマーカーレス動作解析を導入しています。ビデオ映像から子どもの手や指の位置を自動で抽出し、角度や動きの滑らかさ、協調性などを数値として定量化することで、従来目視で評価するしかなかった微細運動の質を客観的に分析できるようになりました。

この研究の背景には、私自身の臨床経験があります。私は以前、小児リハビリテーションの現場で作業療法士として勤務していました。日々、発達に凸凹のある子どもたちと向き合いながら、「何がこの子の動きを難しくしているのか」「どうすればその困りごとをうまく補えるのか」といった問いに向き合い続けてきました。その現場での気づきが、今の研究の出発点になっています。さらに最近では、微細運動の「生涯発達」という視点にも関心を持っています。手指の器用さは、幼児期に獲得され、加齢とともに少しずつ失われていきます。では、幼児と高齢者では、同じような支援でよいのでしょうか？ 幼児期の発達支援と老年期のリハビリテーションには、どこに共通点があり、どこに違いがあるのか。この問いを追いかけてながら、将来的には発達の連続性と可塑性に立脚した、新しい支援のかたちを提案していけたらと考えています。

「ひも通し」という一つの遊びが、実はその子の身体の使い方、発達の特徴、さらには将来に向けた支援のヒントまでを内包していること。その奥深さに触れるたび、私はこのテーマの魅力を再認識しています。これからも、子どもたちの小さな動きのなかに潜む“大きな意味”を丁寧にすくい上げ、研究と実践の橋渡しを目指していきたいと思っています。

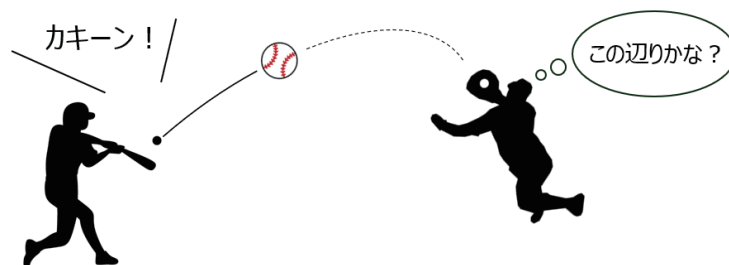
日本バイオメカニクス学会第30回大会奨励賞

音の周波数が視覚標的の軌道予測に与える影響

季原 一樹

Kazuki KIHARA

ヤマハ発動機株式会社



「カキーン！！」という音を聞いて、何を思い浮かべますか？多くの人は、高校野球などでバットの芯がボールをとらえる打球音と、遠くまで飛ぶ白球を思い浮かべるのではないのでしょうか。では、同じ野球の打球音でも、「ガツツツ…！！」ではどうでしょうか？もう少し詰まった当たりで、勢いのないゴロやフライを思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。実際の打球を見ていなくても、これまでに見た映像などの経験をもとに、打球音から状況を想像できたりしますよね。私に取り組んだ研究では、この「打球音」に注目しました。では、もう少し詳しく見ていきましょう。

実際の球技スポーツの場面において、選手は様々な感覚を用いてプレーしています。聴覚情報として入ってくる打球音もその1つです。実際にこれまでの研究では、ボールの速度に伴う軌道を予測する際に、打球音を模した音が大いとき、ボールの速度を速く推定する傾向が示されています (Kreyenmeier et al., 2023)。大きい音が聞こえた時の方が、速いボールが来ると予測するということです。確かに、バットがボールに強く当たった時には、大きい音が出ますね。では、音の大きさが影響するなら、音の高さではどうなのでしょう？この疑問を検証したのが、私の研究です。

それでは、音の高さはヒトの知覚や運動にどんな影響を与えるのでしょうか。これまでに知られている現象として、①速度の知覚への影響、②空間的高さの一致による反応速度への影響、などがあります。例えば、高い音が聞こえる時には標的の速度を速く、低い音の時には速度を遅く知覚したりします (Zhang et al., 2021)。また、高い音が聞こえた時には高い位置にある物体への反応が、低い音の時に

は低い位置にある物体への反応が速くなったりします (Evans & Treisman, 2010)。こうした現象を踏まえると、音の大きさだけでなく高さも、ボールの軌道予測に影響することが考えられます。そこで、私の研究では、高さの異なる音とともに投射される画面上の標的の軌道を予測し、カーソルで標的をキャッチする様な課題を行いました。

実験の被験者は、机上で画面を見ながら、右手でカーソルを操作して課題を行いました。画面上で標的は、異なる高さのビープ音いずれか (220Hz, 440Hz, 660Hz) と共に投射されます。標的は0.1秒もしくは0.3秒後に見えなくなるので、その先の軌道とタイミングを予測して、被験者はカーソルを標的に到達させる運動課題を行いました。

この実験を行った結果、標的の軌道予測に音は無意識のうちに影響しており、音が高いほど標的が速く動くと推定することが分かりました。また、高い音が聴こえる条件では運動の動きだし時刻を早めたり、キャッチしに行く動作を速くしたりと、速く動くと推定した標的に対応した運動が行われる傾向が観察されました。この効果は、特に標的の視覚情報を十分に得られない条件 (0.1秒) で顕著でした。

このことから、ヒトは標的の軌道を予測する際、特に視覚情報が限られたときに音の高さの影響を受けると言えます。視覚的には一見同じ状況下でも、聴覚情報が無意識のうちに影響しているということですね。初めの方にも少し触れましたが、こうした視覚と聴覚の対応関係というのは、過去の経験から獲得されているのではないかと考えられています (Parise et al., 2014)。ヒトには5つの感覚が備わっています。普段の生活でも、色々な感覚を駆使していますよね。こうした生活の中からも、まだまだ解明されていない感覚と感覚の対応関係が生まれているかもしれませんね。

日本認知言語学会奨励賞

中国語温度形容詞「冷」の多義性に関する実験的研究

王 海濤

Haitao WANG

神戸大学 グローバル教育センター・国際文化学研究科 助教

人間にとって温度の経験は普遍的であるので、温度表現は世界のどの言語にもある。英語「It's so hot today.」、日本語「今日は暖かい」は物理的な温度の話だが、「あの人は冷たい」「胸が熱くなる」や「She is cold to me.」「He is getting hot under the collar.」のように、態度や感情も温度表現で語られる。中国語も同じである。本研究で扱った研究対象は中国語の「冷 (leng)」で、実際の「低温」だけではなく、「態度が冷たい」「景気が冷える」「場の空気が冷える」「(冗談が) 冷たい＝ウケない」など、多くの意味へ広がっている。先行研究は内省やコーパス分析に依存してきたが、母語話者の心的表象を実験で測る試みは乏しい。そこで、この多義語が母語話者の頭の中でどう整理され、それぞれの意味がどのくらい近い・遠いのかを、心理実験のデータに基づいて確かめたいと考えた。

まず、「冷」の中心義を認定するために、文想起実験を行った。参加者に「冷」を用いた文を思いついた順に3つ書いてもらう。最初に出る用法は認知的に最も目立つ項目で、全体の出現数はその用法の慣れ(頻度)を示す。結果として、「物の温度が低い」という意味が最も頻繁にかつ迅速に思い出されたため、中心義として認定された。

それから、「冷」の意味構造を確認するために、分類実験を行った。辞書と大規模コーパスに基づき、13個の語義を認定し、各語義につき自然な例文を2例ずつ選定し、計26例をカードにした。参加者には各文の「冷」の意味が似ているものをグループに分けるよう求めた。2枚のカードが同じグループに入った回数を集計すると、回数が大きいほど「似ている」、小さいほど「似ていない」と解釈できる類似度表が得られる。これを距離データ(似ているほど短く、異なるほど長い)に換算し、距離表を作る。さらに、距離を平面に投射する多次元尺度法と、似たものが徐々にまとまっていく様子を示すクラスター分析で可視化した。要するに、参加者の頭の中の意味同士の位置関係を座標地図と樹形図で描き出すわけである。

分類実験の結果について、座標地図により、「物の温度が低い」と「体温が低い」という意味が最も類似しており、「不景気」という意味が両者と最も異なっていることが明

らかになった。また、樹形図により、母語話者は「冷」の意味を分類する際に、「温度」「共感覚」「心理状態」「感情極性」「人間関係」「客観的現象」や「雰囲気」などの基準で意味を分けていることがわかった。最後に、以上の情報を利用し、母語話者の認知空間における「冷」の意味の関係を示す多義構造図を作成した。

本研究の独創性の1つは、複数のオンラインツールを活用し、データ処理の速度と精度を高め、遠隔かつ大規模に心理実験を実現した点にある。さらに、R言語を利用し、心理実験とカスタマイズした統計手法を統合した点もこれまでにない取り組みであった。具体的には、Rにより意味間の類似度を算出し、母語話者の認知的な多義構造図を計算によって作成した点である。特に、クラスター構造の良し悪しを評価するシルエット分析をクラスター分析と組み合わせ、意味認定の妥当性検証に応用した研究はこれまでになく、今後の多義語研究においても有用な分析であった。また、本研究で認定された新しい語義や中心義、各意味の距離、および多義構造図は、辞書編纂や中国語教育に有益な知見を提供する。

研究におけるトライアングレーション(triangulation)とは、複数の異なる視点やアプローチを用いて研究や分析を行い、その結果の妥当性や信頼性を高める手法である。コーパス分析と心理実験を組み合わせる有効性は、既に先行研究で示されている。したがって、本研究の結果をより精緻に検証するためには、もう一つの実証的方法であるコーパスに基づく計算的分析を導入する必要があると考えている。

近年は人工知能(AI)と言語モデルの発展に伴い、言語学の研究も空間ベクトルや深層学習アルゴリズムなどで研究を行うようになってきている。そこで現在、中国語と日本語の特性に合わせたコーパス駆動型の語彙空間モデルを開発し、意味の多様性を研究している。また、言語モデルによる意味分類と人間の意味分類を比較し、語彙空間モデルを評価しようと考えている。このプロジェクトは、言語教育・辞書編纂・自然言語処理・人工知能などの領域への貢献が期待される。

日本語用論学会大会発表賞

現代日本語における 文末表現「V ヨウニ」が表す「命令」と「祈願」

白石 暖哉

Haruya SHIRAISHI

人間・環境学研究科 人間・環境学専攻 言語科学講座 博士後期課程 1 年

「合格しますように」、「当たりますように」、「無事でありますように」といった発話は、意識すると日常会話から SNS 上まで広く見られる。私自身も言ったり言われたりしてきたわけだが、あるとき疑問を抱いた。「なぜ『マス』を伴うのか」という点である。受け手は自分の親しい友人であっても良いので、敬語は必須ではないはずだ。しかし、目にする／使用する範囲では「マスヨウニ」という形で用いている。加えて疑問になるのが「この発話が誰に宛てられているのか」という点である。神仏に祈っているようで受け手に伝えているようでもあるこの曖昧さが非常に興味深く感じた。

こうした疑問を出発点に、言語学的な要素を徐々に落とし込んでいった。日本語学分野には、発話に「丁寧さ」が現れるとき、常に聞き手が存在するという記述が存在する。つまり、「マスヨウニ」は常に聞き手の存在を前提にすると考えられる。また、「ヨウニ」で終わる形は、途中で言い止めているかのような「言いさし」としても分析可能で、文法的にも特異であることが分かる。

ただし、そもそも「マスヨウニ」という形が広く用いられているというのは、いくら用例があろうと私自身の直観に基づく仮説に過ぎない。したがって、本研究では前提として「マス」と「ヨウニ」が結びつく強度を調査し、その結果を基に「マスヨウニ」の聞き手について考察した。

まずは、「マス」と「ヨウニ」の結びつきを調査するわけだが、実際に使われた日本語が大量に集積しているデータベースを確認すれば良い。今回は国立国語研究所が公開している約 1 億語規模の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を用いた。本研究では、「ヨウニ」が文末で用いられているデータを全て抽出し、その中で「マス」が現れている用例を確認した。

ここで注意すべきなのは、これらが必ずしも祈願を表すわけではなく、「よく考えて決断されますように」のような命令を表す場合がある点である。さらに、日本語において「マス」の出現頻度が高ければ、「ヨウニ」と結びつく頻度も高くなる可能性が考えられる。したがって、抽出し

たデータ全てを命令と祈願に分類し、それぞれについて「マス」の出現頻度を数えた。そして、語彙自体の出現頻度を考慮した分析手法であるコロストラクション分析を用いて「マス」と「ヨウニ」の結びつきを確かめた。結果は、祈願を表す「ヨウニ」において「マス」が特異的に結びつくことを示した。

これを踏まえて「マスヨウニ」の聞き手について考察するが、「マス」が果たす機能を分析することで間接的に触れるに留まった。前述の「『丁寧さ』あるところに聞き手あり」という記述を踏まえると、「マスヨウニ」は常に（敬語を使うような属性の）聞き手が存在することになる。確かに神仏に祈っているのであれば自然なことだが、親しい仲でのやり取りなど、そもそも実際は発話時に聞き手を常に意識しているとは限らない。

そこで私は、この表現の使用には 2 つの場合があると整理した。①「マスヨウニ」が使用される際の、聞き手（神仏）に対する敬語として機能する場合、②敬語の機能は希薄化し、祈願を意味する「マスヨウニ」という「構文」として使用されている場合、である。ここで言う「構文」は、構文文法という文法理論における専門用語であり、その性質の 1 つに、構成要素の和から全体の意味を推測できないという「非構成性」を持つ。実際に、「マス」と「ヨウニ」を組み合わせたところで祈願の意味は表さないはずであり、非構成的な構文であると言える。

以上のように、本研究では「マス」と「ヨウニ」の結びつきの調査と「マス」の機能の考察を行った。言語学における祈願研究は発展の余地が多分に残されており、日本語における祈願のモダリティ研究や、他言語の祈願構文を射程に入れた類型論的研究など多岐に渡る。

この研究は日常の言語使用や観察から浮かんだ些細な疑問に端を発したものだ。言語学では言葉にまつわるどんな些細な疑問も研究に繋がる。是非、耳で聞く、目で見る、あるいは自分が産出するあらゆる言語活動に注意を払ってみてほしい。

第19回全国大学国語国文学会賞

『久生十蘭作品研究—〈霧〉と〈二重性〉』
(和泉書院、2023 年 3 月)

開 信介

Shinsuke HIRAKI

三重大学人文学部リサーチアソシエイト (客員准教授)

個人的な体験を記すことから始めるのをお許しいただきたい。もはや臆気な記憶となり、真偽もさだかではないが、小学生であった時分、私は国語の授業が好きではなかった(と思う)。それは何故であったかと顧みるに、おそらくは教科書に載っていた小説がオモシロくなかったからである(と思う)。

お定まりの、山中峰太郎『名探偵ホームズ全集』や南洋一郎『怪盗ルパン全集』にはじまり、舟崎克彦『ぼっぺん先生』シリーズ、井伏鱒二訳『ドリトル先生』シリーズなどを読破していた私は、教科書に掲載されている小説を読んでも、子供ながらに何かお行儀のよい建前めいたものを読まされているような気がして、オモシロくなかったのである(と思う)。おそらくは、この体験が後をひき、国語の教科書に載っている作者・作品＝オモシロくないというヨロシくない傾向が私に定着したのであろう。当然、芥川龍之介や夏目漱石は迂回するということになります(いうまでもありませんが、芥川や漱石はオモシロいです)。

本書は久生十蘭(ひさお じゅうらん／1902-1957)の作品群を扱っている。久生十蘭、申し訳ないがアヤシげな名前である。とうてい教科書には載りそうにない。つまりオモシロそうなのである(あくまで私の基準です)。本名阿部正雄。演出家シャルル・デュランをもじったとか、久しくいきとらん、あるいは、食うとらんのダジャレであるとか、諸説あるが、幼馴染であり十蘭を小説家としてデビューさせた編集者・小説家水谷準によれば、十蘭本人が姓名判断の書物を数週間にわたって研究した結果、導き出された筆名であるという(水谷準「久生十蘭の嘘」『新潮』1955 年 8 月号)。

久生十蘭は 1930 年代半ばから 1950 年代にかけて活躍した小説家である。「小説の魔術師」と称され、探偵小説(今でいうところのミステリ)をはじめ、時代小説、現代小説、幻想小説、少女小説など、様々なジャンルの小説を書き分けた。とりわけ短編には密度の高い、凝縮された名編が少なくない。しかし、探偵小説出身という出自から大衆文学

作家と見なされた時期が長く、学術的研究の対象としては長らく見落とされていた存在だった。1980 年代以降、文学史の見直しが行われる中で、十蘭も活躍の舞台としていた雑誌『新青年』に光が当てられ、そのような流れの中で十蘭も再評価が進んだ。近年では、岩波文庫からも短編集が発刊されるなど、それなりに知名度を得てきたものと思われるが、まだまだ研究の蓄積には乏しいのが実情である。以上のようなことを知ったのは、迂闊にも私が大学院に進学してからのことだったが、そこに久生十蘭作品の論文を多く執筆されている須田千里先生がいらっしやり、かつ私の指導教官となってくださったのは、今更ながら思い返すと非常な幸運だった。

本書は、京都大学大学院人間・環境学研究科に提出した博士学位論文を加筆修正のうえ、令和 4 年度京都大学人と社会の未来研究院若手出版助成をうけ、出版された(2023 年・和泉書院)。学位論文を執筆していく際にもっとも困難であったのは、十蘭が自らの作品について語ることを極めて少なく、また先行研究も豊富とはいいがたいという点であった。そのような場合は作品そのものに語らせるしかないと考え、結果、特定のモチーフの観点から十蘭の全作品を網羅的に分析し、そこで得られた知見を土台に、改めて個別の作品を分析するという手法をとった。

本書は、幸運にも第 19 回全国大学国語国文学会賞を受賞することができた。授賞理由には、「久生十蘭の作品を網羅的に調査」、「近代文学研究において異端視されてきたミステリー研究に、果敢に挑んだ点」などが挙げられている。光が当てられてこなかった研究対象を選び、それを追求することはときにリスクをとまなう。光が当てられてこなかったことには、やはりそれなりの理由があることは多いからだ。しかし、そのリスクを承知しつつも(私の場合は、多分に自らの性向と迂闊が理由だが)、興味の赴くままに地道な研究を続ければ、報われることのなきにしもあらず、という実感をいま抱いている。

アジア太平洋フォーラム・淡路会議 第23回アジア太平洋研究賞 佳作

海を越える「水産知」 ——近代中国における水産人材の育成とその活動

楊 峻誌

Junyi YANG

蘇州大学社会学院 歴史学系専任講師

東アジアにおける漁業近代化の先駆けは日本であった。その中核を担った農商務省水産講習所は、ユーロッパ諸国の知識を単に移入するのではなく、日本的に再構築した独自の「学知」を体系化した。本論文では、この「学知」に加え、技術や生活様式を含む総合的な知識体系を「水産知」と定義する。

清末民国期、日本の明治維新後の発展を範とする中国は近代化の一環として水産業の育成に乗り出し、留学生を日本に派遣することで、この「水産知」を積極的に導入した。本研究は、こうした知の伝播・受容・定着の過程を水産史・留学生史・政治史の学際的視座から解明することを目的とする。

日本からの「水産知」の移入は、まず教育制度の確立というかたちで具体化した。中国最初の水産学校である直隸水産講習所（第1章）は、日本の水産講習所をモデルとし、学制や授業科目において明らかにその影響を受けた。続いて設立された上海の江蘇省立水産学校（第2章）は、南方の要衝に位置し、地域の特性に応じた人材育成を図り、日本由来の「水産知」が中国国内で受容した過程を示した。1945年から49年にかけての戦後復興期（第5章）には戦前の水産教育モデルを継承しながら水産教育の再建を目指そうとしたが、同時に内戦などの社会情勢による困難にも直面し、その定着の限界も浮き彫りになった。このように、日本の「水産知」は中国における近代的水産教育の制度的基盤を形成したのである。

農商務省水産講習所で学んだ留学生たちは帰国後、水産行政や教育の場における指導層として、「水産知」を政策と社会実践へと具現化していった。その活動は多岐にわたった。第一に、海洋権益の観点から、1930年代の海賊問題を単なる治安上の問題ではなく、漁業生産と沿岸秩序

の安定という視点で捉え（第3章）、専門家として政策提言を行うなどした。第二に、漁業社会の基盤整備では、漁民救済や教育を通じて（第4章）、生産技術の向上にとどまらず生活改善や組織化にも取り組み、近代漁村の構築を目指す包括的な「水産知」の実践を展開した。

本論文の分析により、日本の「水産知」が留学生を媒介として中国に体系的に受容され、教育制度の確立、漁業政策の形成、漁村社会の改良という各段階に深く影響を及ぼしたことが明らかになった。さらに、この「水産知」の影響は中国のみならず、日本統治下の朝鮮や台湾にも及んだ。すなわちそれは一国の枠を超えた東アジア地域における一つの知的パラダイムを形成したのである。受賞理由には「近代東アジアの水産業をめぐる近代的学知とその伝播に関する本格的な研究である。官憲資料や新聞記事から学校教育を受けていない漁民たちの「近代」への適応と抵抗の錯綜する姿が浮かび上がってくる。中国の産業が「近代」の挑戦を受けながら「学知」を受容していく際の困難や挫折の具体的な状況を浮き彫りにしたことは本論文の大きな成果である」との説明がある。

これまでの研究は日本発の「水産知」が教育・行政・人材育成において近代中国に制度的に受容された過程を解明してきた。今後の課題はこれに加え、海水浴場や水族館といった新たな公共空間における大衆のレジャーと海洋啓蒙という視角を導入する。これを通じて、近代化における海洋との関わりを国家主導の産業化という枠組みを超え、民衆の身体性と日常性の視点から捉え直すことにより、研究視座の一層の深化を図ろうと思う。これは海洋をめぐる知の受容を制度と日常という二つの側面から検討する新たな試みである。



令和6年（2024年）8月1日

第23回アジア太平洋研究賞 授賞式

於 淡路夢舞台国際会議場

自治体学会 研究論文賞

在宅育児手当の意義とあり方 —自治体による新たな現金給付とその可能性

安藤 加菜子

Kanako ANDO

京都大学大学院医学研究科研究員（受賞時は人間・環境学研究科 人文学連携研究者）

本書は、いくつかの自治体で実施される在宅育児への現金給付（以下、在宅育児手当）を取り上げ、導入経緯や実施状況、意義などを論じたものです。この本では、0歳や1歳の常に誰かの世話を必要とする子どもを保育所等を使わず世話することに対してなされる現金給付を、在宅育児手当と定義します。全国的に支給される児童手当との違いは、保育サービスを使わないことが前提となる点や、ある程度成長した子どもの保護者には支給されない点などにあり、自治体ごとに条件は異なります。日本では一部の自治体の取り組みに留まりますが、国レベルで類似の事業を実施する例もあります。この本では北欧諸国の事例を紹介しましたが、東アジアでは韓国で同種の事業がみられます。

本研究では、乳児に対する子育てを「生存のための世話」と捉えます。この認識に基づき、（特に自宅で）乳児の世話をする親に対し、金銭面で支援を行う政策の可能性を追究しました。生まれて間もない、目を離すことができない子どもを世話することは、命にかかわる責任や緊張を伴います。そうした子育てに対して、保健師による家庭訪問や各種健診、乳児保育などの様々な支援が提供されていますが、実際の世話の多くは親が担っています。公的サービスの枠には限度があり、たとえすべての子どもの世話を託すことができたとしても、なんとか自分の手もとで子どもを世話したい、と考える親もいるでしょう。

では、こうした親が行う乳児期の子どもの世話を、社会はどのように支えることができるでしょうか。この問いへのアプローチの一つは公共政策学です。社会における課題を政府や人々の力を活用しながら解決していく取り組みを公共政策といい、公共政策学では、その過程を明らかにし、実践に役立つ知見を追究します。

公共政策が採用する手段は、法律的な規制や情報提供などさまざまですが、その一つが現金給付であり、在宅育児手当もこれに該当します。この現金給付には「その給付は適正なのか」といった厳しい目が向けられがちです。加えて在宅育児手当には、受給者が女性に偏ることによる性別

役割分業の固定化や、家庭での親子の孤立、保育所に通わない子どもの増加といった懸念も示されています。

ここで子育て支援の最前線を担う自治体に目を向けると、別の事情も見えてきます。在宅育児手当を導入した自治体は、保育所の利用率や子どものいる世帯の妻の就労率が高い傾向にありました。また、現状を詳しく知るために役場や県庁でお話を伺ったところ、保育所を利用しない世帯にはこれまで十分な支援が及ばなかったという声や、保育士の確保が難しいという声が聞かれました。手当を導入した自治体のほとんどで待機児童は見られませんが、その状態を維持するのが難しいとのお話もありました。そうしたなかで、子育て支援の主要な手段を保育サービスに限定すると、保育所を利用していない人にまで支援を広げるのは難しそうです。

以上の経緯から、日本における在宅育児手当は、それぞれの自治体が保育サービスを充実させたのち、まだ十分な支援が及ばなかった、保育サービスを利用せずに乳児を育てる世帯に目を向けるなかで導入されたものと言えます。またそれは、希望すれば誰もが自分の子どもを世話することが支援される環境づくりにもつながると考えられます。

私たちはみな、誰かに世話されなければ大人になれず、大人になっても多かれ少なかれ誰かの世話に依存します。他方で、人口減少社会において、誰かを世話する余力をもつことはますます難しくなっているように感じます。社会の変化のなかで「世話」の空間や時間をどう描くのか、今後も考え続けたいと思います。

さいごになりましたが、ご指導ご鞭撻を賜りました京都大学の先生方や先輩方、公務でお忙しい中インタビューなどに応じてくださいました自治体職員の皆様、執筆を伴走いただきましたミネルヴァ書房の皆様に改めて感謝申し上げます。出版に際し、京都大学人と社会の未来研究院の助成をいただきましたことも、併せて御礼申し上げます。この研究に光をあててくださった自治体学会に感謝し、今後も探究を深め、社会に還元できるよう努めます。

第17回石橋湛山新人賞

「ネオリベリズムの戦間期日本における一起源：自由通商協会の思想史」

岩木 雅宏

Masahiro IWAKI

京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程

思想は、その実態を認識することが困難であるにもかかわらず、人々を強く拘束するものである。当然ながらこの事實は、経済に関する我々の思考、すなわち経済思想にも当てはまる。20 世紀最大の経済学者の 1 人であるジョン・メイナード・ケインズは、過去思想とは全くの無縁であると考えている人ですら、その「奴隷」であるとまで述べていた。それでは、現在を生きる我々は、どのような経済思想の「奴隷」になっているのだろうか。

現在もっとも有力な経済思想であると広く考えられているのが、新自由主義（ネオリベリズム）という思想である。新自由主義は一般的に、1970 年代から 80 年代頃の英米に現れ、市場経済を重視し、市場への政府介入を最小限に抑えようとする思想であると理解されている。そして、政府の縮小と効率化を目指す「小さな政府」、公共サービスを民間企業に担わせる「民営化」、市場にかけられた規制を削減する「規制緩和」、国境を越えたモノ・カネ・ヒトの移動を推進する「グローバリズム」等が、その具体的な主張として挙げられる傾向にある。

しかし、近年の研究に基づけば、このような新自由主義のイメージは、ある程度の真理を捉えてはいるものの、誤解もまた含んでいることが判明している。そもそも、新自由主義が現れたのは戦前のことであり、その形成と発展には、様々な国や地域の人物が関わってきた。また、「小さな政府」と矛盾するかのように、新自由主義に関わった思想家たちは、彼らが求める自由を実現するために、強大な権力が必要であることを認めていた。さらに、新自由主義の中にも様々な変種が存在しており、その中には典型的な主張に留まらないものも、数多く含まれていた。

さて、それでは日本の新自由主義は、一体どこからやってきて、何を唱えてきたのだろうか。残念ながら、西洋諸国を対象とした研究が充実してきた一方で、日本の新自由主義思想、特にその起源を歴史的な観点から論じた研究は、かなり限られているのが現状である。本研究「ネオリベリズムの戦間期日本における一起源」は、このような研究

上のギャップを埋めることを目指したものである。

当然のことながら、「新自由主義思想」というただでさえ曖昧な対象を、従来の理解とは異なる文脈で語る以上、適切な手続きを採用する必要がある。この研究では、新自由主義者のネットワーク、要するに「人脈」に着目する手法を採用した。新自由主義の意識的な形成と実現を目指した諸人物は、スイスで結成された「モンペルラン協会」(1947 年設立) に集っていたことが知られている。そこで本研究では、後にモンペルラン協会に参加する複数の人物と関係性を有していた、戦間期日本の自由貿易団体、「自由通商協会」(1928 年設立) を分析対象とした。そしてこの協会を、新自由主義者のネットワークの一部として仮説的に位置づけ、その思想を精査するという手続きを踏んだ。

その結果、自由通商協会員が唱えていた主張は、同時期の西洋の新自由主義者が論じていたものと、概ね同型的なものであったことが明らかとなった。彼らは、一貫して経済的グローバリズムを支持し、関税の壁を取り払い、世界経済の一体化を目指していた。それと同時に、彼らの理想が単なる自由放任では実現しないことを理解しており、政治権力を積極的に利用する必要があることも認めていた。

その一方で、自由通商協会の思想は、ある種の日本的な独自性を有したものであった。自由通商協会員は、経済的グローバリズムを、資源小国・人口過剰という日本の問題に強く結びつけていた。そして、1940 年頃には、その内外に自由経済圏を作るために、大日本帝国の侵略を正当化すらしていた。

本研究が明らかにしたのは、新自由主義の集団的な形成過程が、戦間期日本でも既に始まっていたということである。この発見は、新自由主義が主に北大西洋地域で形成されてきたという通説の妥当性を、強く疑うものである。加えて本研究は、西洋と同じく、日本の新自由主義者もまた、明白な介入志向を有していたことを示すものであった。

私たちが何の「奴隷」であるのか、その一端を明らかにしたところに、本研究の意義があるといえるだろう。

2024年度日本建築学会近畿支部研究発表会 優秀発表賞

天智天皇奉祀神社創建運動の主体と経緯

迎田 暁

Satoru MUKAEDA

人間・環境学研究科修士課程2年

近江神宮は天智天皇を祭神とする神社で、滋賀県大津市に位置する。天智天皇がこの地に宮都を開いたことを由緒としている。

私が近江神宮を初めて訪れたのは、コロナ禍の真っ只中の令和2年（2020）4月であった。住み始めたばかりの下宿での「ステイホーム」に閉塞感を抱き、自転車で琵琶湖に向かった。浜大津を過ぎて県道47号線を北上し、大津市役所の前を過ぎると、道は急に細くなって住宅街に差し掛かった。かと思ったら大きな森にぶつかって道は大きく直角に曲がった。この大きな森がまさに近江神宮であった。住宅地のなかに不自然に貼りつけられたかのような神社に独特の雰囲気を感じ取った。のちに近江神宮は近代に創建された「創建神社」に分類されるものであると知り、伝統が「創られる」という事象に関心を抱いた。

その後何度か大津を訪れ、観光都市としての大津市にも関心を抱いた。隣接する一大観光都市京都との関係のなかで観光立市を目指すも、必ずしもそれが成功しているようには見えなかった。

このような関心から、観光都市大津の基盤となった昭和初期の大津の遊覧都市計画に着目し、そのなかでの近江神宮創建を考えるべく研究を始めた。

ところが、近江神宮創建までの流れを追っていると、多様な主体の輻輳する意図がそこに込められたことがわかってきた。そこで、創建にかかわった主体に着目し、創建の経緯を明らかにすることを研究の目的とし、単に観光資源創出には留まらない、都市のシンボルとしての近江神宮／天智天皇という歴史意識の創出の過程を見ることとした。

近江神宮の創建運動の特徴は、創建までに約半世紀という長い時間を要したことである。最初の主唱者は漢学者中村鼎五である。中村は明治29年（1896）に滋賀県知事に対して天智天皇を祀る神社の創建を進言した。ここには前年の平安神宮の創建の影響が見てとれる。明治41年には大津市長西川太治郎により、同神社の計画が発表される。西川は、現在の大津市の繁栄は天智天皇の近江奠都に由来するとして天智天皇の功績を強調した。大津市ではこの頃

に天智天皇を都市のシンボルとする動きが見え始める。

しかし、鎮座地をめぐる問題により簡単には計画が進行しなかった。西川は神社の鎮座地として天智天皇の宮都である近江大津宮跡が最適であるとの見方を示していたが、宮跡があったのは当時大津市域外の滋賀村であったため、大津市の計画では次善の候補地を立てざるを得なかった。さらには、その滋賀村も大正8年（1919）以降大津市とは別個の天智天皇神社創建計画を進行していた。すなわち、天智天皇を我が町のシンボルとする神社の計画が大津市と滋賀村で並立していたことになる。

この問題は、大津都市計画および市町村合併によって解消される。大津市は昭和2年に都市計画指定都市となるが、ここで示された都市計画区域は大津市のほか滋賀村を含む周辺町村を大きく取り込むものであり、将来の市町村合併を見越したものであった。そのなかで滋賀村はいち早く大津市との合併を実現するが、その条件として神社創建が挙げられていた。大津市が旧滋賀村域に神社を創建するというで計画が一本化した。

その後、本計画は滋賀県社寺兵事課長石川金蔵によって具体化され、昭和15年に全滋賀県民を氏子とする「近江神宮」として結実した。明治や大正の計画案での名称は「大津神宮」、「志賀神宮」であったが、最終的に滋賀県全域を含意する「近江神宮」が選取られた。当初、「大津市」のシンボルとして企図された天智天皇は、最終的に「滋賀県」のシンボルとなった。

近江神宮は、約半世紀にわたる創建運動のなかで、都市計画や市町村合併とも絡み合い、政策的意図が反映されたうえに創建されたことが明らかとなり、その過程で天智天皇を我が町のシンボルとしようとする複数の主体の動きが見えてきた。これは敢えて言えば、歴史によって都市を表象しようとしたときに、「誰にとつての／誰のための歴史か」という問題が表出したものといえるだろう。都市研究の面白さは、都市空間の歴史的な創出の過程を知り、その空間を生きること、自身の歴史性を実感できる点にあると考える。

第24回徳川宗賢賞（優秀賞）

言語変化における統治性と権力： 「フィジー手話」の構築をめぐる事例から

佐野 文哉

Fumiya SANO

人間文化研究機構人間文化研究創発センター研究員／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科客員研究員

言語と権力は密接に関係している。共通する「国語」をつくりだすことで同じ国家に暮らす「国民」をつくりだしたように、言語は権力の影響下で形成されると同時に、それ自体が権力の装置の一つとして作用する。

第24回徳川宗賢賞（優秀賞）を受賞した本論文で扱ったのも、そうした言語と権力との関係である。ただし、本論文は手話という言語、それもオセアニア島嶼域の手話という研究の蓄積が浅い言語を対象としている点に、そして、後述するように、国家のような一つのアクターに回収されない諸権力の統治的な作用に注目している点に新規性がある。

ここでいう「統治」とは哲学者 M. フーコーの用語であり、人びとのふるまいを方向づけるさまざまな力のことである。現代において統治は多種多様なかたちをとる。それは「抑圧」として現れることもあれば、なにかを生み出す「生産的な力」として現れることもある。

手話研究において、言語と権力が密接に関係していることは決して新しい発見ではなく、周知の事実である。ただし、ここでいう権力とは、後期フーコーが注目したような生産的に作用する力ではなく、抑圧的に作用する力である。

「手話は音声言語を手指で表したのではなく、それ自体が複雑な構造をもつ自然言語である」——1960年にアメリカの言語学者が「発見」したこの事実は、手話を言語学的に研究する手話言語学という新たな研究領域を生み出し、それ以来、欧米を中心に手話とそれを用いるろう者を対象とするさまざまな研究が行われてきた。

その一方で、手話の言語性が学術的に証明された後でも、世界各地のろう教育では長らく口話主義が採用されてきた。口話主義とは、ろう者に口を使ったコミュニケーション方法（口話）を習得させ、それによって教育を施そうとする教育方針のことである。音声言語を優先する、あるいはそれを言語の唯一の形態とみなす口話主義では、「口話の習得を妨げる」という理由で手話の使用は禁止され、それを第一言語とするろう者は抑圧の憂き目にあってきた。手話言語学者とろうの当事者が学術的に、ときに政治的に抗ってきたのは、こうした手話を抑圧し規制する統治的な権力性である。

他方、そこで見落とされてきたものがある。それは（手話）言語学の統治的な権力性であり、言語や主体それ自体をかたちづくる生産的な力である。口話主義が世界各地のろう教育を席卷し、手話に対する誤解が流布していた当時の、そして現在までつづく状況下で、手話言語学者たちがとった戦略は、言語の「真理」——言語とはどのようなものであるか——をめぐる近代的なイデオロギーにもとづいて手話について論じること、その言語性を証明するということであった。たとえば彼らは、言語とジェスチャーを二項対立的に捉える近代言語学のイデオロギーや、近代国家における「一言語一共同体」イデオロギーを流用することで、「手話は文法をもたないジェスチャーである」「手話は世界共通である」などといった誤解にもとづく抑圧的な権力に対抗してきた。

その一方で、手話言語学の主張やそれが依拠する近代的な言語イデオロギーは、そこで言及される手話やろう者自体を再帰的に形成する生産的な力としても作用してきた。とくに、いわゆる発展途上国の人びとのあいだでは、いわゆる先進国の研究者が提示する言語の「真理」をめぐる言説は、グローバルな世界情勢における両者の不均衡な権力関係を背景に、しばしば規範的な言説（「～であるべき」）として（再）解釈され、それは必ずしもそうした言説にあてはまらない多様な言語的現実それ自体を改変・再構成する力として作用してきた。

本論文で注目したのは、そうした言語や主体自体をかたちづくる生産的な力を含む、諸権力の統治的な作用である。フィジーのろう者が使用するフィジー手話は、決して直線的に形成されたものではなく、ろう教育の抑圧的な権力や宗教的な権威、さらには手話言語学や「ろう文化」言説の生産的な力など、「諸力の戯れ」のなかで動態的に形成されたものである。フィジー手話がどのような歴史的経緯で形成され、そこにどのようなアクターが関わっているのか。そして「フィジー手話の単一言語化」という現代的な変化がどのような権力の影響下で生じており、それがどのような主体を形成しているのか。これらの詳細はぜひ拙稿を直接ご参照いただきたい。

第46回沖縄文化協会賞（金城朝永賞）

「沖縄のサンゴ礁資源利用に関する生態人類学的研究」

高橋 そよ

Soyo TAKAHASHI

琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科 准教授

2024 年秋「第 46 回沖縄文化協会賞（金城朝永賞）」をいただきました。博士論文以来続けてきた自然と共に生きる人の営みの研究が今回の受賞対象となりました。その理由として、沖縄における従来の民俗学的研究に対して、人文科学・社会科学・自然科学を横断する総合的な視点から解き明かそうとしてきたと評価いただきました。2024 年 11 月 30 日、沖縄国際大学厚生会館で開催された授賞式にて、「サンゴ礁と人とのかかわり—琉球弧における生物文化多様性研究への展開」と題して受賞記念の研究発表を行いました。

本賞は、1948 年に創設された沖縄文化協会による研究奨励賞の一つです。日本復帰後の 1979 年に若手研究者の研究奨励を目的に設立された本賞は、沖縄で学問を志す者にとって、沖縄学の祖と言われる伊波普猷をはじめとする先人の思いを受け継ぎ、沖縄研究を前へ進めようとする背中を押してきた賞の一つといわれています。この受賞は、大学院卒業後、結婚・出産・国際 NGO などでの就職・シングルマザーとしての子育てなど公私共に紆余大曲折を経て、学位取得から 10 年後に研究職に就くことができた私にとって、予想だにしない出来事でした。2024 年の晩夏の朝、選考委員の先生から受賞の報を頂いた時には、沖縄研究の歴史を背負うことの重責を思い、一気に汗が噴き出しました。まだ何も成し遂げていないと、一旦は全力でお断りをしました。しかし、その先生は電話口で朗らかに笑いながら、こうお話しくださいました。

「受賞することになる賞の金城朝永は、昭和初期より伊波普猷らと共に活動してきた沖縄研究者の一人で、彼は沖縄を言語学や民俗学、文学、歴史学などの総体的な視野から捉えようとしてきた。その学際的な視野と発想力を受け継ぐ研究者として、大いにこれからの研究活動に期待している。」

総合的な知を持って人間とは何かを問う。それは、まさに本研究科での学びやゼミの先生方、先輩・友人らと過ごす中で得た、人間と社会を見る眼差しでもありました。思いがけない受賞は、原点に立ち返る機会ともなりました。

2000 年に大学院進学をした私は、山田孝子先生（現京都大学名誉教授）の第 1 期ゼミ生として琉球弧の自然と人とのかかわりに焦点をあて、島嶼コミュニティの生存基盤維持機構を総体的に解明することを研究テーマとしてきました。中でもサンゴ礁を生業とする人々の在来知と身体技法、経済慣行に着目し、素潜り漁師に弟子入りし、追い込み漁の勢いやタコ捕りを自ら実践するフィールドワーク研究を進めてきました。近年は宮古諸島から沖縄島北部、与論島、八重山諸島へとフィールドを広げ、琉球・沖縄の政

治経済的周縁地域に着目しています。特に戦前のかつお節生産をめぐる人の移動史や、戦後沖縄の環境改変や社会経済的動態の中を生きてきた人々の生活誌を聞き書きし、海辺の地域環境史を明らかにしてきました（高橋 2018）。

2019 年 4 月の現職着任後は、国立歴史民俗博物館や総合地球環境学研究所の共同研究を通じて、語りや写真などの個の記憶や物質文化を地域住民と共にコミュニティアークイブ化する歴史実践にも取り組んでいます（高橋他 2023）。資源が限られた島嶼コミュニティの持続可能性と文化継承は、国を超えた共通課題といえます。近年はこれらの課題に対して、東インドネシアの島々でアクションリサーチを国際展開するなど比較研究を進めています。また、国内外の研究者だけでなく、NGO や漁師、アーティスト、庭師といった多様なアクターと共にダイアログの場を企画し、知の探究と研究実践、教育活動を循環させる方法論の検討にも取り組んでいます（中村他 2025）。この度の受賞は、先人の学際精神を受け継ぎ、今後も島嶼研究に貢献していく決意を新たにす機会となりました。これまで支えてくださった全ての方々に心より感謝申し上げます。

- ・高橋そよ 2018『沖縄・素潜り漁師の社会誌——サンゴ礁資源利用と島嶼コミュニティの生存基盤』、コモンズ。
- ・高橋 そよ、池田 香菜、菊 凜太郎、後藤 真、橋本 雄太、南 勇輔 2023「鹿児島県と論島における市民参加型“島の自然とくらしのゆんぬ古写真調査”の展開」『島嶼研究』24（1）：13-30。
- ・中村 晋一郎、坂本 麻衣子、高橋 そよ、千葉 知世、飯泉 佳子、小森 大輔、橋本 禪、檜山 哲哉、森田 敦郎、吉田 丈人、沖 大幹 2025「社会水文学の進展と日本における学際研究の可能性：価値システム、ガバナンス、文化、歴史からのアプローチ」『水文・水資源学会誌』38（1）：43-65。DOI: 10.3178/jjshwr.38.1829。



授賞式にて18歳になった息子と（2024年11月）

第64回ドイツ語学文学振興会奨励賞

Das Unbehagen im Naturrecht: Was bedeutet die *Neue Deduction des Naturrechts* hinsichtlich der Entwicklung von Schellings politischer Philosophie? (Schelling-Studien 10)

中村 徳仁

Norihito NAKAMURA

三重大学人文学部助教

「人間はポリス的動物である」——古代ギリシアの哲学者アリストテレスのこの言葉はよく知られている。私たちは共同体の中で生きざるを得ず、広い意味での政治は人間の共同生活に欠かせない。倫理学や政治学はこの言葉を基礎の基礎としており、筆者もその意義を否定するわけではない。ただし、必要以上に「ありがたがる」のはどうだろうか。共同体における利害関係の調整、共通のルールに従うための合意形成、違う利益団体間の衝突などなど、政治は途方もなく私たちを疲労させる。

もちろん、嫌気や疲れを抱えながらも、そこにやりがいを見いだし尽力する人びとがいてこそ、社会は回っている。しかし他方で、政治そのものを目的化し、競争や党派争いに没頭する人びともいる。競争のための競争、衝突のための衝突、党派争いのための党派争い……。政治はつねにすでに、油断すれば自己目的化に陥る傾向を有している。薬も過剰に依存して摂取すれば、たちまち毒となる。そう、政治はあくまで、何かしらの目的を実現するための手段ないし必要悪ではないのか。これに対し、「人間は本質的に政治的動物であり、政治活動に従事することこそ最も価値ある営みだ」と主張する立場が根強いことも承知している。それでも、以上のような懸念から、政治——少なくとも、政治のための政治——から適度な距離を取るような思想も省みられるべきだろう。

こうした背景から、筆者は「反政治 (Antipolitik)」という言葉に惹かれた。この言葉は、ハンガリーの作家ジョルジュ・コンラッドが編み出し、現代ドイツの哲学者ペーター・スローターダイクにも影響を与えた。重要なのは、反政治が「非政治的 (unpolitisch)」とは異なるという点だ。単なる非政治的態度は、政治から逃避するにすぎない。それに対し反政治は、人間生活における政治の比重を減らし、

必要以上に政治に絡め取られないための「政治に抗するための政治」なのである。

このような視点に立つと、これまで政治哲学や社会思想の領域で注目されてこなかった思想家の姿が別の様相で浮かび上がってくる。筆者にとってその一人が、19 世紀ドイツの哲学者 F・W・J・シェリング (1775–1854 年) だった。かれはフィヒテやヘーゲルとともに、「ドイツ観念論」あるいは「ポスト・カント哲学」という枠組みで論じられることが多い。かれらはフランス革命に始まり、ナポレオン戦争、復古王政、そして 1830 年と 1848 年の革命を経験した。いわば激烈なまでの政治の時代を生きたのであった。そのなかでたいていの思想家たちが政治にかんする著作を遺し、実際に政治活動にも従事していた。それに対して、シェリングは例外的に明確な政治的著作を遺さず、これまでの研究史においては「非政治的な思想家」として扱われてきた。しかし、反政治という視点から読めば、シェリングの思想に新しい側面を見いだせるのではないか。そのような視座が、筆者の博士論文を着想するきっかけとなった。その成果は 2025 年 3 月に人文書院から『シェリング政治哲学研究序説——反政治の黙示録を書く者』として出版された。今回受賞した研究は、その博士論文に先立ち執筆した関連論文に基づくものである。

最後にもう一度、冒頭の言葉に立ち返りたい。もし人間がポリス的動物であるならば、ポリスから排除された人びと、あるいはポリスに属せない人びとは「人間ではない」ことになるのか。目下の悲惨な戦争と虐殺はいうまでもなく、日々の暮らしのなかに隠されている差別と排除に目を向ければ、この問いは、古代から現代まで続く、あまりに切実な問いである。反政治という主題はおそらく、ポリスの(非)境界を根底から問うための重要な鍵ともなるだろう。

ChemOnTubes 2024 Conference Best Oral Presentation Award

Size-Tunable Diameter Separation of SWNTs by Changing the Metals Coordinating with Phenanthroline-Based Nanobridges

傅 馨怡

Xinyi FU

人間・環境学研究科 物質科学講座 博士後期課程 2 年

It was a great honor to attend ChemOnTubes 2024 in Strasbourg, France, a conference focused on the chemistry and applications of carbon nanoforms, including nanotubes, graphene, fullerenes, and carbon dots. Bringing together leading researchers and students from around the world, the event featured a dynamic program of invited lectures, contributed talks, and poster presentations. During this inspiring conference, I had the opportunity to present my research, engage in meaningful discussions with international colleagues, and was deeply honored to receive an oral presentation award. I am sincerely grateful to be able to formally present my research and to reflect on the insights gained through this recognition.

Carbon nanotubes (CNTs) possess unique electrical and optical properties which have provided great advantages in the wide range of applications such as field-effect transistors, sensors, solar cells, and cancer theranostics. For these applications, CNTs with specific structures are preferable, because their properties are known to strongly depend on their structures or roll-up index denoted as (n, m) . This index (n, m) functions as a vector, C_h , indicating the relative positioning of two overlapping carbon atoms when a graphene sheet is rolled into the form of a single-walled carbon nanotube (SWNT). Figure 1 illustrates the structure of $(9,3)$ -SWNT.

Due to limitation in selective synthesis of SWNTs, diverse techniques have been developed for SWNT separation in aqueous and organic systems, such as gel column chromatography, density gradient ultracentrifugation, aqueous two-phase extraction, DNA wrapping, molecular recognition, and conjugated polymer (CP) extraction. While numerous studies have reported successful separation of SWNTs with narrow diameter ranges or even specific (n, m) structures through the iterative application of various techniques, either individually or in

combination, they often face challenges in complete removal of the dispersants, potentially compromising the performance of CNT-based devices.

Previously, we successfully applied tetragonal metal complexes, "copper-tethered dipyrin-based nanobridges (Cu-DNB)" to separate SWNTs with narrow diameters of 0.90–0.92 nm. In this work, we redesigned the host molecule by replacing the dipyrin moieties in DNB with phenanthroline units, yielding phenanthroline-based nanobridges (PNB). This modification enables coordination with a wider variety of metal ions and enhances molecular rigidity, thereby improving diameter selectivity. Upon metal coordination, PNB assemble into supramolecular polymers (M-PNB, M=Pd(II) or Co(II)) that wrap helically around SWNTs, as confirmed by transmission electron microscopy (TEM). Compared with DNB, PNB exhibits a 2.3-fold improvement in extraction efficiency, attributed to their deeper cavity and broader, flatter phenanthroline surface. As a result, PNB@SWNT and M-PNB@SWNT dispersions remain free of precipitates at room temperature for at least two weeks. Furthermore, Pd- and Co-PNB enhances SWNT extraction efficiency by 2.2 and 1.7 times compared to PNB, respectively. Importantly, we discovered a novel strategy for size-tunable SWNT separation by simply varying the coordinated metal ion. Owing to the distinct dihedral angles of Pd (phen)₂ and Co (phen)₂ complexes, Pd-PNB preferentially extracts smaller-diameter SWNTs (0.90–0.92 nm), whereas Co-PNB extracts larger ones (0.97–1.10 nm). Moreover, combining these separations (Pd-PNB/Co-PNB or Pd/Co-PNB) further enhances selectivity. Figure 2 illustrates the procedure and the corresponding results.

This work was published as a research article in *Chem. Eur. J.*, 2025, 31 (40), e202501144 (7 pages) [highlighted at the cover feature].

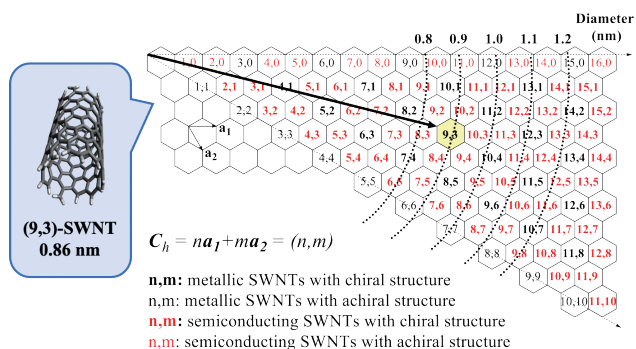


Figure 1. (n, m) -SWNTs defined by rolling up the graphene map along the roll-up vector C_h .

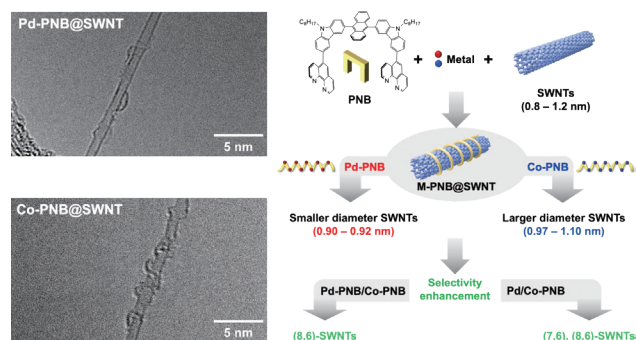


Figure 2. TEM observation of the helical wrapping structure and the SWNT extraction with M-PNB.

The Electrochemical Society PRiME2024 General Student Poster Session Award and The Electrochemical Society of Japan, Kansai branch Award

Developing fluoride-ion conductors for all-solid-state fluoride-ion batteries

Chanachai Pattanathummasid

人間・環境学研究科 物質科学講座 博士研究員

In October 2024, the Pacific Rim Pacific Rim Meeting on Electrochemical and Solid-State Science (PRiME 2024) was held in Hawaii, USA. This event brought together experts in electrochemistry and solid-state science to share their latest research and foster international collaborations. With support from Kyoto University, it was my privilege to travel across the globe to present my work there where I was awarded a poster prize. I would like to take this opportunity to share about the projects and their consequences.

Finding a material that allows fluoride-ion to mobilize, or the so-called fluoride-ion conductor is currently one of the bottlenecks in developing fluoride-ion batteries that require fluoride-ion to shuttle between electrodes. We primarily focused on the understanding of the fluoride-ion conduction inside the fluorite materials under the theme “*Synthesis and F-ion Conduction of $Ba_{0.57}M_{0.43}F_{2.43}$ ($M = Y, La, Nd, Sm, Bi$) as Solid Electrolytes for All-Solid-State F-ion Batteries*”.

In this study, we developed the fluorite compounds via mechanochemical synthesis and examined their electrochemical properties. Barium fluoride generally possesses very low conductivity, but once combined with aliovalent fluorides, the conductivity increases by several orders of magnitude. Some of the materials, particularly those containing yttrium and samarium reveal extraordinary wide electrochemical stability windows over 5 V with the cathodic stability below -3 V vs Pb/PbF₂, allowing them to be compatible with high energy electrodes.

Unraveling the positions of the additional fluorines

To understand the ionic conduction mechanism and the positions of the additional fluorines, we employed neutron diffraction, which is a technique that is sensitive to the nucleus of atoms. Thereby, the small fluorine atoms could be located precisely. Originally, fluorines in a fluorite structure fully fill in its tetrahedral unit while the octahedral unit is left emptied. Our work shows that the additional fluorines undergo into the octahedral unit of

which each fluorite material possesses different possible fluorine sites. This finding introduced three additional fluorine positions within the octahedral unit that expand through the three-dimensional space.

Towards high energy all-solid-state fluoride-ion batteries

As a continuation of the previous study, we applied the developed materials to the battery system which we facilitated the redox reaction of La/La³⁺ as the negative electrode reaction in the project “*La_{0.9}Ba_{0.1}F_{2.9} (LBF) as a high-energy negative electrode for all-solid-state fluoride-ion batteries*”. It was a demonstration of the potential of this type of battery to be performing at high voltage. This work was then presented at the end of November 2024 in the Kansai Electrochemical Society meeting, held at Kyoto University, and received the poster award.

Receiving these awards does not only signify my academic journey but also emphasizes the importance of the work to bring energy security to the incoming electrified society throughout the development of electrical energy storage. The opportunity to join the conferences enables me to connect with many experts in and out of the field where the future collaboration may be fostered. Such an opportunity would be impossible without the support from Uchimoto laboratory and Kyoto University that encourage the participation in meetings on many occasions.

Outlook

Despite being awarded, the research in fluoride-ion conductor is hitherto in an infancy. There are still a lot of rooms of improvement; for example, developing the materials to work at lower temperatures which is the current goal that I am pursuing as a post-doctoral researcher at Kyoto University. Achieving this could bring the battery closer to industrial adoption and commercialization. I am excited about the potential societal impact of our discoveries and look forward to seeing how they contribute to a sustainable energy future.

日本物理学会2024年秋季大会（領域5）学生優秀発表賞

共鳴光電子分光と X 線磁気円二色性による 希薄磁性半導体 $\text{In}_{1.75}\text{Mn}_{0.05}\text{Sn}_{0.2}\text{O}_3$ の電子状態研究

堤 直也

Naoya TSUTSUMI

2024 年度 吉田鉄平研究室 修士課程修了

私は 2024 年度に京都大学大学院人間・環境学研究科吉田鉄平研究室で修士課程を修了し、現在は民間企業で半導体デバイスの研究開発に携わっています。このたびは『総人・人環フォーラム』への寄稿の機会をいただき、心より御礼申し上げます。

私が大学院で取り組んだ研究の対象は ITO（酸化インジウムスズ）と呼ばれる物質です。ITO は透明でありながら電気を通す性質をもち、スマートフォンや液晶テレビなど身近な電子機器に欠かせない素材です。興味深いことに、この ITO にほんのわずかなマンガン（Mn）という元素を加えると磁石のような性質を持つことが報告されました。透明で電気を通すのに磁性までもつようになる—そんな不思議なふるまいの謎を解き明かす研究に取り組み、日本物理学会で学生優秀発表賞をいただきました。

ITO はすでに実用化が進んでいる材料ですが、Mn を加えることで強磁性を示すことが報告されています。強磁性とは磁石のように物質全体が同じ方向に磁化する性質を指します。もしこの性質を自由に制御できれば、「透明で電気も磁気も扱える」新しい電子デバイス—いわゆるスピントロニクス材料として応用できる可能性があります。しかし、なぜ Mn を加えると強磁性が生じるのか、その仕組みは解明されておらず実用化の妨げとなっていました。私は「透明なのに磁石のように振る舞う」という現象に惹かれ、その秘密を明らかにする研究に取り組みました。

私の研究は吉田研究室と同研究科の中村研究室の共同研究として進められました。中村研の中村先生と北川さんには高品質な試料を作成していただきました。そのおかげで私は SPring-8 や Photon Factory といった放射光施設での実験に専念することができました。具体的には、兵庫県にある世界最大級の放射光施設 SPring-8 で X 線磁気円二色性という測定を行いました。これは X 線を用いて原子の磁気状態を調べる手法です。さらに茨城県つくば市にある Photon Factory では共鳴光電子分光という手法を用いました。こちらは電子のエネルギーや分布を調べることで、物質内部で電子がどのように振る舞っているのかを知るこ

とができます。こうした実験を通して、Mn が結晶中にどのように置換され、電子状態をどのように変化させるのかを明らかにしました。その結果、強磁性の起源に迫る重要な手がかりを得て今後の物質設計に役立つ指針を示せました。

SPring-8 や Photon Factory のような世界有数の施設で研究できたことは大きな経験でした。巨大な装置で夜通し測定を行い、データ解析に頭を悩ませる日々もありました。そんな中で特に印象に残っているのは吉田研でご指導くださった吉田先生と大槻先生とのやり取りです。実験で予想外の結果が出ると私は戸惑うことが多かったのですが、先生方はいつも「これは面白いですね」と言って議論を始められました。その姿勢に触れるうちに、わからない結果こそが新しい発見の入口であり議論を重ねて少しずつ解き明かしていく過程そのものが研究の醍醐味なのだと学びました。また身近なスマートフォンや液晶画面に使われている材料にまだ誰も知らない性質が潜んでいることを実感し、一見ありふれた材料からも新しい発見があるのだと感じました。この驚きこそ研究を続ける原動力になったと思います。さらに先生方には放射光実験や学会発表に積極的に挑戦させてくださり、その経験が自分自身の成長につながりました。未知の環境に飛び込む緊張感や発表で得たフィードバックは成長につながりました。このように吉田研の先生方や共同研究者のご指導・ご協力のおかげで研究が進められ、その成果が受賞につながったのだと思います。心から感謝しています。

研究が思うように進まないこともありますが、世界でまだ誰も知らない新しいことを知る瞬間は代えがたい喜びです。私自身は今後、企業の研究者として目に見えない電子の世界を探ることで未来の社会に貢献できる新しい半導体デバイスを生み出したいと考えています。高校生や学部生みなさんにも日常の中で「なぜだろう？」と感じた小さな疑問を大切にしてほしいと思います。その疑問がやがて世界を変える研究の第一歩になるかもしれません。

Outstanding Research Award

Advancing ZnO Photocatalysts: Stabilization Strategy and Insights into Defect-Activity Relationships

張 瀚

Han Zhang

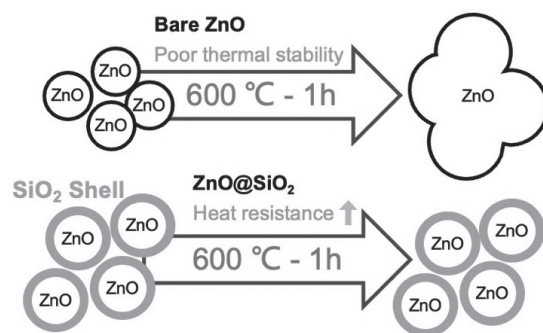
物質化学講座 修士課程 2年

I was honored to present my research at the Osaka-Kansai International Symposium on Catalysis 2024 (OKCAT2024), held at Osaka Metropolitan University. This poster presentation provided a valuable opportunity to interact with researchers from Japan and abroad, exchange ideas, and learn about the latest developments in the field. I am truly grateful to have received the Outstanding Research Award, and I am pleased to share an overview of my work.

Methane is one of the most potent greenhouse gases, with a global warming potential far greater than that of carbon dioxide. Developing effective methods to convert methane into carbon dioxide under mild and sustainable conditions has therefore become an important challenge in both environmental and energy research. Among the various strategies being explored, photocatalysis is one promising approach. In this process, semiconductor materials absorb light and use that energy to drive chemical reactions, making it a low-energy and eco-friendly strategy.

Zinc oxide (ZnO), in particular, has drawn attention as a candidate photocatalyst for methane oxidation because it is inexpensive, abundant, and exhibits favorable photocatalytic activity. However, despite these advantages, the underlying factors that govern the performance of ZnO photocatalysts remain insufficiently understood. In our work, we focused on the relatively low thermal stability of ZnO: under high-temperature treatment, ZnO nanoparticles tend to undergo particle growth, which leads to catalyst deactivation. This limitation makes it difficult to apply high-temperature treatments either during catalyst pretreatment for analysis or as a post-synthesis process to improve material stability.

To address this issue, we designed a strategy to coat ZnO nanoparticles with a thin layer of silica. This protective layer enabled us to synthesize ZnO



photocatalysts that retained both their particle size and photocatalytic activity even after heat treatment at 600 °C.

We believe that these findings not only contribute to the fundamental understanding of ZnO-based photocatalysts but also offer a practical methodology for their stabilization and functional enhancement. Looking ahead, the development of thermally stable ZnO opens up possibilities for broader applications where harsh conditions are unavoidable. In fact, building on this work, we have already applied the silica-coated ZnO materials to investigate how thermally induced defects affect photocatalytic activity under visible light. This study has led to breakthrough findings, providing new insights into the defect-activity relationship of ZnO and pointing the way toward designing more efficient visible-light photocatalysts. We are confident that this material can also be applied to many other fields in the future.

In conclusion, presenting my work at OKCAT2024 and receiving the Outstanding Research Award has been an invaluable experience. It not only strengthened my confidence in pursuing this line of research but also inspired me to continue exploring new directions in photocatalyst design and methane conversion. I am truly grateful to my supervisor, colleagues, and collaborators for their continuous support, and I look forward to further advancing this research while contributing to the broader scientific community.

日本地球化学会第71回年会学生奨励賞

スルメイカ平衡石の安定同位体と微量元素の複合解析による海域識別指標の構築

寺門 寛

Kan TERAKADO

花王株式会社

皆さんは、食卓でおなじみのスルメイカがどこで生まれ、どんな一生を送っているか想像したことはありますか？実は、彼らのほとんどの一生は、謎に包まれています。私が大学院で取り組んだのは、そんな彼らの壮大な旅の秘密を解き明かす研究です。その鍵を握るのは、スルメイカの頭の中にある 0.5 ミリほどの小さな平衡石^{へいこうせき}。この石はイカにとっての「航海日誌」なのです。

地球温暖化の進行による海水温の変化は、多くの海洋生物の分布海域や個体数の増減に大きな影響を与えることが確実視されています。世界中で水産物の需要が増加する中で、水産資源の保全、そして持続的な活用のためにも、水温変動が海洋生物の生存や分布・回遊様式に与える影響を理解する必要があります。魚類や頭足類の回遊調査方法として、生体試料を対象とした漁獲調査や標識放流が挙げられます。しかし、得られる情報が断片的で初期生態情報の追跡が難しいなどの問題があり、現状で理解されている回遊パターンは不確実な部分が多く、海洋生物の生態の理解も進んでいません。一方で、近年地球化学的手法を駆使することで海洋生物の生態を明らかにする技術が進展しています。特に安定同位体比を用いた生態履歴解析手法は回遊履歴解析に対して有力なツールとなりつつあります。

地球科学分野において、生物源炭酸塩 (CaCO_3) の酸素・炭素安定同位体組成 ($\delta^{13}\text{C}$ ・ $\delta^{18}\text{O}$) は生息当時の環境や生態の情報が記録されることから、半世紀以上にわたって環境解析の主要ツールとして世界中で活用されてきました。近年では高解像度同位体解析技術の進展と水産学分野への技術波及によって、魚類耳石 (CaCO_3) を用いた $\delta^{13}\text{C}$ ・ $\delta^{18}\text{O}$ 分析に基づく回遊履歴復元手法が発展し、頭足類平衡石 (CaCO_3) への応用に結び付きました。その結果、これまでの漁獲調査や標識放流では困難であった初期生態情報の理解が可能になりました。

頭足類であるスルメイカは、水温変化に特に敏感な種で、日本の主要水産資源であるものの、生態や回遊履歴は完全には理解されていません。環境変動に対する資源変動予測

が難しく、記録的不漁も続いています。その問題の原因究明及び解決に向けて、魚類耳石の $\delta^{18}\text{O}$ 経験水温復元技術を用いたスルメイカ平衡石へ応用する試みが開始されました。

本研究ではこの技術の発展を目的に、飼育実験による $\delta^{18}\text{O}$ 水温換算式の高度化、日本各地で漁獲された小型個体を含む個体の $\delta^{18}\text{O}$ 経験水温履歴から推測される回遊生態情報について考察しました。また、 $\delta^{18}\text{O}$ 経験水温履歴のみでは難しい東西方向の回遊海域識別の実現に向けて、微量元素組成を併用した回遊海域識別指標の構築を目指しました。

その結果、まず $\delta^{18}\text{O}$ から各個体の経験水温の履歴を復元し、南北方向の移動パターンを推定することができました。しかし、この水温計の情報だけでは、日本海と太平洋という東西の回遊ルートを明確に識別するには至りませんでした。

一方で、この分析過程で重要な発見がありました。これまでスルメイカの主要な産卵群は「秋から冬に九州近海で発生するもの」と考えられてきました。しかし、今回の分析で「夏に北方の海で発生する群れ」が一定規模存在することが初めて明らかとなったのです。これは、スルメイカの資源が、我々の想定よりも多様な産卵群によって支えられている可能性を示唆します。

次に、東西識別という課題を解決するため、微量元素の分析を行いました。すると、仮説通り、日本海の個体は太平洋の個体よりもバリウム (Ba) 濃度が高いという明瞭な差が認められました。この結果と $\delta^{18}\text{O}$ を組み合わせることで、日本海と太平洋の回遊群の識別指標を構築することができたのです。

今回の研究は、平衡石というミクロな記録から、スルメイカの生態というマクロな謎に迫る試みです。

この研究がさらに進めば、近年の記録的な不漁の原因究明や、温暖化が進んだ未来の海の生態系がどう変化するのかを予測することに大きく貢献できると信じています。

日本植物分類学会第24回大会 口頭発表賞

小笠原諸島に固有な ムラサキシキブ属 3 種の起源と過去の集団動態

増田 和俊

Kazutoshi MASUDA

東京大学大学院理学系研究科特任研究員

誕生してから一度も大陸と陸続きになっていない島を海洋島といいます。海洋島の生物は近隣の陸地から、風や海を介しての長距離移動でしか移入・定着ができないため、生物相が大陸と比べ偏りがちです。そのため、海洋島の生物は大陸では起こりにくいような独特の進化を遂げることが多いと考えられています。例えば、世界各地の海洋島に生育する植物では共通して、様々な環境に適応して種分化が急速に起こる適応放散を起こしやすい、個体が雄株と雌株に分かれる雌雄異株化が起こりやすい等の「島症候群」が見られます。島症候群は生物進化の過程や普遍性を研究する上で多くの生物学者に注目されてきました。

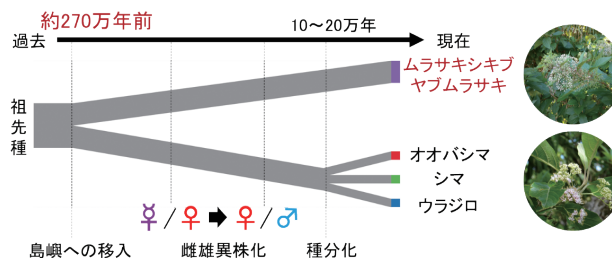
今回私たちが研究対象としたのは、日本を代表する海洋島の1つである小笠原諸島に固有のムラサキシキブ属 3 種（オオバシマムラサキ・シマムラサキ・ウラジロコムラサキ）です。これらの種は約 20km² しかない父島の中で、水分・光条件が異なる環境に側所的に生育していることから生態的適応による種分化が起こったことが推測されています。さらにムラサキシキブ属は東アジアを中心に約 140 種が報告されていますが、そのほとんどは両性花を付けます。その中で、小笠原諸島固有 3 種は両全性を基本とする本属唯一の雌雄異株であることから、島嶼移入後に性表現の進化が起こったことが示唆されています。このように、小笠原諸島固有ムラサキシキブ属は典型的な島症候群を示していることから、海洋島で起こった種分化や表現型進化の要因を調べるうえで興味深い分類群といえます。

では、これらの種の祖先はいつ、どこからやってきたのでしょうか？それが分かれば、進化や種分化の背景や時間スケールを理解する手がかりになります。そこで、私たちはこれら 3 種の属内における系統的位置付けと、祖先種が島嶼に移入した時間スケールの解明を目的として DNA 分析を行いました。小笠原諸島は東京から 1000km 南、太平洋の真ん中に位置しており、現在生育する生物やその祖先は、日本本土だけでなく、南西諸島や東アジア、東南アジア、ハワイ・ポリネシアなど様々な地域から移住してきたと考えられています。そこではじめに、世界中の多様な生

物の DNA 配列が登録されている公共のデータベースを用いて、様々な地域の種を含むようなムラサキシキブ属の系統樹の構築を試みました。

その結果、小笠原諸島固有種は東アジアの種と近縁であることが分かりました。しかし、この時に使った DNA データは扱える種数は多いものの、配列長が短いため、近縁な種間を区別できるほどの十分な情報を含んでいませんでした。そこで次に、種（個体）が持つ DNA 配列全てを取得できる全ゲノムシーケンスという手法を東アジアの種に限定して用いることで、大量データに基づく高精度の系統樹の構築を試みました。その結果、小笠原諸島固有 3 種は日本列島に在来種のムラサキシキブ・ヤブムラサキという種と近縁であることが分かりました。従って、小笠原諸島固有 3 種の祖先は東アジアに由来する可能性が高いと言えます。

最後に、分子時計を用いることで祖先種がいつ種分化（島に移入）したかを推定しました。分子時計とは、DNA の塩基配列が突然変異によって時間とともに変化することを利用し、変異の蓄積速度が一定であると仮定して種間の分岐年代を推定する手法です。その結果、小笠原諸島固有種と日本在来種の分岐はおよそ 270 万年前に起こったと推定されました。つまり、小笠原諸島のムラサキシキブ属で起こった進化現象・種分化は生物の歴史スケールで考えると比較的最近になって起こったことが分かりました。今後は今回の研究で得られた知見をもとに、例えば日本在来種と小笠原固有種がそれぞれ持つ遺伝子の配列比較などを行うことで、雌雄異株化や種分化の謎に迫っていきたいと考えています。



田部勢津久先生オットー・ショット研究賞受賞に寄せて

林 英明 | Hideaki HAYASHI

林 英明（はやし ひであき）
AGC 株式会社

京都大学の田部勢津久教授（人間・環境学研究科・地球環境学堂）が2024年オットー・ショット研究賞を受賞された。同賞は、欧州の特殊ガラスメーカー・ショット社の創始者である O.Schott 氏にちなんで E. Abbe 財団が1991年に創設したもので、2年に一度、ガラスやガラスセラミックス関連の光学材料分野における研究で優れた成果を挙げた科学者が表彰されている。これまでに、細野秀雄、D. Griscom、E. Snitzer 教授をはじめとする錚々たる研究者が受賞者リストに名を連ねている。今回の受賞は、希土類添加ガラス材料、とりわけレーザガラス分野における研究貢献が高く評価されたものである。本年8月26日に韓国・仁川で開催された国際ガラス会議（ICG）2024の開会式で授賞式が執り行われ、併せて受賞講演も行われた。これに先立って、6月に主催者による受賞インタビューも収録されている。動画はYouTubeにもアップされているが、インタビュー終盤ではドイツ語でのベートーヴェンの第九をアカペラの美声で披露されている場面もあるので検索してみたい。本稿では、今回の受賞について心からお祝いを申し上げるとともに、僭越ながら、門下生であった学生時代の記憶もたどりつつ、先生のこれまでの経歴や業績をつづてみたいと思う。

田部先生は、1986年に京都大学工学部工業化学科を卒業され、工学研究科で博士課程まで進んだあと、1990年に教養部の助手に着任された。2001年には総合人間学部助教授に昇任され、2008年より人間・環境学研究科の教授を務められている。



授賞式の様子。右から二人目が田部先生。

私が先生と初めてお会いしたのは、総合人間学部3回生の化学系学生実験のときであった。当時、先生は Rutgers 大学の E.Snitzer 教授（世界で初めてレーザガラスとファイバレーザを開発した Snitzer 教授もまた、オットー・ショット賞の歴代受賞者のひとりである）の研究室への客員研究員としての赴任を終えられ、帰国されたばかりのタイミングであったと思う。学生実験は、化学系の各研究室を順番に回っていく形式であった。先生が助手を務められていた花田研でのガラス関係実験は、希土類ドープガラスの4f-4f遷移について解説されている実験テキストの専門性が高すぎ、学部生だった私には大変難しかったことを覚えている。それでも、レーザを当てるとピカピカ光るガラス材料の実験は純粋に面白く、4回生で花田研への配属を希望することとなった。それから、先生には修士課程卒業までの期間と、AGC（旧・旭硝子）に入社した後の社会人博士課程で、長きにわたりご指導をいただいた。

当時の研究室はこじんまりとした体制であったこともあり、先生には研究の進め方に始まり、実験データのまとめ方や解釈の仕方、資料の作成から研究発表の心構えなどに至るまで、ほとんどマンツーマンに近いような形で教えていただいた。そうして叩き込んでいただいた研究の基礎的な部分は自分の血肉となり、今の仕事でも役立っていると思う。当時の私はバイト、サークルなどに精を出し、卒業単位も足りるか怪しい始末であったが、それでももっとまじめに実験をこなさい、などと言われた記憶はあまりない。自主性が育つのを辛抱強く見守ってくださっていたように思う。先生がお酒を良く嗜まれることはガラス業界では知っている方もいらっしゃるかもしれないが、昼間の活動に加え、研究室では夜の部が催されることもしょっちゅうであった。学生部屋の冷蔵庫には日本酒、ワイン、焼酎などが常備されており、この部屋に来ればお酒が飲めるというので近隣の研究室の学生も良く訪ねてきていた記憶がある。少しお酒の入った先生から、研究だけではない様々なお話をしていただいたのも良い思い出である。

少し脱線してきたので話を戻したい。先生の研究分野は無機材料化学、光機能材料科学であり、とくに希土類元素含有ガラス材料の4f電子遷移に基づく光増幅や波長変換機能発現のための理論設計の部分で学術的貢献を果たされてきた。また、理論に基づいて、赤外-可視変換レーザ用

材料、波長多重通信用光ファイバ増幅器材料、固体照明用結晶化ガラス蛍光体、長残光蛍光体など、世の中にインパクトを与える実用的なデバイス実現のための材料開発に長年取り組まれてきた。ここでは、代表的な成果について概観してみたい。

理論設計のベースとなる希土類含有ガラスの局所構造解明に関しては、固体中の希土類イオン配位子場構造と電子状態の関係を解明するために、 ^{151}Eu 原子核のメスバウアー効果測定を通じて異性体シフトと配位数の間の相関を世界で初めて明らかにされている。その関係を構造未知の非晶質に適用することで、種々のガラスアモルファス中での希土類イオンの配位数が解析できるようになった。また、各種ガラス中の希土類イオンのフォノンサイドバンド測定等により、レーザとして高い量子効率を有する希土類イオンホスト材料としては、多フォノン無輻射緩和を避けるために低い伸縮振動数を有する酸化物やフッ化物を主成分とする組成が有利であることを見出された。

光通信で重要な $1.55\mu\text{m}$ 帯における広帯域光増幅器についても、希土類イオンを含有するガラスで高い増幅利得を実現するための材料設計指針を体系化するという仕事をされている。優れた光学特性を有する各種のホストガラスを作製し、その光物性を精密に測定して、ガラス構造との関連を明らかにした。代表的な成果のひとつとして、広帯域・高効率な特性を持つビスマスガラス系光ファイバについての杉本直樹博士（元 AGC、現旭硝子財団）らとの共同研究が挙げられる。

水銀レスで省電力・高効率を実現できる全固体 LED 照明デバイスの開発では、青色 LED の励起光により高効率で黄色や赤の長波長の可視光を発する波長変換蛍光体として、先生は世界で初めて Ce: ガーネット微結晶をガラスに析出した結晶化ガラス蛍光体を開発された。こうした成果もあり ICG の Turner 賞、米国セラミックス協会の Varshneya ガラス科学フロンティア賞を受賞されている。

さらには、励起源を遮断した後も数秒から十数時間といった長時間発光し続ける長残光蛍光体の研究にも早くから取り組まれてきた。白色 LED 照明への応用を見据えた研究では、キャリアトラップ機構の解析に基づく材料設計により、青色蓄光可能な蛍光体の開発に成功されている。また、残光波長を近赤外領域に拡張し、バイオイメージン

グ応用のための長残光プローブの開発や、アップコンバージョン蓄光などの研究へも展開されている。以上の一連の研究についての主要な原著論文のリストは Google Scholar などで簡単に閲覧することができるが、引用回数は本稿執筆時点で延べ 17,000 回以上と膨大な数字になっている。

ここまで研究内容について述べてきたが、先生は国際的な学会活動でも大きな貢献を果たされてきた。ICG の光エレクトロニクスガラス技術委員会 (TC20) の技術委員長を長く務められたほか、ICG 運営理事として国際ガラス年 (IYOG) の国連採択実現に尽力され、2022 年の IYOG では日本実行委員会委員長として国内における数多くの行事を先導された。また、光機能性材料・デバイスやルミネッセンス材料に関連する数多くの国際会議の運営に携わられてきている。前述のオットー・ショット研究賞の受賞インタビューの中では、若手の材料科学研究者へのメッセージとして “Make friends and study or travel at different places, and you will change your mind completely,” とコメントされているが、先生が築かれてきた国際人脈や活動の成果はまさに正にこの言葉をご自身で体現されているものだと思う。

2023 年には、田部研門下生の北陸先端大・上田純平准教授の主催により、先生の還暦を記念したパーティーが京都で開催された。私自身は卒業してから初めて対面する OB・OG も多かったのだが、卒業生がアカデミア、公的機関、材料メーカーやデバイスメーカーで活躍されているのを目にし、田部先生は研究者としてだけでなく、教育者としても長年にわたり無機材料化学分野に貢献されてきたことを改めて認識した。今後も田部先生が活躍を続けられ、多くの研究者に夢や勇気を与え続けていただくことを祈念したい。（『ニューガラス』39 [3], (2024) 62-64. より転載）

*今回、教員の活躍欄に私の「オットー・ショット研究賞受賞」という記事執筆依頼を受けたが、あまり筆が進まないうちにメ切を過ぎてしまい、細見編集委員長にご迷惑をかけている。そこで昨年ニューガラス誌に掲載された AGC（旭硝子）社、林英明さんの寄稿文を思い出したのでこれをもって原稿とさせて頂くことをお許し頂きたい。（田部勢津久）

日本建築学会 Japan Architectural Review Best Paper Award 2023

および一般財団法人住総研 研究・実践選奨 受賞

住まいの過剰と過小：「スラム化する世界」の先を見据えて

前田 昌弘 | Masahiro MAEDA

前田 昌弘（まえだ まさひろ）
人間・環境学研究科 准教授

このたび、日本建築学会 Japan Architectural Review Best Paper Award 2023、および一般財団法人住総研研究・実践選奨という2つの栄えある賞を同時に受賞しました。これらの受賞対象となった研究は、社会的・文化的背景の異なる2つの地域をフィールドとしています。そこでの探求は現在の世界で進行する「スラム化」という現象めぐり、深いところで響き合っています。

前者は、“Acceptance and transformation of the housing “ladder” in slum resettlement projects in Colombo, Sri Lanka” (Masahiro Maeda, JAR 6-1 掲載) に対するものです。この論文はスリランカの都市スラム再定住事業のフィールドワークをもとに、計画側の意図に反して住民が再定住先の住宅を柔軟に住みこなし、コミュニティの関係にもとづく独自の住宅市場や「事実上の所有権」を形成していくダイナミズムを明らかにしたものです。これは、住まいに対する過剰な需要とその結果としての過密居住の問題を取り上げたものであると言えます。

後者は、「歴史的街並みが残る過疎地域の「住み継ぎ」に向けた環境像の共有」(前田昌弘・片岡八重子、住総研研究論文集・実践研究報告集第51号掲載) に対するものです。この論文は過疎化が進む瀬戸内の港町・牛窓での実践的研究を通じて、老朽化した建築ストックの再生や空き家の活用が人口流出という課題に直面するコミュニティに新たな活力を生み出し、多様な人々や事物の関係を再構築する可能性を示したものです。こちらは逆に、住まいへの過小な需要と過疎や人口減少という問題を扱っています。また、この論文は、研究者・専門家と地域の協働による実践的研究が評価され、実践部門での受賞となりました。

このように、一見無関係に見えるこれら二つの研究は、「スラム化」という現象を需要の「過剰」と「過小」という裏表の関係で捉えている点で、決して無関係ではないと私は考えています。アメリカの批評家・都市社会学者マイク・デイヴィスがかつて『スラムの惑星』で予見した「スラム化する世界」に照らすと、私は期せずして、都市へと

再定住する人々の「行き着く先」(スリランカの都市スラム)と、人口の「送り出し先」(日本の地方都市、過疎地域)を同時に考察していたことになります。日本では既にスラムは存在しないと思われがちですが、日本の過疎地域における空き家の増加とインフラ・公共施設維持の困難化は、最低限の生存環境が脅かされる状況であり、この事態はまさに「スラム化」の定義と合致しています。

ところで、『スラムの惑星』において、スラムは専ら、人々が希望を見いだせない「暗黒世界」として描かれています。一方、私がスリランカや牛窓で目の当たりにしたのは、人々が住まいを柔軟に「住みこなし」、さらには住民間の取引によって次世代へと「住み継ぐ」ことで地域に活力を再びもたらししていく姿でした。このような一面的ではないスラムの姿は、スラム化の原因でもある再定住が単なる人々の物理的な移動ではなく、コミュニティの価値そのものを再創造するプロセスにもなり得るという二面性を示唆しています。また、住まいが単なる器ではなく、多様な人々や事物の社会的なつながりを再構築する媒介となる可能性を示しています。私は今後もこのような、住まいが人と人、あるいは人と地域との関係性を構築・維持するという「住まいの関係論的価値」という視点から、「スラム化する世界」の先を見つめていきたいと考えています。

牛窓での研究は、私が2021年に人環に着任して以来、特にこだわってきた実践的研究(アクションリサーチ)という方法論に基づく成果であり、任意団体 ushimado.labo の設立と活動を通じて実行してきました。この取り組みが早期に評価されたことは私たちにとって大きな励みであり、これまで活動に参加した研究室の学生や牛窓の関係者と共に喜びをわかち合いたいと思います。現在、ushimado.labo の活動はより若い世代に引き継がれ、地域で自律的な発展を遂げようとしています。私は今後も、「現場で考えること、現場から考えること」を基本としつつ、これまでよりは少し引いたところから彼らの活動をもう少しばかり見守り続けるつもりです。

日本セラミックス協会進歩賞

真空準位基準束縛エネルギー図に基づいた新規長残光蛍光体の開発

許 健 | Jian XU

許 健

人間・環境学研究科 物質科学講座 助教

残光 (Persistent luminescence) とは、通常の蛍光 (Photoluminescence) と異なり、励起光遮断後も数分から十数時間以上光り続ける発光現象である。古くは 1602 年のイタリアの Bologna の錬金術師が近くの山で入手した石から金を得ようとして、炭と混ぜて焼いたところ、暗闇で橙色に光る石ができたという話がある。この石は当時の人々に驚きをもって知られ、「Bologna の夜光石」として有名になった。20 世紀前半以来、夜光塗料の主流となった残光蛍光体は銅とコバルト添加した硫化亜鉛 (ZnS) 材料であり、軍事物質としての需要が高まると放射性元素、例えばプロメチウム、ラジウム、トリチウムなどを共添加して、残光継続時間を長くすることが行われるようになった。それは時計の文字盤等として広く 1990 年代まで普及していた。1993 年に根本特殊化学が、緑色蛍光体として知られていた、二価ユウロピウム (Eu^{2+}) 賦活ストロンチウムアルミネート (SrAl_2O_4) にジスプロシウム (Dy^{3+}) を共添加することにより、硫化亜鉛蛍光体よりも 10 倍以上明るく 10 倍以上長く光り続ける $\text{SrAl}_2\text{O}_4:\text{Eu}^{2+}-\text{Dy}^{3+}$ 緑色長残光蛍光体を開発した。この物質は放射性物質や有害物質を一切含んでいないため、夜光塗料として、時計の文字盤や緊急避難用の標識、防災システム等に世界中で広く用いられていることは、読者の皆様も一度は聞いたか、目にしたりしたことがあるであろう。

しかし、20 年以上チャンピオンの座を保持した $\text{SrAl}_2\text{O}_4:\text{Eu}^{2+}-\text{Dy}^{3+}$ は、昨今普及している白色 LED 照明環境下では残光特性が劣るという問題があった。一方、長残光蛍光体の透光性セラミックスが作製できれば、光散乱が低いため試料内部への蓄光が効率的に行われ、一般的な粉末状や樹脂コンポジットの蓄光材料と比べて高い残光輝度かつ長い残光持続時間の実現が可能である。私は、白色 LED から青色光蓄光可能な立方晶 $\text{Y}_3\text{Al}_{5-x}\text{Ga}_x\text{O}_{12}$ (YAGG): $\text{Ce}^{3+}-\text{Cr}^{3+}$ 長残光蛍光体に着目し、高い光学透過率を持つ透光性セラミックスを作製し、残光輝度の著しい向上を実現した。2.8 mm 厚の YAGG: $\text{Ce}^{3+}-\text{Cr}^{3+}$ 透光性セラミックスの励起光遮断後 20 分における残光輝度は 88 mcd/m^2 であり、同組成不透明セラミックスの 30 mcd/m^2 と比較して約 3 倍の残光輝度が向上した。なお、

$\text{SrAl}_2\text{O}_4:\text{Eu}^{2+}-\text{Dy}^{3+}$ 粉末と比較しても 60 分後に約 3 倍の残光輝度の向上が得られた。これは粉末や不透明セラミック蛍光体とは異なり、厚みの増加と共に残光輝度と一定輝度に達する残光持続時間の大幅な向上を達成した初の報告である。透明材料の「体積効果」による初期残光輝度と残光持続時間の大幅な向上を達成し、暗闇においてセラミックス下の文字が自身の残光で読めるというユニークな特徴を有する。

そして、ホスト材の希土類 4f 基底・励起準位の真空準位基準束縛エネルギー図に基づいて、代表的な赤橙色発光中心である Eu^{3+} や近赤外レーザー発振中心である Yb^{3+} イオンを電子トラップとして初めて機能させ、 Cr^{3+} 賦活近赤外長残光蛍光体を開発した。さらに、電気双極子相互作用による Ce^{3+} の可視残光から Er^{3+} の近赤外残光への「残光エネルギー移動」機構を利用し、可視のみならず近赤外の長残光スペクトルを実現できた。この $1.55\mu\text{m}$ 残光域は、既存の長残光蛍光体の中でも最長波長であるだけでなく、光ファイバ通信網システムの発達の恩恵で近年普及の著しい InGaAs 半導体検出器の感度が最大となる波長でもあり、外部励起不要な次世代生体イメージングに新波長資源を提供する初の材料である。このような理論モデルの予測から強い残光輝度・長い残光持続時間を示す一連の新規可視・近赤外残光蛍光体の開発に成功し、本受賞に至りました。

2014 年 1 月に来日してから 11 年が経ち、今年は日本での生活が 12 年目に入りました。本受賞は当然私一人の研究によるものではございません。この寄稿のご機会を借りて、博士後期課程から長年支えてくれた田部勢津久教授、田部研の大先輩上田純平先生 (現：北陸先端大 准教授)、中西貴之先生 (現：物質・材料研究機構 主幹研究員) 及び田部研・物質材研 (ICYS センター・次世代蛍光体グループ) の優秀な学生さんと同僚たちを心より感謝申し上げます。



セラミックス協会進歩賞の受賞式の様子

クリタ水・環境科学振興財団 2024 年度クリタ水・環境科学研究優秀賞顕彰 生物源炭酸塩の超高感度安定同位体分析による新たな水域生態環境指標の開拓

石村 豊穂 | Toyoho ISHIMURA

石村 豊穂 (いしむら とよほ)

人間・環境学研究科 地球・生命環境講座 教授

私は地球科学が専門でして、特に古生物学と地球化学を研究基盤としています。若い頃は古生物学研究の高度化に向けて分析技術の開発に注力しましたが、近年はこの技術を現生海洋生物の生態解明に活用することを模索してきました。今回この一連の研究に対して「クリタ水・環境科学振興財団」より評価をいただきましたので御報告いたします。

炭酸塩（炭酸カルシウム、 CaCO_3 ）の炭素酸素安定同位体組成（ $\delta^{13}\text{C}$, $\delta^{18}\text{O}$ ）は地球環境の変動履歴を記録する指標となることがよく知られています。特にサンゴや有孔虫などの生物は海洋に広域に生息し、彼らを作る炭酸塩骨格は化石としても保存されやすいことから、世界中で古気候復元などの環境解析に多用されてきました。特に $\delta^{18}\text{O}$ は炭酸塩が形成された際の温度指標となることから、環境変動史の理解に対して最も重要な指標になります。そして近年では環境変動予測の高度化に向けて、より高感度・高精度での同位体分析が必要とされていたものの、分析技術の限界から長らく頭打ちの状況が続いていました。

Ishimura et al. (2004, 2008) では、未踏の高感度高精度分析の実現を目指し、独力で新たな分析システム（ハードウェア・ソフトウェア）の開発と基礎実験を遂行し、世界で唯一ナノグラムオーダー（従来の 1/100）の炭酸塩の $\delta^{13}\text{C}$ ・ $\delta^{18}\text{O}$ を高精度分析するできる技術（MICAL）を確立しました。この分析技術は炭酸塩だけではなく、 CO_2 を世界で一番少ない量で高精度分析できる装置でもあり、結果的に応用研究の対象が大きく広がりました。しかし、当初はその分析の質を信じてもらえない時期もあり、コツコツと実績を積み重ねていく事でやっと信頼を得るに至り、今も世界で唯一の分析技術として認知されています。

現在は小さな研究室ながらも MICAL をフル活用した研究体制を構築して、水産資源学や生物学など、当初は想定していなかった多分野にわたる複数の萌芽的研究へと結び付いています。特に近年は、魚類耳石（時系列で炭酸塩を付加成長する）への応用を進めることで、今日まで不可能だった海洋生物の経験水温履歴解析（＝回遊履歴解析）、そして魚類資源変動の理解へと導く新たな道を切り開いてきました。

水温は海洋生物の分布を制限する主要な環境要素の一つであり、地球温暖化の進行による海水温の変化は、多くの海洋生物の分布海域や個体数の増減に大きな影響を与えることが確実視されています。世界中で海産物に対する需要が増加する中で、将来にわたって水産資源を持続的に利用するためにも、水温変動が海洋生物の生残や分布・回遊様式に与える影響を理解し、その情報を基に現状把握と将来予測を行い、生態系の保全策を考えることが重要です。しかし、魚類や頭足類（イカ・タコ類）の回遊履歴を生誕にわたって観測する手段は確立されておらず、彼らの生き様についてはほとんど理解が進んでいませんでした。そこで注目されていたのが魚類耳石（炭酸塩）です。耳石の $\delta^{18}\text{O}$ を MICAL で成長段階毎に高時間分解能で分析することで、海洋生物の経験水温履歴解析（＝回遊履歴解析）の詳細な理解に結び付きます。

共同研究者らとともに発展させたその応用成果は、仔稚魚期の生育環境の復元（マグロ：Hane et al., 2020, シラス：Nishida et al., 2020）、魚種毎の $\delta^{18}\text{O}$ -水温換算式の構築（マグロ：Kitagawa et al., 2013、マイワシ：Sakamoto et al., 2017, マサバ：Nakamura et al., 2019, ウナギ：Kuroki et al., 2025）、回遊経路の高解像度解析とモデルとの融合による個体の回遊履歴の復元（e.g. マイワシ：Sakamoto et al., 2019, Aono et al., 2024）、初期成長と水温の関係解明（e.g. マサバ：Higuchi et al., 2019）、さらにマアジでは 1 日毎の経験水温を解析するまでに至り（Muto et al., 2022）、新たな研究領域を創造してきました。これらは環境変動と資源変動の相関解明（Sakamoto et al., 2022, 2024）にも結び付き、水産資源を持続的に利用していくための諸問題を解決する基礎情報の提供に直結しています。特に白眉センター坂本達也特定助教は学生時代からこの装置の価値を見いだして活用し、数多くの研究論文を公表してきました。

現在は人環学生や共同研究者らとともに頭足類（イカ類）への応用も進めつつ、①魚類・頭足類の回遊経路解析の高度化、②生態食性指標の開発、そして③重元素同位体を活用した海域推定の高精度化によって、「複合生物地球化学タグ」を開発することで新たな生態復元手法を確立し、海洋生物の回遊履歴解析の高精度化の実現を目指しています。

日本生態学会宮地賞

『植物の種形成における地理・生態・時間的隔離の役割』

阪口 翔太 | Shota SAKAGUCHI

阪口 翔太（さかぐち しょうた）
京都大学大学院人間・環境学研究科

新しい種がどのように生まれるのか—これは生物学における最も根源的な問いのひとつである。動物では行動や交尾器の違いが種分化で重要な役割を果たすが、移動できない植物では、種形成の契機はより環境的・空間的な要因に左右されやすい。植物の種形成では、花粉や種子を介した遺伝子流動の制限がやがて生殖隔離を確立し、新たな系統を生み出す原動力となる。その際、地理的・生態的・時間的隔離という三つの仕組みが、異なる時空間スケールで重なり合いながら分化を促してきた。

まず、地理的隔離は最も古典的かつ明快な種形成の要因である。氷期と間氷期の気候変動、海峡の形成、火山活動などの地史的イベントは、植物集団を地理的に分断してきた。日本列島の植物を例にとると、第四紀後半の氷期には海水面が100m以上低下し、本州と九州・四国、さらには朝鮮半島が陸続きになっていた。寒冷期の終焉とともに海が再び入り込み、島ごとに隔てられた集団は互いに独立して進化した。カンアオイ属やギボウシ属など、地域固有種を多くもつ植物群では、こうした地史的分断が固有種の誕生を促してきたと考えられる。地理的隔離によって遺伝子流動が途絶すると、突然変異や遺伝的浮動、さらには地域環境への適応が集団ごとに独自に進み、結果として遺伝的・形態的な違いが蓄積する。このような異所的種分化は、植物進化において最も普遍的なパターンのひとつである。

次に、生態的隔離は、地理的に隣接する集団間で生じる環境条件のわずかな違いから生まれる。たとえば蛇紋岩地のような極端な土壌環境は、生態的種分化の典型的な舞台である。蛇紋岩にはニッケルやクロムなどの重金属が多く、一般の植物にとっては生育困難だが、一部の植物はこれらの元素に耐性を獲得し、中には金属を高濃度に集積することで生存するものもある。こうした土壌適応型植物は、周囲の非蛇紋岩地の個体群と交雑しても、その子孫がどちらの環境にも適応できないため、分岐的自然選択によって分

化が維持される。このように環境選択圧が生殖隔離を強める過程は「生態的種分化」と呼ばれ、高山と低地、湿地と乾地、森林と草原といった多様な環境差によっても引き起こされる。

さらに、植物に特有の要因として時間的隔離がある。開花期のずれが交配機会を失わせ、結果的に生殖隔離を強める。気温や日長の地域差によって、同種内でも開花時期が数週間異なることがある。たとえば、山地と平地に生える同種の植物が、雪解けや気温上昇の時期の違いによって開花期をずらすと、花粉のやり取りはほとんど起こらない。さらに、異なる環境への適応の結果、別々の時期に開花することが集団に有利となり、遺伝子交換が抑制されることもある。このような時間的隔離は、地理的・生態的隔離を補強する仕組みとして働きやすい。

これら三つの隔離は、自然界ではしばしば複合的に作用する。たとえば、氷期に地理的に隔離された集団が、それぞれの環境に適応して生態的分化を遂げ、再び接触した際には開花期や受粉者の違いによって交雑が妨げられる。このような多層的過程を経て「完全な生殖隔離」が成立する。種形成とは、一部の倍数化などの特殊な事例を除けば、空間・環境・時間の三つの次元が織り成す連続的な進化の過程なのである。

植物の進化史を振り返ると、これらの隔離が時代や地域によって異なる重要性をもってきたことがわかる。島嶼では地理的隔離が支配的であり、山岳地帯では環境の垂直分化が鍵となる。温帯から熱帯への移行帯のような地域では、開花期の違いや受粉者の分化といった時間的・生態的隔離が重要となる。したがって、植物の種形成を理解するには、単一の隔離機構を特定するのではなく、複数の要因がどのように重なり合い、どの段階で遺伝子流動を断ち切るのかを総合的にとらえる視点が求められる。

現代韓国朝鮮学会賞、比較文明学会研究奨励賞、田辺元賞

テーマ：思想は「自己否定」する

郭 旻錫 | Minseok KWAK

郭 旻錫（かく みんそく）
京都大学准教授

思想は「自己否定」する。これが、『自己否定する主体一九三〇年代における「日本」と「朝鮮」の思想的媒介』（京都大学学術出版会、2024）という著書でわたしが提示しようとした思想の捉え方である。「自己否定」するものとして思想を捉える方法論は、思想に対する以下の二つの捉え方を批判的に克服するためのものである。

その一つは、思想を政治社会的な状況に還元してしまう捉え方である。確かに、思想は時代の産物であり、その思想が生まれ育った社会的な状況と離して捉えることはできない。思想は、時代における政治的・社会的な諸条件に制約されている。このような思想と時代の関係性を哲学的に言い換えると、思想は、時代的な状況によって「否定」されながら形作られるということになる。しかし、時代状況による「否定」は、思想形成の否定的な制約としてだけではなく、肯定的な契機としてもはたらいている。時代による制約がなかったならば、ある思想家が特定の問題意識を抱き、具体的な思想の生産に携わることもなかったはずである。時代的な条件は、思想の生成にとって不可欠であるのだ。時代的な条件による「否定」に、思想形成における肯定的な意味を与え、思想を時代状況から一方的に説明しようとするのが、わたしのいった「思想を政治社会的な状況に還元してしまう捉え方」なのである。

しかし、思想は時代的な条件によって「否定」されると同時に、「自己否定」を行う。思想は、ただ時代によって「否定」されるだけの受動的な存在ではなく、自らが自らを「否定」し、自らが自らを作り上げていく「自己否定」のはたらきである。これが思想におけるオリジナリティとして現れる。思想のオリジナリティは、時代的な条件による「否定」だけでは説明がつかない。「自己否定」という主体的なはたらきを認めなければならない。思想を「自己否定」するものとして捉えることは、「思想を政治社会的な状況に還元してしまう捉え方」を止揚し、思想の独自性に光を当てするための方法論である。

思想を「自己否定」するものとして捉える方法論が批判的に乗り越えようとした二つ目のものは、思想を時代と無

関係に存在する純粋な論理・表象として捉える思想の見方である。すでに述べた通り、時代的な状況による「否定」なしには、思想が具体的に形成されることはできない。わたしは思想の「自己否定性」がその思想の独特な個性を表すといったが、その個性は時代と無関係に存在しているわけではない。「自己否定」

を展開していくためには、時代のなかに置かれている「自己」がなければならない。「自己」は、個体的な存在者ではなく、思想が「自己否定」によって形成されるための条件である。思想家は、その条件と否定的に対立しながら自らの思想を生み出していくのである。したがって思想の個性というのは、時代から遊離されているという意味における思想の固有性を意味せず、時代との常なる拮抗関係から理解される思想の固有性を意味しているのだ。

わたしは自著において、1930年代における帝国日本と植民地朝鮮の諸思想に表れている「自己否定」のはたらきを描いた。それは、当時の思想が戦争という暴力的な時代状況に還元されない、思想としてのオリジナリティを有していると考えたからである。しかし、当時の思想家たちが、暴力的な時代状況によって強く制約されていたのも、また事実である。彼らは、「日本」とはなにか、「朝鮮」とはなにかを熱心に考えなければならなかった。彼らは時代的な条件としての「日本」や「朝鮮」をそのまま受け入れたわけではない。彼らが生み出した思想は、強い「自己否定」によって、新たな「日本」や「朝鮮」を夢見ていたのである。



超越整関数の複素力学系－有限性の無い世界での数学

木坂 正史 | Masashi KISAKA

木坂 正史（きさか まさし）

人間・環境学研究科 数理・情報科学講座 教授

京都大学大学院理学研究科博士後期課程中途退学。博士（理学）。専門は数学、特に力学系理論。

「私の研究の原点と現在」というお題で執筆依頼を受けた。せっかくの機会なのでこれまでの研究人生を振り返りつつ、同時に私の研究分野について多少なりとも知って頂くために、なるべく平易な解説を試みようと思う¹。

研究の原点 1－研究者を目指すようになったきっかけ

振り返ってみると分野はともかく、私が職業として研究者を選んだきっかけには父の影響があったと思う。私の父は大学の教員で専門は日本政治史であった。その父には小さい頃からたびたび「大学の先生は好きなことをしながら稼げる。こんなにいいことはない」という趣旨のことを言われていた。子供心には「研究者とは？」などと考えることなど当然無く、単に「大学の先生になるとハッピーになれる」くらいに思っていたのだろう。

私は小学5年生までは学校から帰ってきたらすぐに外に遊びに行くような子供で、勉強した、あるいはさせられた記憶は一切ない。算数はおもしろい得意だと思っていたはずだ。これが一変したのは6年生の4月、兄の影響で中学受験をすることになって塾に通い出してからであった。塾でやる算数はそれまで小学校でやってきたものとは違って難しく、最初の2ヶ月くらいはテストで2、30点ばかり、という有様だった。ところが母から1次方程式と連立1次方程式の考え方を教えてもらってから、状況は一変した。今まで難しいと感じていた問題がとても明確に理解できるようになって嬉しかったのを覚えている。

中学受験には残念ながら失敗して公立の中学に行き、その後は地元の私立高校に進学した。高1の終わり頃のある日、出会いがあった。ふと立ち寄った書店で「大学への数学」²という月刊誌を目にして手に取ったのがきっかけであった。基本的に大学受験の数学を扱っているこの雑誌には、大学の先生方による高校数学を離れた話題に関する記事があり、また「学力コンテスト」や「宿題」と呼ばれる、難問が出題されるコーナーがあった。特に「宿題」は1、

2時間考えたくらいでは全く分からないレベルで、最初のうちは解けずじまいであったが、そのうち正解までたどり着けることもたまにできるようになっていった。1問に延べ24時間以上、期間にして1ヶ月ほどかけるようなこともあった。長い時間をかけた末に問題が解けたときの何とも表現できない爽快感は忘れられないものとなった。この体験が原点の1つであることはほぼ間違いないと思う。

研究の原点 2－力学系理論との出会い

その後、京都大学理学部に入学したが、最初の2年間で専門を決めればよいことになっていたので当初は「数学か物理か？」を時間をかけて決めようと思っていた。ところが5月に縁あって「新しい科学の会」というサークルが主催する自主ゼミに参加したことで状況が一変した。この自主ゼミは4回生がチューターとして面倒をみってくれるもので、参加したゼミの内容は微分位相幾何学であった。担当してくれたチューターが過激な方で、ゼミの準備のために時間を相当かけることになり、その結果、早いうちから数学を専攻すると心に決めることとなった。

当時の理学部では1年前倒しで様々な科目を履修することができたので、その頃の仲間5、6人で切磋琢磨しながら勉強を進め、3回生で講究（＝4回生の卒業研究に相当するもの）をやることになった。分野としては微分幾何学を選んだ。ところが…、どうもじっくりとこない。難しくてもよく分からないこともたびたびあるし、また何より、すばらしい定理が証明されていて理解はできるが、それを体現する例が見つからないものしかない、ということもあった（私が面白い例を見つけられなかっただけだと思われる）。このようなこともあり、講究は無事終えたが4回生になって今後何を目指すかで悩むことになった。方向性を変えるのは今までやってきたことを無駄にするような気がして躊躇する気持ちがあった。そんな中で様々な本に当たっていきうちに「カオス力学系入門（Devaney 著）」という本に

1 依頼を受けたのは3年前のことである。私の超遅筆のためにこれまでの間に細見編集長をはじめ、多くの関係者の皆様に多大なご迷惑をおかけすることになった。ここに改めてお詫び申し上げる。

2 ちなみにフィールズ賞受賞者の森重文氏がこの雑誌の伝説の読者であったことは有名である。

出会った。微積分の初歩的な知識だけで読める本で、難しい概念を使わず、しかし Sharkowski の定理（1 次元力学系の周期点の存在に関する定理）のような深遠な結果が証明されているのに大変感銘を受けた。また今までやってきた幾何学的なことも大いに役立ちそうだと分かり、進む方向として新たに力学系理論を選ぶことにした。

数学とは縁遠い人に「専門は力学系です」と言う「物理をやっているのですか？」と訊かれるが常である。「力学」と聞くと物理の力学を思い起こすのは無理もない。力学系とは dynamical systems の日本語訳で、直訳するなら「動的な系」となる。一言でいうと「時間と共に変化するもの」である。そのような具体例は枚挙に暇がない。自然科学が扱う研究対象の多くは力学系である。例えば物理が扱う「力学」、化学が扱う「化学反応」、生物が扱う「生物の個体数の時間変化」、地学が扱う「気象現象」などなど…。一方、数学としての力学系とは「時間と共に変化するもの」を数学の言葉で抽象的に定式化したものである。その方法はいくつもあるが、時間を連続的なもの（通常は実数 t で表される）とするか離散的なもの（自然数 $1, 2, \dots$ で表される）。1 秒後、2 秒後、とか、1 年後、2 年後、など飛び飛びの時刻だけを考えるとするかの 2 つに大別される。前者は連続力学系と呼ばれ、ベクトル場（＝ある種の微分方程式）の理論が典型例である。後者は離散力学系と呼ばれる。具体的には 1 つ集合 X を決め（例えば区間 $[0, 1]$ 、平面など）、その上の写像 $f: X \rightarrow X$ を 1 つ決め、初期点 $x_0 \in X$ をとってそれを f によって繰り返し動かしていく、という写像の反復合成の理論である。即ち、

$$x_1 = f(x_0), x_2 = f(x_1) = f(f(x_0)), \dots, \\ x_n = f(x_{n-1}) = f \circ f \circ \dots \circ f(x_0), \dots$$

という列 $\{x_k\}_{k=0}^\infty = \{x_0, x_1, \dots\}$ （ $= x_0$ の軌道）を考え、時間 n が十分大きくなるときの挙動を考察する。

連続力学系から離散力学系へ

さて、修士課程ではその当時助手になられたばかりの國府寛司先生に面倒を見て頂くことになった。力学系の基礎を学びつつ、中でもベクトル場の分岐理論を主として学んでいった。修論で考えたのは「倍ホモクリニック分岐」という分岐現象であった。その後、博士課程に進んだがその瞬間に國府先生は海外に 1 年行ってしまわれた。その間は修士論文の結果を論文にして出す過程で条件の改善と理論の一般化に取り組み、それと同時に今後何に取り組むのかをあれこれ考えることになった。そんな中で博士課程 1 年の冬に何と就職が決まってしまった。その当時はちょうど世代交代の時期で数学の分野では就職状況がとてもよかつ

た。こんなに早く就職できるとは思っておらず、「一生分の運をこれで使い果たした」と感じたほどであった。

大阪府立大学総合科学部に助手として採用された。就職後は週 1 回講義をするだけで、後はいわゆる雑用もほとんどないという、今では考えられないような環境で自由に研究をさせてもらった。そんな中、かねてから気になっていた複素力学系について勉強してみようと Beardon の「Iteration of Rational Functions」を読んでみた。これに非常に魅了されてしまい、結局ここへきて再び研究の方向性をガラリと変えることにした。これは力学系の中での方針転換ではあるが、連続力学系から離散力学系へ、なので相当勇気の要ることであった。更にその時点で当然ながら私は学位を取っていなかった。この方針転換は複素力学系の研究を自ら行い、論文を書いて論文博士を取ることを意味した。自ら茨の道を選んだと言ってもよい。一方でこのような選択ができたのは、現在とは違って大学の職が全て「任期無し」であったからである。もしこれが「任期 5 年」とかだったらこんな選択は間違い無くしなかったと思う。

最初に取り組んだのは例外的な有理写像の研究であった。大抵の有理写像 f は任意の n に対して周期 n の周期点を持つが、例えば 2 周期点を持たないようなものも存在する（例えば $f(z) = z^2 - 3/4$ ）。そのような有理写像を共役類で分類する、というものであった。Beardon の本を読んでいて抱いた疑問がきっかけであった。自分なりに納得のいくところまで疑問が解決したのは嬉しかったし、また先行研究の論文の中に計算間違いがあることも発見した。有名な方の論文だったので驚くと同時に、出版されている論文が正しいものばかりとは限らない、という業界の常識を知らずも直接体感することとなった。

その後、研究の方向性を模索していたある日、図書館に立ち寄ったときに新たな出会いがあった。ふと手にした雑誌に Devaney（再び！）の指数関数族に関する論文を見つけた³。その当時はまだ珍しかったカラー図版でとても怪しげな図が載っていて、内容と共にとても魅了されてしまった。その当時、複素力学系の分野では多項式や有理写像の力学系の研究が主流であった。そんな中で指数関数のような超越整関数（＝複素平面上で正則で多項式ではないもの）の力学系の世界もあることを知って、何だかとても新しいもののように思えた。人と違う道を行くとひょっとしたら面白い景色が見られるかもしれない、などとも思い、1 つの方向性として強く意識するようになった。

複素力学系—多項式 vs 超越整関数

複素力学系とは X として複素平面 $\mathbb{C}$ をとり、写像 f として例えば多項式

3 この頃はまだインターネットなど存在せず、最新の情報を手に入れるために図書館に足繁く通ったものだ。最新の雑誌やプレプリントが並べられていて、ときにはあまり手にしない雑誌を見たことで、未知の論文と思わぬ出会いをすることもあった。インターネットが発達するに伴い、徐々に必要な雑誌しか見ないようになり、このような機会は減ってしまったように思う。

$$f(z) = a_d z^d + a_{d-1} z^{d-1} + \cdots + a_1 z + a_0$$

を考えた、離散力学系である。初期点 z_0 の軌道がある観点で挙動が穏やかか複雑であるかに分類して、それを図示すると、とても複雑な図形 (Julia 集合 $J(f)$ と、その補集合である Fatou 集合 $F(f)$) が現れる (図 1)。

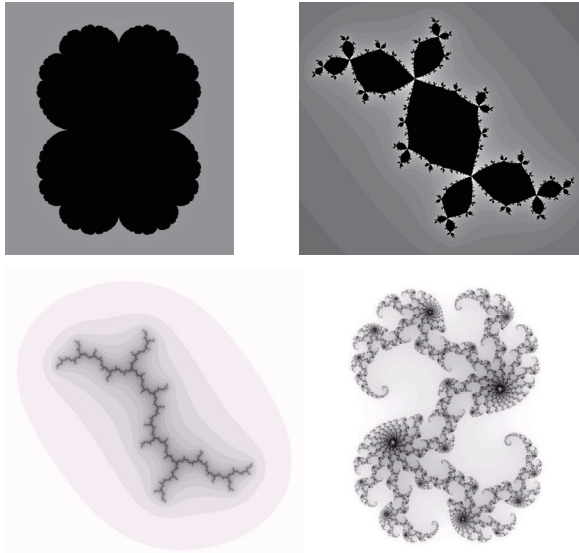


図 1 様々な 2 次多項式 z^2+c の Julia 集合

一方、超越整関数とは

$$f(z) = \sum_{n=0}^{\infty} a_n z^n = a_0 + a_1 z + \cdots + a_n z^n + \cdots$$

という無限和が全ての複素数 $z \in \mathbb{C}$ で意味を持つような関数のことで、複素指数関数

$$e^z = 1 + z + \frac{z^2}{2!} + \cdots + \frac{z^n}{n!} + \cdots$$

はその具体例である。このようなものに対しても同様の研究対象物が定義できるのだが、これは多項式の場合と比べると比較にならないくらい難しいものとなる。そもそも多項式で点 z_0 を 1 回動かす ($=f(z_0)$ の値を計算する) のはとても簡単だが超越整関数の場合は $f(z_0)$ を計算しようとすると無限和になるので、一般には近似値しか分らない。よって Julia 集合を図示しても、正確な図は得られないことになる (図 2)。



図 2 超越整関数の Julia 集合

また理論的な難しさとしては次の 2 点が挙げられる：

1. d 次多項式は有限対 1 の写像、つまり 1 点の逆像は d 個だが、超越整関数は無限対 1 の写像、つまり 1 点の逆像は無限個存在する。
2. 多項式は複素平面に無限遠点 ∞ を付け加えて得られる Riemann 球面と呼ばれるコンパクトな空間 (=ある種の有限性がある空間) $\widehat{\mathbb{C}}$ 上の力学系と見なせる一方、超越整関数ではそうは見せず、あくまで複素平面というコンパクトではない (=有限性の無い) 空間上の力学系となる。

以上のことから多項式の Julia 集合は $\mathbb{C}$ でコンパクト (=有界な閉集合) となるが、超越整関数の Julia 集合はコンパクトでない閉集合となる。

コンパクトという概念は数学のありとあらゆるところで現れるもので、特に幾何学などでは多くの場合、考察する幾何学的対象物はコンパクトなものである。その主な理由はコンパクト性=ある種の有限性、の下での実に様々な数学理論が既に多数あり、考察がしやすいからである。ところがこれが無いと、途端に議論が難しくなり、道は険しくなる。有限性の無い世界においては状況に応じた議論や道具を用いる工夫が必要になるので、一般にはこれらを見て有限性の有る世界を考える人の方がはるかに多いと思われる。一方、難しい分、未だに知られていないことが多々ある、という点ではとても魅力のある世界だとも言える。

さて、最初に思いついたのは超越整関数 f を近似する多項式の列 f_n を考え、 f_n の力学系的性質から f の力学系的性質を理解しよう、という方法であった。いろいろと考えた末に、ある状況下ではこの手法がうまくいくこと、具体的には例えば $J(f_n)$ が $J(f)$ に収束することが分かった。これはそれなりの成果ではあったが、内容的に全く満足のいく物ではなかった。更に検討していくうちにこの手法で f そのものの性質を捉えるのには限界がある、と悟るに至り、その後は f そのものを考察することにした。そこで注目したのが Julia 集合の位相的性質、特に連結性 (=1 つながりの形であること) であった。多項式の力学系では特異値の挙動を見れば連結性が判定できることが知られていたが、超越整関数の場合ではそうはいかないので全く別のことを考える必要があった。頑張った甲斐あって様々な結果を得たが、印象的なのは ∞ を付け加えて $J(f)$ を $\widehat{\mathbb{C}}$ の部分集合と考えたときの連結性と $J(f)$ を $\mathbb{C}$ の部分集合と考えたときの連結性がかなり違うことであった。主結果は「非有界な Fatou 成分の境界がとても複雑である」というもので、その副産物として非有界な Fatou 成分を持つ f について $J(f)$ は非連結になることが分かった。以上の内容をまとめた物が博士論文となった。複素力学系へと研究分野を変えて 5 年近くが経っていた。

研究のその後～現在～今後

その後は研究テーマを変えることなく複素力学系、特に

超越整関数の力学系の研究に携わってきた。いくつかを列挙すると、

- (1) Julia集合の位相的性質の研究
- (2) Fatou 集合の成分である遊走領域の研究
- (3) 超越整関数の力学系の測度論的性質の研究
- (4) 超越整関数の力学系の多様性を示す事例の構成

などなど…。基本的には「超越整関数の力学系特有な現象で、多項式の力学系では起こらないようなもの」について考察してきた。その中で特に印象に残っているものを1つ挙げるなら(2)の遊走領域の研究となる。Fatou 集合の連結成分は f で動かすと再び連結成分となるので、連結成分の軌道を考えることができる。動き方としては

- ・2度と同じ成分に戻ってくることはない
- ・途中で同じ成分に戻ってくる

の2種類が考えられる。後者の場合は戻ってきた後は同じ動きを繰り返すことになるので「やがて周期的な動きに落ち着く」と言える。一方前者の場合はいつまで経っても周期的な動きをし始めることはなく、永遠とあちこちを動いていくことになる。このような成分を遊走領域という。実は多項式の力学系では遊走領域は存在しない、即ち、連結成分はやがて周期的な動きに落ち着くことが知られている。例えば図1の右上の力学系では、どの黒い領域を動かしていても最終的には、真ん中の1番大きな領域とその左上の方に1点でくっ付いている2つの領域の3つを順繰りに動いていることになる。ところが超越整関数の力学系では遊走領域が出現することがある。例えば図2の右側の力学系では上部の真ん中にある領域は動かしていくと上の方にどんどん動いていって2度と同じ所に戻ってこない。このような遊走領域について宍倉光広氏(京大)との共同研究で考察したのは、遊走領域の連結度(=穴の個数)であった。例えば図2の右側に現れる遊走領域は単連結で穴は無い。遊走領域の例としてその当時知られていたものは無限連結なものだけでなく、有限連結なもの、例えば同心円2個で囲まれる2重連結領域のように1つだけ穴が空いたようなものが存在するかどうかは未知であった。我々は2以上の任意の自然数 n に対して、遊走領域で n 重連結なものを持つような超越整関数の存在を擬等角手術の方法で構成することにより証明した。その際に使った手法はその後、他の研究者の方々が用いてくれて様々な例が構成されることになったのはとても嬉しいことであった。

一方で実は、多項式の力学系についての興味も持ち続けてきた。そんな中、約10年ほど前にMandelbrot集合の中に様々なJulia集合とよく似た形が見えることを発見していた。このとても不思議な現象を数学的に解明したいと思い、この話を川平友規氏(一橋大)にしたところ意気投合し、共同研究が始まった。紆余曲折を経て数年をかけて定理の形にまですることができた。紙面の都合で詳細を述べるができないのが残念であるが、以下を参照して頂ければと思う：

T. Kawahira and M. Kisaka, Julia sets appear quasiconformally in the Mandelbrot set. To appear in Conformal Geometry and Dynamics. (arXiv:1804.00176.)

自身がやってきたことを振り返ってみると、個々の成果の中には上記のようにそれなりに納得のいくものがあったが、全体としては大満足な境地には正直なところほど遠いと感じている。定年まではもうあと5、6年となったが、数学は幸いなことに実験系などの研究分野とは違って、定年を迎えたからといって研究ができなくなるものではない。今後も「有限性の無い世界での数学」に多少なりとも貢献できるように、精進していくつもりである。

終わりに

最後に超越整関数の力学系の興味深い応用について紹介したいと思う。数論の有名な未解決問題の1つに次の「 $(3n+1)$ -問題」と呼ばれるものがある。

★ $(3n+1)$ -問題：自然数 $n \in \mathbb{N}$ に対して

$$\varphi(n) := \begin{cases} 3n+1 & n: \text{奇数} \\ n/2 & n: \text{偶数} \end{cases}$$

とする。このとき任意の点 n の軌道は最終的に $1 \mapsto 4 \mapsto 2 \mapsto 1$ という周期系に落ち着くか？

この φ については例えば非有界な軌道(即ち、 $\varphi^k(n) \rightarrow \infty$ ($k \rightarrow \infty$) となるもの)が存在するかどうかさえわかっていない。この問題に対して私の古くからの友人である Schleicher 氏らは次の超越整関数を考えた。

$$f(z) := \frac{z}{2} + \left(z + \frac{1}{2}\right) \frac{1 - \cos \pi z}{2} + \frac{1}{\pi} \left(\frac{1}{2} - \cos \pi z\right) \sin \pi z + h(z) \sin^2 \pi z$$

ただし $h(z)$ は任意の整関数である。この f は $\mathbb{N}$ 上では次の $\tilde{\varphi}$ に一致している。

$$\tilde{\varphi}(n) := \begin{cases} (3n+1)/2 & n: \text{奇数} \\ n/2 & n: \text{偶数} \end{cases}$$

n が奇数のとき $3n+1$ は必ず偶数なので φ の代わりに $\tilde{\varphi}$ を考えても同じである。この f について次の予想がある：

予想：ある $h(z)$ に対して、対応する f の Fatou 集合は遊走領域を持たない。

この予想が示されれば $\tilde{\varphi}$ 、従って φ の力学系に非有界軌道は存在せず、任意の軌道は終局周期的になることが従う。更に巧妙に $h(z)$ を選べば元々の $(3n+1)$ -問題を解決することも可能かもしれない。皆さんの挑戦をお待ちしている。

筑波の道と古典文学と

長谷川 千尋 | Chihiro HASEGAWA

長谷川 千尋（はせがわ ちひろ）

人間・環境学研究科東アジア文明講座教授

1974年生まれ。静岡県出身。京都大学大学院文学研究科修了。専門は日本中世文学。

筑波の道（連歌）との出会い

ジブリ映画ですっかり市民権を得たが、昔はよく名前を読み間違えられた。父が『源氏物語』から取った名前らしい。光源氏が若紫の髪を手ずから切って、「はかりなき千尋の底の海松ぶさの生ひゆく末は我のみぞ見む」と歌う場面である。幼い頃、母が聞かせてくれた『百人一首』の小式部内侍の話が妙に印象に残っている。名誉ある歌会の歌人に選ばれた小式部が、貴公子たちに、どうせ自力では詠めずに、親（丹後に住む歌人の和泉式部）に教わるんだろう？丹後から文は届いたのかい？とからかわれて、咄嗟に詠んだ「まだふみもみず天橋立」の歌が、その場の空気を一変させる。そんな場面がありありと心に浮かんだ。特に詩歌に関心がある訳ではなかったけれど、歌の言葉の持つ力、機知の妙を、肌で感じとることができた瞬間だったのだろう。

高等学校以前の古文の教育は平安朝物語に傾斜しているので、古文好きの大方がそこに関心を抱くようになる。しかし入学した京都大学の国語国文学分野は、伝統的に近世文学と上代文学が本流であった。1、2回生の授業には、朋誠堂喜三二の『文武二道万石通』や上田秋成の『諸道聞耳世間猿』と、聞いたこともない作品が並んだ。『源氏物語』の自主ゼミに参加したりもしたが、当時は学業よりも茶道部の活動に熱中していた。茶道と聞くと優雅な趣味のように思われがちだが、その茶道部は、哲学者、久松真一の茶を学び、修行僧さながらに禅寺で坐禅や掃除をし、裏千家の今日庵で業躰から稽古を受ける本格派だった…。

そんな中、3回生で出会いが訪れた。非常勤講師の光田和伸先生の演習で、宗伊、宗祇『湯山両吟百韻』が取り上げられたのである。若い時の感性は特別なもので、「佐保路をゆけば川風ぞ吹く」、そんな何の変哲もない句にも想像力をかき立てられた。連歌と茶の湯に共通点があることにも気づき、親近感が湧いた。例えば、百韻連歌では同じ言葉や素材の重複を嫌い、変化を尊ぶのであるが、水指や茶碗といった茶の湯の道具の取り合わせにも同様の神経を遣う。連歌は、和歌の半分の文字数まで表現を切り詰めながら、前句と付句の間に意味的連関を持たせ、言外に余情をこめる。茶の湯もまた、広間の座敷から四畳半へと空間

の余剰を削ぎ落としながら、それにより却って深い精神性を獲得している。

何より、連歌には私の好きな『新古今和歌集』や『源氏物語』が盛んに本歌取りされ、新しい命を吹き込まれて作品の中で生きて動いている感があった。連歌師自身が古典の熱烈な愛好家であり、古典籍の継承や研究に多大な貢献をしている。室町時代の連歌流行を牽引したのは、出自も定かでない地下連歌師で、公家や武家がそこに惹きつけられていく構図も興味深かった。『新古今集』や王朝物語は魅力的だが研究し尽くされている。それならば、連歌という未開拓な分野で思う存分に研究がしてみたいと考えるようになった。

恩師の思い出

連歌を中心とする中世文学研究の大家、島津忠夫先生には、博士後期課程で初めてお会いし、随分目をかけていただいた。ある時、学内の学会で発表する機会が巡ってきたが、『京都大学貴重連歌資料集』の諸本調査や解題執筆に追われていた私は、収録書目との関連で、ある資料の諸系統の成立順が通説とは逆であるという発表材料しか持ち合わせていなかった。先生は前々から私の発表を楽しみにして下さっていたが、それはよりによって島津説に正面から異を唱えるものであった。発表当日、先生のにこやかなお顔を拝見して、青ざめながら、これからする無礼な発表の事情を話すと、先生は「そんなこと！」と破顔一笑された。研究には間違いは付きもので、そんなことはいくらかでもあることなのだと。

その頃、先生は武庫川女子大学を退官されていたが、ご自宅で門下生と『連歌貴重文献集成』の影印を読む会を続けておられた。「放談会や」と笑って仰るその会に、私も参加させてもらうようになった。炬燵を囲んで資料を読むうちに、もしや新発見？と思う事柄に出くわすと、その度に先生のお顔がぱっと高揚し、私達も先生の本棚に調べに走った（大抵はそう上手くはいかなかったが）。先生は退職後も学者、理事、歌人、はたまた連歌宗匠として多忙を極めていたが、会後にはいつも、私達のために用意して下さった手料理とお酒を振る舞われた（著作集第14巻には「男ひとりの食日誌」の1章も）。今こんなことを考えてい

ますと自分の研究の話を切り出すと、身を乗り出して聞いて下さる。研究は楽しいものなのだと、先生は身をもって示して下さい。お陰で、あの頃の学び舎を離れて20年が経つ今も、相も変わらず楽しく心躍る気持ちを失わずに研究が続けられている。

北野天満宮とのご縁

2021年、北野天満宮で新たに連歌の資料が出てきたから見に来てほしいとの連絡を受けた。天神は学問の神様として信仰されるが、中世には連歌の神、和歌の神であった。連歌研究者からすれば北野は聖地である。新出資料の中で、丁寧に箱に収められた、天皇や公家の各自筆と思しい大量の短冊が目をつけた。江戸時代には、天皇が古今伝授（『古今和歌集』の秘説の伝授）を受けると、君臣が揃って百首、五十首の和歌を詠進し、諸社に奉納した。後西天皇から仁孝天皇に至る7代の天皇が、180年に亘ってそれを行っている。これまで、和歌の神が祀られる住吉大社、玉津島神社などに一連の奉納和歌が存することは報告されていたが、北野天満宮の奥深く、内陣からそれが出てきたのである。この時の調査では、住吉・玉津島両社に奉納された短冊や宝物も実見させていただき、歴代天皇、とりわけ霊元天皇の、和歌にかけけるすさまじいほどの信念を目の当たりにした（『北野天満宮聖廟法楽和歌集』2023年）。

北野天満宮は2027年に半万燈祭（菅原道真没後25年ごとの祭典）を迎え、記念事業の一環として、現在は連歌資料の調査を行っている。足利義満や義教が北野社に奉納した万句連歌のうち、戦禍を免れた唯一の遺品である百韻や、江戸時代の天神忌に、宮仕らが奉納した万句の連歌懐紙500帖余りが残る。室町幕府以来、武家の最高権力者と連歌の結びつきは強く、江戸幕府にも柳営連歌が引き継がれたが、その後は衰退し、福岡県行橋市の今井津須佐神社や大阪市平野区の杭全神社に、かろうじて奉納連歌の実態が残った。今、北野天満宮の神職の方々も、半万燈祭の奉納を目標に連歌実作の稽古に励まれている。

宗祇の古典研究と連歌

江戸時代の天皇家の古今伝授の道統は、応仁の乱の最中、宗祇が、東国の武家歌人の東常縁から伝授を受け、それを都に持ち帰って、公家の三条西実隆や近衛尚通らに伝えたことに端を発する。宗祇は『古今和歌集』と同時に『伊勢物語』『百人一首』の伝授も受け、宗祇が遺したものは、ほぼそのままの形で後世の堂上歌学に継承されていった。

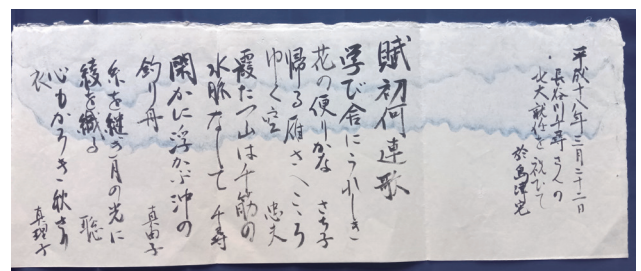
この古今伝授を痛烈に批判したのが、江戸時代の国学者、本居宣長である。東常縁のような取るに足らない人物が邪説を捏造し、学識のある実隆までもが欺かれてしまったと。連歌研究者ですら、一介の連歌師ゆえに中央歌壇から相手にされなかった宗祇が、東国でこっそり伝授を受け、その

権威を都で振りかざしたかのように言う。実際には、宗祇は早くから、碩学一条兼良や、冷泉家の高弟、木戸孝範らに学びながら、次第に、冷泉流と対立する二条流歌学に惹かれてゆき、その正統な継承者である常縁を戦地まで追って、師弟関係を結んだ。資料からは、そのような宗祇の真摯な姿が浮き彫りになる。

宗祇は、他にも『源氏物語』『万葉集』『自讃歌』など、主要な古典の注釈書を手がけた。それらは古典を読むためのツールではあるが、それ自体を「読み物」として読んでみても面白い。対象の古典作品は違っても「幽玄」を追求する二条流歌学の方法で貫かれており、術学的に知識を弄することを避け、文学を文学として味わうことに自覚的である。その鑑賞力の豊かさに、時折はっとさせられる。『伊勢物語』の注釈史を、古注（鎌倉）、旧注（室町）、新注（江戸）と進歩史的に捉える見方があるが、本当にそうだろうかと思う。宣長の著作の評価は高いが、和歌の解釈はそれほど良いとは思わない。確かに、連歌師の注釈書には、無知蒙昧と言うべき俗説も混在しているが、実作者として日々古典と対峙し、古典を透過して自らの表現を彫琢してきた彼らの読みにはそれなりの重みがある。

注釈と言えば、連歌にも古注釈がある。どのような本歌を踏まえているのか、前句と付句はどのように付いているのか、作者自身や門弟が解説を加えたものである。連歌が衰退した今日、私達は付合の機微を察することに不慣れである。例えば『新撰菟玖波集』の「霞分けつつのぼる日の影／山高み花に梢のあらはれて」という句。前句の朝日が「昇る」は、付句が付くと、人が山を「登る」意味に変化すると古注が指摘する。しかし現代の注釈書は、付合を朝日が「昇る」のままで解釈しており、それがごく自然な訳に見えてしまう。和歌を読むのとは異なる、連歌独特の解釈の方法を、もっと古注釈に学ばなければならない。

現代の連歌も、最盛期の連歌のような緊密な付け方をしない。文と文が並んでいる風情がある。北野天満宮の万句を見ていると、その変化は近世後期には兆しているようだ。昔の連歌の魅力は、前句の言葉一つ一つに繊細に応じた上で、大胆に句境を展開させるところにあると考えているが、牛の歩みゆえか、作品を前にしての試行錯誤は今も続いている。



文書館を「逆なでに」する研究

福元 健之 | Kenshi FUKUMOTO

福元 健之（ふくもと けんし）

人間・環境学研究科共生世界講座准教授

京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。専門は歴史学・西洋史学。

ポーランド史を選ぶまで

研究テーマとして最初に関心をもったのは社会主義で、新自由主義的改革がメディアで取り上げられていた2000年代初頭に労働問題に興味をもちました。それで北海道大学文学部に合格したときはロシア革命史を勉強しようと二外でロシア語を選びました。ただ、研究者になりたいければロシア史だけ分かればいいわけではないと先輩たちから助言され、東欧史も調べ始めたわけです。すると次第に東欧はロシア語だけではなくドイツ語も重要なので、それも勉強するうちにどちらも使える地域の勉強がしたいと変な欲がでてきたのでした。いまの日本の東欧史研究では、チェコ史やスロヴァキア史が活況を呈しており、この傾向は私が学部生のときからみられましたが、ハプスブルク帝国を選ぶと逆にロシア語の出番が減るので、結局はプロイセンに近く、かつロシア皇帝が支配したポーランド王国に不時着陸しました。

「ポーランドのマンチェスター」へ

以来、私の研究対象はずっとウッチという都市で、19世紀に繊維産業で栄えた当時は「ポーランドのマンチェスター」と呼ばれていました。20世紀後半までに繊維産業は衰退して、工場の建物はホテルやレジャー施設、マンションに改修されたものもあれば、廃墟となってすっかり野生化したものもあります。私は、ポーランド政府奨学金制度を利用して、ウッチ大学哲学歴史学部のマルタ・シコルスカ先生にお世話になりました。もうお引越されたのですが、当時の先生のお住まいは、カール・シャイプラーというドイツ系大企業家が建てた工場を利用したマンションの一室で、演習もそこで受けました。シャイプラー社にはアメリカ合衆国南部やエジプト、中央アジアから綿花が運ばれ、製品としてコーカサスやシベリアに売られましたから、まぎれもなく19世紀のグローバル・コットン・エコノミーの中にありました。商業や工業ではドイツ語が話され、行政や司法はロシア語で運営され、新聞や雑誌の多くはポーランド語で書かれる。往時のウッチはたしかに、学部学生時代に私が求めた世界でした。



シコルスカ先生と筆者（2017年・ウッチ市）

文書館の秩序

歴史研究で最も重要なのは文書館と史料です。ただ、文書館は国立や公立のものに限られません。私の経験では、カール・ツァイス社や、ジューメンス・ヘルシニアーズ社など、ドイツの企業はとてもよい資料館をもっており、専門のスタッフの方が見たい史料についてアドバイスをしてくれます。史料の中には第二次世界大戦期のものもあり、当然、ドイツだとナチズムと関わってくるものがあって、閲覧の際にはこちらも緊張しますが、いままで何がしかの介入を受けたことはありません。

ただ、検索の仕方がまずければGoogleやChatGPTも頼りにならないように、文書館に行けばよい仕事ができるわけではありません。例えば、修士課程時代の私が一番初めに訪れた現代史文書館（ワルシャワ）で味わったように、自分の調べたい政党があったとして、その名称で目録を探すのはやや無謀です。しばしば目録にあるのは、複数の政党を包摂する史料群であり、ある特定の史料群を取り寄せたら、後は自分でその中から関係する文書を探さないといけません。必ずしも文書の一枚一枚が調査しやすいように時系列順に並んでいるとも限りません。論文や本は、研究者によって秩序づけられた史料の世界を私たちにみせてくれます。しかし、現実の文書館に秩序など存在しません。

より正確に言えば、研究の論理に沿う秩序が都合よくあるわけではないのです。では、いかなる秩序が？

ウッチ市に関して最も重要な文書館は、ウッチ国立文書館です。最初に訪れたのは、留学時代、語学的にそれなりに余裕もできてきた頃で、そのときはウッチ市の救急隊に関する史料を読みたいと思ったのです。この救急隊は1899年に成立しており、つまりロシア帝政期でした。史料の残り方として、ポーランド分割前（1795年以前）、分割時代（1795–1918年）、独立以後（1918年以後）、と大きく3つに分かれているのは既に知っていたのですが、いくら探しても分割時代の史料群で関係するものは見つけれませんでした。しかし、よく考えるとそれも当然で、やがて私は独立後の史料群の中から関連資料を見つけました。それは、成立時点では民間組織として結成された救急隊が、やがて独立後にウッチ市自治体の機関として再編されたために、文書は独立後のものと同じ場所で保管されたからでした。基本が通じないときには、その文書がたどったはずの経緯を応用的に考慮しなければなりません。

私は、こうしたいくつもの失敗経験を通して、文書それ自体が、私たちが知りたいと思う歴史的過去の論理に従って保管されることを学びました。しかし、文書館の秩序はそれだけではまだ完成しません。同時代人にとって保管の価値がなかったために破棄された文書、保管されていても文脈を追えない文書、複数の文書館を跨がねば意味をなさない文書、自然劣化のせいで解読不能な文書、さらにはポーランドの場合、戦争によって失われた文書もあるわけですから、もはや「秩序なき秩序」とでも呼べるものが文書館に君臨しているといえるのかもしれませんが。でも仮にそうであっても、その秩序に対して誠実に向き合い、文書を見つけ、読み、解釈することが、歴史学徒の使命です。

都市の生態史へ？

しかし、このように書きながらいま私が考えているのは、ある意味で逆のことになります。最近研究しているのは、戦間期ポーランドでの結核治療で、サナトリウムでの保養、光線療法、X線療法といった様々な実践について調べています。ウッチ市では、1930年代に結核の死亡率と心疾患の死亡率が逆転しており、感染症社会から生活習慣病社会へのシフトの発端をここに読み取れます。とすれば、直前の1920年代がその土台をつくった準備期間と想定できるわけですが、その間にこの街で起こったのは、都市周辺で治療を完結させることで、郊外での治療施設の建設が進んだのでした。

いまはこれら一連のことを環境史の枠組みから捉えるために、オーストラリアの研究者たちの論稿を参考にしながら模索しています。環境人文学が発展している近年のオーストラリアでは、動植物や、そもそも生物ではない、元素、力といったもの含む多角的視点をもつ新しい環境史について議論され始めています。医療は、病んでいる人間を治療する行為や技術であると同時に、菌やウイルス、薬の材料



郊外のサナトリウム（1930年代）
 （典拠）Jan Fijałek i Jerzy Indulski, *Opieka zdrowotna w Łodzi do roku 1945. Studium organizacyjno-historyczne* (Łódź, 1990), 310.

になる植物や微生物、衛生条件としての太陽や大気、水が不可避免的に関わってきます。ところが、先に述べたような文書館の「秩序なき秩序」は、基本的に人間の秩序です。で、非人間のことを考えるようには設計されていません。ここに、新しい環境史の難しさがあるといえます。

では、どうしたらいいのか。さしあたりいま考えていることについて、1920年代にウッチ市の北に位置するワギェブニキという森林地に建てられた市営サナトリウムの写真から述べてみます。

この写真をご覧になったら、おそらく先のシコルスカ先生と私が移っている写真のときと同じように、中心にあるヒトに視線が集中するのではないのでしょうか。2つの写真には違いもあって、私たちのものは2人の表情が分かるくらいに接近していますが、別の写真は、被写体（医療従事者や患者）から離れる代わりにサナトリウムの建物もよくみえる構図になっており、一つの空間を切り取るようになっています。とはいえ、共通するのは、人間的な論理にしたがって、中心と周辺があるということです。そして、新しい環境史の課題とは、文書館の中でも、とくに二枚目の写真で周辺化されている存在について考える方法をいかに構築するのかにあると考えています。

サナトリウムとは、都市から離れた場所に建てることで、「自然」に近い環境下で建てられるのがウリであったのですが、上の写真をもう一度みていただくと、地面には草があり、背景には木々がありますから、「邪魔な」木を伐採してこれが建てられたことは明白です。つまり、「ありのままの自然」が残されたのではなく、治療にとって都合の良い空間につくり変えられたのです。そのことは、この森に生存する他の非人間にどのように影響を与えたのでしょうか。果たして人間の well-being は、他種にとっても同じであったのでしょうか。このサナトリウムの建設をめぐるのはウッチ国立文書館に史料が残されていますので、それを起点に都市生態史のようなことを考えることが、当面の目標です。

中村徳仁＝著

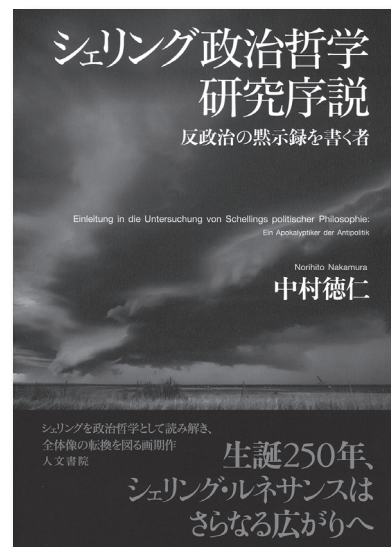
評者・吉村雄太
(国立国会図書館)

『シェリング政治哲学研究序説 —反政治の黙示録を書く者—』

人文書院

定価 4,500円 (税別)

2025年3月刊 350頁



シェリング生誕 250 年の節目の年に刊行された本書は、シェリングを政治哲学者として読み直すことを目的とした著作である。シェリングは一般的な意味でいう「政治」に関する体系的な著作は残しておらず、従来政治哲学者とは思われてこなかった。しかしシェリングは「反政治」という形で政治を語っていたのではないかと、本書は問題提起を行っている。では「反政治」とは一体どのようなものなのだろうか。本書ではその基本的特徴を以下のように三つのテーゼに集約している。

まずシェリングの「反政治」の核は「自由」にある。人間は時に思考の「自由」を放棄して「独断主義」つまり「信」に陥ってしまったり、理性のみを頼りにしてあらゆるものを懐疑にさらす「批判主義」つまり「知」に陥ってしまったりする。しかしシェリングはそうした「信」と「知」の「はざま」にこそ思考の「自由」があると考えていた。その「はざま」つまり「自由」が失われることに抗うことが、「反政治」の一つ目の特徴である。

またそうした「自由」は「国家」の中においてこそ活性化される。「国家」は人々の「自由」を抑圧するものでもあるが、その「国家」に反発するという形で「自由」が活性化され、「個人」は「人格」へと高められる。「国家」を必要悪として認めつつ、「自由」のたえざる行使によって国家秩序の神権政治化を牽制することが、「反政治」の二つ目の特徴である。

最後に、そうした「国家」を乗り越えるために「個性」を持った人間が「完成」を目指して試行錯誤しながら未来へいたる「道」を模索することが、三つ目の特徴として挙げられる。その際に想定されているのはキリスト教における「ケノーシス」という概念である。「ケノーシス」とは、キリストが神でありながら自らを無にして放棄し、人間と同じ身分になったこと指す。神は自らの全能力でこの世を支配するのではなく、「自己犠牲」し「あえて」キリストという人間として生まれた。この「あえて」という点が重要で、「しないこともできたのにそれを為した」という点で、「ケノーシス」こそが世界に「自由」をもたらしたのだとシェリングは考えている。そしてこれは「国家」と「自由」の関係にも対応する。「国家」の専制によって世界を支配するのではなく、あえてそれを放棄し、「個性」を持った人

間として「自由」を行使する「道」を模索する。その「道」とは具体的には「芸術作品」、「大学」、「教会」、「秘儀」であったりする。それらを通して人間は「人格」の「完成」に向かっていくことができる。そして「国家」の先のユートピアを目指して永遠に試行錯誤することこそが「反政治」なのだ。

以上が本書で述べられている三つのテーゼの要旨である。本書の言葉を借りてさらに一言で要約すると、シェリングの「反政治」とは「政治に支配されないための政治」であるということになる。

シェリングの「反政治」の問題意識は意外なほど現在の社会に呼応しているように感じられる。2025 年の現在、一方では大国の政治的指導者達が強権を発動し、驚くほど素朴に「国家」が人々の「自由」を抑圧している。他方では、「科学技術」によって政治プラットフォームを整備することで、人々の自由意思を誘導し、よりよい政治的決定に導こうとするいわゆるアーキテクチャーの思想が強くなっている。アーキテクチャーの思想は直接人々の「自由」を抑圧するわけではないが、「正しい」政治的決定を技術者たちが判定でき、かつ個人の「自由」をそのような「正しさ」に誘導可能だと考えている点で、実は「国家」による「自由」の専制と非常に近いところにある思想だといえる。一言でいえば、現代は「国家」や「科学技術」による「自由」の統制の欲望が高まっている時代だといえるのではないだろうか。

本書で描かれたシェリングの「反政治」は「国家」の価値を認めつつ、それはあくまで必要悪として、個人の「自由」を絶対に手放さない点に特徴がある。ともすれば「自由」の統制の欲望に傾いてしまいがちな時代に、250 年前に生まれたはずのシェリングの「反政治」の問題意識は驚くほど呼応している。シェリングを政治哲学者として読み直す本書の試みは、シェリング哲学の新たな側面を見せてくれるだけでなく、実は現代社会にとっても非常にアクチュアルな価値を持っているのではないだろうか。

* 中村徳仁さんは 2023 年 3 月京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了、同年同月博士号取得。現在三重大学助教。

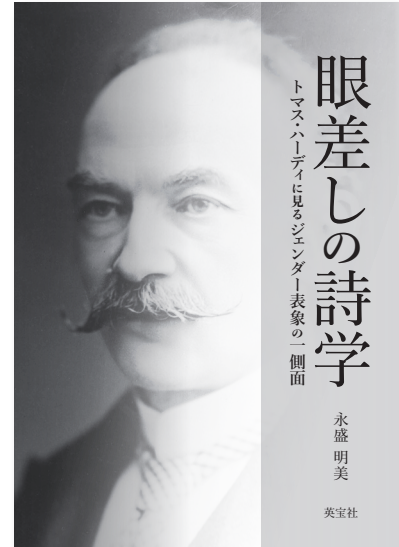
永盛明美＝著

評者・玉井史絵
(同志社大学・教授)『眼差しの詩学——トマス・ハーディ
に見るジェンダー表彰の一側面』

英宝社

定価 3,000円 (税別)

2025年2月刊 215頁



「男性作家は何を見るのか——あるいは何が見え、何が
見えていないのか」という一文で始まる本書は、19世紀
の終わりから20世紀初めにかけて活躍した作家、トマス・
ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) の女性に対する眼
差しについて論じた、野心的な研究書である。ハーディが
活躍した時代は、イギリスにおいて女性が徐々に自由と権
利を獲得し、社会進出を果たした時期と重なる。ヴィクト
リア朝において長らく「家庭の天使」となるべく厳格な性
規範の牢獄に閉じ込められていた女性たちが、社会に抗い
苦悩しつつ、自由と自立を求めて力強く生きていく姿を、
ハーディは数多くの作品のなかで描いていった。それは社
会の事象や思想の反映であるとともに、作家による社会へ
の挑戦でもあり、変革を促す言説の一部ともなっていた。
『ダーバヴィル家のテス』(1891)や『日陰者ジュード』(1895)
が性規範を揺るがすとして、発表当時厳しい批判に晒され
たという事実は、作品が社会に与えた影響力の大きさを示
している。本書はそうしたハーディのジェンダーとセク
シュアリティの表象を精緻に分析することによって、「作
品横断的なハーディの女性観、倫理観、世間への眼差しの
見取り図を提案」(16)しようとする試みである。そして、
それは見事に達成されていると言える。

本書の魅力はいくつかある。第一に、緻密で丁寧な議論
が積み重ねられている点である。序章において時代背景、
フェミニズムの展開とフェミニズム批評の概説、ハーディ
研究の概説が簡潔かつ的確にまとめられ、本書の目的が明
確に述べられる。先行研究の要約は、簡単に見えてじつは
筆者の力量が試される部分であるが、この序章は筆者の該
博な知識と確かな論理力を示す導入となっていて、フェミ
ニズム批評やハーディ研究の初心者にとっても必読の章で
ある。緻密で丁寧な議論は作品論において、その力を遺憾
なく発揮し、ハーディの作品に新たな光を当てることに成

功している。たとえば、『日陰者ジュード』を論じた第2
章は、スーとアラベラを「霊」と「肉」の二項対立の枠組
みでとらえてきた従来の批評に対して、疑問を投げかける。
スーは知的で自由を求める「新しい女」と言い切ることは
できないし、アラベラは単なる肉欲の女ではない。二人の
登場人物の複雑な諸相を検討し、規範や束縛と自由の間で
揺れ動く女性の姿を明らかにした永盛氏の議論には説得力
があり、非常に興味深い。

本書のもう一つの魅力として、これまでは小説とは別個
に議論されることが多かったハーディの詩を、小説と一体
の表現として再評価し、ハーディのジェンダー観や創作観
の重層的な分析を試みた点が挙げられる。本書後半の4つ
の章では、悲しむ女性、清く正しき女性、狂った女性、墮
落した女性など、様々な女性像が取り上げられ、ハーディ
における女性の表象の多様性・多面性が浮き彫りになる。
バラッドやバラッド風物語詩という表現形式を用いること
で、ハーディは当時の女性の葛藤や苦悩を切実に読者に訴
えかけることができたのである。こうしたハーディの豊か
な表現力と女性を見つめる眼差しの鋭さを、永盛氏の論考
は改めて認識させてくれる。ハーディは自らの生きた時代
と重なる第一波フェミニズム (19世紀末から1920年代)
の女性たちの心情を捉えていたばかりではなく、40年後
の第二波フェミニズム (1960年代から1970年代) の視点を
先取りしていたと、永盛氏は結論づけている。ハーディ研
究の新たな地平を開拓した本書は、ハーディ研究者のみな
らず、広く19世紀の文化・文学や女性史に関心のある人々
にも薦めたい一冊である。

* 永盛明美さんは、2019年11月に人間・環境学研究科博
士後期課程修了、同年同月博士号取得。現在、京都大学
非常勤講師。

藤原征生＝著

評者・長門洋平

(東京都立大学人文社会学部准教授)

『芥川也寸志とその時代』

国書刊行会

定価 3,300円 (税別)

2025年3月刊 224頁



芸術的な作品創作をめぐる言説では往々にして、「流用」という言葉にはネガティブなイメージがつきまとう。手抜き、使い回し、オリジナリティの欠如、云々。話を音楽に限ってみても、なるほど例えばクラシックでもポップスでも、新作はあくまで純然たる「新作」であるべきだ、という考え方は今なお広く人口に膾炙している。

だがよく考えてみると、ジャズにはそもそも「流用」の概念はほとんどないし、サンプリングやリミックスを「創造」行為とみなすクラブミュージックにも、「使い回し」に対する否定的な感覚は存在しない。そもそも、たとえば大バッハを引き合いに出すまでもなく、西洋の芸術音楽もまた流用だらけだったのではなかったか。すなわち、「新しさ」信仰やオリジナリティの偏重は、悪しき近代主義の残滓にすぎないのである。

藤原征生が、その博士論文を下敷きにまとめあげた著作『芥川也寸志とその時代』は、作曲家・芥川の創作行為における自作の流用を力強く肯定する。芥川が映画のために書いた音楽をあくまで中心に据えながら、ステージ用の音楽はもちろんのこと、テレビなどの映像メディアのための音楽等も狙上にのせつつ、音楽における「流用の美学」を本書は詳細かつ具体的に検討していく。

本論のプレリュードたる第一章でまず、芥川作品の概要・先行研究・本論の構成が確認されたあとに、第二章では、芥川が團伊玖磨、黛敏郎とともに結成した作曲家グループ「3人の会」の活動が概観される。ステージ音楽のために結成された同グループがその実、映画のための仕事でこそその真価を発揮していたと云う事実、そして日本映画界のスタジオ・システム下で彼らが「超スタジオ・システム」(≒スタジオ横断)的に活動していたことの映画史的意義が、まずはここで論じられる。

つづく第三章と第四章では、芥川の映画音楽における「モチーフの流用」、「テーマ音楽の強調」についての詳細な検討が行なわれており、楽譜を用いてのその楽理的分析のなかで、著者の手腕がはいよいよ遺憾なく発揮される。ここで「モチーフ」概念と「テーマ音楽」概念の関係性につ

いて、より端的には映画における「テーマ音楽」という言葉がどう定義されるのかについての説明が欲しかった気がするが、いずれにせよ、全盛期の芥川の映画音楽におけるモチーフの流用がいかに積極的な意味を担っていたか、という点に関する著者の分析自体には一切の曇りが無い。

第五章は、芥川作品におけるチェンバロの用法に注目する。本論における前後の章との有機的関連という意味においてはやや弱いようにも見える同章だが、これはこれで非常に興味深い内容となっているのは、評者が特にチェンバロという楽器に興味があるからという理由には限定されないはずだ。そして、譜面上の音符をめぐる議論とはまた異なる、使用楽器とその音響という観点からも芥川作品に切り込んだ本論は、いよいよ最終章にて、「映画史と音楽史の交差点としての」『地獄門』(衣笠貞之助、1953年)分析へとなだれ込む。ここまで検討されてきたさまざまな論点が、芥川の代表作と呼ぶべき『地獄門』にて一挙に炸裂するさまを見せる同章は、構成の点からも本書のクライマックスと呼ぶにふさわしい。

特にモチーフの積極的流用という点において特徴的な芥川也寸志の音楽は、本書によってはじめてその真価が計られることになった。思えば、評者はこれまで「日本映画の音楽」を主要研究対象としてきたが、藤原のスタンスは、本書のなかで明言されているように「日本の映画音楽」研究である。この違いはことのほか大きいはずだが、にもかかわらず、あるいはそれゆえにこそ、評者は多くのことを本書に教えられた。それはもちろん、映画音楽というものに興味のあるすべての愛好家・研究者・批評家にとっても同様であるに違いない。

* 藤原征生さんは、2021年3月人間・環境学研究科博士後期課程を修了して博士号取得。現在、独立行政法人国立美術館国立映画アーカイブ特定研究員。

高城建人＝著

評者・小針進

(静岡県立大学国際関係学部教授)

『韓国黎明期の民主政治への試み —大統領制と議院内閣制の攻防—』

明石書店

定価 5,940円

2025年3月刊 259頁



大韓民国初代大統領の李承晩は「建国の父」ではあっても、現代韓国社会での評判は一般には高くない。政治学の世界でも「反民主主義的な独裁者」とネガティブな評価が圧倒的である。たとえば、閣僚も経験したある政治学者は「李承晩という最高指導者の権力意志が、民主主義を死滅させたのである」(金浩鎮『韓国歴代大統領とリーダーシップ』小針進・羅京珠訳、柘植書房新社、2007年)と評している。

「従来の否定一辺倒な李承晩認識から離れ、もう少し俯瞰的に同政権をみる必要がある」という高城の問題提起による研究成果が本書である。京大へ提出された博士論文がもとだ。

たとえば、李承晩政権の専横さを示す例として有名なものに「四捨五入改憲」がある。「大統領の三選禁止撤廃」を骨子とする憲法改正案を、1954年11月の国会で表決した結果、賛成票は可決に必要な全議席(203)の3分の2である136に1票及ばない135で、同案がいったんは否決された。しかし、2日後、国会副議長が「在籍3分の2は、正確には135.33……であり、小数点以下は人格ではないから四捨五入の論理で、135票を可決とみなす」と宣言し、改憲してしまったのだ。これだけを見れば、滅茶苦茶な話だ。

ところが、この顛末をめぐる先行研究に関して、高城は「国会で行われた論争について詳しく具体的な検証がなされておらず、憲法改正案の内容と表決結果の紹介だけに留まっていることである」と問題視する。特に、この時の改憲案には、憲法改正の国民発案制度、主権と領土変更時の国民投票導入など、「民意」を重視する改革的な内容も含まれていた。先行研究では、これがあまり重視されていないのだ。「四捨五入改憲」だけでなく、李承晩と国会の数々の対立を、「独裁」と「民主主義」の対立という二分法の構図に落とし込みがちな先行研究への異議申し立てが実証的になされているのが、本書の特徴である。

そして、本書の随所で垣間見えるのは、李承晩がその「民

意」を大切に政治家であったとする視点だ。とりわけ、李承晩は国民が直接選ぶ大統領制を重視した。しかも、後に朴正熙や全斗煥が採用したような、形ばかりの選挙人団による間接選挙制への改正は一度も企図しなかった。一方、李承晩政権下の野党は国民を政治的に無知なものであると見做し(愚民観)、代表によって行政指導者が選ばれる議院内閣制を志向した。書名の副題が「大統領制と議院内閣制の攻防」となっているのは、この認識差を高城が重視しているからだろう。「李承晩政権期で主要事件が起こった原因を李承晩と野党(主に保守野党)との民主主義観(自らが民主主義だとみなした思想)の相克によるものだと捉える」と指摘する。

ただ、「民意」を大切にしたいといっても、評者には違和感を拭えない。李承晩政権期を「反民主主義的な独裁政権」としかみなさないのは問題だが、済州島などでの夥しい数の民間人虐殺行為は、高城も指摘しているように、まったく正当化できない(本書は李承晩への「全面的な再評価の研究ではない」とも強調する)。「民主主義」とはかけ離れた仕業である。

それでも、「今日の観点からして少しでも民主主義的ではない政権はすべて全く同じ反民主主義政権なのか…。そういった検証を行うことなく、すべてを統括して安易に反民主主義的な独裁政権だと断定することは、本書で見てきたように、多くの事実を見落とすことになる」との問題意識による本書の試みは、成功したといってよいだろう。それは、先行研究を難詰するのではなく、1次資料(国会議事録、新聞記事、要人の著書や回顧録など)を丹念に読み込むことによって、冷静に糺そうとした研究姿勢が読み取れるからだ。

＊高城建人さんは、2023年3月京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。同年同月博士号取得。現在、東北大学東北アジア研究センター准教授。

澤西祐典＝著

評者・庄司達也

(横浜市立大学教授)

『芥川龍之介における海外文学受容 旧蔵書越しに見える風景』

ひつじ書房

定価 7,200円 (税別)

2025年3月刊 492頁



本書は、冒頭の「第1章」に記された通り、芥川龍之介旧蔵書のうち洋書について、日本近代文学館の「芥川龍之介文庫」に確認される639点819冊、山梨県立文学館の20冊、神奈川近代文学館の5点を対象として実見し、精査、検討された論考の集積である。また、京都大学に提出された学位請求論文「芥川龍之介における海外文学受容について―旧蔵書を通して見える風景―」(博士(人間・環境学)、甲第19066号、2015年3月23日授与)を基盤として進化、発展させた一書でもある。著者の澤西祐典氏は、学位論文の提出後も調査と検討を地道に続けてきた。日本近代文学館での悉皆調査も3巡目を終えて4巡目に入ったと聞いている。氏の絶ゆまぬ努力が結実した本書は、学位請求論文の閲覧や本書所収の論文の掲載誌を手にとって学恩を得てきた評者にとっても、当に待望の一書である。

本書は、芥川龍之介研究を行う環境がどれほどに恵まれているかを如実に語る書となっている一方で、芥川研究が如何に為すべきことを為さずに進んで来たか、ということを明らかにした書ともなっている。少なくとも芥川龍之介の旧蔵書や遺品が現存し、それらの多くが公的な機関に所蔵されていることは、直接の関係者ではなくともよく知られている事実である。芥川研究の背後には、龍之介没後に多くの遺品を所蔵、管理してきた芥川家が数次にわたって寄贈を行ってきた日本近代文学館の「芥川龍之介文庫」の資料群があり、東京・神保町の古書店主であった故岩森亀一氏の芥川龍之介コレクションを核とする山梨県立文学館の資料群などがある。もちろん、これらの資料群への調査は行われ、その結果は活用され、多くの論考を生む源ともなってきたのだが、その大勢は、本書の著者の言葉を借りるならば「邦訳の文献の有無によって左右されていた」ということに尽きる。このことは、英語を苦手とする評者自身にも突き刺さる言葉であり自覚もしてきたが、それ故に、評者としても本書の著者澤西祐典氏の仕事に期待する処が以前より大きくあったことをここで告白しておきたい。

氏は、残された龍之介旧蔵の洋書に注目し、これら膨大な書籍群の1冊1冊から得られるさまざまな情報を多角的、

多面的、多層的に読み解く試みに成功した。読了日、書き入れ、傍線、アンカット本でのカットの有無、蔵書印、筆記具など、旧蔵書を手にすることで得られる全ての情報を余すところなく自らのものとした氏の営為は、本書で見事な達成を見せた。例えば、題目のみが知られているウィリアム・モリスに関する卒業論文についての考察では、龍之介の卒業論文の構想と限界を明らかにしただけではなく、龍之介が所有した文学の嗜好、後に展開される芥川文学への「モリス研究」がもたらした多大なる影響についても言及する。また大阪公立大学が所蔵する新村出関連資料をも渉猟し、龍之介の没後に企画された卒業論文「草稿」の活字化が断念されたことへの推測も行っている。氏の探究は、書籍中に挟まれていた「押し花」へも及ぶ。アナトール・フランス『赤い百合』中に発見されたオオマツヨイグサとウイキョウの2種の押し花の存在に若き龍之介の恋の相手とされる吉田弥生宛の書簡(草稿)を重ねて恋心の往還を読み解き、さらにはそこに綴られた文言から第一次世界大戦が開戦された時代への憂いをも読むという見事な展開を見せる。

巻末には、「附録」として龍之介の書き入れに基づいた「読書年譜」と調査結果の「一覧表」が掲載されている。本書で取り上げられ蒔かれた研究のタネは、ここから多く芽吹いてゆくだろう。それらは作家論のみに回収されるものではなく、芥川文学全体の読み直しにつながる可能性を秘めている。もちろん、このことは澤西氏自身によっても継続されていくはずであるが、芥川龍之介研究に関わる者たちに繋がれたバトン(課題)として共に研究の今後をひらいてゆくことを期待したい。まさしく、芥川研究が新たな段階を迎えたことを告げる、そして後世に於いて必ずや研究史上での画期となったと評される一書の刊行である。

* 澤西祐典さんは、2015年3月京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了、同年同月博士号取得。現在、龍谷大学国際学部准教授。

佐々木幸喜＝著

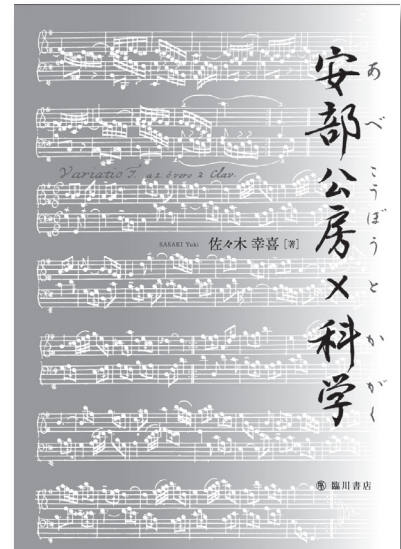
評者・鳥羽耕史
(早稲田大学教授)

『安部公房×科学』

臨川書店

定価 5,800円 (税別)

2025年3月刊 252頁



本書は著者が2016年3月に京都大学で博士（人間・環境学）の学位を授与された論文『安部公房における科学と文学』をもとにしており、おそらく提出からは10年越し、満を持しての書籍化ということになる。学位論文以後に発表した「デンドロカカリヤ」、「大きな砂ふるい」、「砂の女」についての論考が加えられ、全5章から全8章に増補されている。学位論文には「終章 実践者としての安部公房」があり、「本論文での考察を通して、同時代の人々から発せられる言説に敏感に反応し、なおかつ、それらを積極的に作品に編み込んでいった実践者としての安部公房の姿が我々の前に立ち現れつつある」と結ばれていた。本書には終章がないが、「まえがき」の最後に、「安部はどのような時代に生き、どのような文献に接し、そこから何を得たのか。材源との差異から安部文学のおもしろさを見つけていきたい」と記されている。この10年の間に、著者の関心が安部の実践から、さらに精緻な安部文学と材源の差異の探究へとシフトしていったことがわかる。

「まえがき」の言葉通り、本書はこれまで明らかでなかった安部文学の材源を詳細に検討したものになっている。第1章では「シュールリアリズム批判」が精神科医の三浦岱栄と杉田直樹によるプシコノイローゼやヒステリーの解説に基づき、それが「デンドロカカリヤ」にも影響していることを示す。第2章ではアポリネール「オノレ・シュブラクの減形」、レヴィ＝ブリュル『未開社会の思惟』、パンネコック『社会主義と進化論』が「保護色」に用いられていることを示す。執筆年も詳細も不明のまま『安部公房全集』第2巻に収められた「大きな砂ふるい」を扱った第3章は、これがストリンドベリの童話のドイツ語からの翻訳であることを明らかにする。第4章では、「プルートーのわな」が花田清輝の翻訳したカフカ「人魚の沈黙」を下敷きにしたことを示す。第5章ではヴァイゼンボルン「ゲッチンゲン・カンタータ」を原作にした加藤衛「世界に警告する」

と安部の「最後の武器」を比較検討する。第6章では、クレッチマー、フランシス・ボオ、ルイ・コルマンを援用した「使者」を補助線に、『砂の女』における容貌描写を検討する。第7章ではティンベルヘン『動物の言葉』、第8章ではエドワード・ホール『かくれた次元』、コンラート・ローレンツ『攻撃 悪の自然誌』、ハロルド・ピンター「かすかな痛み」と『箱男』の関係を考察する。

本書のジャケットと扉のタイトルには「あべこうほうとかがく」のルビが振られ、友田義行『戦後前衛映画と文学』（人文書院、2012年）の副題にある「安部公房×勅使河原宏」よりも強く、「と」で結ばれる関係であることを明示している。しかし、内容を概観するとわかるように、本書における科学との関わりは一貫したものとは言えない。「まえがき」で『日本国語大辞典』の「科学」の項を参照しながら、人文科学も科学に入ると説明しているが、第3章～第5章あたりは、通常イメージされる「科学」とはやや遠い。『安部公房の材源』の方が本書の内容にふさわしいタイトルであるかもしれない。

著者は「まえがき」で安部の研究動向を整理し、「リテラリー・アダプテーションによる分析」と、「初期作品群に着目し、安部文学が時代状況にどのように影響を受けながら形成されていったかを論じるもの」との二つの潮流があることを指摘している。その上で、安部文学の成立に影響を与えた先行文献について、具体的に調査する研究は進んでいないため、本書を構想したと述べる。まさにこの課題に応えた本書は、今後の研究の基礎になるだろうし、著者のさらなる探究にも期待したい。

* 佐々木幸喜さんは、2013年3月人間・環境学研究科博士後期課程を研究指導認定退学、2016年3月博士号取得。現在、京都大学国際高等教育院特定准教授。

人環図書 — 教員自らが語る新著 —

『ロシアの暮らしと文化を知るための 60 章』



沼野充義、沼野恭子、坂上陽子（編著）

明石書店 2024 年

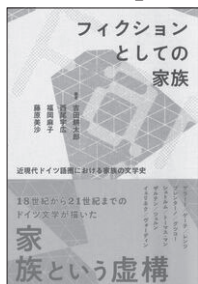
明石書店の「エリア・スタディーズ」シリーズ。ウクライナ侵攻はロシアの文化や人々の暮らし、社会に大小様々な影響を及ぼしている。2023 年に執筆が開始され、2024 年秋に刊行された本書では、40 名を超える各分野の専門家が一般の読者向けにわかりやすく、時には批判的に、戦争の影響を考慮しつつロシアの最新事情を解説している。

私が担当した項目は、ロシア語の言語的特徴とロシアのスポーツである。ロシア語に関しては、戦争に関わる造語や流行語はあるものの、言語の構造自体に戦争は影響しない。スポーツに関しては、スポーツ大国の光と影を概観しつつ、国際大会からの除外という戦争の影響に触れている。

侵攻開始直後の 2022 年 3 月、とあるロシア料理店に足を運んだ。メディアでは毎日戦争の悲惨な映像が流れ、自分の心も喪に服した状態であった。とてもではないが、文化のことなど考えることはできなかった。そんな時ふと、店内に飾られていた木版画に目が行った。そこに描かれた素朴でふくよかな農民の女性を見て、心がほっこりしたことを覚えている。戦争とは別に、文化や普通の人々の生活の営みはこれまでもあったことにまず安心し、これからもあってほしいと希望を少し持てたからである。（堀口大樹）

[四六版 388 頁] 2,200 円（税込）

『フィクションとしての家族：近現代ドイツ語圏における家族の文学史』



吉田耕太郎、西尾宇広、福岡麻子、藤原美沙 編著

松籟社 2024 年 4 月

家族を描いたドイツ語圏の文学作品を歴史的に辿る論集。啓蒙時代に家族は、親密で自然な感情経験の拠点として位置付けられ、近代的な自意識のゆりかごともなった。自由な「私」を育む愛の領域という「フィクションとしての家族」は、その後繰り返して問い直され、矛盾を暴かれてゆく。本論

集ではその具体例が時系列で紹介されている。私があつかったのは、18 世紀後期に流行した「子殺し女」のモチーフ。近代の家族フィクションが覆い隠していたもの、つまり身体的な不自由さに刻印されたケアの領域と、自由と自立を掲げる近代的な主体との解消できない齟齬が、この暗いモチーフにいち早くすくいとられていたことを明らかにした。他の章ではシュトルムやトーマス・マン、イエリネクなどが論じられている。現代の移民家族を描いた映画にも光が当てられて、「フィクションとしての家族」の変容を、ドイツ社会の歴史と相関させながら追うことができるようになっている。全体から見えてくるのは、「フィクションとしての家族」をめぐる物語が、「制度としての家族」を浮かび上がらせるといことだ。名もない個人が制度的問題の「当事者」になる瞬間。この瞬間に立ち会えることにこそ、「家族もの」の醍醐味があるだろう。（菅利恵）

[四六版 378 頁] 3,520 円

Interkulturelle Phänomenologie. Georg Stengers Werk im Gespräch



Murat Ates, Lubomir Dunaj (Hg.)

Baden Baden: Karl Alber, 2024.

間文化哲学学会やドイツ現象学会等、名立たる諸学会の会長を歴任したゲオルク・シュテンガー教授（ウィーン大学哲学科）の退官記念論集。ハインリヒ・ロンバッハに学び、師の構造存在論の現象学から出発しつつも、徐ら西洋以外の諸文化圏における世界経験の分析へと向かい、京都学派の哲学にも取り組むに至った同教授の研究領域の広範さを反映するように、各国から

の寄稿者十九名が銘々、多種多様な問題を縦横無尽に論じている。

拙論“Tetsuro Watsuji's Ethik wieder aufgreifen. Konkretes Zusammenspiel von Universalismus und Relativismus”では、和辻哲郎の倫理学体系における二つの主著、すなわち『倫理学』と『日本倫理思想史』の表裏一体の関係、及びその理由を論じた。だがこれは啻に和辻研究のみを意図したものではない。著者としては、右の両著作の関わりを考察することを通して、（倫理学の一般理論が体现する）普遍主義と（倫理思想史の特殊理論に認められる）相対主義が恰も水と油の如く相反するのではなくして、却って寧ろ一方が他方を要し、互いに産出し合うような「共創的な協働」の関係にある所以を示し、以て日本哲学の側からシュテンガー氏の間文化的現象学との対話を試みたのである。（安部浩）

[判型 14.5 × 3 × 21.6cm 437 頁] 114,00€

『かくも甘き果実』



モニク・トゥルン著、吉田恭子訳

(原著 2019 年、翻訳 2022 年、文庫 2025 年（どちらも集英社））

集英社 2025 年 9 月 19 日

The Sweetest Fruits, by Monique Truong

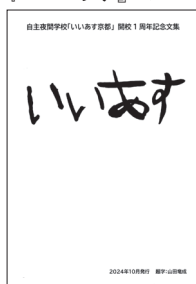
今年ドラマのモデルにもなった小泉八雲ことラフカディオ・ハーン（1850-1904）を描く伝記的フィクション。イオニア諸島からアイルランド、合衆国、そしてマルティニーク諸島を経て日本へと漂泊した作家の

思い出を、生き別れた母親・ひとりめの妻・ふたりめの妻が語ります。歴史の証言者となりえなかった女たちの語りが、オフィシャルな歴史として残らない狭間に光を当てる繊細な小説です。小泉セツとの後半生はよく知られていますが、解放奴隷だったアリシア・マティ・フォーリーとの結婚生活については近年ようやく明らかになってきたところもあります。1968 年サイゴン生まれのアメリカ人作者モニク・トゥルンは、6 歳のときに難民として入国して南部に育ち、東部の大学で英文学と法学を学び、現在はブルックリンを拠点に活動しています。幼少期に移住したいわゆる「1.5 世代ベトナム系作家」のひとり、第二言語である英語で「小説の家」を築いてきた作家でもあります。彼女のどの小説も、味覚と言語と官能をつかさどる「舌」が重要な役割を演じています。

(吉田恭子)

[文庫版 368 頁] 1,265 円（税込）

『いいあす』（自主夜間学校「いいあす京都」開校1周年記念文集）



自主夜間学校「いいあす京都」 2024年10月

京都市内で2023年1月に自主夜間学校「いいあす京都」が開校しました。年齢や学歴、国籍、障害などにかかわらず、誰でも通える夜間学校です。私は開校以来「いいあす京都」の副代表を務めています。同じような市民活動をしている自主夜間中学が全国各地で地域社会における学びの一部を支えています。「いいあす京都」は被差別部

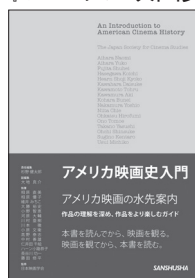
落における識字学級と在日コリアン集住地域・東九条における識字教室「オモニハッキョ」の精神を引き継ごうとしている点で、京都の歴史に根差した独自性のある学び場でもあります。

「いいあす京都」は昨年、開校1周年を記念した文集『いいあす』を発行しました。小学生から80歳代までの学習者26人とスタッフ28人が感じたことを綴っています。あるスタッフの学生は「自分が渡せているものよりも、貰っているものの方がよっぽど多いと感じる。私はここで沢山の元気を貰っている」と振り返っています。文集を読んでいると、学習者とスタッフがともに学ぶことで、それぞれの中で生きる力が沸き出て広がっているのではないかと感じます。

この文集は京都の草の根の市民活動を記録した史料としても価値があると思います。吉田南総合図書館に所蔵されていますので、ぜひ手に取っていただきたいです。（徳永悠）

[A4版 76頁] 該当せず（私版）

『アメリカ映画史入門』



杉野健太郎（責任編集）

三修社 2024年10月

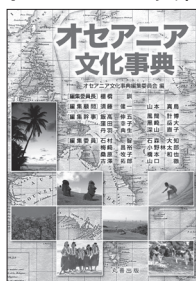
英語で書かれた映画学入門の教科書は数多くあるが、日本語で書かれた映画に関する本となると、一般向けの書籍か英語の専門書の邦訳が多く、日本の大学の授業で教科書や参考書として使えるような学術書は少ない。本書は、アメリカ映画史を学ぶ大学生向けの概説書として、日本映画学会の

監修の下、17名の日本のアメリカ映画・文化・文学の研究者によって書かれている。アメリカ映画の歴史を、映画が誕生する19世紀末から21世紀の現在まで概観する第I部と、人種やジェンダー、戦争、ジャンルといったアメリカ映画研究の主要テーマを取り上げる第II部から成っており、各時代の代表的な監督や作品の紹介が豊富に含まれている。巻末資料には、「レポート・卒論の書き方」「さらに学びたい人のための文献資料案内」「映画用語集」なども掲載されているため、アメリカ映画で卒論を書こうとしている学生や、映画研究で大学院進学を考えている学生にぜひ目を通してもらいたい書籍である。また、映画研究以外でも、たとえばアメリカ文学作品の映画化や、政治や文化などのアメリカ史を描いた映画を取り上げてレポートを書く学生にも、参考文献としてお勧めしたい。

（仁井田千絵）

[A5版 462頁] 4,180円

『オセアニア文化事典』



オセアニア文化事典編集委員会編

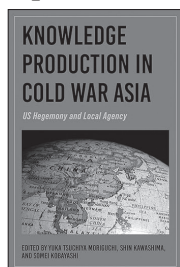
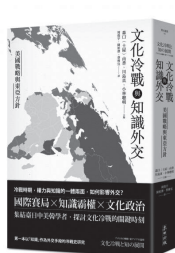
丸善出版株式会社 2024年10月

トンガ出身のポストコロニアル知識人エベリ・ハウオファは、「太平洋諸島」ではなく「オセアニア」という地域名を好んだ。前者は分散した陸地を中心に据える一方、後者は海洋（ocean）に基づいた名づけのためである。海は島々を分断するのではなく、結びつける役割を果たす。かつて遠洋航海術を発達させた祖先たちは、ポリネシア最果

でのハワイやラパ・ヌイに到達した。その後も大海原を遠洋航海カヌーが頻繁に行き交い、ヒトやモノは遠距離移動していた。大航海時代以降、島住民はヨーロッパ人と接触し、植民地期の島々は分割されて列強の領土となった。現代のオセアニアは、島大陸オーストラリア等を除けば、小島嶼国家から構成されており、一般にその内実は知られていない。ややもすれば、無理解にも海と砂浜という単調な観光イメージに矮小化されがちである。しかし、本書の総論に「多様性の世界」とあるように、実際のオセアニアは、独自性をもつ小宇宙が複層的に絡み合いながら成立している。本書では、広大かつ複雑なオセアニア世界について、多くの専門家が自然・言語・歴史から、生活文化・医療・アート・スポーツに至る豊富なトピックを解説している。読者はこの一冊さえあれば、知られざるオセアニア世界に関する興味深い知識を広範に吸収できるはずである。（風間計博）

[A5版 790頁] 26,400円（税込）

『文化冷戦與知識外交：美國戰略與東亞方針』



森口（土屋）由香、川島真、小林聡明（編）『文化冷戦與知識外交：美國戰略與東亞方針』麦田出版（台湾）、2024 年 10 月 8 日。[A5 版 584 頁] 690 円。

同『문화냉전과 지식의 전개 미국의 전략과 동아시아의 심상 (心想)・과학』솔과학（韓国）、2024 年 11 月 27 日。[181 × 232 × 42mm 558 頁] 46,000 ウォン。

Moriguchi, Yuka Tsuchiya, Shin Kawashima, and Somei Kobayashi, eds. *Knowledge Production in Cold War Asia: U.S. Hegemony and Local Agency*. Bloomington, IN: Indiana University Press, 2025. [Hardcover 152.4 × 228.6 × 31.8mm 335 頁] \$110.00. [Paperback 146.1 × 222.3 × 25.4mm 335 頁] \$50.00.

以前に本欄で紹介した『文化冷戦と知の展開』（京都大学学術出版会、2022 年）の中国語版、韓国語版、英語版が刊行された。中国語版と英語版は当初から計画されており、京都大学から助成もいただいた。日本・韓国・中国・台湾・米国の研究者から成る執筆陣のうち、母国語以外で執筆できる人にはその旨依頼し、翻訳が必要な原稿については翻訳者を雇用した。

最初に着手したのは英語版で、英訳原稿を筆者とネイティブ・スピーカーとで校閲した後、インディアナ大学出版会に送ったが、そこで米国の厳しい査読の洗礼を受けた。査読意見を各執筆者に伝え改訂稿を依頼するうちに、中国語版のほうが先に進んだ。麦田出版による丁寧な編集作業は、初歩的な中国語能力しか持たない筆者にとって大変な難く、編集者の忍耐力に敬服した。台北の書店で出版記念の座談会が行われたことにも、同地の出版文化の豊かさが感じられた。当初は予定されていたなかった韓国語版は、執筆陣の一人である文晚龍先生の御尽力で実現した。筆者は文先生の招きで全北大学およびソウル大学で本書に関連する講義を行い、韓国の院生・学部生と交流する機会も得た。

改めて、各国の研究者・編集者の熱意と温かい交流に心から敬意と感謝を表したい。（森口（土屋）由香）

『近代日本の中国学 その光と影』

朱琳、渡辺健哉編著

勉誠社 2024 年 11 月



本書は、明治から戦前にかけ、それぞれの形で中国研究に関わった日本の各分野の人物を紹介したアンソロジーである。2021 年から 2022 年にかけてオンラインで行われた全 3 回の国際シンポジウム「近代日本の中国学の光と影」の報告を中心に、新規の論考を加えて編まれた。朱琳、渡辺健哉の編集のもと、「総論」を山室信一と小野寺が

担当し、以下第 I 部「東洋史」と「支那学」の確立」、第 II 部「中国研究に新風を吹き込む」、第 III 部「日中書画交流」、第 IV 部「アジア踏査」、第 V 部「ジャーナリストの目に映った中国」として、全 23 人の各分野の研究者が寄稿している。各部の題名からうかがえるように、那珂通世、桑原隲藏、白鳥庫吉、内藤湖南、服部宇之吉、狩野直喜といった日本のアカデミズムにおける中国学の創始者に加え、富岡鉄斎、長尾雨山ら藝術分野で中国と関わった人物、関野貞、常盤大定、鳥居龍藏、大谷光瑞など人類学や仏教を背景に中国調査を行った人物、波多野乾一や橋樸といったジャーナリストなど、在野で日中交流に携わった人物を数多く取り上げている。執筆者間で論旨の統一が図られたわけではなく、論考ごとに分量や形式も不均一だが、過去最も厚い『アジア遊学』になったとのことであり、関係者の熱意は伝わるのではないかと思う。（小野寺史郎）

[A5 判 384 頁] 3,500 円 + 税

『比較文明学の 50 人』

郭旻錫

筑摩書房 2024 年 12 月



本書は編著者の小倉紀蔵氏を含め、日本の比較文明学会に所属する 17 人の会員が、50 人の日本人を通して「日本の比較文明学」はいかなるものかについて論じたものである。議論の対象になるのは、法然や本居宣長などの伝統的な仏教・儒教の思想家、西田幾多郎や田辺元などの京都学派の哲学者、鈴木大拙や賀川豊彦などの宗教思想家、

梅棹忠雄や伊東俊太郎などの比較文明学者、夏目漱石や三島由紀夫などの小説家と、様々である。日本の地で知的な生産に携わってきたありとあらゆる思想形態を「比較文明学」というレンズから覗いてみることで、この学問の可能性を一般の読者に分かりやすく知らせることが本書の最大の目的である。以上のような作業は、ただ日本文化の固有性を究明しようとするものではない。編者の小倉氏によると、「文化のなかだけに閉じこもっては見えないことが、文明というパースペクティブを解体しつつ持つことによって、見えることがある」（10～11 ページ）という。「比較文明学」は、自らを規定しながらも、自らをより広い文脈に開いていく作業だといえる。本書を通して、いつも文明の辺境から世界の意味について考えてきた日本人たちの優れた「比較文明学」的な眼目を確認することができる。（郭旻錫）

[四六判 448 頁] 2,420 円

『新しい認知言語学：言語の理想化からの脱却を目指して』



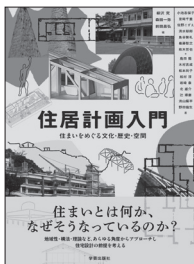
渋谷良方・吉川正人・横森大輔編
ひつじ書房 2024年12月

1980年代、生成文法へのアンチテーゼとして誕生した認知言語学は、半世紀近くの間、国際的な隆盛を誇ってきた。では、本書が掲げる「新しい」とは何か。そのポイントは、副題の「言語の理想化からの脱却」にある。認知言語学は、言葉が伝える意味やそれを支える人間の認知能力の豊かさに着目することで、構造偏重の言語観に鮮やかな対比を示してきた。しかし本書は、従来の認知言語学でさえも、話者の属性や文脈などの要素を捨象し、「理想的な話者」による「理想的な言語使用」を想定した議論に終始しているのではないかと問う。本書には、こうした問題意識の下で執筆された11篇の論考が、「コーパス分析」「新規・逸脱表現」「談話・相互行為」の3パートに分かれて収められている。

こうした3パートの分かれ方にも示唆されているように、「理想化からの脱却」の道筋は一つではない。「新しい認知言語学」とは、認知言語学にとって唯一定まった次のステージというより、認知言語学が本来備えていたはずの、人々の身体経験・生活経験を基盤とする知的体系としての言語の姿に迫る可能性に改めて向き合う、集団的挑戦の総体と見るべきだろう。その意味で、本書が目指すのは、認知言語学に取って代わる領域の創設ではなく、その精神への回帰であると言えるかもしれない。本書の撒いた種が、この集団的挑戦をさらに広げ、認知言語学をより豊かで開かれたものへと更新していくことを期待したい。(横森大輔)

[A5判 296頁] 6,050円(税込)

『住居計画入門—住まいをめぐる文化・歴史・空間』



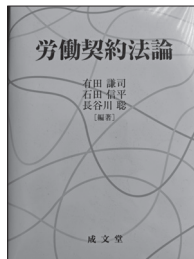
柳沢究・森田一弥・前田昌弘 編著
学芸出版社 2024年12月

最近、家を取得した。築年不詳、おそらく築100年近い、木造二軒連棟の片側である。家を買うなら古い家がよかった。土地に流れる時間を引き受けつつ自分好みに手を加えられるからだ。社会では脱スクラップ・アンド・ビルドが叫ばれて久しい。しかし、新築至上主義の大きな流れは変わらず、空き家は今や社会問題である。ただ、気密・断熱が完璧な新築住宅や都心の便利なタワマンに住みたい人がいるのも理解はできる。その対極には、誰にも頼まれていないのに廃屋を自分たちの手で直し続け、いまでは「廃屋建築家」として空き家を「配って」いる私の知人のような人もいる。住まいは時代の移ろいとともにその存在意義を変えつづける、興味が尽きない対象である。本書は、都市居住の長い歴史をもつ関西の住宅研究者・建築家らと編纂した、住居計画の入門書である。単なるノウハウの解説ではなく、「住まいとは何か、なぜそうになっているのか」という根本的な問いを読者に様々な形で投げかけている。豊富な事例から導き出される住まいのロジックは、時代が移ろっても簡単には色あせないと自負している。住まいづくりについてもっと知りたい読者が、自己の投影でもある住まいと対話するように読み進めてもらえれば幸いである。(前田昌弘)

最近、家を取得した。築年不詳、おそらく築100年近い、木造二軒連棟の片側である。家を買うなら古い家がよかった。土地に流れる時間を引き受けつつ自分好みに手を加えられるからだ。社会では脱スクラップ・アンド・ビルドが叫ばれて久しい。しかし、新築至上主義の大きな流れは変わらず、空き家は今や社会問題である。ただ、気密・断熱が完璧な新築住宅や都心の便利なタワマンに住みたい人がいるのも理解はできる。その対極には、誰にも頼まれていないのに廃屋を自分たちの手で直し続け、いまでは「廃屋建築家」として空き家を「配って」いる私の知人のような人もいる。住まいは時代の移ろいとともにその存在意義を変えつづける、興味が尽きない対象である。本書は、都市居住の長い歴史をもつ関西の住宅研究者・建築家らと編纂した、住居計画の入門書である。単なるノウハウの解説ではなく、「住まいとは何か、なぜそうになっているのか」という根本的な問いを読者に様々な形で投げかけている。豊富な事例から導き出される住まいのロジックは、時代が移ろっても簡単には色あせないと自負している。住まいづくりについてもっと知りたい読者が、自己の投影でもある住まいと対話するように読み進めてもらえれば幸いである。(前田昌弘)

[B5変形版 208頁] 3,080円(税込)

『労働契約法論』



有田謙司・石田信平・長谷川聡編著
成文堂 2024年10月20日

本書は、労働契約法が2007年12月に制定されてから15年余りが過ぎた時期に、労働契約法の意義と課題を明らかにするとともに、労働法の中に含まれる各種の法律と労働契約法との関係を、網羅的に検討することを目指し、19名の研究者により編まれたものである。

このように2つの目的を掲げた本書は、第1部が「労働契約法の規制対象・内容と意義・課題」、第2部が「労働契約法と労働関係法制」となっている。

第1部においては、労働契約の権利・義務、労働契約と人事・雇用管理、労働契約と解雇等、8テーマが論じられている。第2部においては、労災保険法、労働安全衛生法、育児介護休業法、障害者雇用促進法等、11の法律と労働契約法との関係が論じられている。

労働契約法は、労働を提供し賃金を受け取る労働者にとっても、労働の提供を受けて賃金を支払う使用者にとっても、重要で基本的な法律であり、その意義と課題を理解することは大切である。また、労働法の中に含まれる多くの法律の性質を知り、それらと労働契約法との関係を詳細に理解することも、労働契約の締結・展開・終了の各場面が必要となり得る。近い将来、就職する人や起業をする人に、各節で繰り広げられる研究の内容を一読していただければ幸いである。(小畑史子)

[四六判 522頁] 12,000円+税

『史料と旅する中世ヨーロッパ』



図師宣忠・中村敦子・西岡健司(編著)
ミネルヴァ書房 2025年

大学生にとって、ラテン語、ギリシャ語、その他の中世諸言語やイメージで表現され、独特のコードを持つ中世ヨーロッパ史料は決して易しくない。それでもどうしても面白く、なんとか中世ヨーロッパ史の醍醐味を史料で伝えたい。そんな大学教員たちが授業の実際を想定した工夫満載の一冊。「序章 史料を紐解き、過去の世界に旅しよう」

「第1部 権威と統治」(1~3章)「第2部 教会と社会」(4~7章)「第3部 都市と農村」(8~11章)とコラム4本から成る。各章の「概説」で高校教科書が批判的に検討され、「史料と読み解き」で史料から解釈が立ち上がる。章末に読書を深め自分自身で調べ考えたりする〈発展〉課題の「ワーク」つき。デジタル史料へのアクセス用QRコードや、巻末付録「中世ヨーロッパに関する史料の和訳図書リスト」も授業の味方になるし、史料類型を最新の議論を踏まえ深く紹介する4本のコラム「史料の扉」も大変刺激的だ。学生の皆さんには、そこにある史料を読むだけでなく解釈や議論の歩みに触れ、史料を扱う仕事の奥深さを感じる手がかりにもなるだろう。筆者は一分担執筆者として、編者3名はじめ共著者たちの創造的工夫と情熱に感謝している。

(佐藤公美)

[A5版 264頁] 3,080円(税込)

『動的語用論の構築に向けて 第4巻』



田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝
(編)
開拓社 2025年1月

本書は語用論研究者の田中廣明らが主催する「動的語用論研究会」で発表した人々の論考をまとめた論集の4冊目です。語用論は社会文化的文脈のなかでことばがどのように使われるのかを解明する言語学の一分野ですが、この研究会はその動態を捉えるために多分野の協力が必要であるとして

おり、本書では語用論以外を専門とする研究者も含めて、「人はいかにことばを使っているのか」を分析する研究が集められています。

私自身は本書で「ブイ語の掛け合い歌における静と動一定型性と記号論的行為主体性」と題した論考を執筆しました。これは拙著『山歌の民族誌』で提示したブイ語の掛け合い歌データを、言語人類学における記号論的枠組みから再分析したものです。本書にはほかにもデフォルト意味論を踏まえた「動的な機能的命題」の議論(エルダー&ヤシュチョウト)、楽器レッスンにおける「はい」と「うん」の使い方に着目した相互行為分析(横森大輔)、イン/ボライトネス研究を踏まえたメールやグループLINEのやりとりの分析(大塚生子)など、多様な対象や角度からことばの動態に迫る論考が集められています。人がことばをどう使うのか、それをどう分析するのかに関心がある方はぜひ手に取ってみてください。(梶丸岳)

[A4版 272頁] 4,400円(税込)

『美学入門』



ベンス・ナナイ著／武田宙也訳
人文書院 2025年2月

美学に触れたことのない人に、それがどういう学問か説明するのは意外と難しい。美という名を冠していることから、美について考える学問と思われがちだが、必ずしもそうとは限らない(もちろん美についても考えるが)。また、芸術について考える学問かと言われると、それも間違いではないが、やはり十分ではない(芸術は必ずしも

特権的な対象ではないので)。本書は、こうした美学にまつわる素朴なイメージから出発して、ではそれは実際のところ何をする学問なのか、というところに徐々に話を進めていく。

その詳細をここで説明することはできないが、著者がとりわけ重視するのは、私たちが何らかの対象(美術であれ、娯楽であれ、風景であれ、料理であれ)を経験する際に、いかなる感覚を喚起されるか(ポジティブであれ、ネガティブであれ)、ということであり、つまるところそれこそが美学が取り組む問題である、ということになる。これだけでは抽象的すぎて雲をつかむような話と感ぜられる向きもあるかもしれないが、本の中では著者が、豊富な具体例を挙げつつ噛んで含めるように導いてくれるのでご安心を。「美学って何?」と思われたことのある方に手に取っていただきたい一冊。(武田宙也)

[四六判 210頁] 2,860円

『みんなのための生涯学：人生を楽しむ科学への招待』



月浦崇・柴田悠・金子守恵 編著
ナカニシヤ出版 2025年3月

「エイジング」という言葉に対して、多くの人が抱く印象はネガティブなものである。実際に、年齢を重ねることは忌避されるべきこととして「アンチ・エイジング」がもてはやされている。しかし、「エイジング」は本当にネガティブなことなのだろうか? 2020年度に開始された科研費学術変革領域研究(A)「生涯学」(領域代表: 月浦

崇)では、従来の加齢観・生涯観を刷新することを目的として、一人ひとりが自らの人生を豊かに生きるための「サクセスフル・エイジング」を実現するための科学的エビデンスを、「生物心理社会モデル」に即した学際的なアプローチから提示してきた。本書では、この「生涯学」の5年間の研究成果が1冊にまとめられ、高校生にも分かりやすい平易な言葉で紹介されている。

「生涯学」には、神経科学(生物)、心理学(心理)、社会学や文化人類学(社会)などの多彩な研究者が参加しており、本書でも「生涯学」の旗印のもとに、異なる研究分野の多様な視点から学際的研究の最先端の成果が紹介されている。序章では、「生涯学」のコアメンバーとして本学から参加した月浦崇(人間・環境学研究科・認知神経科学)、柴田悠(人間・環境学研究科・社会学)、金子守恵(アフリカ地域研究資料センター・文化人類学)の鼎談の様子が収録されており、異なる研究分野が合同でどのように「生涯学」の研究を進めてきたのかがまとめられている。この鼎談は、本書「みんなのための生涯学」の内容紹介の役割も果たしており、この序章に目を通してから各章の内容を読むと、一見バラバラな研究分野が不思議とつながって見えてくる仕掛けになっている。本書を通して、一人ひとりが自分らしい生涯を考えるきっかけを見つけてくれれば幸いである。(月浦崇)

[A5判 208頁] 2,640円(税込)

『石原吉郎——シベリア抑留詩人の生と詩』



細見和之著
中公文庫 2025年3月

10年前に中央公論新社から単行本で出版されていた本が、中公文庫に収められることになった。単行本の出版は石原吉郎生誕100年に合わせてだったので、文庫本としての刊行は生誕110年に相当している。

私は学生時代から石原の詩とエッセイに惹かれてきたが、ある時期から詩とエッセイをいったんは切り離して読むべきだと考えるようになった。石原のシベリア・エッセイは優れたものだが、それを彼の詩の解説のように読むのは間違いではないか、ということだ。私がたどり着いたのは、作者の石原ではなく石原の用いる言葉がシベリアを追憶していた、ということだった。「位置」「条件」「納得」といった漢字・漢語がその代表である。

しかし、石原にはそれらとは対極にあるようなカタカナ表記の言葉が重要な役割を果たしている作品もある。「自転車にのるクラリモンド」がその代表である。こちらは石原が高校時代から身につけていたエスペラント語が背景にあると私は推測している。

年1回の連載という特異なリズムで6年あまり書き継いだ原稿が元になっているが、ひとりの詩人の作品と体験を、言葉を媒介として考察するのは、自分にとってはとてもスリリングな時間だった。(細見和之)

[文庫判 465頁] 1,650円

『どうやって美術品を守る？ 保存修復の世界をのぞいてみよう』



ファービエンヌ・マイヤー、ジビュレ・ヴルフ 著

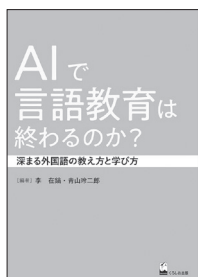
田口かおり 監訳 中村智子 訳

創元社 2025年5月

本書は、美術館における「保存修復」の仕事の全貌を物語仕立てで紹介するビジュアルブックである。物語の主人公は、盗難と劣悪な環境によって大きな傷を負った肖像画の「フーゴ」。展示準備に追われる保存修復士を見守りながら、修復処置を待つフーゴの視点から、美術館の修復室の現場がユーモラスに描かれる。保存修復士は、美術史や材料技法の知識を生かし、科学的分析を用いて作品の状態や組成を調べ、時に作家の声にも耳を傾けながら、どこまで／いかに介入するかを判断する。また、展示や輸送の安全確認など、日常業務も多岐にわたる。本書は、そうした保存修復士の業務を紐解きつつ、彼らの共同作業員としての学芸員や照明、運送、設備、清掃などに関わる多くの人々の仕事にもフォーカスする。保存修復とは単に「モノ」を残すことなく、価値を理解し語り継ぐ行為そのものでもあることを示し、読者に新たな鑑賞の視点を与えてくれる一冊である。(田口かおり)

[規格外 82頁] 4,950円(税込)

『AIで言語教育は終わるのか—深まる外国語の教え方と学び方』



編者：李在鎬、青山玲二郎

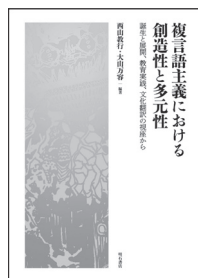
くろしお出版 2025年5月

『AIで言語教育は終わるのか』で、私は「AIの言語生成と人間の言語使用の違い—AIの言語生成能力を人間らしい言語使用の補助手段として使う」という章(p.55-73)を書いた。生成AIの進展ははなはだしく、今や、標準的・定型的な文章作成においては大きな問題はない。作成スピードにおいては人間はもはや敵わない。そんな時代に

における言語教育の意義を、言語教師の自己保身のための詭弁でなく書きたかった。紙幅の都合で本文に書けなかったが、執筆の1つの契機となったのは、漫画『スーパースターを唄って』(薄場圭・小学館)である。主人公は裏社会に蝕まれた貧困状況の中で育ち、ドラッグに母と姉を奪われる。彼はラップ表現でかろうじて生き延びる。「俺が唄わなきゃよな、俺達を証明する音と詩と想いは」—彼にとってことばは生命である。人は人生のどこかの場面で、欺瞞のことばを蹴り飛ばし、自分のことばを必要とする。母語教育は言うまでもなく、英語教育も第二外国語教育も、根底のところでは学習者の実存に根ざしている必要がある。私としては上の漫画に代表されるようなヒリヒリした感覚を抽象的に表現するために、ハイデガーの『存在と時間』の用語を大胆に意識して使った。専門家には叱責されるかもしれないが、これも私の言語使用である。(柳瀬陽介)

[A5 272頁] 3,960円(税込)

『複言語主義における創造性と多元性：誕生と展開、教育実践、文化翻訳の視座から』



西山教行、大山万容編著

明石書店 2025年

本書は2022年3月ならびに2023年2月に本学にて開催された国際研究集会の発表報告などをもとに編集された論文集で、フランス、イタリア、カナダ、ニューカレドニア、南アフリカなど世界の広い国や地域で実践され、研究されてきた複言語主義に関する論考を集めている。

複言語主義は、ヨーロッパで今世紀初頭に開発された言語教育に関わる理念で、個人が複数言語を何らかの形で保持し、活用する教育を指す。それ以来、この教育はさまざまな発展を遂げ、言語教育だけではなく、文化の翻訳などにも展開する概念装置となっている。ちなみに私は本書で20世紀前半のフランスの言語学者アントワヌ・メイエの著作の日本語訳をめぐる課題を論じた。翻訳とは2言語の間を往来する知的活動であるが、そこにはどのような著作をいかなる時代において翻訳するのかといった戦略も働いている。とりわけ戦前のように言論が抑圧されていた時代において、翻訳は単に横のものを縦に置き換えるといった機能にとどまることなく、それ自体が価値を生み出していた。

本書は言語教育にとどまらない複言語主義の多元性を照らし出している。(西山教行)

[A5 256頁] 2,800円+税

『一〇〇年前の「入試改革」——一九二〇年代中等学校入学難問題にみる教育と選抜——』



石岡学

勁草書房 2025年6月

今から百年前、つまり一九二〇年代の日本における「入試改革」について、歴史社会学的な視点から考えてみた本である。

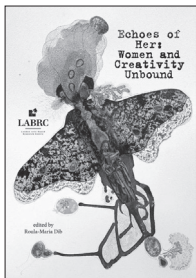
本書の中心となるのは、当時さまざまな論者によって提出された「入試改革案」をめぐる論争の分析である。余りにも多種多様な案が出されたため、これを整理し論点を抽出することは並大抵の苦労ではなかった。

しかし、そこから明らかになったことは、入試改革をめぐる論点は百年前にほぼ出尽くしており、本質的にはそこからほとんど進歩していないということである。選抜方法の「望ましさ」は各々の抱く教育観・能力観によって規定されており、そこに絶対的な基準がない以上、議論は堂々巡りにならざるを得ない。本書の結論では、入試問題の難しさの根幹は「義理と人情の板挟み」であると説いたが、それがどういうことなのか気になる人は、是非この本を繕ってもらいたい。

ところで、当時の議論で個人的に最も興味を惹かれたのは、試験をやめて抽籤にせよという主張である。一見荒唐無稽な極論のようにも思えるが、この発想の根幹には我々の素朴な能力観を問う直すラディカルさが含まれている。くじ引きは近年、選挙制度に関する政治学研究の分野でも議論されており、社会的地位配分をめぐってもっと真剣に考えられるべきことだと思う。「入試改革」という問いの立て方自体が、問い直されるべきものである。(石岡学)

[A5判 288頁] 4,400円(税込)

『Echoes of Her: Women and Creativity Unbound』



Roula-Maria Dib 編

London Arts-Based Research Centre
2025年6月

本書は、London Arts-Based Research Centre 主催のカンファレンス “Women Who Create” から生まれたアンソロジーである。詩人やアーティストから学者まで、芸術に携わる女性たちの多様な声を包摂する一冊であり、出版記念イベントでもその越境的な熱気が再確認された。

私が寄稿したのは、“Passive-Creative: Virginia Woolf, Reading, and the Flowering Feminine” というヴァージニア・ウルフ論である。ウルフのフィクションとノンフィクションの接点を糸口にして、作家の女性性と創造性の関わりを探る試みだが、タイトルにもある “passive-creative” がミソである。たとえば京都人的な間接的嫌味を、英語では “passive-aggressive” と言ったりするが、これをひねって、「能動性」と結び付けられやすい創造性の「受動的 (passive)」な側面をキャッチーに表現してみた。「言語化」ブームの今こそ、言語のコントロールを超えた「自然」の介入を許し、「作る」というより「待つ」——創造行為におけるこのような「受動性＝女性性」の再評価を促したい。(合田典世)

[A5 並製 128 頁] 3,300 円

『感情をめぐる法哲学と法思想』



橋本祐子・菅原寧格編

信山社 2025年7月

法と感情を水と油の関係で捉える人は多い。多くの法学者や法律家の意識もそうだろう。だが、「法と感情」研究は20世紀末以降アメリカ等を中心に盛んである。本書は「法と感情」についてわが国で初めて執筆された論文集である。三部構成となっており、第I部は現代に定位した理論研究。

法・正義・裁判をめぐる現在の主張を感情

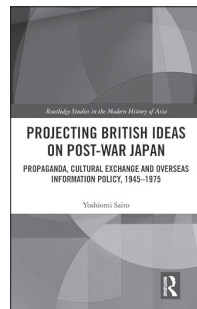
と関連づけて検討する。第II部と第III部は思想研究。幅広い時代の著名な思想家や法思想に対して感情という観点から光をあてる。よく知られた思想家の知られざる一面に出会えるだろう。

私が執筆した第10章では、20世紀初頭に主流派から「感情法学」と揶揄された自由法論という一派に着目し、「法と感情」研究の初期形態として期待をかけた。結果は空振りに近い。法感情や感情を積極的に理論の中に位置づける姿勢は自由法論＝感情法学にもみられなかったからである。感情を忌避・警戒する法学の傾向（それ自体も嫌悪感という感情？）を再確認した。だが、自由法論は法に感情が入ってくることを少なくとも認めたうえでその制御を試みた思想だと言うことはできる。

「法と感情」研究には、このように法における感情作用を認めつつ理性的制御を試みる立場もあれば、理性と感情の対立構図そのものを崩そうとする立場もある。「法と感情」研究の特徴である立場とアプローチの多彩さを、本書からひしひしと感じてもらえるだろう。(菊池亨輔)

[A5 変 336 頁] 7,920 円 (税込)

Projecting British Ideas on Post-War Japan: Propaganda, Cultural Exchange and Overseas Information Policy, 1945–1975



Yoshiomi Saito

Routledge 2025年

戦後日本の対外関係と言えは、「日米関係」がほぼ専一に語られ、日英関係はしばしば戦前の物語で止まってしまう。本書で私が描こうとしたのは、その陰に隠れながらも、戦後を通じて日本社会に働きかけたもう一つの友好国、イギリスの姿である。とりわけ注目したのは、アメリカが圧倒的な対日影響力を持つ中で、政治的には発言力が限られていたイギリスが、福祉国家や「民主的な立憲君主制」といった独自の価値や社会像を、いかに日本社会に投影しようとしたのかという点である。本書はその過程を、情報戦・文化外交・王室交流という三つの軸から検討した。

本書では、占領期の福祉国家イメージの発信やイギリス王室の積極的な宣伝、占領後の皇太子明仁によるエリザベス女王戴冠式 (1953年) 参列をめぐるイギリス世論の反応、ブリティッシュ・カウンシルの活動、さらに安保改定期に構想された日英の対アジア・プロパガンダ協力構想の挫折などを取り上げた。くわえて、昭和天皇の訪英 (1971年) とエリザベス女王の訪日 (1975年) へとつながる皇室・王室外交の軌跡を、一次史料に基づいて丁寧に跡付けた。そこで明らかになるのは、限られた政治力しか持たなかったイギリスが、文化資本を最大限に利用し、日英関係の中に確かな影響力の場を切り拓こうとした試みである。

今日、日英関係は安全保障や経済で再接近しており、新「日英同盟」が語られる状況にある。だがその背後には、大戦中の旧日本軍による捕虜虐待の記憶や「不公正な貿易競争相手」としての日本像をいかに克服するのかという課題と、それを乗り越えて積み重ねられてきた文化的・象徴的交流の歴史がある。本書が示したのは、これらの長い積層を踏まえることで、戦後日本をアメリカ一極でない、多層的な世界とのつながりの中で捉え直す視点である。(齋藤嘉臣)

[16.2 × 1.73 × 23.99cm 206 頁] £ 145

『身ぶりと言語—〈身体記憶〉をめぐる人類学的探究』



岩谷彩子・菅原和孝編

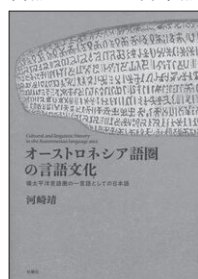
ナカニシヤ出版 2025年9月30日

1990年代以降、冷戦終結と世代交代により集合的な過去が縮小し、人々が異なる「記憶の場」と想起の枠組みを通して自己を語るようになったと指摘されて久しい。しかしそこで前提とされている個人は、あくまでも集団が用意した記憶の枠組みをなぞる存在でしかない。これに対して本書は、個人が〈身体記憶〉を通していかに集合的

な記憶に参加し、またそこからどのようにみ出すことになるのか、探究するものである。例えば、〈身体記憶〉は労働歌や会話中の身ぶりを通してイメージを喚起することで、困難な作業や伝達を可能にしたり、即興的に手話を構成したりする（第Ⅰ部：相互行為における身ぶりと言語）。酒造での技能獲得やコミュニティの踊りや遊びの事例では、集合的な記憶を個人が身体でなぞる過程で生じるずれが、新たな「やり方」を呼び込む（第Ⅱ部：民族誌的文脈における身ぶりと言語）。また、災害や戦乱で集合的な記憶が失われた時、人間は身体を通して失われた人やものを周囲の環境に探索する。過去とのつながりを断たれ現在に宙吊りになる〈身体記憶〉は、不在を不在のまま受けとめることで、他者の想起を喚起する共感的な場をもたらさう（第Ⅲ部：喪失と言語）。本書を通して出会うさまざまな〈身体記憶〉は、変化する環境のなかで我々が残してきた痕跡の思いがけない頼もしさに気づかせてくれる。（岩谷彩子）

[A5版 230頁] 3,520円

『オーストロネシア語圏の言語文化：環太平洋言語圏の一言語としての日本語』



河崎靖 著（単著）

松籟社 2025年9月30日

母語の起源という問題には誰もが関心が向くであろう。ただ、日本語の系統が一気に具体的な形で明らかになる可能性は高くなく、その歴史は性急な答えを許さないほど悠久である。これまで、言語学と国語学は日本語の起源を同じく研究対象とする場合も、国語学は文献学的色彩が濃く、片や言語学の方は国語学との一種の棲み分けも

あって、日本語以外の世界の諸言語との比較対象を主眼としがちであった。いずれにしても、日本の言語学にとって、日本語の起源や系統を明らかにすることは一大使命であるはずである。

日本語のもとをなす基層のあり方に関して、アルタイ的な基層の上に南島語（オーストロネシア語など）が重なったとする立場や、南島語をアルタイ語よりも年代的に古い層と見る解釈がある。本書では、日本語と南島語の関係を積極的に認めようとするわけではなくとも、三千年くらいの長きにわたり（縄文時代中期～古墳時代）、南島語が波状的に渡来したことにより、日本語への文法・語彙面への影響が少なからず見出されることを示す。従来、言われてきたよりも、南島語が日本語の成立過程に関与してきた度合いは強いのではないかと説く。（河崎靖）

[A5判 176頁] 2,640円（税込）

『種分化の生物学—生物多様性を生み出す進化のしくみ』



種生物学会 編、阪口翔太・村中智明・川北篤 責任編集

文一総合出版 2025年10月

本書『種分化の生物学』は、生物の種分化、すなわち種がどのように分岐し、新たな種へと進化していくのかについて、基礎概念から最新研究までを体系的に解説した一冊である。第1章「種分化とははじめ」では、種間の遺伝子交流を妨げる生殖隔離を中心に、種分化の基本枠組みを概説し、

隔離障壁の種類やその進化生態学的意義、さらには地理的状况に応じた種分化モードを整理している。第2章以降では、自然史研究に基づく具体的事例として、植物（アキノキリンソウ、チガヤなど）、昆虫（テントウムシ、ガガンボカゲロウ）、魚類（イトヨ）を取り上げ、環境要因や生態的相互作用がどのように種分化を駆動するのかを明らかにしている。加えて、近年注目される雑種種分化、種分化の分子基盤、分岐の転換点に関する研究など、種分化の最前線に位置するテーマも詳しく紹介されている。また、「生殖隔離の定量方法」や「形質の地理的変異」など、研究実践に役立つコラムも多数収録され、多面的理解を促す構成となっている。対象読者は、進化研究を志す学生から、生物多様性や進化史に関心をもつ一般読者まで幅広く、生物学の理論と実証研究を結ぶ入門書・応用書として位置づけられる。（阪口翔太）

[A5判 288頁] 3,740円（税込）

『英語運用能力の修得—統合型の学習指導と評価』



中森誉之

開拓社 2025年11月

国の指定研究の成果を、国の助成を受けて出版していただく第4弾、今回は渾身の和書が完成した。

現在までの学術研究に基づいて、著者が提唱してきた統合技能とは、音声情報や映像素材を理解して自分のことばで説明する、読解内容を解釈して見解や意見を述べるといった、聞く・話す・読む・書くことを分

離せず、一体的に運用する能力である。この組み合わせ方には厳格な順序があり、それを誤ると学習者の困難性が増大し、原因究明も難しくなることを、実証研究と理論研究を積み重ねることにより解き明かした。学校教育課程で身につけていく語彙と文法の知識を、運用能力にまで高め、技能を統合していくための導入順序を発見した。従来の教材や教具、指導法、カリキュラム設計やシラバス・デザインなどに対して、新たな知見を与える画期的な貢献である。

本書は、言語習得理論、認知科学を根拠として、最適な技能統合の方式を提案し、学習、指導、練習、評価を、日本の教育体制下で、効果的かつ効率的に展開していくための、新たな英語教授学習評価理論を構築したものである。（中森誉之）

[A5判 408頁] 7,480円

感 銘 を 受 け た 3 点

守田貴弘（言語学）

今年は京都コンサートホールが30周年ということで力が入ったプログラムが多かった。その中から3点を紹介する。

1. 3月23日 Sir Andr s Schiff(ピアノ・指揮) × Cappella Andrea Barca (室内楽団)

モーツァルト・プログラムとバッハ・プログラムを準備してのアジアツアーであり、京都は前者のプログラムだった。ピアノ協奏曲20番、交響曲40番と20番の間にドン・ジョバンニ序曲を挟むという構成。自由闊達な演奏で知られるシフだが、この日も20番のカデンツァにドン・ジョバンニのテーマを忍ばせてくるなど、融通無碍の演奏だった。アンコールでは日本語で「バッハを、弾きます」と話しかけると、何とピアノ協奏曲1番というサービスぶりだった。もっとも気になったのがコントラバス奏者の女性で、シフを心から愛し、尊敬していることが分かる表情や動きに目が離せなかった。楽団は2026年の活動終了を宣言しているためこの形で来日するのは今回で最後となったが、シフ個人のコンサートは2026年も開催される(高松宮殿下記念世界文化賞も受賞した)。

2. 9月24日 Emmanuel Pahud (フルート) × Eric Le Sage (ピアノ)

ペルリンフィルのデジタルコンサートホールの会員になっている私としては、いつも画面の中で見ている人に会えるということで、行かないわけにはいかなかった公演である。前半はモーツァルトのソナタK379, K380。初めて生で聞く音はとんでもなく素晴らしいものだったが、バイオリン曲をフルートで演奏するということがあって少しおとなしめだった。後半はライネッケのウンディーネ、そして圧巻だったのは最後のシューベルトのしばめる花による序奏と変奏曲である。もう数十年に及ぶコンビを組んでいる2人に、おそらく細かな打ち合わせなど必要ないだろうし、ドイツで働く2人とは言えフランス人である。フランスの音楽とはここまで自由にきらびやかで伸びやかなものなのかと、久々に思い知らされた。

緊張して口が回らなかったが、終演後に少しだけ2人と話せたのも嬉しかったし、一緒に撮ってもらえた写真は家宝である。

3. 10月23日 内田光子 (ピアノ)

ベートーベンのピアノソナタ30番、31番、32番。あまりにも素晴らしく、どうしてもうまく言語で表現できないコンサートである。全編を通して、内田光子も歳をとったのだなと感じさせる指の回り方ではあったような気がする。しかし、大事なことはそんなことではない。曲自体が神々しいということもあるのかもしれないが、目の前で生身の人間が演奏しているにもかかわらず、音は確かに天から降ってきていた。内田光子と何かがつながっていたし、内田光子を通してホール中の人々もその何かとつながる音であり、静寂だった。その時の感覚を表現できることばなど、私は持ち合わせていないし、だからこそ音楽なのだと思う。

高見大地（触媒化学）

今年の11月から着任することになり、学生時代に住んでいたアパートに2年半振りに戻ってきました。夜、猫の鳴き声が聞こえたので庭に出てみると、学生時代に仲良くなった野良猫が、部屋の電気が点いているのを見て遊びに来てくれていました。月日で

薄れてしまう関係もあるけれど、残っているものもあるんだなあ、なんてにゅんに感じた夜でした。

また、人環の教員懇親会もとても印象的でした。学生時代、中々学際的な活動をすることができず、自分の行動力の低さに歯痒い思いをしていました。結局そのまま卒業してしまい、名前も知らない先生がほとんどという状態でした。教員として戻ったら、このような懇親会があり、学生時代にお世話になった先生や学生時代には関わりのなかった先生にもお話しする機会をいただけて、改めてこの研究科の幅広さを感じました。教員同士の関係性も深め、総人・人環をもっと面白い場所にできるよう僕も頑張ろうと思います。

両方とも11月の出来事で恐縮ですが、京大に戻ってこれて良かったとしみじみ感じています。

大黒弘慈（経済学）

エピクロスとの「出遭い」によって通常の研究から大いに「逸らされた」1年であった。とはいえ肝心の『自然について 他』（朴一功・和田利博訳、京都大学出版会、2025年）はまだ読めていない。ここではエピクロスに拠りながら現代社会を生き抜くための「処方箋」を示した3冊に触れておきたい。

1. 夏川草介『エピクロスの処方箋』（水鈴社、2025年）

終末期医療という重いテーマを扱う中で、エピクロスの快樂の定義に「心に悩みがないこと」だけでなく「孤独でないこと」を加えて、現代における「精神の安定（アトラクシア）」の在り方を示してくれた。作中の京和菓子店名にほっこりする。

2. ジェニー・オデル『何もしない』（竹内要江訳、ハヤカワ文庫NF、2023年）

エピクロスは「隠れて生きよ」と説いたが、著者はこの教えを現代の「アテンション・エコノミー」に対する抵抗として実践する。絶え間ない情報・生産性への強迫観念から解放され「無為」を実践することの意義に気づかせてくれる。

3. 対馬齊『人間であるという運命：マルクスの存在思想』（作品社、2000年）

マルクスは「世界を解釈するのではなく変えること」を説いたが、実は生涯エピクロスの徒であった。歯向かうのではなく「受け流すこと」に、人間というアトムに固有の「偏差（クリナメン）」を読み取るマルクス解釈は斬新である。

三代川寛子（エジプト近現代史）

1. 川端康成『古都』新潮社、2012年。

京都に暮らすならこれを読まなきゃ始まらないと思い、越してくる前に購入したのだが、『片腕』やら『眠れる美女』などの川端作品に特徴的な、女性の身体をじろじろ凝視する視線を思うとどうにも手が伸びず、しばらく積読になっていた。しかし気が向いて読んでみたら、いつもの濃密な視線はなりを潜め、それでいて上品で精緻な文体は健在で、老舗で上等な和菓子をいただいたような読後感だった。あとがきによると、どうやら川端翁は睡眠薬を服用しながら本作を執筆したらしい。なるほど。

2. マーガレット・アトウッド著、斎藤英治訳『侍女の物語』早川書房、2001年（原著は1985年）。

この数年話題になっているのは知っていたが、いかにもムナクソ悪くなりそうなディストピア小説とのことで、敬遠していた。しかしEテレの「100分de名著」でも取り上げられているのを見て、ここは読んでおくと腹をくくる。やはり気持ち悪い。そして皮肉っぽく説教臭い。

恐るべき組織的暴力と人間性の剥奪をテーマにしている点で、バルガス・リョサの『ケルト人の夢』に通じるものを感じた。しかし歴史小説だけに『ケルト人の夢』の方が迫りくるリアリティーがあり、重厚感のある人物描写にも説得力があった。比較すると、『侍女の物語』の世界および登場人物の描写はだいぶ薄っぺらい。「私たちの世界にはこんな野蛮なことは決して起こらない、起こるとすればそれはあちらの世界（共産圏、イスラーム圏、あるいは前近代のどこかの国）のことだ」という確信がこの作品の根底にはないだろうか……？その意味でも、気持ちの悪い作品だった。

3. 柚木麻子『BUTTER』新潮社、2020年。

英語版がイギリスで文学賞三冠達成とのことで、内容をよく知らずに手に取ってみたが、多少ミステリー要素もあり、刺激的でどんどん引き込まれ、かつ暖かな読後感だった。全体を通して繰り返し登場する芳醇なバター風味と料理の場面の描写がまた格別。自分にとっての適量を模索することの大切さが、確かな実感を伴って伝わってきた。

これまで、趣味の読書では評判の本やら受賞作を手にとることが多く、どちらかというと受動的に作品ベースで読んできたが、来年は自分の好みの作家を見つける読書を目指すのも素敵だなと思った。

小島泰雄（人文地理学 中国研究）

旅に出ると発見があるのは、場所が喚起する力によるものと地理学は考える。6月に札幌の地域学会に参加し、北大植物園や二風谷でアイヌ民族をめぐる現在の状況に触れた。演習授業で学生と読んだ『人間の領域性』（サック、2022/1986）が指摘する、近代の領域化の特徴である「空にできて非人格的な空間」の構築が北海道でも進められたことを再認識した。3月には中国南昌で学術交流を行い、高度成長に乗り切れなかったとされる中部地域の都市開発を見た。『ピークアウトする中国』（梶谷・高口、2025）が描く、不動産不況による消費低迷とEV車に象徴される過剰な生産能力という、中国経済の抱える問題を考える際にも、地方都市まで浸透した発展は出発点である。

バッテ・パッラヴィ（20世紀史、日印関係史）

筆者は、来日後、学生時代から翻訳・通訳を実務として行ってきました。その経験を活かし、知人の教員からISO/TC37国内委員会を紹介していただき、次年度からは委員として参加することになりました。それまでは、工業製品に使われていたJIS規格などにISO国際規格が使われていると考えていたのに、言語、特に翻訳・通訳でもISO国際規格が策定されていたことに大変感銘を受けました。教育現場での経験を活かしながら、Expert（専門家）として日本のため、お役に立てることは、大変光栄です。それまでお世話になった日本への恩返しができるのではないかと考えております。現在、通訳に関するISO国際規格の中に『ISO13611:2024 コミュニティ通訳—コミュニティ通訳のための要求事項と推奨事項』があります。その国際規格の認証取得予定です。

もある自分にとって、上記ISO/TC37委員会委員として、日本のために国際規格策定に関わることができるのは名誉なことであり、大変楽しみにしております。

2025年6月22日～28日に香川県高松市でISO/TC37総会が10年ぶりに日本で開催されました。その時に、京都外国語大学の教員（スガンディ アイシュワリヤ、佐藤晶子）の方々と共に学生通訳ボランティアを引率し、2025年度は日本の専門家（オブザーバー）として、会議にも参加し、ISO国際規格の策定に関わりました。次年度は別の国で開催予定ですが、今後も自分の翻訳・通訳業務の経験を活かし、日本のために翻訳・通訳の国際規格の策定に関わっていきたいと考えております。

また、この経験を「ISO国際規格と高等教育」に関する共同研究へと広がっていくよう、研究を深め、情報交換のネットワークを活発にし、本学にも研究成果を還元できるよう、活動していきます。可能であれば、将来、本学を会場にした学術越境プログラム実施や国際シンポジウム開催を行うことができれば幸いです。

佐野亘（政治学・公共政策）

・井原奈津子『美しい日本のくせ字』

いわゆる「きれいな字」ではなく、味のある字や奇妙なくせ字、丸文字以降の若い女子が好む独特の字、などがたくさん紹介されていて、見てだけでも楽しいです。巻末に練習帳もついています。この本のポイントのひとつは、ちょっと（あえて）ヘタな感じ、いわゆるヘタウマをどう評価するかということなのですが、著者はそこに日本的な「カワイイ」の感性を見てとっています。なるほど。

・司馬遼太郎『花神』

大村益次郎と桂小五郎（木戸孝允）は、わたしにとって、幕末の「二大よくわからないひとたち」だったのですが、この本を読んで少しイメージが湧きました。大村益次郎の人物も人生もものすごく不思議で、恥ずかしながら、シーボルトの娘とのあいだになにかしら関係があったこともまったく知りませんでした。もともと貧しい村医者の出身で、馬にも乗れず刀も使えない大村が討幕軍を率いることになったうえ、西郷隆盛が残念がるほどあっさり幕府軍を制圧してしまいます。その大村を見出し、最初から最後までずっと「大村推し」だったのが桂小五郎で、なぜそこまで大村を買ったのかも謎です。ちなみに桂小五郎については、村松剛の『醒めた炎』という長大な評伝があり、こちらもあわせて読むとよくわかります。明治以降の桂（木戸）の憂鬱症に親近感が湧きます。

・ヴァージニア・ウルフ『灯台へ』

若い頃からなんども読もうとしては挫折していたのですが、やっと読めました。正直にいうと、感銘を受けたかどうかよくわからないのですが、とにかく最後まで読んでしまいました。内容を思い出そうとすると、印象的な場面が映像として浮かんできて、映画を観ていたような気分です。たとえば、ボートに乗って海に手をひたすシーンの美しさ。

安部浩（哲学）

小澤征爾の音盤三枚・三昧

1. バルトーク、「管弦楽の為の協奏曲」

令和五年の春、ドイツ。或る会合でオーストリアの方と話す機会があった。私の国籍を告げると、その男性問うて曰く「『セイジ』を知っているか」。彼は大手音盤製造会社の元社員で小澤征爾氏の友人であった（因みにその直前に話したオーストリア人女性

からは「『イッセイ』を知っているか」。彼女は服飾関係の人で三宅一生氏の親友であった）。そのかみ欧州某所で饗応された洋風寿司に一当時、米国育ちの少年（？）であった小澤氏の子息は飛び付き、氏自身は「何だこりゃ」と目を剥いたという裏話を今思い出しても可笑しくて堪らぬといった風に男性は披露してくれた。この逸話と共に、私の耳に残っているのは、音楽業界の玄人としての彼の述懐である。「セイジの録音を聴いて心を打たれた。特に、セイジと言えばバルトークだ」。その翌年、小澤氏の訃音に接した。爾来、哀傷と畏敬の念を以て、氏の音盤に初めて耳を傾けるようになった。遺憾にも件の男性は、自らの愛聴盤たる小澤氏のバルトークの録音の曲目や楽団、収録時期等については生憎何も語ってくれなかったが、或る日、偶々手にした音盤を一聴して解った。これだ。沙漠に迫り来る禍々しき熱風。「管弦楽の為の協奏曲」、小澤氏がシカゴ交響楽団と昭和四十四年に行った録音がそれである。

2. フォーレ、「レクイエム」

通常、鎮魂曲においては、我々生者が死者の為にその平安を祈る。だがフォーレのそれは何かしら違う。その違和感の何たるかが私には疑問であり続けていたが、小澤氏とボストン交響楽団による本曲の録音に頻々と手が伸び、就中、Pie Jesu におけるボニー女史の歌唱を愛聴する中に、この謎が徐々に解けてきたように思う。フォーレの鎮魂曲は我々の祈りなどではない。寧ろ死者が天界より微笑を漏らしているかのようだ。生者の計らいを超えて、何処よりか湧き出でつつ、知らぬ間に掻き消えている笑まい。その銀嶺の如き非人情にはしかし、埋み火のほの温かさがある。

3. マラー、「交響曲第八番」

平成三年の春、東京文化会館にて新日本フィルハーモニー交響楽団を率いる小澤氏の演奏を聴いた。演目はシューマンのチェロ協奏曲とベルリオーズの幻想交響曲であったと記憶する。十代の私は訳も分からずに圧倒された。殊に幻想交響曲の演奏における氏の俊敏にして雄弁な身振りと新日フィルの劇的にして絢爛たる音色に。昭和五十四年、パリはサン・ドニ大聖堂にて実況録音せられた小澤氏とフランス国立管弦楽団（及びフランス放送新管弦楽団）によるマラーの「千人の交響曲」。この稀代の大曲の第一部を締め括る合唱の鋭き高揚と、第二部掉尾の「永遠に女性的なるもの」に導かれていく歌楽一体の法外なる大塊。本録音を聴いていると、私にとって一期一会となった壇上の氏が彷彿する。シヴァの化身。

日置尋久（情報科学）

・情報ということば—その来歴と意味内容

小野厚夫 富山房インターナショナル（2016）

「情報」の情報」の情報をお届けします。「情報」という言葉は、いつどのようにして生まれたのか、どのような成り立ちの言葉なのか、なぜ「情報」であって「状報」にはならなかったのかなど、「情報学」を専門と標榜する者として、一度は読まないとなというところ（つまりまだ読していません）。

・締切と闘え！ちくまプリマー新書 504

島田和彦 筑摩書房（2025）

本書には、「追い詰められたら笑え！」「逆境が新しい可能性を生む」「メ切は俺が決める！」などなど刺さる言葉が並んでいます。ちなみにこの原稿も締切との闘いの一つだったりします。今後もいくつもの締切とまだまだモリモリと闘い続けていくことでしょう…。

・国立大学教授のお仕事—とある部局長のホンネ ちくま新書 1852
木村幹 筑摩書房（2025）

本書で語られていることは「夢も希望も身も蓋もないなあ」と思えてしまいますが…首がもげるほど頷いてしまう自分がいるというか。WLB という言葉を捨てて、働いて、働いて、働いて、…おっと、誰かが来たようです。

福元健之（西洋史）

佐藤成基『国民とは誰のことか——ドイツ近現代における国籍法の形成と展開』花伝社、2023 年。佐藤氏は、ロジャース・ブルーベーカーに学んだ社会学者で、ナショナリズムの歴史社会学に取り組まれてきた。一人の研究者の手で通史を書くことの困難さは想像を絶するものがあるが、本書は「国籍法の形成と展開」を軸に、18 世紀後半から 21 世紀までのドイツ史をみごとに描き出している。とりわけ、「アドルフ・ヒトラーの帰化」（246-254 頁）は、エピソード（というにはあまりに影響が大きい）としても興味深い。もともとオーストリア市民で、その国籍を放棄し、ミュンヘン一揆で犯罪者ともなったヒトラーは、ドイツ国籍をえるまでに何回その申請をしたのでしょうか？

ここでは二つ。まず一つ目は、館野之男『放射線医学史』岩波書店、1973 年。館野氏は、放射線医学総合研究所臨床研究部部長などを務められた放射線専門医であり、アッカーネヒトの翻訳にも関わってこられた。本書は、その館野氏による放射線医学の通史であり、著者が放射線医であるだけに信頼して読み進めることができる。刊行から半世紀以上たったが、これほどバランスよく重要な問題を押さえている文献は他にはない。

また、二つ目は、慶応義塾大学医学部放射線科学教室のサイト <https://www.radiology-history.online/>。ヴィルヘルム・レントゲンやマリー・キュリー＝スクウォドフスカなど、放射線医学の歴史を構成する重要な論文の原文とその和訳がつけられている。これも、専門家にしかできない大きな貢献のように思われる。

マリア・フェラウエル＝スクウォドフスカ。1874 年に生まれたキュリー夫人（1867 年生）の従妹。彼女もまたソルボンヌに学んだが、研究者としてではなく、臨床医としての道を歩んだ。ポーランド独立後、ウッチ市という町でラジウム治療のための専門施設をつくることに尽力した。ここでは彼女の家族的つながりも重要な意味をもっていたはずで、自分の史料にキュリー夫人から「マリアちゃん」宛の手紙があったのにはすこし震えた。しかし、マリア・フェラウエル＝スクウォドフスカは 1930 年末に突然失踪し、翌年ザコパネでみつかった身元不明の遺体が彼女であったと判明する。おそらく自死だった。館野氏の本や慶応義塾大学のサイトには一切出てこない人物だが、彼女の仕事と人生の意味を復元することが、ポーランド史の専門家として自分にできることではないかと思う、今日この頃。

吉田恭子（アメリカ文学）

・Lorraine Hansberry 作、Gabrielle Randle-Bent 演出、A Reason in the Sun

アーカイブ調査中にたまたまシカゴ大学のコート劇場で上演していた。作品の舞台は劇場のあるシカゴのサウスサイド。現在もアメリカに根強い不動産取得の構造的な人種差別をめぐる家族劇。1959 年の戯曲も映画版も未見で鑑賞し、結末への展開で揺さぶられ涙が流れて呆然としてしまった。彼女がもっと長生きしていたらと思わずにはいられない。

・金田淳子『『グラップラー刃牙』はBLではないかと1日30時間300日考えた乙女の記録ッッ』(河出書房新社、2019年)

前から話題になっていた社会学者の本。研究のヒントにならないかと意地汚い気持ちで手に取ったら、まったく参考にはならなかった。でも爆発的に面白かった。1日30時間考える乙女マインドがあれば白黒の少年誌誌面も虹色に映るもの。だとしたら研究者はすべからず乙女では。その心意気こそ見習いたい。

・レベッカ・ブラウン著、柴田元幸訳『体の贈り物』(トワイライト)

代表作の刊行30周年新装版。エイズ禍初期の証言文学は時を経るほどに輝きを増している。著者が来日し、学生の英語創作を精読・激奨してくれた。

合田典世 (英文学)

①佐川恭一『清朝時代にタイムスリップしたので科挙ガチってみた』(集英社)

本学文学部卒の知人ぞ知るカルト系作家——らしいのだが、そんな前評判は知らずに読んだ(巷で話題の)エッセイ『学歴狂の詩』でハマってしまい、次に手に取ったのがこの小説。せっかくの文才をど下ネタに全振りしている感じがいっそ清々しく、外で読んでいて笑いが止まらず困るという経験を久しぶりにした。こういうのでいいんだよ!

②バカリズム脚本のドラマ

『ホットスポット』『架空OL日記』『ブラッシュアップライフ』と一気見。「空気読んで」という頻出するセリフが典型だが、「適切さ」からの逸脱(をめぐっておかしみ)が一貫したテーマなのかも。他愛もない日常に宿るアナーキーを知る人……え、バカリズムってジェイン・オースティン? !などと謎理論に飛んだ限界英文学徒であった。

③『アドレセンス』(イギリス、Netflix ドラマ)

ワンカット撮影が醸し出すドキュメンタリー風味の「リアル」さに、ドラマの最先端を感じた。不穏な気配を糊塗するかのように空気を装う家族の会話シーケンスなど、「無駄」なリアルがすべて作品に奉仕しているのが圧巻だった。ちょっとしたことが気がつけば大きなゆがみに……やはりこれも「日常のアナーキー」系、つまりはモダニズム? !などと謎理論に飛(以下ry。

柿原武史 (社会言語学)

今年はなんと言っても大阪・関西万博を外して語ることができない一年だった。そこで、万博で感銘を受けたパビリオン3点を紹介する。

1. イタリア・パビリオン

ネット予約を活用した「並ばない万博」が目指された本万博で最も長い行列ができたのがこのパビリオンだろう。私も、はじめて入館した時は5時間以上待った! 事前予約もあったのだが、ブラチナチケットを入手するのは至難の業であった。完全予約制のパビリオンもあるなか、予約なしでも並びさえすれば入れるという点で、イタリア・パビリオンは良心的なパビリオン(?)であったのかもしれない。猛暑の中、長時間待っても(あるいはそれだけ苦労したからかもしれないが)、十分に満足できる展示内容であった。なんと言ってもナポリ国立考古学博物館蔵の巨大な大理石彫刻『ファルネーゼ・アトラス』の両手と肩で天球儀を担いだ姿は圧巻だった。カラヴァッジョの『キリストの埋葬』も人は多かったものの、間近でゆっくり見ることができ、満足できた。レオナルド・ダ・ヴィンチの『アトランティックコード』は歩きな

がらちらっと見るだけで、ちょっと物足りなかったが、いずれも、これだけのものをよく持ってくるのができたものだと感心した。他にも現代アートから鉄鋼業、自動車部品から伊東マシショ、宇宙技術から核融合まで、てんこ盛りのイタリアを味わえたので、5時間待った甲斐があったと思う。

2. クウェート・パビリオン

言語に関心がある私としては、このパビリオンの展示方法が一番印象的だった。すべての展示物の解説が日本語、アラビア語、英語で表示されているだけでなく、映像展示では3人のキャラクターがそれぞれ異なる言語で話しているのに、観客はストーリーを追えて理解できるというのには驚かされた。マルチメディアでクウェートの伝統文化や現代社会を身近に感じられただけでなく、いろいろな展示物に触れることができたり、子ども向けの遊具で遊べたりと、単に見るだけにとどまらない展示で楽しめた。また、最後のプラネタリウムのような場所では、空調が効いた空間で横になって休める仕掛けもあり、暑いなか歩き疲れた訪問者が何を欲しているのかをよく分かっている点で好感が持てた。

3. シグネチャーパビリオン「EARTH MART (アースマート)」

今回の万博の目玉展示の一つが、各界のトップクリエイターである8人のプロデューサーがそれぞれの解釈で万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」を表現したシグネチャーパビリオンであった。どの館も人気で、連日予約サイトと格闘したのもいい思い出である。アースマートは小山薫堂プロデューサーによるもので、食べ物テーマとなっていた。食物連鎖の中で私たちの命が他の生物の命を犠牲にすることで成り立っているという事実を、巨大な目玉焼きなどユーモアあふれる形で実感させてくれる斬新な展示だった。世界各地の家族の1週間の献立や食料品の展示も、異文化や世界の多様性を理解するのに資するものだった。「いのち輝く未来社会」という一見「?」なテーマをうまく表現した展示だと思った。

最終的にはほぼすべてのパビリオンを見たが、スマホで何でも調べられる時代に、リアルな体験や驚きに勝るものはないのだと改めて気づかせてくれる万博だった。

二宮美那子 (中国古典文学)

・小津夜景『ロゴスと巻貝』(アノニマ・スタジオ)

読書とその周辺の記憶を綴ったエッセイ。著者が文章から受け取る表情、色彩、リズム、手触りの豊かさ、それを描く著者の筆致の鮮やかさに目を奪われた。そのような読み手になるまでの歩みにも言及されており、なるほどなあと感じ入る。石田幹之助『長安の春』に触れた下りにはニヤリと共感。大分市にある、入り口は狭く地下が広い不思議な本屋で手に入れたことも含め印象深い。・林文月『吃在成都』(『京都一年』)

中級中国語のテキストに思い悩んだ末に選んだ一篇。70年代初頭、十か月半京都に滞在した台湾の著名な研究者のエッセイ。著者の食に対する好奇心や感性、市井の人々との暖かな交流を通して、古き良き——と言うのが適切か分からないけれど——京都の姿がありありと浮かびあがる。文中に、「本物の京都の美食は、外からは一見民家としか思えないような店でこそ食することができる」という下りがあり、たまたま自分が同じような経験をする機会に恵まれて愉快的気持ちになった。

・坂田明×高良久美子×湖南ダンスカンパニーのパフォーマンス(第17回大津ジャズフェスティバル)

琵琶湖の畔で毎年開かれるジャズフェスティバルの野外ステージで、1時間休みなく吹き続ける坂田明のサクソに圧倒された。体に音の風が吹き抜けてそのままさらわれて行くような感覚。管

楽器の達人は楽器と一体化して、全身で楽を奏でる。全く別のジャンルだが、中国笛の名人陸春齡を聞いた（見た）時のことを思い出した。暮れなずむ空と湖を背景に、舞台上で合わさる音楽とダンスが胸に響いた。

柳瀬陽介（英語教育）

(1) Fletcher, A. (2023). “Storythinking” Columbia University Press.

AIで語法添削や文体改善が容易になるにつれ、ライティング教師としては、ストーリー指導の重要性を痛感する。Fletcherは、かつてのJerome Brunerのように、思考を論理思考とストーリー思考に分ける（“Story cannot calculate timeless truths; logic cannot generate original actions.”）。彼は、ストーリー生成の過程を進化における変異の発生と選択に喩えるが、このアイデアは早速授業でも導入した。

(2) 菅野完、他（2025）『陰謀論と排外主義』扶桑社

だがストーリーは人間のもっとも強力な理解手段であるだけに、悪用・乱用されれば怖いと、理論家は口を揃えて警告する（『ストーリーが世界を滅ぼす』（ゴットシャル、G・東洋経済新報社）、『ナラティブの被害学』（阿部幸大・文学通信）、『物語化批判の哲学』（難波優輝・講談社））。だがその危険性をもっとも私に響かせてくれたのは、ジャーナリストらによるこの本だ。戦後の日本は国内外の人々を得心させるナラティブ（ここでは「具体的なことばと語り方で受肉化されたストーリー」と定義する）を育てられなかった。その欠如が、歪曲した単純なストーリーに基づく粗野なナラティブの跳梁跋扈につながり、現在の日本を危険な方向に導いている。

(3) フレッチャー、A. 著、山田美明訳（2023）『文学の実効』CEメディアハウス

ここで再びFletcherに戻る。彼はアリストテレスの『詩学』に倣い、古今東西の文学に見られる高度なナラティブ技法を解明する。彼は文学の価値を、筋書きや教訓よりも、そのレトリックや文体に求める。熟成された語り方は、多元的・動態的・精妙な思考を生み出すからだ。VUCA（激変性・不確実性・複雑性・多義性）が常となった現代に必要なのは、文学的な言語使用の知恵だ。いい本を読んだと思って、ふと積読状態の本棚を見れば廣野由美子先生の『批評理論入門』『小説読解入門』（共に中公新書）があった。慌てて読むとこの本の主な論点はほぼすべて説明されている。燈台下暗し。不明を恥じるばかりだ。

柴山桂太（経済思想）

①上野英信『地の底の笑い話』（岩波新書）

私の伯父は夕張の炭坑夫だった。一度、夕張の炭坑跡を案内してもらって当時の苦労話を聞いたことがある。今年、宇部の炭坑博物館を訪ねる機会があった。明治に入って大資本が開発した夕張と違い、宇部は江戸から採炭が行われており、村ぐるみで石炭産業を発展させてきた。一口に炭坑といっても地域によって文化が違うと気づかされた次第である。本書は筑豊炭田の聞き書きで、筑豊はその人身支配の過酷さで知られているが、坑内労働のどうしようもない苦衷の中に漂うユーモアの空気を見事につかまえていて印象に残った。他にも炭坑の本をいくつか読んだが、日本に資本主義の「原始的蓄積」段階があるとしたら、それは石炭産業の歴史の中に深く刻み込まれている、という確信がさらに深まることになった。

②「民藝誕生100年」展（京都市京セラ美術館）

陶芸家を継いだ院生がいて、実家の窯を見せてもらった。ご尊父が残した作品はどれも不思議な魅力があり、深い青みのある釉薬の美しさは何とも形容しがたい。色の秘密を教えずに亡くなったため、息子は残されたノートを手がかりに釉薬の調合をひたすら試す毎日だという。その院生も交えて民藝展を見に行った。民藝というと日本の伝統の精髓のように語られる（実際、柳宗悦がそのようにプロデュースした）が、見てみると第一次大戦後の世界的なモダニズムの流れを巧みに取り込んでいることが分かる。伝統とは、昔の様式をただ引き継ぐものではなく、「モダン」を取り込みながら日々あらたに発見されていくものだ。だから父の影を追いつつ陶芸の腕を磨く息子は、正しく伝統の道に推参しているということになる。

③映画『エドガルド・モルターラ』（マルコ・ベロッキオ監督）

学部ゼミで『プロ倫』を読んだ。勤勉や信用を重視する資本主義の精神と、プロテスタント信仰の説く世俗内禁欲の間には「親和関係」（≠因果関係）があるというウェーバーの分析は、今なお読む者の思考を刺激して止まないが、今ひとつ想像できないのは、予定説を受け入れた近世人に起きたらしい、深い「内面的孤独化」のドラマである。そんな折、たまたまアマゾンプライムで見た本作がとても面白く感じた。ユダヤ人の少年が拉致されてバチカンで信仰漬けにされるという物語は、実話だから仕方ないとはいえ、ストックホルム症候群を思わせる愉快とは言えない展開である。しかし、描かれているのは単なる信仰の厄災ではない。青年になったエドガルドが最後のシーンで見せる表情は、家族からも共同体からも切り離された「内面的孤独化」の果てに湧き上がってくるものなのだろうと、妙に納得して見終えた。もっとも、こちらはカソリックの物語でプロテスタントの話ではないのだが。

霜田洋祐（イタリア文学）

・C'è ancora domani（邦題：ドマーニ！愛のことづて）

パオラ・コルテッレージ Paola Cortellesi 監督・主演の映画。1946年の戦後ローマを舞台に、抑圧された日々を送る女性が「一通の手紙」を胸に静かな決意で未来へ踏み出す姿を描いた作品。イタリア共和国の誕生と権利の重みを鮮烈に伝えており、歴史教材としても秀逸（日本語版DVDが発売されるのを待っています）。

・大阪万博イタリアパビリオン

万博自体はあまり応援していなかったが、招かれて訪れたイタリア館には「ファルネーゼのアトラス」など「本物」が来ており見る価値があった。ティントレットによる伊藤マンショの肖像も見られてよかった。前任校（阪大外語）の教え子たちがスタッフとして頑張っており、その姿にも感動しました。

・比叡山登山道

イタリアから来た友人の希望で坂本から修学院までハイキング…のつもりがかなり本格的なトレッキングコースを選んでしまい、自然や眺望は楽しめたものの、その後数日間は身体がガタガタに（アルプスにも登る友人はケロリとしていて悔しい）。

中村仁紀（イギリス・ロマン主義）

・伊泉龍一『スピリチュアリズムの時代—1847-1903』（紀伊國屋書店、2025）

19世紀欧米のスピリチュアリズムの実態をまとめた大著で、膨大かつ緻密な記述に圧倒された。冒頭で著者は懐疑派であるとはっきり宣言しているが、当事者らの声を拾う筆致がとても丁寧なので、つい引き込まれて読んでしまった。不正を暴かれた霊媒

も多かった一方で、科学者らの厳しい検証に耐え抜いた一流の霊媒もいたようで、そんな交霊会だったら一度くらい参加してみたいという気持ちにもなる。

・『図録 恐竜図鑑—失われた世界の想像／創造』（2023）

2023年に兵庫県立美術館で開催されていた同名の特別展の図録。19世紀初頭から1970年代の「恐竜レネサンス」に至るまで、レアな恐竜の絵画・イラストをたくさん収録していて、また恐竜表象文化史の詳しい解説もありとても充実した内容だった。時代を経るにつれ恐竜の姿はだんだんと「整っていく」のがよくわかるが、むしろ19世紀に制作されたものの方が、目玉をひん剥いていたり、とぼけた表情をしていたり、アルカイックスマイルをたたえていたりどれでもバラエティ豊かで、想像力を掻き立てられて楽しい。

・松井健人『大正教養主義の成立と末路—近代日本の教養幻想』（見洋書房、2025年）

読書と人格形成を結びつける「教養」という概念は、教育言説において今でも効験あらたかなお守りとして生き続けているようである。しかし著者はその源流にある大正教養主義の歴史的実態を原史料から明らかにし、その「原像」は「幻像」にすぎない、と結論づけた。これを読み終えて、私は（読書文化の末路にある）積読状態のたくさんの本を前にして、今後の本の買い方をもう少し改めようかと思った。

小木曾哲（地球科学）

・大阪・関西万博 サモアナショナルデー 公式特別イベント

開催前には万博に興味がなかったのだが、3月にサモアに調査に行き、その素晴らしさに感動したので、6月に開催されたサモアナショナルデーのイベントに参加した。伝統的な音楽とダンスが一通り披露された後、最後のダンスでは、駐日大使が中心となって、サモア関係者の大半が舞台上上がって一緒に踊っていた。このイベントのために本国から訪れたサモア人と、遠い異国で活躍するサモア人が、一緒になって楽しそうに踊る姿を見ていたら、不意に涙が出てきた。国民みんなで共有できる音楽と踊りを持っていることが心底うらやましかった。生まれ変われるとしたら次はサモアに生まれたいと、半ば本気で思っている。

・サマセット・モーム『月と六ペンス』

サモアにゆかりのあるモームの代表作。といっても、この小説の舞台はサモアではない。お隣（といっても数千キロ離れているが）のタヒチにゆかりのあるゴーギャンをモデルにした画家の半生が描かれている。地位も家族も故郷も捨てて絵画制作に没頭する芸術家の狂気が凄まじい。もっとも印象的なのは、彼が命を削って最後に書き上げた作品の描写。その作品がもしこの世に存在していたら世界のどこにあっても見に行きたい、と思わせる。

・宮島未奈「成瀬あかりシリーズ」三部作

現代小説はほとんど読まないのだが、数年前に新聞の書評で紹介されていた第一作『成瀬は天下を取りにいく』に妙に惹かれ、読み始めたらハマった。成瀬のいる世界に浸っていたくて、3作とも何度も繰り返し読んでいます。こんなにも魅力的な主人公は初めてだ。こんなやつ現実にいるわけないんだが（そもそもフィクションだし）、成瀬はいま京大生なんだからキャンパス内で会えるかも、と思ってしまうから不思議。

田口かおり（美術史・保存修復学）

・イタリアのトレント、ブオンコンシリオ城に描かれたドッソ・ドッシ（と工房）の壁画

神話的な主題と鮮やかな色彩、夢幻的でありつつも力強い人物表現が建築の石肌と響き合い、絵画が「場」と不可分であることを思い起こさせてくれた。

・ヒルマ・アフ・クリント展（東京国立近代美術館）

霊的探究と視覚的秩序のあいだを行き来しながら展開された、思考の場としての絵画たち。とりわけ〈10の最大物〉を含む「神殿のための絵画」群では、紙や布の上に形と色をとどめおくために試みられた技法的な冒険の痕跡が浮かび上がっていた。

・宮永愛子による「万寿の園」展（Gallery & Restaurant 舞台裏）

「変わりながらあり続ける」をテーマに多様な素材を扱う作家が、麻布台地域の丁寧なサーチを基盤に新作群を展示。『詩を包む』シリーズでは、ガラスが貝殻や植物の一片を包み込んで、まるく光を放っていた。

前田昌弘（建築学・まちづくり）

・中西泰人・本江正茂・石川初（2024）『スマートシティとキノコとブツダ：人間中心「ではない」デザインの思考法』ビー・エヌ・エヌ

総人の演習科目で学生らと読みました。近年、ポスト・ヒューマニズム、脱人間中心主義への転換の機運がデザインの領域でも高まっています。この本は日本の都市開発、まちづくりの文脈を踏まえ、東洋的な自然観や思想などをもとにした議論を喚起しており、こういう本が日本からもついに出了か！と唸られました。授業では学生発案のワークショップ、「無分別俳句を詠む」「人工物の気持ちになる」「無本質的分節に至る工作」などを通じて議論しました。

・「リビング・モダニティ：住まいの実験1920s-1970s」展（国立新美術館）

20世紀に始まるモダニズム住宅の実験を独自の視点から再構成する展示で、どれもよく知られた名作住宅ながらも豊富な図面、模型等の展示物を通じて新たな発見が満載でした。昨年末に亡くなったアメリカ人建築家フランク・ゲーリーのインタビュー動画も展示されており、彼が若い人に向けた「遠くの誰かの真似をする必要はない。周囲に回答し続けることで独自性は自ずと生まれる」といった趣旨のメッセージが、彼の独特な作品性もあいまって、特に心に残っています。

・「磯崎新：群島としての建築」展（水戸芸術館）

磯崎の代表作でもある施設で開催された初の大規模回顧展。自分は磯崎にあまり影響を受けた世代ではなかったものの、彼と交流のあったレム・コールハース（OMA）らオランダ系建築家には学生時代、憧れました。コールハースが磯崎とも関連が深いメタボリズム運動に強い関心を示したのは、混沌と流動から建築を立ち上げ、しかも競い合いがちな建築家たちが協働するという点で、彼らには真似できない建築運動だったからのようです。改めて、日本的、東洋的な知とは何か、興味がそそられました。

須藤秀平（ドイツ文学）

①梅棹忠夫『知的生産の技術』

四度目の読了。本書で紹介される「技術」の一つに、本に読了日を記すというものがあり、（本書を読んだときには）毎回それを実践するので確認できる。知識を「物量化」とするという教えに従い、今更ながら読み切った本をきちんとリスト化することにした。

するとリストに書くのが楽しみで読書が捗るようになった。目的を履き違えているような気がしないでもないが、リストを見返すことで内容がより定着するので、むしろ一冊一冊の本と真摯に向き合っているように思う。手垢のついた表現かもしれないが、カントやゲーテの時代の読書はこうした堅実なものだったのではないか。油断するとすぐに濫読になってしまう生活を反省。

②J・スタインベック『怒りの葡萄』

好みだけで言えば、ドイツ文学よりもアメリカ文学が日本文学が好きだ（だから研究はしない）。もちろんアメリカ文学といってもさまざまだが、特に本書は私が思う意味で極めてアメリカ文学らしい。泥臭い人間の生活をごりごり描いていて、頁を繰る度に感じるものがある。原書で読もうと河原町の丸善を訪ねたところ、数あるスタインベック作品の中でこれだけ売り切れだった。家族が寝静まった後、バーボンを舐めながら読み進めるのだが、忙しくなるとそれすら叶わなくなる。作中の亀のような改造車のような歩みで、なかなか①のリストに入ってくれない。

③円谷プロ『ウルトラセブン』

自分への誕生日プレゼントとしてブルーレイディスクセットを大人買いした。5歳と2歳の息子に見せたところ、見事にハマった。土曜の午前に少しずつ鑑賞し、第49話まで（一話欠番があるので全48話）全部観た。「悪」をただ暴力で制圧するアニメ版のアンパンマンは教育上見せないようにしているのだが、セブンは戦いに葛藤があって良い。宇宙人と地球人のあいだで自らの存在意義に悩む姿や、「血を吐きながら続ける悲しいマラソン」といったメッセージは令和に観ても刺さる。初回放送が1967年で、大半の人間がタバコを吸うところは令和と異なるが。

細見和之（ドイツ思想）

①金時鐘さんの創作ノート

金時鐘さんが日本に渡られてから使われていた創作ノート7冊が金時鐘さん本人の手によって金時鐘さんの自宅で発見されたのだが、それを収める「金時鐘コレクションⅡ」に私は解説を書いた。日本に渡ってから毎日のように詩を書いていたという、以前から聞いていた金さんの言葉のとおりだった。民族学校の再建に

取り組む昼間の困難な活動のあと、夜のわずかな時間にそれでも詩が毎日のように書きつけられていたのだった。

②永山則夫の遺品

永山則夫が刑死して二十数年が経ったが、最後に彼に面接した市原えみこさんを中心に、永山の遺品を管理する運動が続けられている。現在、千葉県柏市の民家に、永山の遺品が置かれているのだが、その膨大なこと。私は15年前に、公刊されている彼の詩、小説、批評のすべてを読んで「永山則夫——ある表現者の使命」（河出書房新社）を刊行したが、永山則夫という表現者はやはり謎である。遺品からのさらなる解明が必要だ。

③デンチャーライフ

とうとう私にもデンチャーライフが始まってしまった。縁のないひとには分からないだろう。入れ歯を装着した暮らしのことである。ぐらついていた前歯がとうとう抜け落ち、歯医者に行ったところ、それを宣告されたのだ。最初にご飯を食べるところか、話すのにも違和感があった。授業は大丈夫かと大いに不安だった。滑舌の悪さを入れ歯のせいと受講生に打ち明けようかとも思ったが、そこはこらえた。それでも、1週間ですぎるとだいぶ馴染んできた。これはこれで相当のテクノロジーである。

小林哲也（ドイツ文学・精神史）

・K・H・ボーラー『シュルレアリスムとテロル』

批評家ボーラーの初期著作。ベンヤミンとシュルレアリスムの関係を強調した視点が興味深い。美学と政治の関係を峻別しつつ、シュルレアリスムのアクションの政治性には注目するという姿勢も興味深い。

・野村修『暴力と反権力の論理』

60年代後半～京大紛争時までには書かれた文章を収録。昔読んだ時はほとんど意味がわからなかったが背景を調べるととても興味深い内容だった。

・Smashing Pumpkins

9月15日 名古屋 Comtec Portbase でのコンサート。昔聴いていた頃は解散していたので初めて観た。思い出の名曲群に感涙。

〈編集後記〉

▶4月に人環に着任し、まだ業務に慣れない中でフォーラム委員として働けたことは、私にとってとてもいい経験でした。編集の仕事を通じて同僚の皆さんと知り合うことができ、職場に少しずつなじめたと感じています。対面とオンラインを織り交ぜた会議の頻度もちょうどよく、特に対面で集まった際には、業務に関する情報交換や率直な意見交換ができて助かりました。会報という明確なアウトプットがある点も、達成感があり楽しく取り組みました。面識のない方々にメールだけで原稿を依頼したにもかかわらず、(時にはなかなか返事が来ないと不安になることもありましたが) 皆さん、ご多忙中にもかかわらず快く引き受けてくださり、大変助かりました。しかも、素晴らしい原稿を寄せていただき、感謝感激雨あられ(古い?)です。何より、同期の仲間と親しくなったことは、思わぬ成果でした! 皆さん、特に細見先生、大変お世話になりました。(柿原)

▶今年は別の委員会と重なり編集委員会への出席がままならない状況が続きましたが、おかげさまでなんとか走り抜けることができました。ご寄稿いただいた先生方には改めてお礼申し上げます。また長らく本誌の編集委員長を務められた細見先生には心より謝意と敬意を表したいと思います。誠にありがとうございました&大変お疲れさまでございました。(合田)

▶編集に携わって数年になります。今回も早いものでもう編集後記を書く時期(1月末)になってしまいました。今年度に入ったあたりから「生成AI」で合成された文章を読む機会がものすごく増えました。本誌とは関係ありませんが、文書の修正依頼の仲介作業をする中で、エクセルファイルのセル内に「…を生成ください」という文を見かけました。修正指示依頼内容が記されるセル内に現れる謎めいた文言「…を生成ください」。私たちはいったい何の作業をしているのか、頭を抱えております。(小林)

▶編集委員として本号の編集に携わり、世界理解のための視点の多様さにあらためて刺激を受ける一年でした。個人的には、編集側から誌面づくりに関わる一方で、某学内広報誌から講義を取材されてしまい、その対応に追われたり寄稿を行ったりと、発信する側としての経験も重なった一年でした。編集する側にもされる側にも回ったことで、原稿が誌面として整えられていく過程の意義を、より実感をもって理解できるようになったと感じています。それから締切を守ることの大事さも(締切は時間泥棒だって声も聞こえてきますが)。(齋藤)

▶今年度から編集委員を担当することになりました。雑誌を一冊つくりあげるのはいかに大変なことだ、というのは、いままでの数少ない経験から理解していたのですが、それにしても細見委員長と北斗プリント社の松本さんのおかげで、すいすいと出来上がっていくことにずっと感嘆していました。もちろんおふたりに限らず、編集委員の先生方もそれぞれにテキパキと仕事をこなされていて、びっくりです。わたしは主に公開講座の田部勢津久先生のご講演を担当したのですが、理系の先生のご講演の「文字起こし」を拝見するのは初めてで、「文字」として読むことで初めて腑に落ちたことも多くあり、とても刺激的な経験でした。そして最後はちゃんとした講演録として完成して、とても充実感があります。関

係者のみなさま、どうもありがとうございました。(佐野亘)

▶編集委員として三年目を迎えました。今号でも昨年に引き続き、「私の受賞研究について」「自著を語る」、書評欄を担当しております。現役生・修了生の皆さまがそれぞれの場で思考を深め、実践を重ねておられる様子に触れるたび、研究という営みが個々の歩みでありながらもどこかでゆるやかに響き合っていることを感じます。分野や立場が異なっているにもかかわらず、誌面を通じて小さな対話が生まれているようにも思われます。着任当初よりフォーラムづくりのいろはを教えてくださいました細見先生が、誌面づくりに真摯に向き合っておられる姿からは、多くのことを学びました。本当にありがとうございました。今後もフォーラムが「総人・人環とはどのような場所なのだろう」と学内外の方々に関心を寄せていただくささやかなきっかけとなれば、と願っています。(田口)

▶4月に着任して初めての委員業務がこの総人・人環フォーラムの編集でした。委員長の細見先生はじめ委員の先生方からご教示いただきながら作業を進めていくことができましたが、至らぬことも多々あったと思います。わからないことだらけの新しい環境の中、この広報誌のことも少しでも知っておかないと、とバックナンバーにも目を通しましたが、教員、大学院生、修了生お一人お一人の活躍と、それらが緩やかにしなやかに繋がっていくさまを感じることができたように思います。編集作業は、総人・人環というまさしくフォーラム(=広場)を知る貴重な経験となりました。(中村)

▶着任一年目の目が回るような日々の中で、編集会議が同僚の先生方と一緒に過ごす貴重な機会となりました。雑誌の構成や記事のあれこれ、時には来し方行く末についての話を聞く中で、本誌の幅広さすなわち学部・研究科の多彩さの映し鏡であるのだな、とぼんやり理解した次第です。編集委員とはいえ一年目の不慣れな中で、ほんの一部分を担当しただけですが、今までつながっていなかった回路がつながるような気分を味わいました。記事の依頼等々でやり取りをした方々が、気持ちよくお返事下さったのもありがたく印象に残っています。(二宮)

▶私が委員長=編集長の最後の号になる予定です。長いあいだお世話になりました。ありがとうございました! (細見)

お詫びと訂正

第43号の「研究科修了生の助成金による出版図書」欄において、安藤加菜子さんの肩書きに誤りがありましたので、ここにお詫びとともに訂正いたします。

誤：現在、京都大学大学院人間・環境学研究科人文学連携研究者
京都大学学際融合教育研究推進センター政策のための科学ユニット研究員

正：現在、京都大学大学院人間・環境学研究科人文学連携研究者
京都大学大学院医学研究科研究員(政策のための科学プログラム)

『総人・人環フォーラム』の趣旨

21世紀における人類の生存は、現在直面している地球をとりまく環境の危機をどのように乗り越え、地球上の多様な諸民族の持続的な共存の道をどのように見いだしてゆくことができるかにかかっている、といえましょう。「自然と人間の共生」という理念のもとに平成3年に設立された京都大学大学院人間・環境学研究科(略称「人環」)は、こうした21世紀における人間と環境との新しいかかわりを模索してゆくため、「総人・人環フォーラム」を発刊することになりました。本誌では、人間と環境の相互関係にふれる第一線の研究のうえに立つて、精神的豊かさをもった広い視野から、21世紀における人類の課題を問いつけてゆきたいと考えています。

編集委員会 委員長 細見和之
副委員長 佐野亘
委員 柿原武史・合田典世・小林哲也
齋藤嘉臣・田口かおり
中村仁紀・二宮美那子

総人・人環フォーラム 第44号

令和8年2月27日発行

編集 『総人・人環フォーラム』編集委員会
表紙デザイン 倉本修装幀事務所
発行 京都大学大学院人間・環境学研究科
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
FAX 075-753-7908
印刷製本 ㈱北斗プリント社

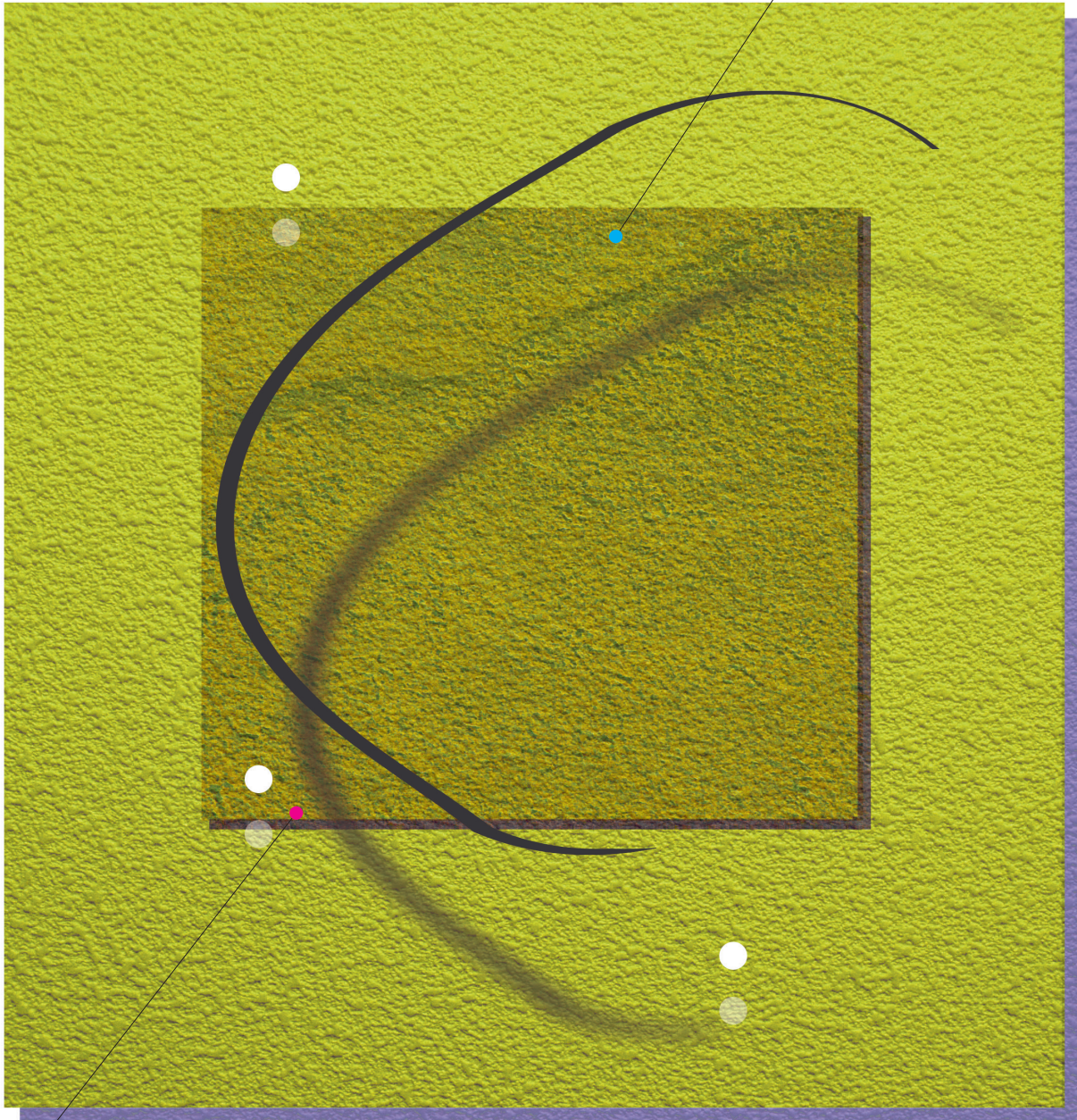
総人・人環フォーラム

HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM

特集 美とはなにか

武田宙也 「美学にとって美とはなにか」

田部勢津久 「材料化学はこんなに面白い～光り物に魅せられて～」



特別公開講座 藤原辰史

「学問で平和はつくれるか？—私が総合人間学部と人間・環境学研究科で学んだこと」